魔法少女リリカルなのはStrikerS　～PROJECT　S.W～

天破

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～ＰＲＯＪＥＣＴ　Ｓ・Ｗ～

【Ｎコード】
Ｎ９７６０Ｔ

【作者名】
天破

【あらすじ】
とある管理世界。森の中に巧妙に隠されていた『生態兵器研究所』において３万人以上の死者が出る事件が発生した。そこで研究されていたはずの５人の少年・少女達は１人を除き全員別々の世界へ飛ばされた。　誰が想像できただろう？　たった１人研究所に残り、無表情に涙を流す子供がその大惨事を引き起こしたなど――――
処女作・駄文・超駄文・超亀更新です。嫌な方はお戻りください。
誹謗中傷も御勘弁くださいませｍ（＿＿）ｍ

プロローグ（前書き）

始めまして。天破と申す馬鹿野郎でございます。
この拙作を1秒でも御覧頂き誠にありがとうございます。見てくださった方には本当に感謝したい気持ちで一杯でございます。
亀更新・駄文ではありますが、更新しましたらお暇なときに手にとってくださいませ。

プロローグ

――――――そこは、紛れも無く地獄だった。

何もかもがバラバラに切り裂かれ、人すらもただの肉屑と化して燃え盛る炎に焼かれている。

悲鳴を上げることも出来ず、瞬時に生命を奪われた人間達。

信じられるだろうか？この惨状を、たった1人の子供が、一分も満たぬうちに作り上げたという事を。

「うぐ…あぁっ…兄さん…？」

ふと、瓦礫の中から5歳程度であろうボロ布を纏う少年が、この惨

状の中心で座っている子供へと向けられる。

「…何をしやがったんだ、兄、貴」

違う方向からも、くぐもった声で同じくらいの身長、同じくらいの歳である少年が声をかける。

「うぅ…動けない、のじゃ…」

「痛い…これは、お兄様がやったのですか…？」

更に別の方向から――――これも5歳程度の――――2人の少女が、畏怖と混乱を以って災害の中心に座る少年を見つめる。

八つの目を向けられて、ゆっくりと“彼”は振り返る。

その目は何も見ていなかった。

ただひたすら、何を思っているかも分からず涙を流すのみ。

「『…兵器の心（ウェポン・マインド）が暴走して、います……すみやかに、関係者はその場を離脱して、下さい』」

その子供は、本当に機械的に、感情も見せない声でそう告げる。

「なっ！？…兵器の心（ウェポンマインド）！？　そんな馬鹿な、いつの間に実装されてやがったんだ…！？」

「それどころじゃありません…兄、さん…目を…覚まし…」

幼さが残る子供が言い終える前に。

４人の子供達を、真っ黒な強制転移魔法陣が囲んだ。

「「「「！！」」」」

「兄貴！？」

「『…もうスグ私ハ、自我を、失い…マス。このママでは、貴方達まで、殺して、しまウデショウ』」

依然として途切れない涙で、少しだけ彼は微笑む。

「『せメて、私が貴方達を忘れるマデに、この世界カラ、逃げて、下サイ』」

「そんなの認められるわけがないじゃろう！？」

「そうですわ！！早くこれを解いて下さいませ！！」

しかし彼は、座ったまま頭を横に振った。

「『次期ニ、この施設ノ関係者ガ、私達を捕獲シニやってきマス。恐ラク、次捕まレバ今回ノような奇襲は出来ません。洗脳モ施さレるデショウ。ココから先ハ、貴方達は関ワラナクテいいのデス』」

「そんなの納得出来るか！！兄貴、頼む！これからも5人で頑張ってけばいいじゃねえか！」

「そうです！僕らがここに生きているのだって、兄さんのお陰なんですよ！？　お願いです、1人で背負い込まないで下さい！！」

「『…時間、デス。“強制次元転移魔法”発動』」

「兄ｓ――――」

真っ黒な魔法陣が光り輝き、懇願するような叫びは途中で途切れ、

辺りに虚しく響き渡る。

その様子を見たのか見てないのか、虚ろな目をした子供は、小さく呟いた。

「『…魔力内臓量が３０％以下に低下。休止モードへ移行します。関係者ハ…本体ノ保護、ヲ……』」

既に言う気力も途絶えたか。その場に少年は崩れ落ちた。

涙を流したまま、たった一人で炎の中眠りにつくその姿は明らかに異常であり。そしてそれこそがこの研究所『だった』ところの目指すべき存在であった。

管理局の“闇”が、あらゆる技術や外道な研究を重ねた所謂“最高傑作”。

それこそが――――――『プロジェクト　―ｓｅｃｒｅｔ・ｗｅａｐ（シークレット）ｏｎ（ウェポン）』。

数時間後、管理局員が到着した。

しかしその会話は、正義と呼べるには程遠いものであった――――――――

――――コイツのことか？　例の計画中５体しか成功しなかった兵器のうちの１体ってのは

――――どうやらそうらしいな。信じられねぇが、コレ１体で次元世界が３桁は滅ぶんとか言う話だぜ？

――――よくもまあそんなもんを造ったもんだ。上も上だ、こんな餓鬼を兵器にしちまおうなんざ。怖い怖い

――――まあ、不運だったと諦めてもらうしかねぇな。それに今回の件は最高評議委員会が絡んでやがる。意見しようものなら即お陀仏だぜ？

――――尚更同情できなくなったな。まあこの道具がどれほど役に立つ見ものでもあるが…そういえば、残りの４体は何処に行ったんだ？

――転移で逃げたらしい。それも次元転移だ、俺ですら出来ねえよ

――バケモンだな…っと、だべってたら怒られちまう。さっさと死体処理するぞ

――ああ、そうだな…　お前も災難だな、餓鬼。自分の意志とは関係なく…血塗られた戦争への御招待だぜ？寒気が出るね…クックック

その言葉は、深く深く眠っている少年へは届かなかった。

――――同時刻、とある次元世界――――

「ん…？　！　おい、美由紀！子供が倒れてるぞ！？」

「っ…酷い傷…それにこの布切れ…一体何処から来たのかしら？」

「そんなこと言ってる場合じゃ無さそうだな…気絶しているみたいだし。取り合えず、家に運ぼう」

「ええ、そうね…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「フェイト、あれっ！」

「こ、子供…！？　っ、酷い…誰がこんなことを！？」

「そんなこと言ってる場合じゃないよ！　この子、傷だらけだし…」

「アルフ、取り合えず家に運ぼう！　ここだと、誰に見つかるか分からないから…」

「わ、分かったよ！」

――――――更に同時刻、とある次元世界――――――

『クロノ君、その子は…』

「…ああ、酷い傷だ…ほおって置けば命が危ない。早急に手当てしなくてはならないな。悪いがエイミィ、次元震の調査は一時中断だ。転送してくれるか？

『うん、今から転送するね』

「…一体誰がこんなことを…絶対に許さないぞ……！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ドクター、この子は一体…」

「ふむ、酷い傷だね…ウーノ、丁度今治療ポッドが１つ空いていた

と思うのだが」

「はい、確かに空いていますが…」

「それならば最高レベルに設定し、丁重に治療を開始してくれたまえ。私の勘だが、その子供はただの人間では無い気がするからね」

「了解しました」

「……あの脳味噌共が言っていた『プロジェクト　S．W』…関係無いと、いいのだが」

ピースは散りばめられた。

そしてそれは、まるで引き寄せられるかのように一箇所へ集まって

いく。

ずっと昔から、決められていたかのように――

これは、とてもとっても不幸な兵器達が望まぬ戦いを強いられた結末を語るお話。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｓ．Ｗ～　…始まります。

プロローグ（後書き）

駄文失礼します。天破です。ノリとノリとノリで書き終わりました。大変ですね、やっぱり…その場しのぎで書くというのは（ぉ。嘗めてましたね、小説を。読むのも書くのも楽しいですが、大変さが違います（当然だ。

あ、この後にまた人物紹介を書く予定なのでよければ見てやってくださいませ。

では…閲覧ありがとうございました～♪

【８／１０更新】登場人物紹介（かなりネタバレあり）（前書き）

後々補正を加えていくと思います。
何か『これおかしいだろ』なことがあればメッセージで遠慮なくお知らせくださいませｗ

８／１０更新：現在主人公達が使った希少能力を追記しました。
・主人公達の外見をちょっと変更しました。

【8／10更新】登場人物紹介（かなりネタバレあり）

登場人物の紹介です。

ネタバレがありまくりなのでネタバレするなよバーローって方は読み飛ばしても多分大丈夫です。

それでは、駄作者天破による設定の甘さをとくと御覧下さい（ぇ

【生態兵器シリアル？1“無還者（リセッター）”】

名前：？？？（現在は名前と呼べるものは無く、リセッターと呼ばれることが多い）

外見：いつもドレスのような服を着ている。髪は黒く、背中の中心から少し長いのが特徴。戦闘時は目が紅くなるが通常時は黒。

身長：１８５ｃｍ以上　体重：５５ｋｇ以下

所属（現在身を寄せている所）：？？？（分かっているのは管理局

の上層部の何処かということのみ）
魔力量：ＥＸ以上
魔道士ランク：正規な魔道士ではないため判定不可。
魔力光：黒　魔力変換資質：【炎熱】、【雷電】、【氷結】、【暗黒】、【重力】、その他
使用術式：古代ベルカ式、近代ベルカ式、ミッド式、？？？

希少能力（レアスキル）

・【死契執行】：？？？（代償として自らの命を喰らうことのみ分かっている）

・【脅威返し（メナスカウンター）】：障壁の類を展開し、（障壁に）直撃した攻撃を自由自在に跳ね返すことが出来る。

・【？？？】：緊急時にのみ発動する能力。本人もこの能力を持っていることすら知らない。

・【音速再生能力】：腕が千切れた程度なら3秒程度で完全に再生が終わる能力。常時発動している。

・【幻影体現（ミラージュボディ）】：自分への注意を他のものに強制的に移すことができる能力。サーチなどからも反応を消すことが可能なので使い勝手がいい。

・【精霊人形】：魔力変換資質を利用して造り上げた炎や氷の人形を自分と錯覚させる能力。作れる個数に制限が無く、圧倒的な演算能力さえあれば全ての人形に違う動きをさせることができる。

・【創造魔力（イマジンエネルギー）】：魔力変換資質で作った氷や炎が消えなくなる。雷

ならゴムにすら帯電し炎なら水の上で燃え上がると言う世界の理を無視したような能力。

備考：生態兵器研究での“最高傑作”。世界最高の魔力、世界最強の能力を持つ、管理局の『所有物』。
感情が一切存在せず、戦うときも無表情。兵器の心（ウェポンマインド）と呼ばれる洗脳まがいのことを施されたことによって、自らを機械だと思い込み、苦痛も絶望も感じない兵器へとなった。常に機械の様に口に出して状況報告をするのでそれを隙だと見る人間が多いが、それが出来るのは空間認識能力、状況把握能力が異常に長けているからである。
　プロローグで研究所を倒壊させたのは間違いなくこの少年。
どうやら、リミッターを常に誰かにかけられているようだが…？

【生態兵器シリアル？2　消失者（パニッシャー）】

名前：高町春斗（たかまちはると）

年齢：１９

外見：性別は男。首程度まである茶髪で、耳を隠すように垂れている。目の色は普段は金色だが、戦闘時は銀になる。
身長：１８０ｃｍ前後　体重：７０ｋｇ前後
所属（現在身を寄せている所）：高町家→現在、能力がある事を隠しつつミッドチルダにてなのはの手伝い。
魔力量：ＳＳＳ（常に隠している為検査では出ず）

魔道士ランク：計ればＳＳＳ程度。状況によってはＥＸ以上。
魔力光：明るいプラチナ色　魔力変換資質は無し。
使用術式：ミッドチルダ式だが、転移や飛行などの補助的なことにしか使わない。

希少能力（レアスキル）

・【消失処理（ロストパフォーマンス）】：白銀色の閃光を放射し、貫いた物体を文字通り消失させる能力。本人も良く分かってないが、『消失』という概念が閃光という形になったのではないかと言っている。
元ネタはワンピースの黄猿より。

・【強制術式停止（マジックストップ）】：発動中の魔法を強制的に停止させてしまう術式。たいしたこと無いように思えるが、転移中に停止させられたら酷いことになる。

・【再生能力】腕がちぎれとんだ程度なら、１０秒あれば回復出来る。常時発動中。

備考：なのはが5歳の頃に拾われて、そのまま成り行き的に養子的な感じになった。名前は高町夫妻から受け取り、柄にも無く泣いてしまったことがある。人が怖いという理由で学校には通わなかった上、まだ未熟だったためジュエルシード事件、闇の書事件にも全く関わらなかった（というかあった事を知らなかった）。現在は自分の力を理解し、その危険性も分かっているためなのはやフェイトには黙秘している。
なのはの事を『なのは姉』と呼ぶ。なお、何故か色々な意味で時間軸があっていない事に疑問を感じている。

【生態兵器シリアル？3　再生者（ファスター）】

名前：フラン・Ｔ・ハラオウン（誰が名づけたかは永遠の謎として処理された）

年齢：１９
外見：性別は女。青い髪のツインテール。目は普段は水色だが戦闘時には深い緑に染まる。胸は小さｒｙ
身長：１７０ｃｍ程度　体重：５０ｋｇ程度
所属（現在身を寄せている所）：フェイト家→管理局にてフェイトの手伝い
魔力量：魔力が無い
魔道士ランク：？？？（魔力が無いため現在は判定不可）
魔力光：魔法が使えない。　魔力変換資質も無し。
使用術式：魔法が使えないため無し。

希少能力（レアスキル）

【巻緑戻光】：“戻る”という概念が光になった能力。あらゆる存

在・概念を戻すことができる。
治療にも使えるほか、人の人生を巻き戻すことで子供に戻すことすらできる。ガジェット等に使えば組み立てられる前にまで戻せるなど、攻撃にも使える能力。

【陰陽術】：『地球』に存在する一種の魔術。研究員が面白がって詰め込んだようだが、魔力無しで使える敵撃退術として大いに貢献している。補助として人払いや障壁なども存在するので使い勝手がいい。

【再生能力】：春斗に同じ。

備考：傷だらけの状態でフェイトに保護され、それからずっとフェイト宅で少しずつ何かを食べながら眠っていた。何年かたつと回復し、フェイトと共になのは宅へ行ったところ春斗に遭遇し、思わず抱きついたという黒歴史が存在する。当然彼女もジュエルシード事件、闇の書事件に全く関わっておらず、特に闇の書のバグが出現した夜にはもう眠っていた。結界があったことすら気づいていなかった。
天然でお嬢様風な口調。ちょっとツンデレ。嘗めてかかるといつの間にか赤ん坊になってたりする。
フェイトのことを『フェイトお姉様』、または『お姉様』と呼び、『兄妹』は呼び捨て、その他の人には大抵さんづけで対応している。

【生態兵器シリアル？４　創造者（クリエーター）】

名前：シーナ・ハラオウン

外見：性別は男。しかし女装すると女っぽくなるお約束。髪色は薄い赤でポニーテール。
身長は１６５ｃｍ～１６７ｃｍ程度。　体重はなぜか極秘事項。
所属（現在身を寄せている所）：ハラオウン家→たまにクロノの補佐で事務的なことをやっている
魔力量：ＳＳ（常に隠している為検査では出ず）
魔道士ランク：計測不可能
魔力光：少し暗い赤　魔力変換資質は無し。
使用術式：近代ベルカ式

希少能力（レアスキル）

・【創造神（ザ・クリエーター）】：様々な物体を粘土細工のように形を変えてしまうことが出来る。何も無い所からいきなり物を造りだす等をするにはまだ経験が足りない。元ネタは遊戯王など。

・【人形支配（パペットマスター）】：『意思の無い物体』限定で自由自在に動かせる能力。１度に１０体が限界。『意思の無い物体』にはガジェット等も含まれる。訓練次第で何体でも操れるらしい。

・【術式模倣（マジックコピー）】：１度見た術式を１瞬で構築できる能力。だが『見て』、その魔法を『喰らう』ことが前提なので使えたらいいな程度にしか本人は考えてない。元ネタは…色々ありすぎて忘れた。

・【再生能力】：上記に同じ。

備考：とある管理世界でのクロノの調査中に拾われて、高町家と同じ感じでそのまま養子になる。
物静かな性格で、１人称は『僕』、２人称は『君』。『一番兵器に相応しくない性格』をしているとされている。クロノ達には能力などのことは伏せてあり、ただ仕事をこなすスピードが異常な少年としか見られていない。なぜかニアミスが多く、春斗やフランと会った事が無かったりする。現在は地上本部に出張しており、レジアスやオーリス、ゲンヤとも顔見知り。特にレジアスが実は楽しい人だということを知っている数少ない１人であり、よくオーリスを嫁にどうかという誘いに対してのらりくらりとかわしている。自分の事を歩く質量兵器だと思っている。リンディによく女装させられる。
この作品中で、男の娘の宿命を背負わされている駄作者が描くストーリーの被害者。

【生態兵器シリアル？5　拒絶者（ヴィター）】

名前：クインディール（イタリア語の１５番から）

年齢：１９歳

外見：曲線状に立つ1本のアホ毛と腰まである長い黒髪。ゴスロリ服をいつも着ている。胸が大きい。しかし背は小さく、１６０ｃｍ程度で止まっている。

身長：１６０ｃｍ前後　体重：スカリエッティ及びナンバーズ合意の元焼却された為閲覧不可

所属（現在身を寄せている所）：スカリエッティ宅でナンバーズと遊んでいる。

魔力量：ＳＳＳ

魔道士ランク：ＳＳＳ

魔力光：滅茶苦茶目立つ金色　魔力変換資質は電気のみ。

使用術式：ミッド式

希少能力（レアスキル）

・【拒否宣言（リフューズコール）】：“拒絶する”という概念を持った影のようなものを操る。この概念はときに最強の盾に、時に最高の武器になる。拒絶するものは選ぶことができる。元ネタはディ・グレイマンのティキ・ミック（名前違うかも汗）。

・【雷電充電（ライトニングチャージ）】：自分の身体に触れた相手の魔力を電気に変換して蓄えることが出来る。でもダメージは来る。蓄積できる量を超えるとそのまま喰らうという結構難しい能力。

・【魔法爆破（マジックバーン）】：魔力を暴発させる厄介極まりないスキル。某教導官のスターライトブレーカーを暴発させたらどうなるかを考えると、この能力の恐ろしさが分かるだろう。スカリエッティですらも顔を引くつかせながらこの能力の使用禁止を言い渡した。元ネタはチンクのＩＳ、ランブルデトネイター。蛇足だがチンク本人とも仲がよく、彼女達が組むと爆発物の嵐である。一度スカリエッティの訓練室が完全崩壊したため、彼女達が戦闘で組むのはスカリエッティの許可が無くてはできなくなった。

・【再生能力】：上記に同じ。

・【艶やかなる誘惑（グロス・チャーム）】：理性に揺らぎがあった生き物を思うがままに操れる力。　大半の男は引っ掛かるものの、当然ながら朴念仁な男やそういうことを何も知らない男、というか元々性欲がない男は引っ掛からない。

備考：１４年前にスカリエッティへ拾われた。無還者（リセッター）を除いて唯一保護者に自分の事を明かしている兵器の１人。口調が特殊であり、１人称は『妾（わらわ）』、２人称は『お主』などと言う。１０歳の頃にスカリエッティやその頃存在していたナンバーズへ自分が知っていることを話して出て行こうとするも、ナンバーズとスカリエッティ総出で止められた。その後ウーノが徹夜で考えたクインディールという

名前を与えられ嬉しさで涙を流した。　スカリエッティやナンバーズには手のかかる妹、または娘という見方をされており、その一方で明らかに親バカな一面を見せている。要はキャラ崩壊である。造られた成功体の中では末妹に当たる立場であり、いつも兄や姉のことを隠れて探している。周囲からはディール、またはクインと呼ばれる。

全体的な備考：彼ら『兵器』は味方を攻撃しないよう、自分以外のプロジェクトS．W関係者には攻撃できないよう洗脳されるはずだったのだが。その前にリセッターが研究所を滅ぼしたため中途半端に終わってしまった。最低でも自分以外の『兄妹』――――つまりは他の『兵器』達を――――見つけられて、その？を知ることが出来るだけである。フランが春斗を見て気づいたのはそういう理由があったのだが…周囲の人間には生き別れた幼馴染（？）という説明で納得してもらったらしい。現在はクイン以外は誰にも能力を言っていないようだが、いつかは…？

【8／10更新】登場人物紹介（かなりネタバレあり）（後書き）

以上、少し遅れた人物紹介でした。
御指定等々お待ちしております（キリッ

え？能力がチートすぎる？それが天破クォリテ（ｒｙ

“邂逅”（前書き）

ようやく一話。恐らく週1更新になります。
今回の話は我等が将、巨乳の星の登Ｊ（火龍一閃

注意：駄作者のせいでシグナムさんが弱体しています。申し訳在りません。

“邂逅”

「『夜天の王、八神はやての騎士　ヴォルケンリッター烈火の将シグナムとお見受けしマス』」

それは普通の任務だった。

暴れている魔法生物を調査し、帰還せよという至極単純な命令。

そしてそれを命じたのは他でもない我が主――――罠である筈が無いと思っていた。

だからこそ1人でここに来て、魔法生物を調査して早く帰還しよう

と。

甘すぎた。既に、自らの主である八神はやてがこの任務を頼まれた時点で罠だったのだ。

「…だったら何だというのだ？」

任務を完了したと思ったと同時、一目見ただけで硬いと分かる堅強な結界が辺り一面に張り巡らされ、目の前に真っ黒なドレスのような服を着た男が現れて、冒頭の言葉を投げかけた。

一瞬で形成された状況と投げかけられた言葉に呆然とするのも一瞬、呼びかけられた烈火の将――シグナムは直ぐにデバイス『レヴァンティン』をセットアップし、自らの騎士甲冑を装備する。

「『セットアップを確認…投降の気配は無いと判断。警戒度をSランクへ上昇』」

「無論だ…みすみす殺されはしない」

目の前の男は、無表情で無反応。

殺意も何も無い男だが、だからこそ怖い。

殺意の無い人間が殺しにかかってくる。矛盾していそうだがそれは即ち暗殺者である所以。

故に、武人たるシグナムは理解していた。

目の前の男は、強敵であると。

「『言動・デバイスから目前の生存反応が烈火の将であることを断定。それでは』」

警戒していたはずだったのに、次の瞬間に目の前の男はシグナムの目から掻き消えた。

「『――標的の排除を、開始します――』」

「ッ！？（速い！）　レヴァンティン！」

《障壁》

完全に不意をついた攻撃にも関わらず、シグナムはその『火を纏った』攻撃をレヴァンティンの障壁で防御する。

その一撃は、鋭く、重い。

かなりの手練である。改めてシグナムは、そういう結論を出した。

「はぁっ！！」

「『回避』」

この状況の打開策――――つまりは勝負に勝つ方法を考えつつ、シグナムは横に剣を振るうも、男は身軽な動作でバックステップしそれをかわす。

「レヴァンティン！」

《カートリッジロード！》

「紫電…一閃！」

『後退』という動作を取った隙を見逃さず、切り込んでいくシグナム。その光景は、傍目から見れば明らかに圧倒的。

しかしシグナムは攻撃しながらも、１つの確信を抱いていた。

（…違う。これは私が押しているのではない…逆に押されている…！？）

常人の目には負えない斬撃の嵐が男へ降りかかるも、男は一向に慌てる様子も無くそれを極めて無駄のない動作でかわす。

機械的に、まるで分かっていたかのように。

「『攻撃パターンの記憶７０％終了。反撃に移ります』」

そして、均衡は唐突に終わりを告げる。

無機質な声の後、シグナムの顎が蹴り上げられた。

「うっ…ガッ!?」

「『“炎魔の拳撃”』」

「ぐぅっ…嘗めるな！！」

再び障壁と炎の拳の競り合いが起き、戦況がほんの数分前へとリセットされる。

しかし、シグナムの胸にあるのは焦燥と混乱だ。

（今、奴は私の攻撃パターンの記憶が終わったと…まさか、この短い時間で私の癖を見抜いたｔ――――）

「『零距離　虚槍雷光（ゼロ・ライトニング）』」

「！？　しまっ、」

焦りのあまり次なる敵の行動に気づけなかった、と気づいたのは既にその攻撃を喰らった後だった。

それはあまりにも致命的で。次の瞬間には、彼女の腹に青白い稲妻の槍が突き刺さっていた。

「――――ッぐ、あぁ…ッ！」

痛みから来る呻き声を押し殺し、口を血が出るほど噛み締め目の前の敵を睨む。

「『虚槍雷光の効果があることを確認。連射モードへ移行――――』」

その言葉を聞き、一瞬顔を青ざめさせたシグナムは直ぐに男へ剣を振りかぶる。

（冗談じゃない！　あんなものを連射されては、私とてただでは…！）

不意をつかれたとはいえ、痛みが走るまで喰らったことすら分からなかった攻撃。そんなものが連射されれば自分がどうなるかど想像に難くは無い。

「『！』」

その行為に少し驚いたのか、しかし無表情なのは変えないまま、いつ造ったの分からない雷を圧縮して作られた剣によって受け止められる。

鍔迫り合い、しかしそれも数秒。男はその膠着状態を雷の剣を思い切り振ることで打破、そのままシグナムへと振るうも彼女はそれをレヴァンティンで受け止める。

そして始まったのは剣技の応酬。

青光りする雷の閃光と炎を纏う魔剣との交錯が、何回も、何十回も繰り返される。

（私の剣技について来るか…いよいよ持ってこの男、何者だ!?）

「『…剣技に関しての能力値はＳＳ以上と断定。魔力ブースト使用、速度上昇開始』」

「なっ！？　チッ、レヴェンティン、此方もだ！」

≪了解！　カートリッジロード！≫

人の出せる限界を超えた剣技の応酬は、更に加速する。

彼らの剣が出す衝撃派によって地面は陥没し、不自然に風が吹き荒れる。

また、彼女自身も自分の出せる限界を超えていた。

（くっ…剣の腕には多少なりとも自信があったが、こうも容易く私と同格かそれ以上の力を……それも、デバイス無しで…）

使っている力は雷の変換資質を使い雷を圧縮した剣。当然カートリッジシステムなどは無い。

先ほど魔力ブースト――――恐らくは自己強化魔法の類――――を使ったことから、強化魔法も自在に扱えるのだろう。

ここに、もしレヴァンティンクラスのデバイスがあったら。それこそゾッとしない。

「くっ…はぁあっ！！」

「『…、』」

シグナムの剣を、まるで意に介さないように受け流しして斬撃を入れてくる。

その威力は鉄槌の騎士（ヴィーダ）の一撃に匹敵し、その速さはシグナムの宿敵（フェイト）を思わせる。

それに耐え、全てとは言えないが往なしつつ更に攻撃をする烈火の将もまた異常の一言。

響き渡る衝撃音、輝く火花。その光景は幻想的で、彼らが殺し合いをしているとはとても思えないだろう。

それほど鮮やかで、それでいて綺麗な攻撃・斬撃の嵐。一種の幕として金を取れそうな舞台と言ってもいいかも知れない。だが――

「『…依頼者（クライアント）からの、指令を確認』」

――これもまた唐突に、この一幕は終わりを告げる。

男に聞こえた言葉は、今彼が誰よりも優先すべき存在からの指令。

「依頼者（クライアント）…？　なるほど、その依頼者とやらに私の暗殺を頼まれたわけか」

「『…』」

その問いに、男は雷の剣を消して右手を前に突き出して。。

冷徹に、冷酷に、冷静に。

「『――――依頼者からの要請により、任務を標的の完全なる排除へと変更します。１ｓｔリミッターの解除申請を開始』」

シグナムへと、死刑宣告を突きつけた。

「は――――ッ！？」

そして次の一瞬で、均衡していたはずの勝負は終わりを告げた。

彼女の、2秒に1回あるかないかの瞬きという絶対の隙。その間に、氷の杭が何本も彼女の身体に打ち込まれていた。

「…が、はぁッ…」

「『申請の承認を確認、同時に攻撃を終了。標的の損傷箇所の詳細を確認――右胸、腹、左足、右腕へ“氷華冷葬（デット・フラワーズ・アイス）”の直撃と断定。生存確率は30％以下、放置によって死に至る時間は2分程度』」

そんな光景を見ても、目の前の男は眉1つ動かさない。まるで人形のように、何も疑問を持たない上に何も考えていないように。

否、シグナムが恐れたのはそんなことではない。

この杭が身体に打ち込まれた瞬間、男と目が合った。

深い、深い、闇だった。何も無い、本当の無が広がっているような目だった。

それこそ、この世界の何も見ていないような、そんな目。

（…主、はやて、私は、恐らく、ここまでで、す……どうか、お気をつけを…あの、男）

「『――“依頼者”の指示――処理、指示――――』」

（ただの、人間では…ありませ…）

そこまで考え、同時に巨大な爆発音が響くと同時。

烈火の将、シグナムの意識は完全に闇に染まった。

“邂逅”（後書き）

天破「デバイスの口調もシグナム姐さんの口調も分からない件。如何してこうなった。というかシグナム姐さんすいません」

シグナム「色々と突っ込みたいところがあるが、何だこの駄文は。私が弱すぎるではないか。まあ、奴が強すぎるというのもあるんだろうが…」

天破「自分で書いてて思った。あれ、この兵器達強くね？　と」

シグナム「さすがは下書きも無く行き当たりばったりで書いていることだけあるな…いつか絶対お前批判喰らうぞ」

天破「本当に勘弁してください。まじで私立ち直れませんよ？…というわけなので、誹謗中傷本当に勘弁してください…この小説は私の欲望と妄想が詰まった駄作者の小説です。当然駄文で超駄文です。御気を悪くされてもどうすることも出来ません。その辺りよろしくお願いしますｍ――ｍ」

シグナム「色々と作者は現実世界で参っているらしいからな…まあ、お手柔らかに頼む。それでは次回だが…私は生きているのだろうな？」

天破「シグナム姐さんを殺したら全世界のシグナムファンが私にスターライトブレーカー級の精神攻撃を放ってくるはず。それにシグナム姐さんはこの話の中でもヒロインに近い立ち回りなんだから、死んでもらっても困ります」

シグナム「…ヒロイン？ちょっと待て、聞いてないぞ？」

天破「という訳で次回！　いつ更新になるかは当然の如く未定です！本当にすいません！ｏｒｚ　呼んでくださっている皆様には申し訳ありませんが、どうかかなり遅れても見てやってくださいお願いします…」

シグナム「答えない気か…まあいい。感想・指摘などもしもらえれば嬉しさのあまり作者がブレイクダンスをやるようだ。作者のアホ面を拝みたい勇者は、是非ともこの駄作品に感想を入れて欲しい」

天破「酷いいわれようだ…あ、処女作なのでこれからの改善はそこまで期待しないほうがいいです（キリッ　直して行きたい所存ですが、何かあればお伝えくださいませ。それでは、また次回に！」

第２話　“命令”

“命令”（前書き）

Q：何故こんなに短いのですか？
A：天破が先のことを考えない馬鹿だからです

Q：何故戦闘シーンが分かりにくいのですか？
A：第三者視点で、しかも男（シグナム姐さんの敵）が機械的に喋るという厄介な特徴を持っているので絡ませにくいからです。

という訳で第2話お送りします。いきなりお気に入り登録して下さった方がいるようで、本当に嬉しいです。

では本編をどうぞ！

“命令”

第三者視点　ｓｉｄｅ

膝を突いたまま気を失ったらしいシグナムを虚ろな瞳で見つつ、彼女を暗殺しようとして張本人である男は、依頼者（クライアント）との念話を始める。

「『標的の気絶を確認。放置しても、止めを刺しても結果は９７％の確率で同じと算出しました。依頼者（クライアント）、指示を』」

『　　。』

「『――“依頼者”の指示を確認。優先すべきは死体の処理との事。指示を実行しマス』」

人形のような動作で、烈火の将へと近づく男。
動きに合わせて、ドレスのような服の裾が翻るが、それすら死神の一挙一動にすら見える。
そう、彼は今間違いなく“死神”だ。今まさに、１つの生命を奪おうとしている。

「『確実に指示を実行すべく、１ランク上の魔法の使用申請開始。…承認を確認――――術式展開』」

シグナムの前へ立った男の足元に魔法陣が描かれ、その手をシグナムへと翳す。

「『“絶対焼却魔法（フレイムバーン）”。発動した場合の標的死亡確率は――――１００％』」

彼女にとって絶望的な数値を算出し、しかし確かなる結果を未来に示しながら男はたった一言、『発動』というキーワードを唱えればシグナムの身体は文字通り完全に焼却され死体すらも残らない。

普通の人間なら、そんな光景を思うだけで嫌悪するだろう。そしてそれを見るだけで、苦しんでしまうだろう。

生憎と、今回シグナムの暗殺を依頼されたこの男は完全に『普通』では無かった。いや、『人間』という部類に入れてしまっていいのかも疑わしい、そんな存在だった。

「『さようなら』」

形式だけの別れの言葉を口にし、彼は魔法を発動――――――

――――――しようとした瞬間に、その肩へ白銀の槍が突き刺さった。

「『！　敵対反応。数は六。依頼者（クライアント）の指示を――――』」

「その依頼者っちゅーのをちょっと教えてくれんかなぁ？」

「『…！　魔力反ｎ――――』」

その槍を受けて、『石化』していく身体をものともせず指示を仰ごうとした男へ、これもまた白い砲撃が直撃し大規模な爆発が発生。

その砲撃で起きた粉塵が辺りを覆った。

「やった？」

「いや、まだや。あのシグナムが、傷を１つも付けられずに此処まで酷くやられたんや…この程度で終わるわけが無い…いや、終わらせへん」

その言葉が終わるのと同時、男を中心に取り巻いていた粉塵が不自然に吹いた突風で取り払われた。

「『…魔法形態をベルカ式と断定…魔法光、威力、技術から該当する魔道士を検索…完了…』」

その姿には当然のように傷は無く。

それどころか、その真っ黒なドレスにも煤１つ無い。

放ったはずの槍も、いつの間にかその身体からは消え失せていた。

そして、それだけで目の前の敵の『異常』さを垣間見た魔道士達は、全員が警戒態勢に入る。

そして男は、常人なら気絶してしまうかも知れない敵意・殺意の中心にいながらもまるで気づいていないかのように“標的”の援軍として現れた“敵”の名前を告げた。

「『９８％の確率で…夜天の王“八神はやて”だと推測します』」

「…私の家族を傷つけた報い…倍にして返したるからな」

夜天の王、八神はやてとその騎士、そして仲間（友達）が空中で男を囲んでいた。

“命令”（後書き）

天破「駄目だ私、本当に才能ない」

はやて「今更気づいたんか…」

天破「結構傷ついた、今の言葉で。…さて、今回のタイトルである“命令”ですが皆さん疑問に思ったでしょう。何処が命令なのかと」

はやて「なんてことはあらへん…ノリで決めたら書いてる途中に全くタイトルとかみ合わない内容になってるってだけや」

天破「マジでごめんなさい。次からは気をつけます。それでは次回ですが…」

はやて「私のターンが来るで！フッフッフ、あの男ギタギタにしたる…！」

天破「それは合っている様で間違ってたりする」

はやて「え〜」

天破「それでは次回！」

第３話　“化け物”

“化け物”（前書き）

という訳で第3話をお送りします。

戦闘がようやく終了！！なのでやっぱり短いです（お

という訳で、駄文ですがお楽しみいただければ幸いです。

それではどうぞ！

「時空管理局です。今すぐ投降してください。投降すればあなたには弁解の余地があります」

そう告げたのは、白いＢＪを着た女性――――高町なのはである。

しかしその目には怒りが宿っており、投降をしたとしても恐らく攻撃をするであろう意思があった。

「『…時空管理局…白い悪魔、高町なのはと断定します。更に、その申し出は却下します』」

そして彼が呟いた一言で更に怒りを強めるなのは。当然ながら、その二つ名は彼女にとってかなり不本意なものだった。
直ぐにでも特攻しようとしたが、先程男に向かって啖呵を切った――八神はやてがそれを止めた。

「落ち着くんや、なのはちゃん。アイツには聞きたいことがある」

その言葉に異論を唱えたかったなのはだが、この中で一番つらい気持ちでいるのは他でもないはやてだということに気づいて引っ込んだ。

「時空管理局、やのうて私本人として質問するで。何故シグナムを狙った？」

その節々に溢れる怒りの波長。しかしそれに気づかぬとでも言うように男は言った。

「『…依頼者（クライアント）からの許可が取れたのでお話します。理由は簡単です』」

男は、無表情で無機質な声でその事情を告げた。

「『烈火の将、シグナムがあなた方の中で一番大きな存在だからです。もし彼女を殺しておけば、貴方達とて復讐に取り付かれる。そこを狙って私が1人ずつ殺そうという計画でした』」

「…それはなんや？アンタが提案したんか？」

「『その問いへの返答ですが、違います。これは依頼者（クライアント）自らが私へ指示を下したものです。しかしながら、別に殺さなくても良かったのではないかとも言っています』」

「其は何故や？」

その問いに、少し男はその目を閉じ、大きく息をすう。

再び開いたその瞳は――――紅かった。

「『皆さんがここに来るだろうからです。ほら、今殺せば一網打尽に出来るかと』」

もう、問答など必要なかった。

次の瞬間、はやての両脇に控えていた鉄槌の騎士――ヴィータと、高町なのはがそれぞれ砲撃とデバイスによる一撃を放った。

「アクセルシューター！！」

「ギガントォォ…シュラーク！！！」

魔力と共に怒りという感情を乗せ、その“鉄槌”は寸分違わず男へ接近する。

それを見た男もまた、右手を前に上げて、攻撃を開始しようとする。
その手に、“金色”の魔法陣が現れた。

「「なっ!?」」

「あれは、私の…!?」

そう言って驚くのは、見覚えのある魔法陣を見た――フェイト・T・ハラオウン。

そう、それは紛れも無く自分の魔法――まさか、稀少技能（レアスキル）かと疑う思考も束の間、それは放たれた。

「『依頼者（クライアント）の趣向により、フェイト・テスタロッサの魔法を使用開始（ロード）。発動しマス――――“ハリケーンセイバー（ダウンロ）”』」

男が一瞬で造った雷の剣を振るうと、その魔法陣より巨大な雷の斬撃がなのはとヴィータを襲った。

「っ！？――（フェイトちゃんの魔法よりも大きい！？）レイジングハート！！」

「チィ、アイゼン！」

≪≪プロテクション≫≫

２つの堅固な障壁が張られ、男の放った“ハリケーンセイバー――（？）”を受け止める。

「『…、障壁…』」

男はその様子に、全く動じずにただ一言発した。

「『障壁ヲ解除セヨ、“レイジングハート”、“グラーフアイゼン”』」

その言葉と同時に、彼女達の障壁が無かったかのように消え去った。

「えっ？――――」

「な――――――」

何が起きたかも分からぬまま、２人の少女は雷の斬撃に直撃し、爆発した。

「なのは！　ヴィータ！？　…ッ、許さない！！」

どうやら直撃して一時的に気絶しているようだった。

男に感情があれば、非殺傷設定であるだけ感謝して欲しいものであるがそんなものは彼には無い。

今は目の前にいる女性の対処を優先する。

「バルデッシュ！！」

《カートリッジロード！！》

「ソニックムーヴ！！」

ただでさえ早い“金色の閃光”は、カートリッジをロードした瞬間に常人の目には追えないスピードへと変化する。

地面から空中まで、多くの虚実を織り交ぜながら――――

――――――狙うは、男の死角。

（獲った！！）

此方に気づかない男に、フェイトは会心の笑みを浮べ、バルデッシュを振るう。

その美しい顔が驚づかみにされ、ソニックムーヴが強制停止させられたことに気づいたのはその2秒後であった。

「…！？　ッ、あぁあ…！！」

「フェイトちゃん！？」

八神はやて、そしてその後ろに控える守護騎士達は信じられなかった。

彼女――――フェイトのソニックムーヴは人の目には追えない程に速度を上昇する強化魔法。ましてや今は、男の完全な死角を狙った。それが今、いとも容易く見破られ彼女の顔は握りつぶされようとし

ている。

「『依頼者（クライアント）から許可をもらったので、貴方の問題点を指摘して差し上げます。まず先程の魔法の軌道ですが、あんなに動いていれば何処から何処を狙ってくるかなど瞬時に計算できます。早く動けるのだったら、私の背後なり斜めに回り込み、私の首を切断すべきでした。それが貴方の敗因です。しかも、そのデバイスは非殺傷ですか？私には感情がありませんが、恐らく自らの仲間とやらを殺されかけ非殺傷で敵を捕らえようなどとは虫が良すぎると私は思考しまｓ…！

…クライアントからの指示を確認……』」

その紅い目は見る見るうちに黒くなり、フェイトをその場で放り投げた。

空中で一回転し、地面に立って男を睨むフェイトだが、当の本人は何処吹く風というものである。

「『依頼者（クライアント）からの伝言です。今回はこれで引かせていただきます』」

「「「！！」」」

「嘗めとんのか、私らを…これだけやられてだまっとると思うんか！？」

「『いや、１００％の確率で貴方は黙らずを得ないと、私は算出します。そして伝言です、“これが何か分かりますか？”』」

そう言って男が見せたのは、ミッドチルダの人々の映像。

皆笑いあい、どつきあいながら仕事をしている。

「…それがどうかしたんか？」

いやな予感を感じ、低い声でそれを聞いたはやてはその予感が正しいことを本人の口から証明された。

「『ここで貴方が私に攻撃を仕掛けた場合、“不慮の事故”で貴方方全員とここに写っている人間が殺される、と指示が出されました』」

「ッ！？」

「なんやそれ…一般の人まで巻き込むつもりなんか！？」

「『それが命令なのなら、私はその通りに動くまでであり私には何

ら関係の無いことだと回答します』」

その言葉を受けて、ついに彼女達は絶句した。

他でもない、彼は自分の手で“不慮の事故”を起こし、そしてそれを自分には何ら関係ない、と言い切ったのだ。

「『…それで、どうされるのですか？』」

「……私はアンタへ手はださん。今回はな」

「『了解しました。今の言葉を依頼者（クライアント）へ送信…完了。それでは、“また会いましょう”』」

形式だけの言葉を投げかけ、男は霞のようにその場から消えていく。

「…化け物やな」

「『それが、私の存在意義なので』」

はやての呟きに、凍えるような無機質な声が帰ってくる頃には、もうそこには誰もいなかった。

“化け物”（後書き）

なのは「ようやく私たちの名前がでたね」

天破「実はシャマルとザフィーラがでてなかったりする」

なのは「あ…で、でもでるんでしょ？でるんだよね！？」

天破「次回は他の“兵器”達の対談みたいな漢字になる予定だから無理ぽ」

なのは「出してあげて欲しいの…あまりにも2人がかわいそうなの」

天破「うん…頑張る。それで、戦ってみてどうだった？」

なのは「…強すぎるの。それに、障壁もいきなり消えちゃうし…よく分からないなぁ」

天破「まあ色々と下手な伏線を入れたからなぁ…いつか分かるはず」

なのは「それに、フェイトちゃんのソニックムーヴもとめられちゃうし…何者なの？」

天破「ああ、それに関して1つ。
彼が普通に言っていますが、実は何処から何処へ攻撃することを計算するのってスーパーコンピューターでも難しい計算です。それは何故かと言うと、あんなに簡単に受け止められたという事はいつ、どうやって攻撃するのかも分かっていたという事なので…」

なのは「作者さんの駄文っぷりに代わりに謝るの。ごめんなさい」

天破「君もなかなか毒舌だなぁ…では次回」

第４話　“兄”

“兄”（前書き）

という訳で第４話です。
今回は“兵器”との対談になります。
なのは「私の出番は？」
あるよ？何回か会話するだけだけｄ（ディバインバスター
なのは「ふう…それじゃあ、第４話、“兄”！リリカルマジカル始まります♪」
…その歳でその台詞は無理があｒ（スターライトブレイカー

“兄”

――――翌日。

管理局　機動六課　病室ｓｉｄｅ

「…、シグナム…」

「シャマル、どうや？　シグナムの容態は」

「…酷いわね。この氷の杭がそこまで深く刺さっていなかったって言うのが不幸中の幸いかしら…」

ずっと外に出しておいても何故か溶けていない謎の氷を持ってそう言ったのは、現在重傷を負っている女性、シグナムと同じヴォルケンリッター湖の騎士――シャマル。
そしてそれに唇を噛み締めて答えたのは、彼女達の家族であり護るべき存在、八神はやてである。

「命に別状は無いわ。けど、出血が多すぎる…目が覚めても絶対安静になるわね」

「完治するまでどれくらいや？」

「少なくとも、1，2ヶ月はかかると思うわ」

「…分かった。そやな、私はこの事件の後処理とかがあるから…シグナムのこと、頼むで」

「ええ、任せて」

本当なら、家族である彼女の傍でずっと看病していたい。しかし、現実がそれを許してくれないことは明白であった。

彼の、“エースオブエース”と“鉄槌の騎士”、そして“金色の閃光”が負けた。しかも、それぞれがほぼ一撃で、だ。

いや、厳密的には負けたとは言い難いのだが、このニュースは管理局中を駆け巡り、ほぼ全ての職員へと影響を与えた。

マスコミも勝手に騒ぎ立て、彼女達のことも考えずに取材の申し込みが後を立たない。

更に、現場にいた中で最も偉い立場にあるはやてからの報告は今最も注目されていた。

「…う……」

しかし彼女の心中は、それどころではない。

家族は傷つき、自分の仲間はいとも容易く落とされ、それどころか

それらを行った犯人はまんまと逃げてしまった。
一般市民を盾に脅迫されたとはいえ、なんということか。
家族が、仲間が傷つけられたのに、自分は何も出来なかった――
その事実が、はやての心を締め付けていた。

「くそ…くそ…っ！！」

誰もいない、淋しい六課の廊下で、彼女は静かに涙を流して泣いていた。

管理局　仕事部屋ｓｉｄｅ

カチカチカチ…

「…」

カタカタカタ…

「…」

カチカチカチ…

「フェイトお姉様…」

「何かな？」

「…今はなのはさんと御一緒に、検査のために聖王病院にいらっしゃるはずではありませんこと…？」

現在、午後3時。確かなのはとフェイトは聖王病院で検査を受ける予定だったのでは…ということを呆れたような顔で突っ込んだ女性――フラン・T・ハラオウンは、自らの姉ことフェイトを見ながらそう告げた。

「何だと…？　なあ、なのは姉。俺はその話初耳なんだが？」

「…テヘッ♪」

「…時の流れって残酷だよな…」

「…春斗？　今の流れでのその言葉はどういう意味かな？」

そのフランの一言を聞き、たった今姉と呼んだなのは本人から万力の如き力を持つその右手でアイアンクローをされている男――高町春斗は、登場してからわずか一分にも満たずに、その短い生涯を自業自得で終えようとしていた。

「なのは姉、俺が悪かった。大丈夫だ、なのは姉は多分…いや、まだ現役で頑張れると俺が保障するから頼む離してくれ」

「分かればよろしい」

同じ姉でもこうも違うものなのかと、フェイトとなのはを見比べて無言で涙を流す春斗に、フランは苦笑しつつ

「で、行かなくていいのですの？」

と、念を押すようにそう言った。しかしフェイトはその言葉に笑って、

「大丈夫だよ。もう、心配性だなー、フランは」

「たった一人のお姉様なんですもの、心配にもなりますわ…」

と、返してフランはため息をつきながらずっと接続しておいた回線を開いた。

「それで、こう言ってますけれどどう致しましょう。クロノお兄様」

『…全く持って、本当に困った妹と幼馴染を持ったものだ…』

「「クロノ!?（クロノ君!?）」」

フランは最初にフェイトに突っ込みを入れたときから、この回線を開きっぱなしにしておいたのである。用意周到と褒めるべきなのか、それともなんということを…と叱るべきなのか、ちょっとずれた混乱をフェイトがしているうちに、
クロノがじゃんじゃん話を進めていった。

『頼むから、検査だけでいいから病院へ言ってはくれないか？あまり話したくはないが、管理局にも体裁がある。ここで君達を病院へ行かせなければ、管理局は病人を働かせる場所だ、というようにマイナスイメージが生まれてしまう』

「「え～？」」

いやそうな声を出すなのはとフェイト。困った顔をするクロノへ、それを傍観していたフランと春斗から助け舟が出た。

「なのは姉、俺からも頼むよ。これでもアンタの弟だ、心配なんだぜ？」

「フェイトお姉様、私もですわ。確かに異常なところは見られませんが、それでも病院へ行ったほうがいいと思います。フェイトお姉様の身に何かあるとすれば、心配で夜も眠れませんわ…」

それぞれの弟、妹による心配そうな顔＋涙目＋上目遣い。

若干ブラコン&シスコン化しつつある彼女達にそれが効かない筈も無く、先程とは打って変って先を争うように彼女達は病院へと向か

って行った。

「という訳でクロノお兄様、それではまた」

『ああ、達者でな』

その言葉と共に、通信が切られる。

その会話が最後とでも言うように、暫くはパソコンのキーを叩く音のみが聞こえる空間となった。

カタカタカタ…

「…、」

カチカチカチ…

「……」

カタカタ…カタ

「『？3（フラン）』」

「『了解。稀少能力起動【陰陽術】。人払いと聴力阻害をかけますわ』」

ふと、無機質な声が春斗から漏れるとそれに応答するかのように無機質で機械的な声でフランがそれに応答した。

それと同時に、何重もの人払い・聴力阻害の結界が仕事室へと掛けられた。

「…一息、だな」

「いいえ、一息ではありません…きっと、始まりですわ」

主語は無いが、それだけで彼らは通じ合えた。
ずっと探していた、自らの心を犠牲に自分達を助けてくれた“兄”。
そしてその手がかりを得るために、あえて憎んでいる管理局へと入り込んだ。
何回か、見覚えのある上官をテレビで見る度に怒りが沸いた。見覚えのある研究員や所員が自分達の姉と笑顔で会話をしている度に殺意が起こった。
それでもそれを押し殺し、ようやく“兄”であるかもしれない手がかりを得た。

いや、彼らには確信があった。なぜなら、なのはやシグナムの友人である八神はやてから「何故かシグナムの身体に刺さっていた氷が溶けない」と言っていたからだ。

創造魔力（イマジンエネルギー）

“兄”の数多き稀少能力の1つだった。この魔力で変換した炎や雷は、絶対に壊れない。
炎は水を掛けても消えないし、雷はゴム細工に打ち込んでもゴムに帯電してしまう。
本人が望むまでは消えない、戦闘で兄が好んで使っていた能力だった。

しかしこの能力には欠点がある。それは、絶対に壊れないという性質が仇となって敵に使われる可能性があるからだ。
だからこそ、敵を素早く行動不能にする技能が彼には求められたわけであるが…今はそれは置いて置こう。

だからこそ、彼らは確信し…同時に歯軋りをした。

“兄”が、人を殺そうとした。

しかも、誰かの命令で。

これが示すのは一つであった。

「機械的に感情の篭っていない声で話していた、というフェイトお姉様の証言にも一致しますわ。恐らく、兵器の心（ウェポンマインド）による完全洗脳でしょう」

兵器の心（ウェポンマインド）――

“兄”の身体のみならず、他の兵器たちにも施された洗脳（プログラム）。
この洗脳を施された生き物は、“管理局の上層部”からの命令に逆らえなくなりどんなことでも忠実に実行するようになる。命を顧みない特攻であっても、何の躊躇もなしにそれを実行してしまうというものであった。
どうやら、一番実験回数が多かった“兄”への被害が一番大きく、他の兄妹（兵器）達にはそこまで強い洗脳はかかっていない。「何か、やらなければいけ無い気がするような…」兄以外の兄妹達にはその程度であった。

「チッ…俺達にもプログラムされていたのにも驚きだってのに、兄貴には完成されたものが埋め込まれてたっつーのかよ」

「……管理局の屑め…何処まで私達を馬鹿にすれば気がするんです

の…？」

低い声で呟く彼女の身体から、薄緑色の光が漏れ出し始めた。

それを厳しく春斗は注意する。

「落ち着け、フラン…ここを廃墟にする気か。それもまた一興だがな」

「…そうですわね。申し訳ございません…それで、どう致しましょう？」

「…洗脳を受けてんのなら、俺達のことすら分からない可能性が高い。俺達は所詮、造られた存在だ。だから――」

春斗は、その目を輝くような金色から銀に変えて、笑いながら言った。

「打ち倒すしかねえ。俺達の兄貴であり、世界最凶の兵器である無(リ)還者(セッター)を」

「他でもない、お兄様の兄妹である――私達(兵器)が、ですわね」

「それが、この世界に生まれてきちまった俺達の罪滅ぼしだ。だから、まずは他の兄妹を集めなきゃならねえ…」

その目は再び、輝くような金色に戻っていた。

「どうにかして手段を考えなきゃならねえな」

「そうですわね…」

数分間、そのままの姿勢で考え事を始めるフランと春斗。
兄程には無いにしろ、フェルマーの最終定理を2秒で解ける程度には（人間の観点から言えば、それは絶対にその程度、とは言わないが）彼らは頭がいい。
考えることなど山ほどある。計算、断定、算出を繰り返すことに、飽きなど来るはずもない。

しかし、彼女たちは1つ忘れていた。

「…フラン、なのは姉とフェイトさんっていつ帰ってくんだっけ？」

「検査だけだから一時間程度で済むはずだから――――16時程度ですわよ。それがどうかし――――あっ」

現在の時刻…17：23

その後、慌てて人払いと聴力阻害の術を解除し、解除した瞬間に2人の姉が入ってきた。

なんでも、検査が終わって戻ろうとしたら次から次へと別の仕事が見つかり、中々こちらへ戻れなかったらしい。

事情を知っている2人からしてみれば謝りたいのはこちらのほうであったが、そうも行かないので仕事に戻った。

2つの兵器は仕事をこなす。

――兄妹全員で挑んで、結局1度も勝てなかった“兄”の姿を思いながら。

“兄”（後書き）

天破（生還）「ふぅ、死ぬかと思った」

春斗「死なないお前が怖いぜ。なんでなのは姉の砲撃2発受けて五体満足なんだよ」

天破「それが作者クォリティ（キリッ」

春斗「意味わかんねえよｗｗｗｗ」

天破「で、無還者って強いの？」

春斗「ああ。俺たちが挑んでも、結局兄貴には一度も勝てなかった…当然、兵器としての能力を駆使してだぜ？　強すぎるぞ、あれは…」

天破「そういう設定にしたんだから当然だけどね」

春斗「笑顔で言うなよ。俺たち、死ぬかどうかの瀬戸際なんだぞ？」

天破「ふっ、知らん」

春斗「駄目だこの作者（バカ）、早く何とかしないと…」

第５話　“ＦＷ”

注：幕問を挟む可能性があります。御了承下さい。

幕間 “依頼者”（前書き）

結局書いてしまいました。無還者（リセッター）サイドのお話です。
ちょっと彼の戦闘シーンでは、機械的なところが分かりずらかったかな、と思い書いてみました。当然の如く短いですｗ

読まなくても多分支障はありませんが、フラグがあるかも知れないので見たほうがいいんじゃないかな？かな？（ぇ

それではどうぞ！

幕間 “依頼者”

――時間は、シグナムが殺されかけて男が撤退した頃から１０時間程経過した深夜。

１人の男が、真っ暗な闇の中で何かを待っているように立っていた。顔を見られたくないのか、顔には深くフードを被っている。身体も真っ黒なローブで覆われており、しかもこの時間帯だ。余程目を凝らさなくては気づけないほどであった。

暫くして、真っ黒な魔法陣が地面に現れて輝いた次の瞬間に、別の男がそこに立っていた。
男だというのに真っ黒なドレスのような服、しかし此方は顔を隠す気も無いのか深い闇の色をした目を男へ向けて、機械的な声で言った。

「『魔力サーチ…完了。依頼者（クライアント）であることを確認しました。もう一度確認を取りますが、何故退け、と命じられたのでしょうか？』」

「今殺すのは得策ではない」

男はかなり低い声で、しかし嘲笑うかのように喋った。

「あの小娘共は地上本部の栄華の為には確かに邪魔だ。だが、もし今殺せば管理局の評価もろとも落ちてしまうだろう。あの小娘共は民衆にも人気がある。それが殺されたともなれば、管理局の名折れだと考えた。もし殺すのなら、それこそ大きな戦争の際に“巻き込まれて戦死”したとでもでっち上げればいい。いい考えだろう？」

醜悪な声で、最低な事をのたまう男――地上本部少将、ガルザス・サクライズは、そう言ってその口を三日月状に曲げ、気味悪く笑った。

目の前の男は今の言葉を黙って聞いていたが、話が終わると同時に小さく、無機質な声で言った。

「『…記憶を完了…“　　”に送信しマス…』」

「何か言ったか？」

「『エラーが発生したようです。現在修復しました…それでは依頼者（クライアント）』」

「うむ、報酬だな。任せよ、飛び切り上等な魔道士達をお前に殺させ――――」

男は、それはそれは普段通りに。

「『さようなら』」

死の宣告を投げつけた。

言おうとした言葉を遮られ、状況を理解することも無くガルザスがその言葉の意味を聞こうとするも――――

男が軽く蠅を追い払うように手を仰いだかと思うと、ガルザスの頭

は鋭利な刃物で切り裂かれたかのように綺麗に空中へ吹き飛んだ。

残されたガルザスの身体だけがビクビクと痙攣し、頭があった場所からシャワーのように真っ赤な液体が噴出していく。そして、これから絶対に言葉を発しものを見ることは無いその頭は、空中で回転し大地を少し転がったかと思えば黒色の雷が直撃し炭へと変わった。

「『…魔法・能力による再生の可能性０％。生命活動の停止を確認。依頼を完了』」

その鮮血が顔や服にかかるのも気に止めず、男は無機質な声で小さく呟く。

『　　。　　。』

それに応答するかのように男の頭に声が聞こえたかと思うと、男は目を閉じて、

「『了解。管理者の指示により、帰還後速やかに休止モードへと移行します。何か指示が在れば起動を。　これより指示を実行しマス』」

と言って再び目を開き、現れたときと同じように魔法陣を展開し、次の瞬間には死体を残して男は消えていた。

幕間 “依頼者”（後書き）

当然ながら、今回のオリキャラであるガルザスはこのときのためだけに作りました。上手く悪役をかけたか不安です。いえ、無還者も十分悪役ですが。

さて、今回もやっぱり下手な伏線を入れております。とりあえず注目すべきは“管理者”とガルザスの殺害方法です。

管理者の方は予測が付く方もいらっしゃるかも知れませんｗしかしガルザスの殺害方法については多分何処でも触れていないので分からないと思います。
なので、本文で書けない分ヒントを…兵器達は皆、１つは“概念”を持つ武器や力を操ります。今回の話で彼がガルザスを殺したのはこの“概念”を持つ能力か武器のどちらかです。これから出ると思うので今しばらくお待ちくださいｗ

という訳でこれを見てくださっている方へ感謝を捧げつつ第５話の執筆を急ぎます！題名どおりフォワードが登場です。上手く書けるといいなぁ…（お

それではまたｗ　あ、感想下さると嬉しいです＾＾ちょっと怖いですが楽しみです。お待ちしておりますｍ＿＿ｍ

それでは今度こそ、次の話でお会いしましょう。

改めて次回　第５話　“ＦＷ”

“FW”（前書き）

という訳で第5話、お届けします。
いつにもまして駄文だぜ…！

何だかストーリーの展開が早い気がします。おかしい、こんなはずじゃなかったのに。如何してこうなった…。

もっと緻密で濃いストーリーを書きたい（遠い目
…永遠に無理かなあ（ぉ

それでもこの駄文を受け入れる自信のある方は、どうぞ先にお進み下さいませ！
よろしくお願いしますm――m

“ＦＷ”

管理局　機動六課　訓練室ｓｉｄｅ

「それじゃあ、今日も訓練を始めるよ！」

「「「「はい！」」」」

聖王病院にて治療を受け、「異常なし」と判断されたエース・オブ・エースこと高町なのはが、目の前で元気良く返事をした４人の魔道士に笑顔で頷く。

「うんうん、今日も皆元気そうだね」

「あの、なのはさん…撃墜されたと聞いたのですが、大丈夫なんですか？」

そう、小さい声で心配そうな声を出したのは青髪の少女――スバル・ナカジマである。

彼女にとってなのはは尊敬すべき存在であり、憧れだった。そんな人が撃墜されたとなれば心配もするだろう。

そんな言葉を聞いてなのは本人はくすりと笑って、

「大丈夫だよ。非殺傷設定だったし、…手加減、されてたみたいだから」

最後の言葉を小さく付け足す。この事実は彼女に重くのしかかって

いた。

数多の次元犯罪者を捕らえてきた彼女は、驕ってはいなかったが自分の強さに自信を持っていた。

しかしその力は1人の男に簡単に敗れた。しかも手加減までされて。

手加減されていたと分かったのは、非殺傷設定であったからとそこまで傷が深くなかったからである。

アレはどう考えてもフェイト本人の出力以上の雷。でもそれでフェイトのオリジナルよりも傷は無い――とすれば、恐らく当たる直前で手加減でもしたのだろう。

「あの、なのはさん？」

「！　あ、ゴメンねスバル…で、なんだったかな」

「い、いえ…何か考え事をしていたもので…す、すいません」

「如何して謝るの…いいんだよ、心配してくれたんでしょ？　大丈夫…さ、改めて訓練を始めるよ！」

「「「「はい！」」」」

再び――機動六課の誇る部隊、フォワードのメンバー達は元気良く返事をした。

機動六課　執務室ｓｉｄｅ

「フラン、なのは姉しらねえか？」

「あら、春斗…確か今の時間はフォワード陣の訓練をしているはずですわ」

扉を開けるなりパソコンで仕事をしていたフランに春斗がなのはの居場所を聞く。

フランはその問いに、壁に掛けられた時計を見ることで回答した。

「っつーことは今訓練所は使ってんのか…」

「何かあったんですの？」

「いやな、新しいガジェットが発見されたって言う報告が来たんだが…気になるものを見つけてな」

「気になるもの、ですの？」

「これ見ろよ」

苦い顔で春斗は手に持っていた封筒から出した写真をそのままフランに見せる。

「これは…新型ガジェットですわね。気味の悪い形ですわ…」

写っていたのは大量の触手を持った球体型のよく分からないものだった。しかも空中に浮いている。

どういう原理なのか興味を持ったが、そんなものは次の春斗の言葉で吹き飛んだ。

「その球体の中心部分を見ろ。それは恐らく“拒絶宣言（リフューズコール）”のエネルギーで動いている」

ドォンッ!!と。

緑色の光が彼女の体中から放出され、そしてそれらは次の瞬間に真っ白な閃光によって“消失”した音が、執務室中に響き渡った。

幸いに今、執務室には彼ら以外はいない。

「落ち着け、フラン・T・ハラオウン！！　マジで此処を廃墟にする気か！！」

「…誰ですの。私達の兄妹を幽閉し、道具として扱っているのは、何処の屑ですの！！？」

フランは、現在春斗が知る中でも一番他の兄妹への心配をしている。

春斗も当然管理局を憎んでいるし兄妹への心配を欠かしたことはな

いが、彼女の心配は度が行き過ぎているように思える。

「何故そこまで乱れる？　まだ俺は何も言って無い！」

「当然じゃありませんか！　いつも、いつも他の子たちがどんな扱いを受けてるか心配で心配で…春斗は心配してないんですの！？」

「してるに決まってんだろうが！　だからこそ俺達は落ち着かなくちゃならない！！」

その剣幕に思わず言葉を詰まらせるフラン。

そして、急激に頭が冷えたのかその場に崩れ落ちた。

「…怖いんですの」

そして小さく呟いた。

「怖いんですの…フェイトお姉様やなのはさんが、私達が造られた存在だと分かってしまったときにどんな反応をするのか…！　もう私は、失うのはいやですの…もう、別れなんて嫌ですわ…！！」

それは恐らく、遠い昔に兄が自らの全てを犠牲に他の兄弟を逃がしたことから来る恐怖。

頼れる存在が、親しい存在が急に消えて新しい環境に放り出される――それがどんなに心細く、どんなに怖いかを彼らは全員が体験していた。

保護された先が、幸運にも優しい人間であったから良かったものの、これが自分達のことを知っている上層部とかであれば、辿る運命は

変わらなかっただろう。

「今はそれを忘れなくちゃならねえ」

だからこそ、恐怖を拭う意味でも、これからのことを見据える意味でも今はそれを忘れなくちゃならない。それに、春斗はどうせいつかはバレると踏んでいた。兄が現れ、自分達が打ち倒すと決めたからには絶対になのはたちの前で能力を使わなくてはならない時が来る。

それまでは、このことを忘れて前に進まなくてはならない…そう考えた。

「俺だってなのは姉と別れるのは絶対に御免だ。だが、俺達は不運にもそういう存在だ。…なのは姉達が望むのなら、俺達は兵器として此処を去らなくちゃならねえ」

「…分かっていますわよ。それが、人間に害を為すために生まれた私達が最低限の出来ることなんですものね」

そう言って、怯えた瞳から意思のある瞳へと切り替わったフランがゆっくりと立つ。

「…そんじゃあ、このガジェットのことは報告しにいく。当然、これを動かしている力のことは説明しないけどな」

「ええ、それが妥当でしょうね。その分、はやてさんの頭痛の種が増えるでしょうが…」

「違いねえな…じゃあな、フラン」

「ええ、春斗」

そう言って、執務室から出て行く春斗。

その背中に、ぶっきらぼうで小さいけれど、感情が篭った言葉がなげかけられた。

「…ありがとう、ございます」

兵器としての聴力でそれを聞き、扉を閉めてから「何がありがとう、なんだかな…」と言って少し笑った後、彼は自分の姉に資料を届けに歩いていった。

機動六課　訓練所ｓｉｄｅ

「はい、今日の訓練はお仕舞い。皆、お疲れ様！」

「「「「……」」」」

これがＲＰＧならば「返事が無い、ただの屍のようだ」などと出るのだろうが、当然彼女達は生きている。返事をする気力が無いだけだ。

「にゃはは…大丈夫？」

「な、なんとか…」

苦笑いしながらなのはが声もかけるも、帰ってきたのはオレンジ色の髪をした少女である――ティアナ・ランスターのみであった。

その横でうつぶせになって倒れているのは、この六課で数少ない男

ことエリオ・モンディアル。彼もまた言葉を発することが出来ないほど疲労していた。

「今日はもう終わりだから、皆もう休むといいよ」

「はい…」

今度は桃色の髪の毛の持ち主であり、心配そうに鳴く白き竜――フリードを撫でる少女こと、キャロ・ル・ルシエがかすれるような声でそれに答えた。

のろのろとその場から立って、安眠を求めてゾンビのように宿舎へ向かうフォワードたちに、既になのはは苦笑しか漏れなかった。

「おーい、なのは姉」

「あ、春斗？どうしたのー？」

そこに彼女の弟が現れ、新型ガジェットについての報告をする。最初は頷きながら聞いていたなのはだったが、暫くしてから春斗が話終わると、

「新型ガジェットならはやてちゃんやフェイトちゃんと一緒に打開策を考えなきゃね」と言って何故か春斗も道ずれな感じで引きずられて行った。

自分では造られた存在だとか言っていても、恐らく彼は生きている間はなのはに心からは逆らえないだろう…。見る者にそう思わせる一面であった。

こうして夜は更けていく――――

？？？　？？？ｓｉｄｅ

『　　。』

「『――――起動を確認…起動完了。魔力・能力等最高の状態です。障害等は見当たりません。指示を』」

『　　。

　　。

　　。

』

「『任務を把握、確認しマス。　任務内容は“エイリム山岳丘陵地帯、山岳リニアレール内に存在するレリックの回収。場合によっては殺害も可。間違いありませんか？』」

「『了解。…任務内容に、“リニアレールの破壊”を追加します。これはジェイル・スカリエッティなどの次元犯罪者との関与を隠滅するため――で、間違いはございませんか？』」

『

。

』

『

、

』

「『任務を承認…完了。　任務開始は山岳リニアレール内に魔道士が到着し次第となりますが、宜しいですか？』」

『

。

』

「『最終確認を終了しマス。　これより3秒後、指示の実行を開始します――3…2…1…』」

――夜の訪れは、闇の始まり。

あらゆる人間の想像を超える闇もまた――

「『――兵器：無還者（リセッター）。任務開始』」

――史上最凶の兵器と共に、静かに動き出した。

“FW”（後書き）

天破「“拒絶宣言”についての説明はまだ出すべきでは無いと判断し此処では書いていません。知りたい方は人物紹介のところを見てくださいw」

フラン「作者、ふと思ったのですけど」

天破「ん、なに？」

フラン「私、本編で春斗に口論で負けるの早すぎません？」

天破「ゴメン、アレが天破の限界」

フラン「…低い限界です事…他の作者様を見習ったらどうですの？大体貴方という人は……ブツブツ…くどくど」

天破「…春斗、助けて」

春斗「すまん、そのモードに入ったフランはきっと兄貴でも止められないと思う」

次回、第６話　“ＡＬＥＡＴ”

フラン「次回の題名のつづり、間違えていないでしょうね…？」

天破「ゴメン、自信な……うわ、何するやｍ」

春斗「あっ、作者がフランに兵器としての力（フランはデバイスを叩き割れる程度だが）で殴られて吹き飛んだ」

お楽しみに～♪

“ＡＬＥＡＴ”（前書き）

という訳で第６話?です。すいません、駄文でｒｙ
カリムの口調が心配だ。そして原作キャラの台詞忘れた。…あってるかな?かな?

こんなんでよければ、どうぞお楽しみ下さいませ！

注意：深夜に書いたので誤字脱字駄文が多く、後々大きく変更します。申し訳ございません。

“ＡＬＥＡＴ”

――春斗が新型ガジェットについてなのは、フェイトらと話をしてから一週間が何事もなく経過した――。

機動六課　訓練所ｓｉｄｅ

現在、六課の魔道士部隊フォワードが教導官であるなのはと共に早朝訓練を始めようとしていた。
それは彼女達が機動六課へ配属された頃の数倍厳しくなってきており、正直言って常人が耐えられるレベルではない訓練だった。それを息を切らしながらもこなして行く彼女達は、きっと各自に才能があるのだろう。

そして、その訓練の様子を見るものが２人。

「ほぉ…フラン、あれがフォワードとかいう部隊か？　中々元気な子供じゃねえか」

「ええ、あれがフォワード部隊のうち、フェイトお姉様率いるライトニング分隊となのはさん率いるスターズ分隊の子供達ですわ」

春斗とフランの両名である。彼らは朝の仕事が一段落し、丁度早朝訓練が始まるということから興味本位で見に来ていた。なのはがどういう教導をするのか、詳しくは知らなかったがために見に来たのである。

まあ、春斗からして見ればかなり扱くのだろうと簡単に予想は出来たが。

「しかし、本当に管理局は大丈夫なのですの…あんな子供達まで働かせるなど、人材不足もいいところですわ」

「確かにな…」

ガジェットとの実戦訓練で至る所から現れるガジェットを各自個別撃破していく様を見ながらそんな会話をしていると、

「それを言われると何も言えへんな…」

「あら、はやてさん」

何故かこの部隊長の八神はやてが訓練所へと現れた。
思いもよらぬ人物の登場に、少なからず驚く春斗とフラン。
当然といえば当然だろう。彼女は今、『例の事件』の各所への説明や会見に追われており、とてもこの場に居れる状況では無いと聞いたからだ。現に彼女は少しやせ細ったように見える。

「オイオイ、ふらふらだぞ?そんな調子で大丈夫かよ?」

「正直、大丈夫やあらへんよ…」

そして、あのはやての口からこんな弱気な言葉が出るのも予想外だった。

「ほら、この部隊って突っ込みどころ満載の部署やろ?　無理矢理

『各部署の抱えることが出来る魔道士ランクの限度』を無視しとる形なんや…それが、今回のことで格好の的になっとってな?ドサクサに紛れてなのはちゃんたちを勧誘しようとする部署まで出てくる始末や」

そう言って重いため息をつくはやて。何故かその一挙一動が彼女らしく無い気がして、酷く彼らは不安を覚えた。

確かに、この部隊は色々とおかしいところがありすぎる。管理局を心では嫌っている彼女達ですら、この部署の異常さを感じ取っている。

リミッターを掛けることで、魔道士ランクの限度をギリギリに保つ部署など聞いたことが無い。それにリミッターというのは諸刃の剣である。リミッターを掛けるということは少なからず弱体化するという意味であり、もしその状態で兵器(リセッター)クラスにでも出会えば遺言を考える間もなく殺されるだろう。

それをはやても分かっているのか、もう一度彼女は深いため息をついた。

「本当はリミッターなんて掛けたくないんやけどな…さすがにそれはどうにも出来んかった…」

「リミッターを掛けるということは弱体化を示すことでもあり、そしてそれは今回の事件のようになのはさん達の死亡率を高めますわ…」

低い声でフランが言った言葉は、まさにはやてが危惧していることであった。
彼女の方が少しだけ震える。

「はやてさん。私は貴方のことが嫌いではありません、寧ろ大好きですわ。フェイトお姉様に連れられてお会いしたころから、親しみやすい方だと…しかし」

彼女（フラン）は流れるように言葉を紡ぐ。

「私は最後まで、この機動六課へフェイトお姉様のみならずなのはさんを入れることは反対でした。それは春斗も同じですわ」

「この部署は確か、『表向きは』レリックとか言うロストロギアの回収を専任としてるんだったか？　はやて…その程度のことならば一般局員でも十分事足りるはずだ。わざわざなのは姉達に頼む必要もねえ」

「だからこそお聞きしますわ。―この部署の本当の目的はなんですの？《・・・・・・・・・・・・・・・・》」

気づけば、フランと春斗の４つの目は鋭くはやてを射抜いていた。

はやてはそれに、気づかれぬように動揺する。

（…この２人は、確か『普通』の一般人やっていう話だったはずや……何処が普通なんや、もうこの部署の異常さとおかしさ、そして裏の目的に気づきかけとる…）

なのはやフェイトも疑問に持ってこそいるだろうが、ここまでは突っ込んでこない。

しかし彼らは臆することなく、その裏にある真意を見抜くために真正面からはやてに問いただした。

それはある意味で驚嘆に値することであり――――即ち、はやて（自分）が疑われている。これに関しては当然の事だろう、自分の家族が危険な事に巻き込まれているのかもしれないのなら疑心暗鬼にならざるを得ないと思う。そこまで考えたはやては暫く目を閉じて深呼吸すると、彼女もまた２人を正面から見据え、

「…悪いけど、まだその件に関しては言えへん。たとえ、春斗とフランであってもや」

謝罪の言葉を放った。

「これはなのはちゃんやフェイトちゃんであっても同じことや。確かに二人の言うように、この部署には裏がある。けど、私は誰一人死なせる気はあらへん」

そして、心からの言葉を話す。

「どうか、今は引いてくれんやろうか。時期を見て話すことを約束する」

「それは信じていいのですわね？機動六課部隊長さん」

「夜天の誇りに懸けて」

交わした言葉は短く、しかしその言葉には確固とした意思が存在していた。
それを見て取ったフランは目を閉じ、はやてに向かってこう言った。

「分かりましたわ、今は退きます」

その後、春斗が脅すように付け加える。

「だが、俺達はこのことを忘れない。なのは姉、フェイトさんのみならず、怪我を負った人間が出た場合は責任を取れよ。機動六課部隊長、八神はやて」

「その言葉、肝に銘じておくわ」

その言葉に頷き、そしてフランが時計を見てはやてにいつもの調子で促す。

「ほら、はやてさん今日は聖王協会でカリムさんと会う約束があっ

たのではありませんこと？」

「へ？　…ああっ、しもた！フェイトちゃん待たせたまんまやった…行ってくるわ！」

はやてもまた、いつも通りに会話をした。

その慌てて走り去っていく後姿を見ながら2人の妹と弟は思う。

「俺達の姉は良い友人を持ったものだ」

「ええ、本当ですわね」

彼らは改めて、八神はやてという人物の再確認をした。

その顔に、穏やかな笑みを浮かべながら。

「あら？　終わったようですわね、フォワードの早朝訓練」

それからまた暫く雑談しながらフォワードの訓練を見ていたフランと春斗だったが、なのはの攻撃を疲労した状態で5分間避け続けるかなのはに一撃入れろという鬼畜訓練に春斗が心底同情していた以外は何事もなく終わった。

「なのは姉に、もう少し訓練優しくしてやれよと言ってくるか…」

「きっと無理ですわね」

「だよな…」

一言で断定され項垂れる春斗。笑いを押し殺すのに必死なフランに、更に春斗の心は傷ついた。

そしていつかのように、再びゾンビの如くのろのろと、それでもキッチリとした足取りで宿舎へと戻っていくフォワード陣に、春斗は再び心底同情した。

「…今度何か驕ってやるか、アイツラに…」

そしてそれは彼らの食欲を知るものからして見れば金銭的な意味で完全な死亡フラグなのだが、それを知ることは春斗にはなかった。

そんな対極的な2人に気づいたなのはが近寄ってくる。

「あ、フランに春斗。見学してたの？」

「ええ、彼女達も中々やりますわね。貴方の鬼の訓練についていってるんですから」

「そうだよな。なのは姉、だから管理局の白い悪魔なんて呼ばれるんだ」

「うぅ…、一応私も気にしてるんだからそんなこと言わないでよ～」

そういいながら困ったように笑うなのは。そしてその手にはレイジングハートが握られていた。

「なのは姉、取り合えず何故フランにはデコピンで俺にはディバインバスターなのかを教えてくれ。レイジングハートに溜まってる魔力マジで半端ねえ」

「春斗、貴方はいつも一言多いんですのよ…」

今度は呆れるような口調でフランが言う。その横では、命乞いをしている見っとも無い春斗の姿があった。

聖王協会本部ｓｉｄｅ

「騎士カリム、騎士はやてがいらっしゃいました」

「早かったのね…私の部屋まできてもらってくれる？」

「はい」

「あ、それからお茶を二つ…頼めるかしら？」

「畏まりました」

椅子に座り、傍にいた騎士へお茶と案内を頼む女性――聖王騎士団が魔道騎士、カリム・グラシアは扉を控えめに叩く音を聞き「どうぞ」と声を上げた。

その声を聞き、扉を開けて入った来たのは当然、機動六課が部隊長、八神はやてであった。

「カリム、久しぶりやな」

「ええ、はやて。いらっしゃい」

柔らかな笑みで挨拶しあう2人。そして暫く雑談しあうと、真剣な表情となって本題を始めた。

「あのね、はやて。まず機動六課の職員が発見した新しいガジェットなんだけど…」

「ああ、あの半透明で浮いてたやつやな?」

「あれを分解したら、動力部分に不可解な力が働いているのが見つかったの」

「不可解な力…やと?」

「ええ」

短く答えるとカリムは部屋中のカーテンを閉め、薄暗くなった部屋へ色々なデータの映っているモニターを展開した。

そしてそれを見たとき、はやては絶句した。

「これは…」

「ええ…恐らく稀少能力（レアスキル）の類でしょう」

「いや、そうに違いあらへんやろ…―魔力や剣を弾いて無効化する《・・・・・・・・・・・・》魔力なんて聞いたことあらへん」

「しかも一定時間がたつとこれは消えてしまうの…お陰でなんなのか全く分かってない状況よ」

「しかし、これは厄介やな」

「えぇ、いくら貴方やその仲間がどんなに優秀だろうと、魔力を無効化されては何も出来ないわ…まだ発見数は少ないけど、貴方も気をつけてね」

「分かったわ。それで、それだけや無いんやろ？　何の用件で呼んだんや？」

「…いい、これは口外無用よ…たとえ、貴方の友人に対しても話してはならないわ」

低く、威厳のある声でカリムは喋る。そこにいたのは『優雅な女性』では無く『聖王協会騎士魔道士』としてのカリムであることを理解したはやては背筋を正す。

「まず一つ目よ。これを見て頂戴」

「…っ、こ、これは…！！」

それは、はやてが建てた部隊、機動六課の表向きの目標のロストロギア。

“レリック”であった。

「一昨日にこれが運び込まれたの。それに、この新型ガジェットが

出たのも一昨日…偶然とは思えないわ」

「…ガジェットがレリックを見付けるんは、早くて今日明日の話やったな…分かったわ、警戒しておく。それで、まだ他にはないんか？」

「あるわよ…あのね、はやて。貴方、管理局を信用してる？」

「？　信用しとるも何も、管理局は私の償いの場や。それに次元犯罪者を捕まえるための組織なんやから、信用しとるのは当然や。信用してなきゃ部隊なんてつくらへんもん」

「…」

カリムは黙ってパネルを操作し、ある画面を表示した。

それを暫く何気なく見ていたはやてだが、少しすると何が書いてあるのか理解したのか、顔をゆがめて怒鳴った。

「……なんや、これ」

「…、」

「…なんや、って聞いとるんや、カリム！！」

その画面の最上部には、こんなことが書いてあった。

『ｌＰＲＯＪＥＣＴ　Ｓ．Ｗｌ　プロジェクト　シークレット・ウェポン　研究成果及びそれに伴なう能力の説明』

機動六課　デバイスルームｓｉｄｅ

此方では、デバイスマスターーーーシャーリーより、フォワード陣に新しく改良され、強化されたデバイスを配っている所であった。

余談だが、春斗やフラン用に通信機のような物も作ろうとしていたらしいが本人達から普通に却下をもらったため断念となった。
彼らからしてみれば、別にそんなもの無くても念話で会話できるため必要ないのである。…ただし自分達に魔力があることを知られたくないので暫くは無理であるが…。

「わぁ…これが…」

「あたし達の…新デバイスですか…」

フォワード陣は感動で声も出ないようであった。その中でもスバルは無邪気な子供のように新しいデバイスをいろいろな角度から見たり触ったりしている。

「設計主任は私！協力者はなのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長」

「えーっと、ティアナのがクロスミラージュ、スバルのがマッハキャリバー。エリオとキャロはいままで使ってたのと同じ名前だよ」

「あれ？　ストラーダケリュケイオンは変化無しかな？」

「うん、変わって無いように見えるけど…」

「違います！　変わってないのは外見だけです！」

「わっ！　り、リインさん！」

そこに急に現れたのは、小さな妖精のようなユニゾンデバイス――リインフォース？である。

「はいです！　実はですね、２人はちゃんとしたデバイスの経験がなかったですから、使い方などに慣れてもらうために必要最低限の機能と基礎フレームのみで渡してたです」

「あ、あれで最低限！？」

「凄い…」

これまでずっと使っていたからこその驚きだろう、エリオとキャロは自分の使っていたデバイスが最低限の機能しか備えていなかったことに驚いていた。

「みんなが扱うことになるこの４機は、六課の前線メンバーとメカニックスタッフが、技術と経験の粋を集めて完成させた最新型。部隊の目的に併せて、エリオやキャロ、スバルにティア、個性に合わせて作られた、文句無しに最高の機体です！」

そう言ってリインは４機のデバイスを宙に浮かせて話した。

「この子達は生まれたばかりのいわば赤ん坊です。でも、色んな人の想いや願いがいっぱーい込まれていて、たくさんの時間をかけてようやく完成したです」

デバイスをもう一度ティアナたちに返しつつ、笑顔でリインは続ける。

「だから、ただの都合の良い道具や武器と思わず、大切に、けど性

能の限界まで思い切り引き出して使ってあげて欲しいです」

「「「「…はいっ！」」」」

元気良く返事をし、新しいデバイスの確認をしようと訓練所へ向かおうとした――

次の瞬間だった。

「!?　このアラームは…」

「第一級警戒態勢!?」

「な、何が…」

『なのはちゃん、フェイトちゃん、グリフィス君、此方はやて！！』

そこにはやてからの通信が入る。フェイトはどうやらグリフィスと通信しながら帰っていたようで、同じく回線を開いていた。

『はやて、此方フェイト。これは…』

『教会調査団で追っていたレリックらしきものが見つかった！　場所は、エイリム山岳丘陵地帯、対象は山岳リニアレールで移動中や』

「移動中？…まさか！」

『そのまさかや！内部に侵入したガジェットに操縦機関を完全に奪われてもうとる…リニアレール内のガジェットは最低でも３０。未確認のガジェットもいるかも知れへん。いきなりハードな任務になるけども…なのはちゃん、フェイトちゃん、行けるか？』

「わたしはいつでも大丈夫！」

「私も大丈夫だよ！」

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、皆も出れるか？』

「「「「はいっ！！」」」」

『よし、良い返事や。シフトはＡ－３、グリフィス君はそのまま行って宿舎で待機、リインは現場管制や』

「はいです！」『了解！』

『じゃあ行くで…機動六課フォワード部隊！出動や！！！』

「「「「「「「「「「はい！！」」」」」」」」」」

一糸乱れぬ返事の後、一同は現場へと向かった。

「『…（ピクッ）…魔道士の接近を感知……』」

「『リニアレール、速度７０維持…。レリックの位置、把握完了』」

「『レール内ガジェット数、７０体前後。空中に２００。未確認ガジェット３機』」

「『魔道士到着時刻を、現在の速度から計算し残り十分～二十分と判断します』」

「『――地形条件、及び魔道士の強さを把握完了。任務成功率は……９９％』」

「『残り１２分程度にて、兵器：無還者（リセッター）、任務を開始しマス』」

――そこに、何がいるのかも知らずに。

機動六課　山岳リニアレールに到着するまで　残り１２分前後――

――

“ＡＬＥＡＴ”（後書き）

天破「という訳で、六課の死亡フラグとカリムが何故そのことを知ってんだ！？…な回でした」

フェイト「あれ！？私たち死亡フラグ！？」

天破「いや、もう無還者（リセッター）がいるところは全部死亡フラグ立つから」

フェイト「理不尽すぎる…で、でも原作キャラは死なないんでしょ？」

天破「死ぬような目にはあってもらう可能瀬が高いっ！」

フェイト「えぇっ！？」

～宣伝～：天破は感想を正座でお待ちしております♪ｗｗ

では次回！

第７話　“技能（スキル）”

次回、遂に無還者の能力の片鱗が明らかに！！お楽しみに♪

“技術（スキル）”（前書き）

という訳で第7話です。ちょっとこの話を読むことで注意したいことがあります。
原作と台詞が全く違う箇所がこれからいくつかでてきます！！いやな方は御注意ください、本当にすいませんｍ＿＿ｍ

Q．それは何故ですか？
A，アニメや漫画を見直す時間がないのです。家のゴタゴタや学校のゴタゴタにいい感じに巻き込まれています。

それでも許せるという大きな心の持ち主の方は、どうぞ御覧下さいませｍ＿＿ｍ

“技術（スキル）”

機動六課　出動ヘリｓｉｄｅ

「問題の貨物車両を捕捉！速度７０を依然として保ったまま進行中です」

ヘリのレーダーに捉えられ、それを見て状況を報告したヘリのパイロット――ヴァイス・グランセニックは背後に控える頼もしき魔道士達へと声をかける。

「状況から見て、まだ重要貨物室の突破はされていないようですが、ガジェットの数などを計算すると…」

「時間の問題か…」

ヘリを運転しながら、注意深く周囲を見渡すヴァイス。最近は新型ガジェットの量が多く、何処から出てくるか分かったものでは無いと事前に聞かされていたからだ。

（新型ガジェット…確か、ＡＭＦも発動されていないのに攻撃全般を無効化するアンチ魔道士のようなガジェット。体型は丸型…って、アレは！！）

注意深く当たりを見回していたヴァイスが『何か』に気づくと同時になのはが大声で指示を出した。

「！　アルト、ルキノ、広域スキャンお願い！　空に何かいる、サーチャーを飛ばして！」

指示を受けてサーチャーを空へ飛ばす。

一回目のスキャンでは引っかからなかったが、もう一度スキャンすると同時に『何か』が現れた。

「これは…」

「新型ガジェット!?」

風船のように、大きな球体型の機械が大量にヘリの周りを飛んでいた。

「ここまで接近されるのに気づかないなんて…」

「でも攻撃する様子がないっすね」

そのガジェットはただ只管に浮いているだけだ。此方に近づいてくる気配も無ければ、攻撃を仕掛ける気配も無い。

ただ、ヘリが前進すると遠巻きに囲んだまま前進してくるのが不気味であった。

「…ん？」

ふと、ヴァイスがその球体の中から一体良く分からないものを見つける。
他のガジェットの機体は透明なのに、その一体だけ赤く塗りつぶされていたのだ。
何となく薄気味悪さを感じ、前進しながらもヴァイスはそのガジェットから離れようとして――

赤い球体ガジェットが何やら細かく光ったり消えたりを繰り返したかと思うと、ヘリの傍で漂っていたガジェットが爆発を起こした。

――ドォンッ！！という音と共に、ヴァイスはこの危険な兵器の本領を悟る。

このガジェットは、赤い機体以外はただの爆弾。

そして、赤い機体が光ったときに爆発する――これだけの数を一気に爆破されたときを考えると、それだけはどうしても避けたい。

「ヴァイス君、このガジェットは私に、「無理っす！下手にでたらあの爆発に巻き込まれます！」っ！」

焦ったなのはを慌てて止めるヴァイス。この判断は正しいだろう。いくらなのはとレイジングハートが優秀でも、全方位からの爆発をバリアジャケットと障壁で耐え切れるかと問われれば疑問である。まあ、彼女なら受けきれる気もしなくもないが、もしもという場合もある。ここで六課の主戦力が落ちてしまっては話にならないのだ。戦力は当然、新戦力であるスバル、ティアナ、エリオ、キャロのモチベーションの低下へと繋がってしまう。それを分かっているからこそ、なのはもギリギリで踏みとどまったといえるだろう。

しかしこのままでは膠着状態であり、しかもリニアレールはまだ前進を続けている。どうやら移動手段がヘリであることを利用しての足止めだったようだが、それは結論として大成功だっただろう。これを造った科学者の高笑いが目に浮ぶようであった。

――唯一の誤算は、そこに“金色の閃光”がいなかったことだろう。恐らく此処に彼女も乗っていれば、それこそ他の局員に駆けつけてもらわねばならなかった。

悔しさで歯を噛み締める彼女達の目の前を、瞬きする間もなく“閃光”が通り抜けて。
更に次の瞬間、全てのガジェットが撃墜され沈黙した。

「フェイトちゃん！」

「なのは！大丈夫！？」

その影は、言うまでも無くフェイト・T・ハラオウンである。彼女はグリフィスに市街地の飛行許可をもらって、自力で此処まできたのである。金色の閃光、というだけありそのスピードは尋常では無いものであった。

フェイトが元気そうな親友に安心するのも束の間、直ぐになのははヴァイスへと叫ぶ。

「ヴァイス君、わたしも出るよ！　フェイトちゃんと一緒に空を押さえる！」

「ウッス、なのはさんお願いします！　まだあの球体型がジェットがいるかも知れません、気をつけて！！」

「うん！　じゃ、ちょっとでてくるけど皆もズバッとやっつけちゃおう」

「「「「はい！！」」」」

「…、」

元気良く返事をするフォワード陣だが、キャロだけが震えているよ

うに見える。

それを見たなのはは、そっとキャロに近づいてキャロの頭を撫でた。

「キャロ」

「…！」ビクッ！！

「自分の力が怖い？」

「…は、はい」

「大丈夫だよ」

「えっ？」

「自分と、自分の仲間を信じれば…きっと大丈夫」

「…、」

困惑したような表情のキャロに苦笑し、エリオに「キャロのこと、頼むね」と耳打ちした後ハッチの開いたヘリで彼女はデバイスを起

動した。

「レイジングハート・エクセリオン！！セットアップ！！」

《セットアップ！》

真っ白なバリアジャケットが、その身体に装着される。

その色は、美しくもあり気高くもあるようなそんな姿。

これこそ、管理局のエース・オブ・エース高町なのはであった。

「スターズ1、高町なのは！！　行きます！！」

そして、また彼女も空へと出撃した。

出撃した瞬間、あたり一面から群れるようにガジェットが出現する。

当然の如く例の爆弾ガジェットも混ざっていた。

「っ、レイジングハート！」

「凄い数…バルデッシュ！！」

《アクセルシューター！》

《ハーケンセイバー！！》

彼女達はそれを、少しずつしかし確実に減らしていった。

「今回の任務は二つ。全てのガジェットの掃討とレリックの安全な確保。ですから…スターズのティアナとスバル、ライトニングのエ

リオとキャロ2組の分隊に分かれて行動します。ガジェットを破壊しつつ、スターズとライトニング先に着いたほうがレリックを確保するですよ」

「「「「はい！」」」」

「…で、私も現場に降りて指揮をするです」

なのはが戦いへ身を投じた後のヘリ内では、新人達への説明が終わりを告げ初出陣、というところまで来ていた。

なにがあるかは分からないけど、全力で。それが彼女達の共通意思。

この辺りは教導の成果というべきだろう。そう――

「『魔道士の参戦を確認。デバイス、声紋、バリアジャケットなどから機動六課所属の魔道士、フォワードと一致しマス。行動パターンから、狙いはレリックと判断。――妨害を開始』」

相手が、人の努力を嘲笑うかのような力をもつ者であれば、確固たる意思ですらも砕け散る。

「っ！？　なのは！」

「うん…魔力反応…大きい！！」

その異常とも言える魔力に、ガジェットですら動きを止めて周辺のサーチを開始している。ただ、それが有効なのはサーチが効く相手だけであり――

「『…“幻影体現（ミラージュボディ）”』」

幻影体現――

男の持つ希少能力の1つであり、自分への注意を強制的に別のものへ逸らさせることで自分を相手の視界・サーチから消す能力。
男が好き好んで使う能力の1つである。この能力があれば、大抵の人間は自分へ気づくことも無く殺すことが出来るからだ。

≪マスター、サーチ反応ありません≫

≪サー、同じく此方も反応ありません≫

「そんな!?魔力反応がしてるのにそれを放つ敵が分からないなんて…どういうことなの!?」

《魔力反応、ＳＳを突破!!サー、一旦軌道上から離れてください!》

「軌道上?待って、ここを撃つと言う事は――狙いは、私達だけ？」

そこまで自分で言った時、彼女は理解する。

相手の目的は六課の足止めなどと柔なことではない、六課の支えであり中核を担う私達だけを目的として撃つ気だ、と。

「なのは、逃ｇ――」

≪！！　マスター、魔力反応が増大しました！　撃たれます！！≫

「「っ！！！」」

わずか、此処まで５３秒。

もう少しフェイトやレイジングハートが気づくのが早ければ、どうにかなっていたかも知れないが――すべては遅すぎた。

「『魔力チャージを完了。発射しマス、“デス・デミス・ブレイカー”』」

そんな声が聞こえて、空を見上げるフェイト達。

声の主を確かめるまでもなく――彼女達は、真っ黒な魔力の奔流に飲み込まれた。

“技術（スキル）”（後書き）

なのは「にゃあああ！！　いやなの！わたし達が死んじゃうー！」

天破「いやいやいや！多分死なないから大丈夫だよ！？それに、ここで死んじゃったらこの先どうするの…？」

なのは「ま、まあそうだけど…作者さんは何するか分からないから、ねぇ…？」

天破「ヒデェ…だが否定できない…この話がいい礼だものねぇ…という訳で、原作をかなり改悪してしまいすいません。時間が取れればアニメなり万がなり見るんですが」

なのは「現在作者さんはテスト中なの…大目に見てやってもらえると嬉しいかな」

天破「ホント、申し訳ない…では次回予告」

第８話　“理由”

なのは「…危険な匂いがするの。何、理由って」

天破「次回の主役っぽい存在はティアナとスバルです。しかしシリ

アスっぽいのでツンデレは無いと思います。期待していた方申し訳ない！（キリッ」

なのは「あれ！？わたし達の無事かどうかは言わないの！？」

天破「いやー…それ、ネタバレじゃん」

次回も楽しみにお待ち下さるよう、土下座しつつお願いいたします！
それではまた、次回でお会いしましょう！

“理由”（前書き）

まず最初に言っておきます。

前回、ティアナとスバルが中心的なことを言いまくりながらなのはとフェイトが中心的な感じになっております。

…あい、すいません。だからその蔑むような目をホント止めて下さい。反省しております。
そして、如何してこうなったのか私にも分かりません。

更に謝罪しなくてはなりません。
すいません、はやて好きな方。はやてが今回ボコされます。

それでも良いという全治全能な神様以上の心の広さを誇る方は、どうぞ私の駄文を御覧下さいませ。

注：投降して直ぐに修正しました。重ね重ね申し訳ないｍｍ

“理由”

六課ヘリ内部ｓｉｄｅ

「す、スターズ１、ライトニング１謎の敵とエンカウント！！　敵の魔力数値…推定、ＳＳＳ！？」

「さ、サーチャーに先程まで無かった反応が確認されました！　位置関係から見て、この反応が魔法を撃ったのかと！」

「で、誰なんだよソイツは！？」

「い、今映像を出します！」

焦って混乱しかけたパイロット達を、ヴァイスが怒号で無理矢理自分のやるべきことを再確認されるが、気持ちはよく分かった。
何しろ管理局の技術を結集して造られたサーチャーで察知できず、しかも不意打ちとはいえあのエース・オブ・エースに直撃したのである。
更に追い討ちを掛けるようにこの魔力量の多さだった。混乱するのも頷ける。

「…映像でました！此方です！」

パイロットの1人、アルトがヘリの画面や各自のデバイスに映像を送る。

映像に映っていたのは、真っ黒なドレスのような服を着た男だった。

「…何処かでコイツを聞いたことがある気がする…」

呟いたのはヴァイスである。そう、それこそ何処か、しかし結構聞いて間も無い気が――――

『――――以上、シグナムさんを殺そうとした男の特徴だ。もし出合ったら即撤退をお勧めするぜ、ヴァイス』

「っ、そうだ!!この男、シグナムさんを殺そうとしたって言う次元犯罪者だ!!」

「「「「!?」」」」

その事件なら既に知らぬものはいない。

烈火の将がいとも容易く殺されかけ、管理局の誇るエース達もそれぞれが一撃で落とされたという忌まわしき事件。
しかもこれは知られていないとはいえ、それを命令したのが管理局の上層部だというのだから笑えない。

「マジかよ…ハルト、すまねえ。いやな予感大当たりだったぜ」

このハルトとは御存知高町春斗のことである。彼らは六課に配属されている数少ない男として仲が良かった。

「とにかく、誰か連絡取れる奴はなのはさんとフェイトさんに連絡してくれ！」

ヴァイスが指示を出し隊長陣へ連絡を入れようとしたところで、

『それには及ばないよ』

「フェイトさん！？」

ヘリの内部に回線を開いたのだろう、ヘリにフェイトの姿が映しだされた。

『私達で時間を稼ぐから、皆は早く行って！』

「どのくらい持ちそうっすか？！」

本当ならばその様な質問はモチベーションが低下してしまうから聞いてはならないのだが、今回は敵が敵である。聞かずにはいられなかった。

『ん～…そうだなぁ…』

そういうと金色の閃光は苦笑しながら、しかし目は笑わずに言った。

『持って5分かそれ以下。もし相手が私達を殺す気だったらもう終わってる…どうやら今回はレリックがターゲットみたい。私達を殺す気は無いと思うよ』

絶句する新人達とヘリの職員達。六課の主柱の1人にそこまで言わせるのだ、一体どれほど強いのか想像もつかない。

一番早く立ち直ったのはヴァイスだった。彼はこのヘリの操縦を任されている。ここで暢気に停滞していた巻き込まれてしまうかもしれない。

「――ウッス、了解！　無事でいてくださいよ、フェイトさん、なのはさん！！」

そう言って手馴れた手つきで戦闘空域を離脱するヴァイス。更に呆然としている新人へ素早く活を入れる。

「しっかりしろ新人共！！今ならまだあの男はなのはさん達に抑えられてる、比較的安全に降下できるはずだ！！お前達はなのは隊長達の努力を無駄にする気か！！」

「「「「っ！！」」」」

「…準備はいいな！？」

「「「「「はい！！」」」」」

「いい返事だ！ではまず、スターズ、行け！！」

「「はい！」」

気を引き締めた顔でハッチの前に立つティアナとスバル。下を見下ろし、大きく深呼吸した後。

「スターズ3．スバル・ナカジマ」

「スターズ４、ティアナ・ランスター！」

「「行きますっ！！」」

二人合わせて、ハッチから勢い良く飛び降りた。

徐々に迫ってくる地面を見つつ、彼女達は確かな信頼を持って己のデバイスへ呼びかけた。

「行くよ、マッハキャリバー！！」

「お願いね、クロスミラージュ！」

「「セットアップ！！」」

《《了解、セットアップ！！》》

同時に装着されるのは、白を基調としたバリアジャケット。
そのまま浮遊魔法を使って、上手くリニアレールの上に着地した。

それを見届け、更にヴァイスは声を出す。

「次！　ライトニング２人、行け！！」

「は、はいっ！　…ねえ、キャロ」

「え？」

「…手、繋いで一緒に行こう！」

「！　…はい！！」

続いて出陣するのはライトニングが2人、キャロとエリオ。

まだ少し震えている彼女は、エリオが提案したことに笑顔で応じた。

「…ライトニング3、エリオ・モンデュアル」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「キュクー！」

「「行きます！！」」

手を繋いだまま降下する2人。彼らもまた、自らのデバイスの名を叫んだ。

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！！」

「「セットアップ！」」

同じようにセットアップし、列車の最後尾に着地。これでヘリ内にいた全ての戦闘員が出撃した。

だが、ヴァイスの仕事はこれで終わりではない。

「…なのはさん、フェイトさん…！」

コントロールパネルを操作し、サーチャーで六課の隊長2人の姿を写そうとする。確かにティアナたちも心配だが、なのはとフェイトの方には限りなく強いあの男がいる。今のティアナ達ならばガジェットの一機や二機問題はない。しかし隊長達の方は相手が相手だ。気になるのも仕方ないだろう。

暫くして、ヘリ内部のディスプレイになのは、フェイト、そして今だ謎の多い男の戦闘画面が表示される。

――そこに映っていたのは、肩で息をしているなのはとフェイト、
そして全く疲れているように見えない男の姿だった。

なのは＆フェイトｖｓ謎の男ｓｉｄｅ

「はぁ、はあっ…」

「くっ…っ、はあ」

方や、肩で息をしているエースオブエースと金色の閃光。

「『敵対魔道士の体力減少を確認。リニアレール速度７０を維持』」

方や、全く息も乱れていない上に無傷な男。

――――どちらが優勢かなど、子供にも分かる状況だった。

「はぁ、はあ…っ！レイジングハート！」

≪はいっ！　カートリッジロード！！≫

「バルデッシュ！」

≪了解！カートリッジロード！≫

「ディバイン…バスター！！」

「プラズマスラッシャー！！」

「『ＡＡランク級攻撃を感知。防御しマス、“脅威返し（メナスカウンター）”』」

確かにその魔法は彼に直撃したかに見える。炸裂音が聞こえ、爆音が響いた。

しかし次の瞬間、桃色の砲撃と金色の斬撃が飛んできたのは自分達の方だった。

「「！？」」

突然のことに驚く二人だが、直ぐにその場から退避し『自分達が放った攻撃』を避ける。
また、これだ。先程からこれの繰り返し。

攻撃してはその攻撃が弾きかえってきて、向こうはたまに砲撃を放つだけ。明らかに時間稼ぎが目的であることは確実だ。

馬鹿にしているのか、それとも何か考えがあるのか…いや、彼の性格からして恐らく後者だろうと彼女達は考える。まだ2回しか戦ってはいないが、彼は恐ろしく打算的で冷静だ。仲間が目の前で血の海に沈んでいても冷静でいられるようなそんな性格。
だからこそ、恐ろしい。相手には恐怖と言う物が存在しないから、どんな手でも使ってくるのである。

（なのは、このままじゃ拙い）

ふと、再びにらみ合いになった際にフェイトから念話が入る。

（多分だけど、ティアナ達がレリックを確保した瞬間にそのレリックを奪うんだと思う。それこそ、ティアナ達は殺されちゃうかもしれない）

（…っ、それだけはなんとしても避けなきゃね…っ！！）

「『砲撃。魔力解放、ＳＳランク。発射。“デスワールド・バスター”』」

「！　レイジングハートッ！」

「バルデッシュ…ッ！！」

《《ロードカートリッジ！！…プロテクション！！》》

――ドォンッ！！という豪快な音と共に一段と大きい真っ黒な砲撃を桃色と金色の障壁が受け止める。

「（ビキビキビキィッ！！）！？　障壁…がっ…！！」

「如何して…さっきまでと威力が、全然違う…！！」

障壁が割られる――そう思った瞬間、黒色の砲撃がいきなり止んだ。

「「…？」」

不審に思い、なのはとフェイトは男の方を見る。

彼は既に、こちらを見てはいなかった。

見ているのはリニアレール。今だ速度７０を維持しているリニアレールを見ながら、何かブツブツと言っていた。恐らく先程もやっていた状況把握のようなことを呟いているのあろう。

そしてこれに呆然としたのはなのは達であった。

当然といえば当然だろう。彼女達は女だからと嘗められることはあっても無視されるようなことは今まで無かった。しかし、いきなり目の前の敵は攻撃を停止し、まるで自分達がいないかのように振舞い始めた。未だに一向に此方を向く気配は無い。

これが示すのは、一つ。

――――『相手にするまでも無い』と判断されたからに他ならなかった。

「…レイジングハート」

《了解…魔力充填開始》

「!?　なのはっ!?」

「フェイトちゃん…ゴメン。此処まで馬鹿にされたら、さすがの私も我慢できないよ…」

その先端に、桃色の魔力が溜まっていく。

「無理だよなのは!忘れたの?アイツに放った攻撃は全部帰ってき

ちゃうんだよ！？」

「今なら余所見してる…それに、跳ね返せないだけの魔力をぶつければ…！！」

フェイトの必死の忠告も聞かず。

彼女はそれを男へ向けて放った。

「はぁあああ！！スターライトォォォ…ブレイカー！！」

《スターライトブレイカー》

リミッターを掛けられているとはいえ、彼女が出来る最大にして至

高の砲撃。
荒れ狂う桃色の魔力砲は、そのまま男を飲み込んでいった。
…そう、飲み込んでいった。

「…跳ね返って、来ない…？」

フェイトが呟いた瞬間、どうやら男に直撃したようでそのまま爆発が起きる。

その横では、もう体力の限界という顔をしたなのはが肩で息をしながら勝利を確信した顔で笑っていた。

《マスター、敵の抵抗もありませんでした。直撃したと思われます》

「うん…確かに手ごたえを感じたよ。　ね、フェイトちゃん！これで私達の勝ちだよ！」

微笑みを向けてくるパートナーに曖昧な笑みを返す。
しかし、フェイトは素直に喜べない。未だに粉塵を撒き散らしている場所を見ながら考える。
ＳＳ級の砲撃をあんなに簡単に放てる人間が、こんな簡単にやられるはずが無い。

そう思っていたからこそ…彼女は、なのはの背後へと鎌を突きつけた。

「!?　ふぇ、フェイトちゃん!?どうしたの?!」

「大丈夫だよ、なのは……　出て来てください。そこにいるのは分かっています」

フェイトが低い声で、呟くようにそう言うと。

まるで霧が晴れたかのように、無傷の男がなのはの背後へ現れた。

「――――!?」

「バルデッシュ！」

《プラズマザンバー！！》

「『…回避』」

驚愕するなのはと、あらかじめ準備していたフェイト、そして何も動じぬように回避する男。そのまま男は距離をとり、2人を見据えてこう言った。

「『…幻影体現（ミラージュボディ）を見破ったことを確認。フェイト・T・ハラオウンへの警戒ランクを2段階上昇』」

その目に宿るのは先程とは打って変わった警戒の光。

「フェイトちゃん、どうしてあの人が私の後ろにいるって…」

「ただの勘だったんだけど…まさか当たるとは思わなかった、って所かな」

「でも、確かに私の砲撃は…！？」

なのはが粉塵の晴れた先程砲撃が着弾したところを見ると。

そこにあったのは、氷で出来た男の人形。砲撃を受けたからか、少し欠けていること以外はほぼ無傷な人形だった。

彼は砲撃を受ける直前に、二つの能力を発動した。１つは幻影体現、もう１つは――――

『『S級魔力砲感知。幻影体現（ミラージュボディ）、精霊人形使用開始（マジックデコイ）』』

精霊人形――

魔力変換資質で作り上げた物体を自分の姿に錯覚させた上で三時間程度動かすことが出来る。意思と質量を持つ幻術というイメージだが、これは影分身と言ったほうが正しいのかもしれない。

しかし使われた側は溜まったものではなく、分身を造りだせる量に制限が無いため何十体もの男が一斉に襲い掛かるという地獄絵図すらありえるのだ。そう考えるとこの稀少能力も十分恐ろしい。

要するに彼は自分の姿を強制的に認識をずらすことで消すと同時に分身も作成し、なのはの背後に回って彼女を気絶させようと――してフェイトに見つかり、一時的に距離をとった。

「『……』」

「「…」」

無言のまま睨みあう両者。彼も警戒ランクを上げた、というのは嘘ではないらしくもう余所見をしたりなどはしない。

「…お聞きしても宜しいでしょうか？」

「『…』」

その膠着した空気を見て、フェイトが感情を押し殺した声で口を開く。

「何故、こんなことをするんですか？もし事情があるのなら、管理局が解決できると思いますし私達も貴方の力になれます」

質問。それは、自分達へ害を加える理由と如何してこんなことをしているのか、という二つの意味がこめられた質問だった。

そして、その言葉を紡いでから数十秒が経過する。ふただび膠着状態に入ったかとため息をつこうとしたフェイトの耳に、無機質な声が届いた。

「『“貴方の力になれる”』『“事情があるのなら”』『“どうか話を聞くために管理局へ――――”』」

それは自分の声だった。

無機質で、感情の無い人形のような自分の声を聞いて、フェイトは思わず鳥肌が立ち、男を見た。
男は相変わらず表情を変えていなかったが、雰囲気が少し変わったような気がする。

「『――その言葉、それに準ずる言葉を管理局から聞くのは通算３７０８６回目となります』」

と、雰囲気は変わらないが声は戻り、男は言葉を紡ぐ。

「『私は命令に従うために造られた兵器なので。理由などありません。しかし、センサーで探知したところ貴方の言葉には嘘が無い。管理局の人間は皆、私の力を手に入れようとして私に近づきました。しかし今はそれもありません、私は管理局（貴方方）の絶対に手の届かない場所にいるので』」

男には嘘発見器のような能力があるらしい…しかしフェイトはそう

考えた後にその言葉のおかしさに気が付いた。

「管理局が貴方を手に入れようとしている？　…待って。それは…」

犯罪組織や次元犯罪者なら分かる。しかし管理局が手に入れようとしているとなれば話は別だ。

彼女達も管理局の闇までは知らないが、はやてなどから聞いた話で自分達を引き抜こうとする他の部署の話は聞いたことがある。しかしそれは管理局の味方であり、自分達が管理局に所属しているからこそでる話だ。これでもしなのはやフェイトが犯罪組織などにいればそんな話は一切出なかっただろう。

管理局が“悪事”をしている人間を取り立てるはずが無い…とすれば、男は管理局と連絡が取れる立場にいることになる。

「貴方は一体…」

「『申し訳ありませんが』」

その言葉を遮るかのように、男は断固とした口調で言った。

「『これより先は機密事項なので話すことはありません。更に、貴方方は忘れている。――リニアレールには生命反応がありますね』」

一瞬、頭が真っ白になった。

しかしそれも一瞬、彼女達は腕を振り被った男を止めるべく魔法を放とうとする。

何をするのかは分からない。

しかし――――止めなくてはならない、と本能が言っている。

魔法を放とうとする直前。

無情にも、男はその腕を一文字に振るった。

――――――――――同時。

轟音を立てて何かが吹き飛んだ。

何が起きたかなど、フェイトとなのはに分かるはずも無く。

そして呆然としている2人の魔道士を無表情で男が見ているという奇妙な光景のまま数分が経過して、ヘリから聞こえてきたのは絶望の宣告だった。

『…フェイト隊長、なのは隊長…たった今、リニアレールが『何か見えない力に』ぶち当たったかのように吹き飛びました！　リニアレールは大破…ライトニング3、ライトニング4、スターズ3、スターズ4との連絡が取れません！！』

「…貴様、今何をした…！？」

フェイトが低い声で、怒りを押し殺した声で聞く。

確信があった。これはこの男がやったことだと。というか、そんなことを出来る人間が、する人間が一人しかいない。

「『…いくら強かろうと』」

彼はその問いに答えるのか、無表情で言葉を紡ぐ。

「『いくら硬かろうと、いくら速かろうと』」

その目はやはり、何も見ていないけれど。

「『――世界に存在している物体である以上、“死”という概念からは何者も逃れられません。これはこの世界の絶対の理デス』」

悪寒が、走った。

何かがまとわりつくような、そんな悪寒。ぞわぞわ、と何かが自分の周りに集まってくる感じ。

「こ…れ…フェイトちゃ…ん」

「なのは……、！！」

考えていることは同じで、２人とも相手の顔を見ただけで伝わった。

『アレはヤバイ。私達の手には負えない“何か”を持っている――』と。

心の底から認めたくは無い。

まだたくさん疑問はつきない。

しかし、まだ彼女達は男を何処か甘く見ていたことは事実。

――ここからリニアレールに攻撃することはない、と、決め付けていたからその可能性に気づけなかった。

だからこそ、ヘリから届いた報告を聞いて彼女達がすべきことは1つ。

“撤退”。即ち、敵からの逃亡だった。

「なのは、一旦リニアレールに向かうよ!!」

「っ…うん!」

高速でその場を後にするなのはとフェイト。

途中、フェイトが一瞬だけ追ってきていないか気になって後ろを振り向く。

だが、そこには既に…誰もいなかった。

――――時は、ライトニング2名がリニアレールに降り立った頃に遡る

リニアレールｓｉｄｅ

此方ではスターズの２名、ティアナとスバル、そしてライトニング２名、エリオとキャロが、それぞれガジェットを破壊しているところであった。

列車に降り立った後、ティアナとスバルは一旦別れて個別にガジェットを撃破していく。

「はあああ！！」

此方はスバル。ガジェットの開けた穴から侵入し、列車内で動き回るガジェットをその拳で次々と仕留めて行く。

「うぉぉおっ…って、うわあぁあ!?」

が、勢いが余りすぎてガジェットを破壊すると同時にリニアレールの天井まで破壊してしまい外に放りだされてしまった。

《ウィングロード》

しかし投げ出されバランスを崩し落下する、という瞬間に彼女のデバイスであるマッハキャリバーがウィングロードを発生させなんとかスバルは体勢を立て直した。

「マッハキャリバー…凄い、強化や加速にウィングロードまで…」

《私は貴方をより強く、より早く走らせるために作られましたから》

「…うん、でもマッハキャリバーはＡＩでも心があるでしょう？だったら、少し言い換えようよ！…お前は、私と走るために生まれてきたんだ、って！」

《…同じ意味に聞こえますが…》

「ちょっと違うんだよ」

《考えておきます》

「うん！」

そんな会話の後、再びスバルはガジェットの中へ突っ込んでいった。

同時刻、ティアナとリィンフォースが列車内に進入しケーブルを破壊していた。

「駄目です…ケーブルの破壊、効果ありません」

「分かりましたです。では、ここから列車の停止作業は私が引き受けるので、ティアナはスバルとの合流を目指しつつガジェットを破壊してくださいです」

「了解！」

再び、彼女もまた列車内を走りガジェットを殲滅しながらスバルの

いる方向を目指して行った。

更に同時刻――――山岳リニアレールより数キロ離れた地点。

二つの人影があった。

1つは、『真っ黒なドレスのような服を着ている』男。

もう1つは、『真っ白な騎士甲冑を着ている』女性。

他ならぬ、機動六課部隊長、八神はやてと、『今はなのはとフェイトと戦っているはず』の兵器(男)だった。

男は無表情で言葉を紡ぐ。

「『管理局機動六課部隊長、八神はやて。通告します』」

「…、」

彼女（はやて）は何も答えない。

否、答えられない。

既に、この場所に――――ヘリのサーチャーやなのはやフェイトでも気づかないような結界が張られているこの場所に誘い込まれた時点で、既に勝負は決まっていたのかもしれない。

男の真っ黒な瞳に映るのは、ほんの数分前まで敵意を越えた殺意を放っていた少女ではなく。

右腕が変な方向に曲がり、力なく浮いているような八神はやての姿だった。

「『――これ以上の戦闘は貴方にとって命の危険を及ぼします。算出した結果では、貴方の魔力で私に勝てる確率は０．１％未満です。今すぐ投降を』」

「…誰、が、降参する、かい…！！」

懸命に意識を保ちながら、彼女は再びその瞳を男へ向ける。

男はその様子に、少しも顔色を変えることも無く、ただ『右腕を右上から左下へ少し振った』。

瞬間、はやての体に『右上から左下』へ切り傷が走った。

「うぅ、ぁ…ぐあああああ！！」

悲鳴を上げるはやて。しかしそれでも唇を噛み締め、目に灯るのは憎しみと憤怒。

その一方で、彼女は頭をフル回転して考える。

（なんや、これは…！！　さっきからアイツが手を振るうたびに私が殴られたり切られたり…こんなのありえへん。どんな能力やっていうんや…！！）

一向につかめない謎の能力。

彼女は男が腕を振る動作だけで自分の体が傷つけられていくという『攻撃』という動作をまるで無視した『傷』に内心舌打ちした。バリアジャケットなどまるで意に介さぬように自分の体へ傷を付けていく謎の攻撃。この腕は結界に閉じ込められた瞬間に折られたもので、激痛で思わず大声を上げた。

しかしそれすら馬鹿らしくなるような謎の攻撃が続き――しかも明らかに手加減している様子で――はやては既に精神的にも肉体的にも限界であった。

「『！　…？1の魔道士2名との接触を確認。敵対対象は高町なのは、フェイト・T・ハラオウンの両名』」

ふと、男が何かに気づいたように声を少しだけ大きくした。はやてに“？1”の意味は分からなかったが、とにかく自分の見えないところで2人の親友が頑張っているのだけは理解できた。

自分だけがくたばっているわけには行かない。そんな想いが更にはやての体を突き動かしていく。

「『（ぴくっ）…抗戦の意思を確認』」

「当然や…なのはちゃんやフェイトちゃん、それにライトニングやスターズも頑張っとる…私だけが…気絶しているわけにはいかんのや！！」

でも体は正直で、既に意識を保っているのも限界であった。今大声を出せたことすら奇跡、という状況。

体のいたる部分は悲鳴を上げて、直ぐにでも倒れてしまいそうであった。一瞬でも目の前の敵が放つ圧力に負けないように、彼女は四肢の力をこめて顔を持ち上げて、男を睨んだ。

そのまま暫く膠着状態が続く。

何分か経っただろうか――――男が急にはやてへ手を翳した。

「っ！！」

迎撃体制に入るはやて。しかし彼は全く予想外のことをした。

「『――癒し（ヒーリング）の光』」

無機質な言葉で紡いだその言葉と共に、はやての傷が全快した。

「…は？」

「『条件を満たしたことを確認…契約を終了しマス』」

「な、なんて…」

「『…、』」

ボキュンッ!!という音と共に、男は陽炎のようにその場から消えた。

と同時に結界が解除され、はやては無傷の状態で結界から離脱する。

しかし彼女は、とても助かった気にはなれなかった。

いや、それよりも――――『助けられた』気すらする。

はやてに気づいたヴァイスが呼びかけるまで、先程の『条件』と『契約』について、彼女は深い思考の海へ沈んでいった。

――――更に同時刻、リニアレール内。

ライトニングの2人がレリックの置いてある重要貨物室の前車両へ到着したのだが、そこに待っていたのは例の爆発ガジェット群と触手が大量にある新型ガジェットという地獄だった。
お馴染みの赤い球体ガジェットが点滅し、半透明の爆発ガジェットが起爆する中で新型ガジェットの触手の猛攻が迫る。隊長格ならなんとかなるだろうが初陣でこの戦いはきつく、避けきれるものではなかった。

「っ、ぐあぁ！！」

「え、エリオ君！！」

爆発によって起こる粉塵は、ほぼ密室なリニアレール内では最大限の力を発揮する。列車の外にいるキャロはともかく、内部にいるエリオに煙の中から迫り来る触手を避けろというのも酷だろう。
エリオは判断ミスで触手に捕まり、壁に激突させられた。

「エリオ君！！」

悲鳴のような口調でエリオの名を呼ぶが、返事は無い。どうやら完全に気絶してしまっているようだった。

「っ…私…私、どうすれば…！？」

フリードの炎は弾かれる。しかもＡＭＦが発動しているため魔法も掻き消されてしまう。

万事休す。そんな言葉が彼女の頭によぎった。

そう、このままではエリオは――――死ぬ可能性すらある。

それだけは、どうしても避けなくては。

（なんとか…何とかして、エリオ君を助けなくちゃ…！！）

そんな時だろうか。

この状況に追い討ちをかけるかのように、『何か』が存在しているのに気が付いたのは。

ゾクッ…！！

っと、一瞬にして背筋に悪寒が走る。これは1人の少女としては無く、竜召喚の巫女としての本能。

『何か』いる。フリードもさっきまではガジェットを警戒するように飛び回っていたのに、今はキャロの肩で少し震えているようにすら見える。

気配が大きくなった。でもまだ何処か分からない。
更に大きくなった。大体分かってきた、それは自分の後ろにいる。
そこから更に大きくなった。今キャロの顔は冷や汗で一杯であり、フリードの怯えも更に酷くなった。
ついにキャロは耐え切れず――後ろを向いた。

「…、あ…っ……」

そこにいたのは、山ほどの大きさでリニアレールを見下ろしていて、真っ黒なローブだか布のようなものを着ている――――

『骸』だった。

それは死神を連想させる、そんな姿。風に揺れて真っ黒な服がはためいている。

剥き出しになっている骨。人間に入っているはずの骨が、今目の前で動いている――――。

悲鳴を上げる声すら出ず、彼女は顔を真っ白にして固まった。

『ホホォ…ソコノ女、我輩ガ見エルカ。余程の素質カ、アルイハ死

ヲ垣間見タカ？』

肉がついていない顔が笑い、喋る。

その言葉は何処か神聖さを感じさせるようなものでもあり、しかし
その姿と絶対的な威圧感がそれを上回る恐怖を感じさせていく。

「あぁ…あぁああっ……！！」

怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い…！！！！

『恐怖』が彼女の頭を埋めていく中、彼女は必死で考えた。

目の前にいるものは、何なのか？

明らかにアレは、召喚術で出せるようなものではない。この世界に存在していいようなものではない。

それだけは…本当にそれだけは、一目見ただけで分かった。

『マア、関係無イガナ』

『それ』は不気味な声で、キャロにのみ聞こえているらしい言葉を吐いた後、その骨で出来た拳を握り締め。

そして、何処までも低い声で、一言呟いた。

『……“執行（ジャッジメント）”』

キャロ・ル・ルシエは信じられなかった。

目の前の存在が放った一撃で、殴られた箇所から『リニアレール全体』が吹き飛んで、爆発したかのように粉々になっているということを。

車両のコントロールを取り戻そうとしていたリインフォース？は何があったか分からない。

突然大きな揺れが走ったかと思えば、リニアレールが線路上から空中に投げだされて破壊にされているなど。

別の車両にいて、外の様子を見ていなかったティアナ・ランスターも何が起きたか理解が出来ない。

自分が立っていた車両に揺れが走ったかと思ったら、次の瞬間にその車両は陰も形も無く粉砕され、自分は崖の下へと落下していることなど。

――そして、ティアナ・ランスターと共にガジェットを破壊しつつレリックのある車両へ接近していたスバル・ナカジマは見た。

落ちていく自分を、真っ黒な魔法陣の上に立って見下ろす、ドレスのような服を着た男の姿を。

「『…リニアレール、能力“　　”によって破壊(死)を確認。任務第一目的のロストロギア、“レリック”の入手も終了。…任務達成』」

そんな光景を見納めながら。

彼女達は、崖の下へ、下へと落ちていった。

“理由”（後書き）

天破「マジ申し訳ない」

フェイト「土下座してる…ねえ、状況説明してくれない？」

天破「かくかくじかじか」

フェイト「恐ろしい程にカットされた気がするけど、なるほど…それは謝らなくちゃいけないね…」

天破「うん…だから、私、学んだんだ」

フェイト「？」

天破「…もう、次回予告、しない」

フェイト「…えええぇぇぇ！？」

という訳で、次回予告を今日でやめます。本当にすいません。
次回はできる限りアニメ準拠にする…『予定』です。

天破「あくまでも『予定』です」

フェイト「そんなに繰り返さなくても…」

天破「本当に申し訳ありませんでした…」

フェイト「あ、作者さんに代わって私がお礼言うね？お気に入り登録してくれた人、ありがとう！まさかこんな駄作品に8件も登録してくれるなんて思わなかった…って、作者さんが」

天破「あい、それはマジで感謝しております。その調子で感想の方もどうかお願いします」

フェイト「そういえば、まだ一件も来てないんだよね…（苦笑）」

天破「宜しくお願いしやーす！！」

それでは次回の更新を、心の隅でも良いのでどうかお楽しみ下さい。

“死神”（前書き）

さて、次話をお届けします、天破です。
今回はほとんど無還者の能力が無双しています。
つまり、今回で聡明な皆様ならば恐らく彼の能力がほぼ分かる事でしょう。
というか本編中に答えが出てます。

という訳で、そのチートっぷりをお楽しみください。

それではどうぞ！！

“死神”

男ｓｉｄｅ

「『レリックを確保、これにて任務を終了しマス』」

『カッカッカ…他愛モ無イ…コノ程度ノコトニ我輩ヲ呼ンダノカ？ツマラン』

「『その質問に答える義務はありまセン』」

男が、背後に控える黒い死神のような服を着た骸と――――見えない者からすれば、ただ男が１人で呟いているようにしか見えないが――――話している。

先程リニアレールを粉砕したときよりも縮んでおり、現在は男とほぼ同じ大きさだった。

どうやらどんな大きさも自由自在らしい。

そして、その話しかけられている男は合いも変わらず無表情だが、骸のほうは心なしか笑っているように見える。

白骨で出来ている顔が笑うというのもかなり気味が悪かった。

「『確認したいのですが、あの魔道士達は死んだのデスか？』」

『我輩ニ聞カズトモ、貴殿ナラバソノ程度分カルでアロウ』

「『確かに彼らは今は生命反応があります。しかしもし貴方がその気を持っていたのなら彼らは時期に死に至るでショウ。その為の確認です』」

『我輩ハリニアレールニノミ“力”ヲ行使シタ。人間ニハ何モシテイナイ』

「『そうですか。分かりました…では、魔道士達のデータを管理者へ一斉送信、後に痕跡の抹消後に帰還します』」

兵器は状況を把握し、そのまま転移でこの場を去ろうとする。

その目はやはり何も見ていないような闇そのものであった。実質、この状況から魔道士達がまた反撃するとは確率的にありえなかったし、更に言えば反撃してきたとしても対応すればいい。

常に機械的に状況を把握する。人間ならばそれは１００％不可能なことだが、男はそれを可能にしていた。

だからこそ気づけなかった。

自分の真下にいる竜の存在に。

「『！？　生命反応、数は5…その中に竜と思われる魔法生物の存在を確認』」

真っ黒な魔法陣の更に下。

真っ暗な崖下から、竜の咆哮が響いた。

『ホオ』

「『何を感嘆しているのか理解出来まセン』」

先程からその黒い服をはためかせている骸は、少し右にその白骨を

傾け、人間が考えるときするように骨のみで構成されたその右手で自らの顎に触れた。
それを見て無表情且つ無機質な声で男が機械的に言った。もしかしたら突っ込みを入れたのかもしれないが、それは無いかと骸は思い返す。

そんなよく分からないやり取りをしていたら。

「フリードリヒ！！ブラストレイ…ファイア！！」

「グォォオオオ！！！！」

崖下より、真紅の炎が男と骸めがけて放たれた。

「『…炎熱反応…竜の息吹（ドラゴンブレス）系統の魔法と判断します。現在の状況による障壁展開による抵抗は困難と判断、能力を使用しマス』」

呟くようにそう言って、男はその目を荒れ狂う炎へと向けて、右手を前に出した。
それを見た骸は、笑うように曲がっていた口を元に戻し、無表情――骸骨に表情があるかは分からないが――のまま、一言、歌うように呟いた。

『汝はどの様な“死”を望む？《Ｗａｓ　ｄｕ　Ｗｕｎｓｃｈ　ｚｕ　ｓｔｅｒｂｅｎ？》』

その問いに、男はおどけるでもなく、怒るでもなく、困惑するでもなく、当たり前のような感じでこう返した。

「『我は永遠なる死を望む《Ｗｉｒ　ｈｏｆｆｅｎ，　ｄｅｎ　ｅｗｉｇｅｎ　Ｔｏｄ》』」

『永遠なる死』――そんなものが存在するのか。死とは一瞬であり、一度味わえば生き返ることの無い限りもう味わうことの無いはずの痛み。

普通ならば意味など分からないだろう。しかし、その答えに骸はこう返した。

『ならばその望み、叶えよう《Ｗｅｎｎ　ｅｓ　Ｗｕｎｓｃｈｅ　ｗａｈｒ　ｗｅｒｄｅｎ》』

彼（骸骨）もまた、その骨で構成された左手を炎へ向けて差し出す。

真紅の炎が、今まさに敵を焼き尽くそうと骸と男に迫る。

それに全く動じず。

そんな炎へ贈るように、彼らは声を合わせて。

『「『凍　死　せ　よ《Ｅｒｆｒｉｅｒｕｎｇｓｔｏｄ　Ｃｏｌｄ　Ｃａｓｅ》』」』

炎が手のひらに触れる直前に、そう言った。

「…、え…っ？」

全速力でリニアレールのあった場所に駆けつけ、その様子を見ていた高町なのはとフェイト・Ｔハラオウンは――信じられなかった。

否、信じたくない。

――男の手に触れたフリードの炎が、一瞬にして凍った、など。

崖下ｓｉｄｅ

「きゃあああああ！！」

落ちる。

このままじゃ、スバルもティアナもエリオも…そして、自分も、全員。

スバルは突然のことで体が追いついていないらしく、マッハキャリバーを使おうとしても落ちる速度が速過ぎてウィングロードで体勢を立て直せない。

ティアナも何とか浮遊魔法で落ちる速度を軽減しているようだが、此方も少し状況の把握に追いつけないらしくただ落ちるのを遅くしているだけであった。

エリオに至っては体の自由が未だに利かないらしく、気を失っている。

「ッ…スー、ハー、スー、ハー」

この状況で、自分のすべきことは1つだった。

全員が助かるには、これしかない。

失敗したらどうしよう、なんて考えられない。

失敗したら、全員命は無い――だから、失敗は許されない。

でも、それでも。

「フリード…ゴメンね、私ちゃんと制御するから…」

「キュクー！」

護りたい。

本当の意味で自分に優しくしてくれた人たちを、自分に笑いかけてくれる人たちを…自分に居場所をくれた人を…護りたいから。

「いくよ！！」

彼女はその思いをこの詠唱に込めて、呟くように言葉を紡ぐ。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ！！　来よ、我が竜フリードリヒ…竜魂召喚！！」

召喚呪文の終了と同時に、白き巨大な竜がキャロらの下へ現れた。

「フリード、大丈夫！？」

「グルッ！」

主の言葉に、頼もしい返事を返すフリード。

これがフリードの真の姿であり、そしてキャロがしっかりとフリードをコントロールできた始めての瞬間であった。

「やった…わたし、制御できてる…！あ、今はそんな場合じゃなかった！　フリード、まずはティアナさんとスバルさんをお願い！！」

感動も束の間、慌てたキャロからの命を受けたフリードは全力で降下し、少し下へ落ちていたスバルとティアナを拾い上げる。

更にその後、エリオの体を丁度抱き寄せたキャロも救い上げ、どうにか全員が助かった。

「キャロ、これがアンタの…」

「はい！これが、フリードの真の姿です」

「わあ…大きいなあ」

場違いな台詞を言うスバルと驚きを隠せないティアナ。

更にここでエリオも回復した。

「…ん、あれ…キャロ？」

「あ、エリオ君…大丈夫！？」

「う、うん僕は何とか…これは？」

その説明をスバルとティアナが引き受け、キャロはフリードに指示を出す。

「フリード、上に行って！」

「グルッ」

再びキャロの命に応じて、上へ上昇していくフリード。
しかしキャロやエリオ達が振り落とされないように、スピードは保っていく。

そして、キャロの目は捉えた。

真っ黒なドレスのような服を着た男と、その背後に存在している骸骨の存在を。

「フリードリヒ！　ブラストレイ…ファイア！！」

「グォォォォォォォォォォ！！！」

完全に死角を突いた一撃。

炎の威力も申し分なく、相手がどんなに化け物でも少しくらいのダメージは負わせることが出来るはずの一撃。

キャロの目が、骸骨と男がそれぞれ手の平を炎に向けて差し出すのを捉えなければ――――この攻防は、『キャロらの負け』だった。

再び背筋に悪寒が走る。
この感覚は、リニアレールが粉砕され自分達が落下したときと全く同じ感覚。

「フリード、停止!!」

慌てたように大声を出すキャロ。その言葉に従い、急停止するフリード。

怪訝な目をキャロへ向けるティアナ、スバル、エリオだが、次の瞬間にその顔が真っ青になった。

ワンテンポ遅れて、ティアナらが視線を向けている方向へキャロも視線を向けた。

そこにあったのは、真っ赤に燃える炎などではなく。

おぞましいまでの冷気を放っている、氷であった。

炎が凍る。

そんな非現実なこと、信じたくない。

しかし、現に今その“非現実”が目の前で起きている。

そして、男の目が自分達を捉えたのと、キャロが素早く指示を出したのは同時だった。

「『――――キャロ・ル・ルシエを視認、その他ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマ、エリオ・モンデュアルを確認。攻撃を開始――――』」

「フリード、旋回してあの人から逃げて！！」

フリードが旋回し、男とは真逆へと飛び出す。

と同時に男の足元に大きな魔法陣が展開された。

「『――――“執行モード”』」

その言葉と共にキャロの目に映るのは、リニアレールを吹き飛ばした巨大な骸骨。

ティアナ、スバル、エリオは気づいている様子は無い。

とすれば――――気づいているのは、自分（キャロ）1人。

山と同等、いやそれ以上の大きさを誇る骸骨は、キャロの見ている前で謡うようにその低い声を紡いだ。

『汝はどの様な死を望む？《Was du Wunsch zu sterben?》』

それはベルカ語だった。

更にその言葉に返されるように、男の声が響く。

『苦しまず、一瞬で眠れる安らかな死を望む《In Leiden, Sterben und erholsamen Schlaf in einem Augenblick hoffen》』

『ならばその望み、叶えよう《Ｗｅｎｎ　ｅｓ　Ｗｕｎｓｃｈｅ　ｗａｈｒ　ｗｅｒｄｅｎ》』

骸の低い言葉と共に、キャロの目に、自分達の数十倍は大きいハンマーが骸骨の手に出現したのが見えた。

そして、それを振りかぶると同時に放たれる男と骸の言葉。

『「『圧　死　せ　よ《ｚｕ　Ｔｏｄｅ　ｇｅｑｕｅｔｓｃｈｔ　Ｆａｌｌ》』」』

その言葉がキャロの耳へ届いた刹那、それ（ハンマー）が振り下ろされる。

狙いは、どう考えても――――自分達。

「フリード、加速ッ！！」

「グルッ！？…グォォォォォォォォ！！」

この状況で何故加速するのかフリードにも分からなかったようだが、キャロが言うのでそれに従い急加速する。

振り落とされぬよう、ティアナやエリオたちも必死にしがみ付きながら。

何とかその攻撃範囲から抜けた直後。

先程まで飛んでいた場所を、巨大なハンマーが轟音を立てて通り過ぎていった。

「…ほ」

思い切り安堵の溜息を付くキャロ。スバル達はいきなり聞こえてきた轟音に少々パニックに陥っているようだったが。

そして安堵と同時に寒気が走る。もし自分にアレが見えてなかったら、あのハンマーで潰されていた、と。

「『！…回避？　理解不能です。キャロ・ル・ルシエは一体…』」

『言イ忘レテイタガ、アノ小娘ハ我輩ガ見エルゾ』

「『…把握しました。キャロ・ル・ルシエに対する警戒度を3ランク上昇し、転移を発動しこの戦闘地域を離脱します』」

「ッ！？　ま、待ちなさいッ！！」

「『…警告。高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン』」

その言葉に反応したのかしていないのか。

男がなのはの名を呼ぶと同時、なのはの首に『何か』が突きつけられた。

「…！？」

得物の姿は見えない。それどころか、『何か』を突きつけている存在すらなのはの目には見えない。

当然、フェイトにも何が何だか分からない。急になのはが冷や汗を流して動きを止めたように彼女には見えるのだ。

「『失礼ながら、貴方方の戦闘力と私では１００％私の勝利です。もう私に関わることは止めることをお勧めします』」

「そんなこと出来るわけがない！！」

そんなのはに変わってフェイトが若干イラつきながら大声を出す。

「『…残念です。しかし、これだけは言わせていただきたい』」

その言葉が彼の口から漏れた瞬間。

なのは、フェイトの周りの空気が明らかに変わった。

「ッ…？何…？」

「…（がたがたがた…）」

「？　なのは…！？」

そして、なのはの方を向いたフェイトは驚く。

なのはの首に、銀色の大鎌が突きつけられていたからだ。

そしてその鎌を突きつけているのを見て――――更に、信じられなかった。

否、呆然とした。

「…骸、骨…？」

そう、そこにいたのは黒衣を纏い、両手でなのはの首に突きつけている鎌を持っている――――骸骨だった。

「……！！」

恐れからか、焦りからか。

顔をゆがめながらバルデッシュをその骸骨に向けて振るう。

しかしそれは何の意味もなさず、骸骨をすり抜けた。

「!?」

「『“死”という概念とは何処にでも転がっています』」

その混乱を更に深めるかのように、男からの追い討ちがかかる。

「『例えば貴方の周囲に飛んでいる空気。それらが圧縮して刃になり、貴方は斬首されて死ぬ…ほら、死ぬでしょう?』」

「何を言っ――（ヒタリ…）て……?」

何の意味か分からず問いただそうとしフェイトの首にも、いつの間にかなのはと同じ大鎌が突きつけられていた。

「『もしかしたら、空気が圧縮して貴方達を押しつぶそうとするかもしれない』」

その言葉に呼ばれたように、男の周りにハンマーを持った骸骨が現れた。

「『もしかしたら、酸素に火がついて貴方達を焼死させようとするかもしれない』」

その言葉と共に、両手に火の灯った骸骨が4～6体現れた。

「『もしかしたら空気が槍状に圧縮され、貴方達を突き殺そうとするかもしれない』」

その言葉と共に、今度は槍を持った骸骨が現れた。

「『ホラ。死って本当にたくさんあるでショウ?』」

真っ黒な魔法陣の上に男は立ち、その周りで骸骨が自由自在に動き回る。

真っ黒なドレスのような服がその光景に妙にあっており、更なる恐怖を彼女達に与える。

その顔の表情は結局変わることはなく――――

「『私は死を操る死神。もう、貴方方は近寄らない方がいい――――マニュアル通りの説明を終了しマス』」

最後にこの場では少し緊張感に欠ける台詞を言いながら、男は指を鳴らす。

と、同時に全ての骸骨が消滅し、男も同時に消えていた。

「…ねえ、なのは」

「…何？フェイトちゃん」

今の説明を受けて、気づいてしまった。

あの男は、あの骸骨を自分達が気づく前からなのはに近寄らせていた。

ということは、だ。

「…あの男の能力って、さ…本人の話を照合するなら…私達…ううん、『どんなものでもいつでも殺せる』って…事だよね…」

「…（ペタン）」

空中でへたり込むという器用なことをするなのは。

暫くして、エリオ、キャロ、スバル、ティアナが戻ってくるまで彼女達はずっと噛み締めた。

またしても何も出来なかった自分達の無力さへの悔しさと、絶対的な力を持つあの男に対する絶望感と憎しみを――――。

???side

その頃、何処かの研究室。

1人の科学者っぽい服を着た男と、一般的にゴスロリと呼ばれる服を着ている女性、更にもう1人此方も何処か可笑しな服装をしてい

る女性がガジェットの残した映像を見て話し合っていた。

「なるほどのう」

その中で、ゴスロリ服を着た女性が年寄りのような口調で一言洩らす。

その声には、怒気が入り混じっていた。

「そうかそうか、やはり“兄上”は管理局に…絶対に許さん」

その言葉と共に吹き荒れる殺気。冷や汗を流す男ともう1人の女性。

それを少しでも和らげるため、男が殺意を放出する女性へ問いかけた。

「ふむ…“ディール”、あの男が君のいう“兄”なのか？」

「間違いない…妾達は皆他の兵器を区別できる目を持っておるからの…この映像の中にいるこの男は、紛れも無く兄上じゃ」

苦虫を潰したように言う――ディールと呼ばれた女性は、さすがに気づいたのか殺意を引っ込めた。

それにホッとしたもう1人の女性は、改めて男に問いかける。

「それで、ドクター、いかがしましょう?追撃戦力を送りますか?」

「…いや、さすがにこの状況で追撃戦力を送るのは止めてあげるとしよう。彼女達も疲弊しているだろうし、今更新しいデータは取れないさ。それよりも、ディールの言う兄の方が気になるね」

「少々お待ちください…出ました。魔力数値、推定ＳＳＳ…魔道士ランク、推定ＥＸ…これまで確認された希少能力は５個以上…ディールと聞いたのもあわせると２０を超えます」

「２０以上の希少能力、か…此方としても敵に回したくないんだが…」

「それだけは分からんのじゃ。今の兄上は管理局の上層部に絶対に従うように洗脳されておる。もし管理局が此処を襲え、と言ってくれば…」

「彼が此処に来る、というわけか」

頭を抱える男。今回確かにレリックを失ったのは惜しいが、そのレリックを奪い取った真犯人がディール曰く管理局の上層部なのだから笑えない。

男はただの人形、ただの駒――しかしその駒の印象が強すぎて、裏に誰がいるかまでの考えに至れない。

もし彼らもディールからこの男について聞かなければ、恐らく彼らも何も考えることは出来無かっただろう。

「で、どうするのじゃ？妾としては、今からでも管理局を潰しに行きたいのじゃが」

「まあ待ちたまえ。そんなことをせずとも、次の出撃任務でストレスを発散して来たほうがいいんのではないかね？」

「むぅ…しかし、管理局の方が面白そうじゃし」

面白そう、という理由だけで世界最高権力者を潰そうとしているディールに内心再び冷や汗を流す男と女性。

しかしそれでも何とか説得に成功し、くれぐれも勝手に行動しないように、と念を押され、それでも分かっているのか分かっていないのかディールは鼻歌を歌いながらその部屋を出て行った。

「…ふぅ」

「…ドクター、心中お察しします」

「はっはっは…全く…アレで本当に管理局を1人で潰せる能力があるから性質が悪いね」

「全くです」

「さて、約束したからには次の出撃で外に出して上げなくてはならないな。次は…」

そういいながら、次ガジェットを出撃させる場所へのリストをＵＰする男――ジェイル・スカリエッティ。

そのジェイルの質問に応答をしていく女性――ウーノの２人は、自分達の家族同然の女性である“クインディール”の頼みに応ずるため、ああでもないこうでもないといいながら２人だけの会議を始めた。

“死神”（後書き）

天破「という訳でディールが登場したわけですが…」

ティアナ「…ねえ、ちょっと思ったんだけど」

天破「何かね」

ティアナ「今回、キャロかっこ良すぎない？」

天破「えっ、そっち？」

ティアナ「だってそうじゃない！その割にはあたしやスバルの活躍がほとんどないわよ？これはどういうことなのかしら？」

天破「まあまあまあ…今回はキャロ初の竜魂召喚というわけで見せ場だったわけよ。しかも設定上、君達の中ではキャロしかあの骸は見えないわけで…もし誰も見えてなかったら君たち今頃ハンマーで圧死してたよ？」

ティアナ「うっ…想像すると怖いわね…前兆なしに人間がつぶれる姿って」

天破「まあそりゃそうでしょ」

次回　幕間“？5（クインディール）の日常”

ティアナ「あれ？次回予告しないんじゃなかったの？」

天破「内容は言えないけど、次回はディールのぶらり一人旅です」

ティアナ「…今回の事件の顛末とかはどうなるのよ？」

天破「次回でちょこっとだけ入れるけれど、詳しくは次回の次回だね」

ティアナ「まあ、頑張んなさい」

天破「人事だと思って適当な…まあいいけどさ…」

次回も、心の何処かに鍵を掛けてでもいいので楽しみにいただけると幸いです＾＾

それでは閲覧ありがとうございましたｍ＿＿ｍ

幕問“？5（クインディール）の日常”（前書き）

てな訳で幕問をお届けします。
今回のお話はディール含むオリキャラが中心です。
そして駄文です…これはいつもでした、申し訳ない。

それでも良い方はどうぞお進み下さいませ（´∀`）

幕間“？5（クインディール）の日常”

――――リニアレールの事件から次の日…

ミッドチルダ市内ｓｉｄｅ

リニアレールでのなのはらの葛藤・混乱など全く知らないミッドチルダは、今日も人々で賑わっていた。

「…暇じゃのう」

そしてその街中をフラフラと歩くゴスロリ服を着た女性――クインディールは、一言そう溢した。…此処にもしスカリエッティやウーノがいたら、「何故そこにいる」と突っ込みを入れるだろう。

そう、彼女はスカリエッティのアジトから脱走してきたのだ。

だが、脱走と言っても決して彼女は不自由を強いられているわけではない。食事はナンバーズの誰かに上目遣いで頼めばいつでも作ってくれるし、欲しい玩具があればスカリエッティが何でも作ってくれた。しかし、彼女はその変わらぬ日常に飽きたのであった。確か

にスカリエッティ達には感謝しているし、絶対に裏切るつもりは無い。しかし飽きるものは飽きる。まさに彼女の現在の思考は子供のそれであった。
ここらで少し刺激が欲しい。そう思って脱走したのだが…

「…平和じゃ。平和すぎて詰まらん」

少々問題発言をする彼女もどうかと思うが、クインディールは現在暇すぎて困っていた。
この話はまたいつかすることになると思うが、ディールは研究所にいた頃から『非日常』が大好きであった。おかしな言い方ではあるが、厄介事を見つけてはそれを解決することが楽しいらしい。
変わらぬ日常より常に変化する日常へ。それが彼女の本心であった。その点では、兵器達の中でも少し可笑しな変わり者だといえるだろう。その一方で、有り余る元気と嘘を付けない性格が彼女の周囲に人を集まらせる要因のひとつとなっていることも事実であった。
それはさておき、そんな本心を胸に刺激を求めてディールは町へと繰り出したのである。

しかし、本当につまらなすぎる。かなり前になるが、ウーノに連れて行って貰った時の燃える空港からのレリック奪取は中々に刺激が強かった。最初は一般人を装って普通に奪うだけの簡単な作業のはずだったのだが、突然空港に火災が発生し、見事に彼女の望む『非日常』があの時始まったのである。結局火災を起こした犯人は分からなかったが、彼女は最初の方はその犯人に感謝すらしていた。

――その火災で、人が死んだことを知るまでは。

しかも明らかに火災による死ではなく、強制的に焼死させられたかのような痕跡があることに彼女は気が付いた。しかし管理局はそれに気づかず、ただ火災による事故死ということで片付けられた。

確かに刺激は欲しいが、刺激が欲しいからと言って人を殺してはならない。それもまた彼女の本心の1つであった。

「……ふむ…少しくらいならば人を躓かせるくらいは…いや、それをしては兵器と変わらんではないか…妾は人を傷つけることに能力を使っては…」

…現在の彼女の呟きからは、到底想像できない本心であることは誰も否定できないが。

と、そんな危険なことを呟きながら人ごみを歩いていたときだった。

「ふぁ～…そろそろ姉上達も心配する頃じゃし…帰るかのう…と、うん？」

欠伸をしながら引き返そうとすると、ふと目に飛び込んできたのは泣いている男の子だった。

辺りを見回すも、親と思われる人間の姿は何処にも無い。この人ごみではぐれてしまったのだろう、と見当をつけたディールは迷わずその子供の下へ向かった。

「ひっく…うぅ…？」

「ほれ、どうしたのじゃ？泣き止むのじゃ、男じゃろう？」

優しく話しかけると同時に、関りたくない一心で男の子をスルーしていた大人に白い目を向けるのも忘れない。何人かの大人が目を反らしたのを見て満足すると、泣きやんできた子供の頭を撫でながら会話を始めた。

「お主、母親か父親は？」

「ひっく…お母さんが…あっちではぐれちゃった…」

「この人混みじゃ、確かに逸れるのも無理は無かろう…分かった、では妾が一緒に探すのじゃ。　お主、名前は？」

「一緒に探してくれるの…？　あ、僕ラース…ラース・アディアクスです」

「ふむ、いい名前じゃのう。妾はクインディールじゃ。長いからクイン、またはディールと呼んで欲しいのじゃ」

「じゃあ…クインお姉さん？」

「おぉ…姉、と呼ばれるのは新鮮じゃのう。おっと、そんな場合じゃ無かったの…まあお主の好きなように呼んでくれ。じゃあ、行く

とするかの」

「…はいっ！ありがとうございます！」

5，6歳にしては中々しっかりしている少年に苦笑を洩らしながら、ディールは少年と手を繋いでミッドチルダを散策し始めた。

…とまあ、色々な所を探し始めたのだが。

「…いないのう」

「うぅ…」

ラース本人から聞いた話によれば、ラースとその母――リース・アディアクスという――は、このミッドチルダに父の誕生日プレゼントを買いに来たらしい。
しかもこの人混みに加えて、リースは子供のラースから見てもとんでもなくマイペースな人で、例え質量兵器を突きつけられてものほほんとしている人とか。
もしかしたらラースのことも慌てずにゆったりと探しているのかもしれない。いや、寧ろいつか見つかるだろうと思って探してすらいないのかも知れない…とはラースの弁である。

「ふぇぇ…お母さ～ん……」

「うぅむ…ラースよ、お主の母の特徴をもう一度言えるかの？」

「え？　あ、はい…えっと、髪が長い栗色で、身長はクインお姉ちゃんより高くて、目の色が白くて…うぅ、すいません、これくらい

しか…」

「いや、それだけ聞ければ上等じゃよ」

仕方が無いので、少々…いや、かなり遠慮したいが管理局に頼ることにした。実は彼女は“兵器”としても魔道士としてもサーチ能力において、才能は一般人以下のため人に聞くしか道が無いのである。幸い、自分が人間じゃないことは他の“兵器”でない限りはバレないはずだ。そこまで思考したのち、ディールは探す相手を“母親（リース）”から“管理局の服を着ている人間”へ切り替えた。

まあ、さすがは管理局本部がある世界である。探し始めて5分少々で見つかった。
何やら焦ってそうに見えるオレンジ髪の少女であった。

（？　…あの娘は確か）

何やら見覚えがある気がして、出掛かっている記憶を少し思い返してみる。

直ぐに思い当たった。

（ああ…兄上の能力の被害にあった管理局の…確か、スカリエッティがスターズ分隊だとか何とか言っていたのう）

彼女も…というか、兵器達は自分以外の兄妹達の能力の名称は良く知らない。実際、ディールがスカリエッティに齎した“兄”の希少能力の中にリニアレールを吹き飛ばしたあの骸の能力は入っていなかった。

…しかし、スカリエッティ達の様子から恐らくあの死神のような存在が見えたのは自分だけだということは理解出来た。研究所にいた頃からそうだが、未だに兄の底は見えないのだった。

（おっと、思考が脱線してしもうた）

首をかしげて此方を見ている少年の為にも早くあの管理局の少女と接触しなくてはならない。

そう思い、少し小走りで少女の元へ向かった。

「…ん～…こっちにもいないわね…何処に…」

「すまぬが、ちょっといいかの？」

「う～ん…取り合えずスバルに…って、あ、すいません！！　な、何でしょう？」

何やら考え事をしていたようで、此方に気づくまでに時間が掛かったが話は出来た。

「実はの…」

迷子の子供と、その母親の特徴、たまにラース本人の言葉も交えて

これまでの経緯を説明する。

「栗色の髪…？　リース…あ！　やっぱりそうだわ！あの、その子なら今管理局の方で捜索願が出てたんです！」

「なん…じゃと？」

「あのマイペースな母さんが…僕のために捜索願を…？」

だが、探している途中でどれだけリースがマイペースかを聞かされていたディールとそのマイペースな性格の被害をまともに受けることの多いラースにはそれが全く信じられなかった。

「で、私がその子を探している途中で…じゃあ、管理局のロビーに来てくれますか？」

「ふむ…正直（管理局も捜索願の件も）信じ難いが…行くとするかの。良いな、ラース？」

「は、はい」

まあ、もし行って見て嘘なら自分が暴れればいいだろう――とまたしてもとんでもないことを考えながらラースとディールは逸れない様手を繋ぎつつオレンジ髪の管理局の少女の下へ付いていった。

管理局ロビーｓｉｄｅ

「あ、お母さーん!?」

「……本当にいるとはのう…」

「あらー、ラース。探していたのですよー？　…で、貴方はそこの女性の方に私をどう説明したのですかー？」

「いふぁい（いたい）、いふぁいよ（いたいよ）ー」

ロビーに着くと、管理局の女性と仲良く談笑しているラースに聞いた特徴とほとんど同じ女性――リースがそこにいた。
少しラースの情報に加えるとしたら、胸が大きいことであろうか。
ディール並に、それ以上かもしれないほど大きかった。

暫くじゃれ合っていた（リースによるラースの尋問をしていた）親子であったが、ラースから事の次第を聞くと、リースがディールの元へやってきた。

「ラースから聞きました。　親として、本当に感謝してますー。ありがとうございました」

柔らかな笑みと共に頭を下げるリースに、ディールは少し照れてこう返した。

「いいんじゃよ、妾とて嫌では無かったからのう」

「そう言っていただけると嬉しいですー♪　さ、ラース。帰りましょうか？」

「うんっ！」

ラースも満面の笑みで返事をして、ロビーの出口へ歩いていく。

出口から出る直前、ラースが振り返ってディールへと呼びかけた。

「クインお姉ちゃん！　また一緒に遊んで下さいねー！」

「うむ、約束じゃぞー！」

その会話を最後にして、その親子は一瞬の笑顔の後に消えてしまった。

魔力反応無く転移したアディアクス親子に驚きを隠せないディールだったが、皮肉にも先程リースと談笑していた管理局員である――なのはが説明した。

「アディアクス一族はですね、大昔から“魔法薬”の分野で凄い活躍を残してるんです。でも残念ながら、その凄い魔法薬は一部しか出回ってなくてしかも高価で…管理局でも一部の人しか持っていないんです」

なのは曰く、今の転移のようなものはその薬の一部を使ったものらしい。

「それは便利じゃな。しかし…ふむ、一部しか出回っていない、というのは如何してかの？」

「それが、聞いてみたら…」

『貴方方が“本当に信頼できる組織”だということを証明出来るのならー、いくらでもただで差し上げるのですがー…後１００年は無理そうですねー♪』

「…って、よく分からないことを言われてはぐらかされちゃって…」

それを聴いた瞬間、ディールの中で1つの仮説が芽生えた。

もしかしたら彼女のマイペースという性格は見せ掛けなのかも知れない。

わざとマイペースに見せることで、相手のペースに巻き込まれず、しかも同時に本当の自分をごまかすことが出来る。簡単なようでかなり難しい会話術に置いての高等テクニックだ。

もしそうだとしたら…リースという女性は中々の曲者である、とディールは不敵な笑みと共に小さく笑った。

「成程のう…ふむ、それでは妾もここで失礼するとするかの。一応家族も待っているのじゃ」

「あ、分かりました。捜査協力に感謝します！」

「ほっほっほ、別によいぞい。そういえばお主の名を聞いていなかったの。名はなんという？」

「あ、高町なのはといいます」

「ティアナ・ランスターです」

「そうか、そうか。良い名前じゃのう…ではお主らに忠告しておこう」

ニヤリ、と。

悪どい笑みを浮べ、不審がっている2人の魔道士へ彼女はこんな言葉を投げかけた。

「…“骸”に注意じゃ。もし会ってしまったのなら逃げよ。戦えば、お主らに助かる道は残されておらん」

「――――――!?」

「…？」

対極的な反応。

思い当たることがありすぎるなのはと、よく分かっていないティアナ。

特になのはの頭に鮮明に蘇るのは、『男』が操っていたと思われるあの“死神”である。今でも思い出すだけで恐怖が走る。

呼び止めようとディールの方へ意識を向けるが、彼女はそのまま出て行こうとしていた。

「あ、待ってください！貴方はあの男の人と関係が…」

直ぐになのはが追いかけ、詳しく聞こうとするも。

既にそこには、ゴスロリ服の女性の姿は無かった。

スカリエッティアジトｓｉｄｅ

「ただいｍ」

「「「「「「！！　（クイン）ディールーーー！！！」」」」」」

「ぬおあぁあ！？　やっ、すまなかったのじゃ！反省しているから許ｓ…説教は嫌なのじゃー！！」

「全く、お前という奴はクドクド…」

「君は自分が狙われていることを…ガミガミガミ……」

「全く、どれほど心配したと…グチグチグチ…」

因みに、帰宅してから5時間超の説教にあったことを此処に記す。

幕間“？5（クインディール）の日常”（後書き）

天破「少しくらい、ギャグを、入れたかったんだ」

ディール「ふむ…何故妾をそのギャグに起用したのじゃ？」

天破「一番ギャグに絡ませやすいから」

ディール「よし、それは妾への宣戦布告と受け取った。表へ出るのじゃ」

天破「いや違…」

リース「あらー…作者さんが首を捕まれて連れてかれちゃったわねー。…まあ、いっか♪　ええと、作者さんが言う予定だった事を言わせて頂きますー。私達…ラースと私の初登場となった訳ですがー、どうやら私達をただのモブキャラにするつもりは無いみたいですねー、作者さんは…私としては別に今回限りの登場でも良かったのですがー。　まあ、もう一度出るとしてもかなり先のことになると思うのでそのときはどうぞよろしくお願いしますー♪」

ディール「ただいまなのじゃー」

リース「あらー、お帰りなさい、ディールさん…作者さんはー？」

ディール「今頃ゴミ収集車に回収されてる頃じゃないかの」

リース「作者さん、冥福をお祈りしときますねー」

次回は個別スキル訓練に入ります。

…が、『計画』を知ったはやてが少しゲンヤへ迫ります。兵器に関してゲンヤの知っていることとは如何に!?　と同時にこの作品中で遂に最後の兵器（？４）の登場です。皆！この作品唯一の男の娘の登場を見逃すなよ!!

？「…なんで僕がこんな目にぃ…（涙目」

サーセン、自重しませんでした。でも後悔はしていません。

それでは、心の隙間でもいいので楽しみにしてくださるようお願いします＾＾

1万PV達成記念！　閑話〝何処にでも無さそうな日常風景〟（前書き）

どうも。1万PV達成してて舞い上がっている男、天破です。
これも皆様のお陰です。土下座しつつ感謝しております。

さて、今回は先程のディールの日常みたいな感じではなく、本当にギャグそのものというか和むことに重点を置いたお話です。お楽しみいただければと思います。

では、どうぞ！

1万PV達成記念！　閑話〝何処にでも無さそうな日常風景〟

兵器の日常？『？1：無還者（リセッター）の休日』

「『…』」

真っ黒なドレスのような服を着た男が、アホ毛を立たせながらとある家の屋根に座ってミッドチルダ市内を見物していた。どうやら任務という訳ではなく、何もすることがないように見える。

「『…理解できませんが、この状況を暇というのでしょうか』」

『ソレ以外ニ何ト言ウノカ知リタイモノダ』

そんな呟きのようなものに反応したか、男の後ろにフードを被った骸が現れて突っ込んだ。

しかし男はそれを華麗にスルーし、丁度近くに寄ってきた蝶々を何ともなしに目で追っていた。

『大体、何故任務ガナイ。我輩ラノ能力ニ頼ル人間ハ大量ニイルハズダガ』

「『その質問に関する回答ですが、実際のところ私の存在を知る人間がほとんどいません。更に私に依頼した人間は“管理者”を除いて全員抹殺しているので、少なくなっているのが現状デス』」

『…ツマランナ』

一言呟くと、妙な骸骨もまたその辺にふよふよと浮きながら通行人を見物し始めた。

「…！…、…！」」

「『…真下より生命反応？』」

ふとそのまま数分が経過した後、男の真下――つまり家の中から口

論が聞こえてきた。どうせすることもなかったので、聞いてもいいか否かを計算してまあいいだろうと何とも彼らしくない曖昧な答えを出して耳を済ませた。正直これは任務でもないので真剣に計算・断定・思考する必要もない。なのでバレ無い程度に魔力を使用して聴力を上げた。

「もうあの桜の木は駄目です…私の薬でも治せませんー」

「そんな！そこをなんとか…」

「私としても心苦しいのですがー…死んだ存在を治す、ということは私達の家系でも不可能です」

「うぅ…そんな」

「『…声紋から、アディアクス家現当主リース・アディアクスと断定します。もう1人の声紋はデータが存在しないので判別不可。年齢は５０~６０前後と推定します』」

自分の声で結論付けたところで、男は彼女達の話題の元である桜の木を見る。

確かに、その桜の木は『老死』しており普通ならば二度とその花を咲かす事はないだろう。

そう、普通ならば。

「『死因は老死と判断……能力を使用し、対象の回復を始めます』」

『ム？…ホホォ、面白ソウダ。暇潰シニ最適カモ知レヌ』

男が“幻影体現”を使用し、自分の存在に気づかれぬようにする。その後、その場から動かずに掌を老死している桜の木へ向けると、骸骨が愉快そうに『唄った』。

『汝は死を何とする？《Ｗａｓ　ｉｓｔ　ｄｅｉｎ　Ｔｏｄ？》』

その唄に、男は無表情でこう返した。

「『死とは投げ捨て、操るもの《Der Tod ist nicht manipulierbar und weggeworfen》』」

その言葉に満足したかのように、骸骨は愉快そうに頷いた。

『ならば、汝に“我ら”を操る力を授けよう《Thee, dann schenken die Kraft, uns zum anipulieren》』

骸骨はその骨のみで構成された手の内、中指であろう骨を1本突き出して、男と共に最後の唄を謡った。

「『「死よ、我が前に跪け《Ich tot, knieet vor uns》」』」

最初は、何も起こらなかった。

しかし少しすると、その桜の木から子供程度の大きさの骸骨が次々と出てきて、それに反比例するかのように桜の木が若返っていった。

「…あ、あらー？」

「まあ…」

困惑した声と驚愕したような声。

無理もない、彼女達の眼からは桜の木が勝手に若返り、たった今季節はずれの花を咲かせたようにみえたのだから。

「『…能力の使用を終了します』」

『フム、“老死”カ。我輩モコノ“死”ハ使ッタコトガ無イナ』

そう言った男と同じ程度の大きさの骸骨は、老死していた桜から沸いて来た骸骨達と何やら会話していた。その言語はベルカ語でもミッド語でも無い為常人には理解できないが、どうやら骸達の間でのみ通じる言葉らしい。

「『論理的に考えると、老死よりも焼死や凍死などの方が一般の人間ならば確実に且つ安全に殺せマス。従って、老死を使う機会というのはそこまで無いと思われます』」

『ソウカ。残念ダ』

その会話と同時、一瞬だけ男は桜へと目を向けた後全ての骸と共に消えた。

後に残されたのは、美しく散る桃色の桜と、リースが治したと勘違いした女性が彼女に感謝しているという、真実を知る者からすればかなりおかしな光景だけであった。

兵器の日常？『？２：消失者（パニッシャー）＆？３：再生者（ファスター）の休日』

「何故休みの日までお前と付き合わなければならないんだ、フラン」

「それは此方の台詞ですわよ、春斗。はあ…」

珍しく私服を着てミッド市内を歩く、２人の男女――まあ、春斗とフランなのだが――は、互いに愚痴を溢し合いながらノンビリと歩いていた。

目的は単純で、彼らの姉の知り合いへ荷物を届けにいくだけの簡単な作業であるのだが。

「はぁ…いい加減、なのは姉達のワーカーホリックは何とかしなければならないな」

「ええ。はやてさんは部隊長だからともかく、このままではフェイトお姉様達はいつか倒れますわ」

管理局ほぼ全ての局員に休日が許されているというめでたい日に――なのはとフェイト、はやては相変わらず六課で仕事していた。

いや、これには語弊があった。なのは、フェイト、はやてのみならずフォワード陣は一般局員を除いて全員が訓練か仕事中だ。本当に彼らの体は大丈夫なのかと思ってしまうのも無理はないだろう。

「何処をどう間違ったらなのは姉があんなワーカーホリックになるんだか。仕方ねえ、前々から計画していた高町家乗り込ませ作戦の実行の時が…」

「止めなさい。死人が出ますわ。主に恭也さんとか」

此処で管理局ではなく、なのはの兄である恭也の死を予見する辺り、恐らく彼女も高町家の上下関係の実態を把握していると思われる。しかも彼女の予想では、その恭也を死なせるのはなのはだというのだから全く以って笑えない。

春斗も当然分かっているらしく、冗談だと言って力なく笑った。

「そういえば…」

「ん？」

そこから暫く会話もなく、欠伸をしながら歩いていた春斗へフランが話しかけた。

彼女から春斗に仕事の件以外で話しかけるのは珍しい。そう思った春斗はその言葉に耳を傾けて――

「別にそこまで重大なことではないのですけれど。昨日、なのはさん達が出動してる最中に他の局員の方から手紙をもらったのですが、どう断ればいいでしょう？」

傾けたことを次の一瞬で後悔し、思い切りその場でこけた。

「なんというリア充…ッ！！　俺はラブレターなぞ生涯に一度たりともらったことはないぞ…今俺は性別は違うがお前が憎い…！！」

そのラブレターをもらえない理由の１つに、自分の姉が一枚噛んでいるということを彼が知ることは永遠にないだろう。

「…つか、断ること前提なのな。いいじゃねえか、許可しちまえば？」

「……フェイトお姉様が黙っていませんわ…」

「……ああ…」

確かに若干シスコン化しつつあるフェイトさんならば、フランが付き合うことを了承した男は次の日に丸焦げになって転がっていそうだ…と春斗は思った。

「という訳でどうにかして断りたいのですわ…勇気あるその方の為にも」

「そうだな…金色の閃光の妹に交際を頼む位だ。中々に根性のある奴と見たぜ…」

「……少し位私のことも心配してくれてもいいですのに（ボソッ）」

「何か言ったか？俺は今その男をどう慰めるか考えるので忙しい」

「…ばーか、ですわ」

「何故！？」

いきなりの罵りに本当に分からないような顔をする春斗。フランはその言葉に合わせるようにそっぽを向いた。

その顔には、如何してあんなことを口走ったのかという恥ずかしさと女心を全く理解していない春斗への苛立たしさで赤く朱が差していた。

さて、若干彼ららしくない会話もあったが何とかその荷物を届ける家へ到着。

到着、したのだが…。

「……（唖然」

「そ、そんな…ありえませんわ」

「「……桜？」」

このミッドにはないはずの、綺麗な桃色の桜が一本だけ満開の状態で存在していた。

「おや、この木を知っているのかね？」

「「！」」

その木を潜る様にして、５０代程度の女性が現れた。

「君達は？」

「あ、高町春斗です」

「フラン・Ｔ・ハラオウンですわ。私達のお姉様達の代わりにお荷物をお届けに参りました」

「おぉ、そうかいそうかい。なのはちゃんとフェイトちゃんの。ありがとうねえ」

持ってきた風呂敷を女性は丁重に受け取ると、右手に持って春斗とフランに「せっかくだから上がっていきなさい」と誘われたので２人は好意に甘えることにした。

そのまま靴を脱いで、女性に連れられて和室へと上がりこみ、3人で座る。

そこは桜が良く見える場所であった。

「あの桜はねえ、さっき凄腕のお医者さんに見てもらって、もう駄目だって言われてしまった桜なのよ」

女性は優しい目で桜を見ながらそう語る。

「寿命らしくてねえ…私のご先祖様が地球、ってところから持ってきたらしくって。綺麗だから、私の息子も娘も大好きで…あの桜は家宝みたいなものなんだ。今管理局で働いてる娘も、もし私に何かあればこの家と桜を継ぐって言ってくれたのよ…

でも、それももう無理かと思ったら…不思議なことが起こったの」

「「不思議なこと？」」

「ええ…私達が見てる前でね、急に桜が若返り始めたのよ」

「「…は？」」

そんなことはありえないはずだ。希少能力でも使わない限り、いきなり桜が蘇ったりするはずがない。

そんな疑問を見て取ってか、女性はクスクスと笑って、言った。

「でもね、本当なのよ？現に今、桜は咲いてる。まるで、別れたくない、って言ってるみたいで嬉しかったわ…」

その目は、嘘を言っているようには見えなかった。

春斗とフランは、拭えない疑問はあるものの今もまだ綺麗に咲いている桜へと目を向けた。

まるで何事もなかったかのように、若返った桜は今もその桃色の花を散らしている。

まるで、自分を蘇らせてくれた者へお礼を言っているかのようだった。

兵器の日常？『？５：拒絶者（ヴィター）の休日』

「何もすることがないんじゃが」

「…その言葉を言いに此処へきたのかね…」

スカリエッティのアジトにて、暇つぶしの標的とされたスカリエッティがディールの処理に困っていた。

「せめて何か手伝わせてくれんかのう…」

「しかしね…正直君が作ると何故かこの世の理を無視したかのような形状になるじゃないか。あのガジェット（爆破ガジェット）Xも同じだろう？一応中身を見てみたが、結局どうやって爆発したのか分からなかったのだが…」

「そういうのはな…根性でなんとかなるのじゃ！！」

「いや、それはない。それだけは科学者として譲れないね」

むぅ、と膨れるディール。反応がまんま子供な彼女を華麗にスルーし、スカリエッティは自分のすべき研究に没頭する。

その奇妙な状況のまま数分が経過する。

…遂に根負けしたのはディールの方であった。

「うぅ～…分かったのじゃ。おとなしくしてるのじゃ…」

涙ぐみながら出口の方へ歩み寄り、研究室の外へ出て行くディール。

その様子を見ながら、スカリエッティは溜息をついて額の汗を拭いた。

「…危なかった。あと五分粘られていたら私が折れていたかもしれない…」

どうも、彼らの間には見えない戦いが繰り広げられていたらしい。

タイミングよく研究室へ入り、その言葉を聞いたウーノはそう結論付けた。

―数分後―

そんなスカリエッティとの戦い（？）から数分後、ミッドチルダ市内に降り立つゴスロリ服を着た女性の姿がそこにはあった。

「さて、例の如く脱走してきたわけじゃが…」

何が例の如くなのか全く分からないが、この瞬間、彼女に再び説教が降りかかることは確定したといえるだろう。

「相変わらずこの辺りはにぎわっとるのう」

そんな決まりきった運命から目を背けるかのごとく、ディールは様々な店を冷やかしてはそのまま出て行く。

そんなときだった。

「あれ？クインお姉ちゃん？」

「む？」

後ろから呼ばれたかと思うと、先日迷子になっていたばかりのラース・アディアクスがソコにいた。
今度はリースに手を繋がれている。迷子ではないようだった。

「あらー、クインさん。お久しぶり…と、言う訳でも無いでしょうがー」

「そうじゃの。ほんの少し前にあったばかりじゃ」

握手して再会を喜ぶ3人。少し雑談をしてから、ディールが彼女達にここに来た用件を聞いた。

「それで、如何してまた此処に？」

「それがですねー、1つ依頼を受けて此処にきたのですが…不思議なことがありましてー」

「不思議なこと？」

「えぇ…聞いていただけますかー？」

前置きすると、リースは本当に不思議そうに話し始めた。

「先程の依頼の内容なのですが、桜が枯れてしまったから何かもう一度だけでも生き返らせる方法がないか、というものだったのです」

「ふむ…桜、というのは確か何処かの世界にあったものじゃの？」

「はいー。続けますねー？　で、私はそれを身に行ったのですが、聞けばもう何十年もそこに根を張っていたそうでー…完全に寿命だったんですー。心苦しいんですけど、私達でも老死してしまったものは何も出来ません…諦めるしか無いと思っていたのですがー」

「ふむふむ」

「急に、私達の見てる前で…その桜が若返り始めたんですよー」

「…なんじゃと？」

さすがに信じられなく、ディールはリースの顔を見る。
しかしその顔は嘘をついているようには見えない。本当に何故あんなことがおきたのだろう、という不思議な顔だった。

「信じられないでしょう？でも、本当なのですー…その依頼人は私が治したのかと言っていましたが、私は何も出来ませんでしたしー」

「ふむ、興味深いのう…いきなり若返った桜、か」

「あ、それなら見に行きますかー？　場所ならお教えしますー」

「おぉ、では頼めるかの？」

「もちろんですー」

そう言って、その“不思議な家”の場所を教えるリース。ディールはそれを頭の中で地図として記憶し、理解した後に礼を言った。

「ふむ、分かったのじゃ。　礼を言うぞい」

「いえいえー。それではまたー♪」

「またねー、クインお姉ちゃん！」

アディアクス親子に手を振って、自分の記憶を頼りにしながらその家まで歩いていった。

「…これが…」

その家について最初に出た言葉は、それだった。

乱れ咲く桃色の花。散っていく花も凄く幻想的で、和風っぽい家の門に良く合っていた。

「おぉ、今日は客の多い日だねぇ」

「！」

その門から出てきて思わず身構えるが、どうやらこの家の主のよう

であった。

「私はこの家の主よ？　貴方もこの桜に惹かれたのかしら？」

「惹かれた、というか…リースからこの桜のことを聞いたので、見に来たのじゃが」

「あらあら、先生が？　そうなの。惜しかったわねぇ、あと少し早ければ貴方と同じ位の2人を紹介できたのに」

「妾と同じくらい？」

「そうなのよ…2人ともいい子でねぇ。まぁ、折角きたんだから上がりなさい。お菓子もあるわよ」

「お邪魔するのじゃ」

少し気になってその“２人”を聞きたかったのだが、後半のお菓子という言葉で全ての疑問が吹き飛んだ。

笑顔の女性とそれ以上の笑顔のディールは、スキップしながらお菓子を楽しみにその門を潜った。

その後、桜の良く見える場所へ案内してもらって、そこでお菓子を食べて和んで、何事もなかったかのように帰宅した直後に説教で１日潰れたことは言うまでもないだろう。

日常？ｌａｓｔ『とある兵器の遺言状』

？ｓｉｄｅ

……俺ももう此処までのようだ…

見ればその横で、なのは姉やフェイトさんも既に三途の川を渡る直前のようだな。体は痙攣し、その顔は青い。

フェイトさんに至っては「ああ、母さん…アリシア姉さん…私も一緒に…」とかうわ言を呟いている。これは俺よりも拙いだろう。

駄目だ、力が抜けてきやがった…そのまま俺は食堂の床へ倒れ込む。

机の下から、青い顔で呻いているフランを見つけ、目が合った。俺はそっと微笑み、口パクで「お前のことは嫌いじゃなかったぜ…」

と言った…が、口もほとんど動かないので本当に通じたかは分からない。

フランはその口の動きを見て、あいつも微笑み、そして力なく果てた。くっ、フランも向こうへ逝っちまったか…

俺の頭に浮ぶのは、兵器であった頃に感情の乏しい兄貴と過ごした記憶と高町家に拾われた後に起きた様々なこと。ふっ、これが走馬灯って奴か。中々乙なもんじゃねぇか…

だが、このまま眠るのも、悪くはなさそうだ…せめて、他の兄妹に会って話をしてから向こうに逝きたがったが…いつかは通る道だったはずだ。後悔はねえ。

…お?

「何だ、フラン、此処にいたのか…大丈夫か?」

「えぇ、大丈夫ですわ…」

目を閉じると俺は、いつの間にか花畑にいた。そこに倒れていたフランと、起き上がりつつ会話する。

「兎に角、あの川の向こうへ行きましょう…？何か、渡らなければ、行け無い気がしますわ」

「確かにな…よし、渡ってみるか…。　？　お、なのは姉じゃねぇか、あんなところにいたのか…よっしゃ、今行くぜなのは姉ー…」

「皆～、次のご飯よ～…ってきゃあああああ！！！何これ！？」

俺――――高町春斗は、食堂で料理を作ってこの場を死屍累々へと変えた張本人である――――ヴォルケンリッター、シャマルの悲鳴を何処か遠くで聞きながら、フランと共に向こう岸で待つ姉の元へと駆け出した。

～魔法少女リリカルなのはｓｔｓ　～ＰＲＯＪＥＣＴ　Ｓ．Ｗ～

ｅｎｄ

「『…まだ終わりまセンよ?』」

『主、イキナリ何ヲ言ッテイルノダ?』

何処かの兵器とそれに付き添う骸骨がそんなことを言ったとか言わないとか。

1万PV達成記念！　閑話〝何処にでも無さそうな日常風景〟（後書き）

〝その後〟

フラン「ええと、ここですわね？手紙にあった場所は…」

？「あ、あのっ！」

フラン「？　あ、貴方が……って！？　貴方、女ではないですの！？」

？「はいっ、フランお姉様！　手紙を読んでいただきありがとうございます！」

フラン「フランお姉様！？」

？「あのっ、此処に着てから貴方に一目ぼれしました！どうかお願いします…あたしと付き合って下さい！！」

フラン「ちょっと待って下さい！？　女が女に告白するなんて聞いたことが…」

？「私は本気なんです！　さあ、どうなんですか！？」

フラン「いやっ、あのそのっ…　？「（ドスッ！）はぅ！（ドサァ…）」　！　は、春斗ではないですの！？」

春斗「何かおかしいと思ったらこういう事か…いるんだな此処にも…百合っつーのは…」

フラン「焦りましたわ…でも助かりました。ありがとうございます…」

春斗「まあ良いって事よ。　それにしてもお前は本当に男でも女でもひきつけるよな～…フェイトさんがいるから近寄れねえ、っていう奴も結構いるんだぜ？」

フラン「そ、それは初耳でしたわ…」

春斗「逆に、お前といつも一緒にいる俺は嫉妬の対象になっているがな」

フラン「…」

春斗「そんな申し訳無さそうな顔するんじゃねぇよ。やりづれえだろうが。ま、お前は結構面白いしたまに信じられない位に（弄った時の反応が）可愛いからな」

フラン「！？　か、かわっ…！？」

春斗「ん？　何顔赤くしてんだ…って、フェイトさんいつの間に俺の背後に！？　ちょっ、二股って誤解ですよ！　なのは姉は姉ですから！　如何してなのは姉が俺の交際相手に上がるのか物凄い疑問ですけど！！　いやだから俺はどちらかというとフランを助け…って、ザンバーフォームは止m…ぎゃあああああああ！！」

フラン「…本当に、ばーか…ですわ…／／／」

“その後”ＥＮＤ

え?フラグ?　ＨＡＨＨＡＨＨＡ、何のことだか分かりません↑
勘違いからのフラグって、結構面白いじゃないですか。えっ?そのせいで春斗が死んだじゃないかって?残念ですが奴は死んでません。ギャグ補正が働いたようです。

さて、改めて1万ＰＶありがとうございます!!これも皆様のお陰です。
こんな馬鹿な駄作者と作品ですが、これからも見ていってもらえると嬉しいです。そしてどうか私に感想を↑　…せめて、1つでも、来て欲しいなと思ってます。

という訳で、次回のお話を改めてお待ち頂けるよう、よろしくお願いします。
誤字脱字報告感想お待ちしております!!

”？4　シーナ”（前書き）

タイトルがっ、思いつかなかったんだ！！

シーナは最後の方にしか出てきません。タイトル詐欺ゴメンなさい

ｏｒｚ

…次回までに地球へのミッション行けるかなぁ…？

では、どうぞｍ＿＿ｍ

追記（７月１０日）：ＮＯＯＯＯＯ！！申し訳ありません、サブタイトルミスってました！！

誤→？５　シーナ　正→？４　シーナ

改めて申し訳ないです。混乱させてしまったことを深くお詫びしますｍ＿＿ｍ

それでは改めて、天破の駄文を御覧下さい＾＾；

”？4　シーナ”

初出動から数日後の事。

スバル、ティアナ、エリオ、キャロはそれぞれの個性（スキル）を強化すべく、チーム戦からそれぞれ訓練に適した隊長陣が就いた個別訓練を始めていた。

スバルはヴィーダと。

ティアナはなのはと。

エリオとキャロはフェイトと。

それぞれハンマーで叩かれたり砲撃で吹っ飛ばされたり体力切れで倒れたりなど第三者視点から見ればほとんど苛めにしか見えないような訓練内容だが、取り合えず彼女達は生きていた。

そしてそんな新米魔道士を、同情の目線で見る影が三つ。

“無関係”を貫くヴァイス、春斗、フランであった。

「…うぉ、今また吹き飛ばされたぞ。スバルだっけか、アイツ…生きてるよな？」

「まあ、一応非殺傷設定にしてあるはずだから大丈夫だろ…多分」

「ヴァイスさん、そこは断言してほしかったですわ…」

頬が引きつるフラン。実は春斗とフランは、非殺傷設定と言うものがよく分かっていない。

疑問に思ったならば考えてみるとしよう。まずはやての使う氷結の

吐息と言う魔法だが、アレは少し昔にあった空港の火災事故を炎ごと凍結させてかたをつけた魔法だ。

ふと考えてみる…あれは非殺傷設定に出来るのか、と。

氷に閉ざされれば当然息が出来なくなる。その前に凍死するかもしれないが、もし凍死するまでも無く凍ったのなら息が出来なくなって苦しみながら死んでしまう。

石化の槍ミストルティンでもそうだ。石化するあの魔法は何処が非殺傷設定なのか。というかあの魔法に非殺傷設定が存在するのだろうか。

それをヴァイスに話したら、真顔で「ハルト、フラン。　そういうのはな…気にしたら負けなんだよ」と言われた。

その言葉に何処か無還者以上のプレッシャーを感じたので、彼らがそれ以上追求することは無かったが。

「…というかこれが午前の練習って何処かおかしいよな…」

確かに基礎は大事だが、何も早朝に起きて此処まで濃密な訓練をする必要は無い気がする…というのは春斗の弁である。

その件にはフランも同意した。

「このままではいつか彼女達は倒れますわよ？　まあ、なのはさんがあの子達のデータをいつも纏めているから暫くは大丈夫ですけれど…」

しかし、とフランは前置きして、目を細める。

「…意外と分かりにくいですが、この訓練は自分の成長を実感しにくいですわ」

その言葉にヴァイスが反応した。

「それはどういうことなんだ？　此処まで濃密な訓練をすりゃあ、直ぐに成長していくと思うんだが…」

「ではヴァイスさん、お聞きしますが…昨日、貴方の５０ｍ走のタイムが７秒３台だったとしますわ。で、一週間今あの子達がやって

いる以上の訓練をしてようやく7秒2台になった場合…どう思いますか？」

「まぁ、俺としちゃ少しでもタイムが伸びたのは嬉しいが…あれ以上の訓練をするならもう少し伸びても、と…って、そっか」

「まあ、そういうことだな」

春斗がフランの言葉を引き継いだ。

「確かにちょっとずつは伸びるだろうな、あれ程の訓練をしてれば…だが、人間てのは意外に強欲だからな。自分の思ったよりも成長して無いと、必ず焦るようになる」

「特に今すぐ力が欲しいと思っている人間は、その焦りが更に焦りを呼んでいく…そしてその末路にあるのは、焦りによる“事故”、または敗北ですわ」

「…、お前ら本当になのはさんやフェイトさんと同い年の非戦闘員か？　あの人たちに失礼だが、今俺はお前らが歴戦の戦いを見て理解してきたような感じがしたよ」

実はそれは当たらずも遠からずなのだが、当然彼らがそれを言うはずが無かった。

しかし少々拙いと春斗が感じたその時、丁度なのはの笛が鳴って午前の訓練が終了した。

「お、訓練が終わったみたいだな…じゃあなハルト、フラン。食堂で会おうぜ」

それ以上ヴァイスも追求することは無く、そのまま食堂へと去っていった。

安堵の息をつくフランと春斗。そしてこれからは、人の前で考察のようなものを説明するのは控えようと心に決めた。

そして昼飯を食べに行こうとするなのは達と合流し、そのまま食堂へ向かう途中のこと。

例の“烈火の将殺害未遂事件”に加え“リニアレール粉砕事件”のせいで色々とボロボロなはやてとリインが外回りへ出かけるところに遭遇した。

「あっ、訓練が終わったところかいな？皆、お疲れさん」

「「「「はいっ！」」」」

「あ、はやてちゃん…大丈夫？フラフラだけど…」

「何とかシグナムの件については落ち着いてきたんやけどな…というか、今地上本部はそれどころじゃないらしいで」

「それどころじゃない？」

なのはが反応し、はやてにそれはどういうことかという目を向ける。

「それがな？　地上本部を構成しとった重要な役職についとる人が、次々と殺されとるんや…」

その言葉に顔色を変えるなのは達。

「つい最近も、ガルザスっちゅー少将が首から上が無い状態で放置されたのが見つかったばかりなんや。その他にも人為的な心臓発作を起こされて死んだと見られる人や、酷いものやと体中切り刻まれて内臓が晒されてる状態で見つかった死体もあるんや」

「…うぷっ」

想像してしまったのか、顔を青くして口を押さえるキャロを慌ててエリオが支える。

「酷い…でも確かに、それだと他の事に構ってる暇なんて無いね」

「それでな？　…うちとカリムとそして今日話すつもりのゲンヤさんは…この地上本部の連続殺人事件の犯人と例の男は…同一人物だと見てるんや」

「「「！！！」」」

驚くと同時に、なのは達に寒気が走る。

やはり相手は、自分達を殺そうとしている犯罪者であり――そして説得して分かり合うことが不可能だということを――改めて、思い知った。

そんなのは達の心情を察してか、はやてが再びかすれるような声

で言った。

「じゃ、その話も含めて行ってくるわ…」

「行ってらっしゃい、はやてちゃん、リイン。ナカジマ三佐とギンガによろしくって伝えてね」

「分かったわ。スバルは何か伝言あるか？」

「いえ、大丈夫です！」

「ほんなら、行ってくるわ～」

「行ってきますです～」

そんな気の抜けた返事と共に――恐らく疲れが溜まっているのだろうが――はやてはナカジマ三佐こと、スバルの父でありはやての尊敬する上司ゲンヤ・ナカジマの元へと向かった。

そして。

今のはやての言葉を反芻し…そして結論の出た2人の兵器が、数秒間だけ無表情だったことに、気づく者はいなかった。

――食堂　兵器ｓｉｄｅ

「フラン、今の話をどう思う？」

「別に私に相談せずとも貴方なら分かるでしょう…はやてさん達の予想は１００％当たってますわ」

食堂の人にいつも通り大盛りに載せてもらうスバルたちを見ながら、彼らは小声で会話する。

食堂はこの時間になるといつも賑わっている。その中での会話なら、誰かが近寄ってこない限りは聞こえはしない。

「恐らくその殺された人間は、お兄様に任務を依頼した方なのでしょう。確か“兵器の心（ウェポンマインド）”が自動的に実行できる指令（プログラム）の中に、“依頼者”の抹殺も含まれていたはずですわ」

「その兵器の心（ウェポンマインド）の中に含まれている指令（プログラム）を実行するにはそれを操作できるキーが必要なはずだ。そしてそれを持っているのが」

「…兵器の管理者。完成した私達を引き取る予定だった人間ですわね」

その言葉を最後に、何も言わず黙々と食事を続ける春斗とフラン。

彼らは、自分達を引き取る予定だった者の名前も姿も知らない。

知る必要もないし、というかそれ以前に引き取られている頃には自分達も兄と同じく洗脳されていたに違いない。とすれば、研究者達がわざわざ教える道理は無いと判断するのも頷ける。

という訳で知っているのは消去法で無還者1人だけであるが、完全に洗脳されている彼が自らの管理者を話す訳が無い。

万が一別ルートで判明したとしても、何の準備もせず乗り込んではそのまま無還者を敵にまわすこととなる。どう考えてもそれは得策ではない…とすると、何とかして無還者を足止めすると同時に管理者の所へ行ってキーを奪うしかない…のであるが。

「「…無理（だな）（ですわね）」」

この案はほぼ同時に却下された。第一、研究所にいた時代何度も殺し合いで挑んだが成功体の兄妹全員で戦って一度も勝てなかった相手なのだ。その頃は兄妹全員で足止めしたとしても4分持つかどうかという瀬戸際であった。

現在はどうか分からないが、向こうは感情を封印された上に子供であった頃よりも強化されている。現在の春斗やフランですら1人で

管理局を完全に崩壊させる自信があるのだから、恐らくその上を行く強さを手に入れているに違いないだろう。

そんな男を、同じ兵器とはいえ足止めしろとは無理な相談である。

「まあ、まだ時間はある。もう少し考えようぜ」

「…ですわね。万が一と言うこともありますし…」

ちらり、とフランが目を向けた先にいるのは…

何かを話しながら大量のご飯を食べている、新人魔道士達であった。

「まだアイツらは不安定すぎる。全員に才能はあるが…全員に同じ位厳しい過去があるだろ?特にティアナ・ランスターはそれがかなり如実に表れているからな」

結構な量のスパゲッティを一口で口に入れ、口を動かしながら春斗が言う。

「確か…兄の死、でしたか。そしてそれを管理局の上司が侮辱した、と…」

当時の事件のことを少しは知っているようで、フランが額にしわを寄せながらその言葉に答えた。

「人事だと思えねぇんだよ…俺達の兄貴も死んじまったようなもんだ。俺達のこともう分からないだろうからな」

その言葉に春斗がこう返すと、フランが溜息をつけながら更に言葉を返した。

「生きて動いているだけでも幸いですわ。まだかなり少ないですが望みはありますもの…」

――その代わり、史上最凶の敵になりましたけれど。

皮肉っぽくそう付け足したフランだが、それは冗談でもなんでもなく、今彼らが最も逃避したい現実でもあった。

地上本部ｓｉｄｅ

「…久しぶりだな、八神。そろそろ来る頃だって思ってたぜ…」

場所は地上本部、陸士１０８部隊宿舎。

１０８部隊の隊長でありスバルの父、ゲンヤ・ナカジマと何故か無表情な女性、八神はやてが向かい合っていた。

そのゲンヤはかなり疲れたような顔であり、そしてはやてが何故此処に来たのかも知っているような口調であった。

「…ナカジマ三佐。出来ることなら貴方を疑いたくたくはありませんでした。しかし…今の言葉から見て、『何か』を…知ってるんですね？」

「…、」

「…此方は私の家族が被害に合ってるんです。ナカジマ三佐…お願いします。貴方の知っていることだけでいい」

はやてには珍しい、硬い硬い口調で。

彼女は深呼吸してから、言った。

「――『プロジェクトS．W』について、教えてください」

その言葉と同時に、ゲンヤが深い、深い、溜息をつく。

「何処まで知っている」

「カリムから見せてもらいました。プロジェクトF、戦闘機人計画、違法魔獣製造計画…管理局が『追っていたはず』のあらゆる違法計画の礎となった計画で、被験者の子供は5～6歳前後。死者は実験に掛けられた6万超のうち、約5万9995名…

実験に成功したのはたったの5人。用途は管理局の上層部による管理外世界の征服…此処までは」

スラスラと、しかし耐え難い事実が彼女の口から漏れる。

彼女にとって、否…管理局にとって許されざる悪であった“違法研究”。彼女本人からして見ても勝手に命を作って捨てていくのは許されないことであるし、許すつもりも毛頭無かった。

しかし、蓋を開けてみればどうだろうか。彼女が許さないと思っていたものはほとんどが管理局がバックについていて、資金提供すらしていることもあるという。

しかも真実を知った者が消されるオマケ付きだ。現実逃避だってしたくなる。

カリムから聞いたときは、思わず彼女に怒鳴り散らしてしまった。…が、しかしそれに構わずカリムは話を進め…はやては絶句した。

バッグにいる権力の大きさに、ほぼ管理局公認でそんな非道な実験が行われていると言う事実に。

そのはやての言葉を黙って聞いていたゲンヤは、はやてを真正面から見て、低い声で言った。

「浅いな。やはり聖王協会にはそこまで情報は行かないか…その程度、まだこのプロジェクトの入り口にもならん」

衝撃であった。カリムから見せられた情報だけで彼女には十分すぎる程の苦痛を与えたと言うのに、あの情報はゲンヤの知っている情報に比べればなんて事はなかったのだ。

「確かに俺程度の地位となれば情報は入ってくるが…正気か？　分かるだろう、知れば消される可能性すらあるんだぞ」

「…貴方が誰にも協力を仰げず、そうしてやつれるほどのバッグホーンがこの計画にはある、と？」

「正確には俺もこの計画の裏にいる奴は知らん…だが、この件をマスコミに流そうとした俺の同期が次の日にそいつの家ごと焼却された状態で見つかった。一家心中と片付けられたらしいがな、そんな訳が無い。恐らく捜査した局員も息がかかってたんだろ。　そして手を下したのは十中八九このプロジェクトの成功体（ひがいしゃ）の一人だ。　…皮肉なもんだろ？俺の同期はこの計画を告発して生き残りの子供を保護しようと思ってたのによ、その同期を殺したのは保護しようとしていた子供なんだぜ…」

「…ゲンヤさん、その件と同じく地上本部の重鎮が次々と殺害されている事件ですが…あれはもしかしたら…」

「お前の予想通りじゃねえか？あれをやったのは全部プロジェクトの成功体だ。　ただ、…これは俺の推測でしか無いが…恐らく殺された地上本部の奴らは、何かしらプロジェクトの成功体に依頼した奴らだ」

「！！！」

更にその言葉ははやての心を抉った。

はやては、あの男（兵器）をずっと憎んできた。

シグナムを傷つけ、大事な親友を、家族を傷つけ更には躊躇い無くリニアレールごと新人魔道士達を落として殺そうとすらした。

しかし、それは全て“命令”だった。彼は何も疑問を持たず、自らを道具として与えられた任務をこなしているだけだったのだ。

そう、それはつまり――『シグナムを殺せ』と命令したのも管理局の人間だと言うことになるし、レリックを回収するためだけにリニアレールを破壊してティアナ達を殺そうとしたのも管理局の何者かによる指示なのだ。

「信じられへん…嘘やろ？なあ、嘘やと…」

「甘ったれるんじゃねぇ、狸。これがお前の望んだ答えだ」

あまりの出来事に錯乱状態に陥ったはやてを、ゲンヤの厳しい声が無理矢理現実へ引き戻す。

その目は真剣そのもので、はやてが口を挟む余地すらなかった。

「いいか、よく聞け…この瞬間、管理局はお前の味方では無くなった」

そしてその一言一言が、彼女の心へ突き刺さっていく。

「上層部の8割以上はこのプロジェクトを知りながら俺のように見なかったこととして処理している。更にそのうちの2割はこのプロ

ジェクトで作り出された兵器に任務を依頼している。この分だと、近いうちに管理局は管理局によって滅ぼされる日が来るだろう…」

一息ついて、更にゲンヤは言葉を紡ぐ。

「しかし、だ。1つだけだが希望はある…お前も自分で言っていただろう。計画の成功体は全部で何人だ？」

「えっと…5人です」

「そうだ。しかし、俺が知る限り管理局の駒として使われている兵器（いしゃ）は一人しかいない…つまり、だ。この広大な世界…管理世界、管理外世界から他の成功体を見つけ出すことが出来、なおかつ管理局の味方に付かせれば対抗出来るかも知れねえ」

「…私がもし彼らの…この計画の『被害者』の立場の子供なら、絶対に管理局には協力しないと断言できます」

「だからほとんど無いに等しい望みだっつーことだ。　…正直、今

ほど俺は何も知らない、ということを羨んだ事はねぇよ。最近は日々殺られるか殺られないかの瀬戸際だからな…俺の同期や上司も部下もさっき話した奴も含めて何人か消されている。お前も気をつけろ…先程も言ったが、この計画を知ったからには、管理局は味方では無く敵になる。近づく奴は全て注意しておけ」

「…っ、了解しました」

暫く、双方が無表情のまま何分かの時が流れる。

しかしその空気に耐え切れなくなったか、はたまたもう考えるのを止めたか――恐らく後者だろう、ゲンヤが笑いながら豪快に言った。

「…さて、この話はもう終わりだ！　もう一つ用件があるんだろ、八神」

「あ、えっと」

その行動について更に問おうと一瞬だけ思ったはやてであったが、ゲンヤの心境を察し踏みとどまった。

“この話はもう終わり”――つまり、もうゲンヤは何も知らない、または何も言う気は無いということなのだろう。

そう考えたはやては、ゲンヤに会いに来た表の理由を言った。

内容はレリックと思われるロストロギア密輸ルートの探索依頼。つまりは人手が足りないので誰か貸して下さいということであった。

「ふむ、ふむ…まあいいだろう。辻褄は通っているからな…で、誰を連れて行くかだが、捜査主任はカルタスでその副官にギンガを付けるか。後誰か…」

「いえ、2人だけで十分ですよ?」

「相手は管理局そのものだ。何人いたとしても困るものじゃねえ…そうだ、今確かアイツが来てたな」

「？　誰です？」

「ん？そういやお前は面識が無かったな…　今レジアス中将のお気に入りと言うか弟子と言うか、まあそんな奴が今来てるんだ。本人にも中将にも許可は取ってある。好きなところに飛ばしていいっつー事だから、お前らを手伝わせるか」

「いやいや！　そんな、レジアス中将のお気に入りなんか私の部隊に入れてしまったら、また中将から…」

レジアス・ゲイズ中将のみならず、地上本部には魔法を敵視するような動きが多い。

その筆頭とも呼べるレジアスのお気に入りが機動六課に入ったりでもしたら…レジアスの機嫌を損ねるのはほとんど間違いない、そう思ったからこそのはやての言葉であった。

しかしゲンヤの口から出たのは驚くべき言葉であった。

「ああ、心配するな。そいつが言うことなら、大抵レジアス中将は聞くからな」

「何者なんですか!?　あのレジアス中将に言うことを聞かせるって!」

レジアス・ゲイズという人物は、地上でも管理局でも頭の固い人物であることで有名だ。自分の決めたことは一度たりとも曲げたことが無いというほどの強情さで、だからこそあの地位にいると言っても過言ではない。

一部で親バカ且つノリのいい男という噂がある…が当然の如く相手にされていないのは言うまでもない。

「まあ、それ程お気に入りだってこった…噂では中将の娘のオーリスを嫁に出そうとしているらしい」

「いやいやいや、それじゃその人次期中将候補見たいなノリとちゃいますか!?　もっと無理ですって!　絶対に面倒なことになりますって!」

「じゃ、手伝う手伝わないはともかくまずは会って見ろ。話はそれからだ」

そう言った時、丁度カルタス陸尉からの通信が入る。タイミングが良い、という訳でゲンヤから捜査協力の話をした。

「おぅ、丁度いいな。八神二佐から外部協力調査の依頼だ。ギンガとを連れて会議室で打ち合わせをしてくれ…あ、それと“シーナ”も同行させるから、此処へ来てくれるように言ってくれや」

『し、シーナもですか？　了解しました…失礼ですが、それ程の危険な任務なのでしょうか？』

「いや、心配するな。ただのロストロギアの密輸ルート調査だ…大事には大事を取る、っつうこった。　じゃ、頼むぜ」

『はっ、了解しました。失礼します』

「おう、頼むぜ。　…どうした八神、何か恐ろしいものを見たような顔をして」

回線を閉じたゲンヤが、はやての顔を見て怪訝な顔をしながら尋ねる。

「いえ…カルタス陸尉に心配させる程その人って戦力になるんですか？」

「まあ、な…質量兵器を持たせればＡＡランク級魔道士三十人に囲まれても無傷で生き残れるような奴だ。正直もしアイツが管理局員ではなく犯罪者になっていたら、俺は捕まえられる気がせん」

「それ、道を間違えたんとちゃいます？　良い意味で…」

確かにそんな人間が犯罪者にでもなれば、悪い意味での大物になるに違いなかった。というか、自分の尊敬する上司にまでそこまで言

わせるシーナとはどのような人間なのか…はやてはちょっと興味が出てきた。

丁度はやてがそう思ったときだった。

呼び鈴のブザーが鳴り、一人の男がゲンヤの部屋に入って来る。

薄い赤色の髪をした男だった。美青年――というよりは正直美少女と言った方が良いだろう。何故男だと分かったかと問われれば、そこに胸が無かったからとしかはやては答えられない。

いや、かなりの貧乳という可能性は捨てきれないが。

「失礼します。シーナ・ハラオウンです」

「おう、来たな。　こいつが話してた八神二佐だ」

「あ、八神はやてです。宜しくお願いしますな」

「あ、此方こそ。シーナ・ハラオウンです」

その自己紹介を受けたとき、はやての頭の中に疑問が浮んだ。

“ハラオウン”という単語は、自分の親友であるフェイトその義妹のフラン、義兄のクロノ、そして彼女達の母リンディの苗字である。ということは目の前の男はクロノやリンディの家系になるが…フェイトからシーナという義弟（もしくは義兄）がいるという話は聞いたことがない。

その疑問を見て取ったのか、ゲンヤが笑いながら言った。

「ああ、コイツは何か訳ありらしくてな…お前の親友と同じくハラ

オウン家の養子らしい」

「あ、そうなんですか…何か申し訳ありません」

「いえいえ、リンディ義母さんやクロノ兄さんには感謝してますよ。身寄りのない僕を引き取っていただいて…実は僕、フェイト姉さんやフラン姉さんに会ったことがないんですよ」

「えぇ!?」

それもそれでおかしい話だ。しかもフランやフェイトから話を聞かないと言う事は、よくよく考えてみれば彼女達は自分たちの義弟の存在すら知らないと言うことである。

ちょっとだけはやては、ハラオウン家の不思議さを垣間見た気がした。…いや、八神家も高町家も色々と不思議な点が多いのだが。

「なので、姉さん達が出向してるという六課を手伝えると聞いて…もしかしたら会えるかもと思ったんです。是非とも手伝わせて下さ

い、八神二佐」

「うん、宜しく頼みます…ところで、シーナ…君？の階級って何なん？」

「えっと…まず君付けするところで何故疑問系なのかを少し聞きたいんですが…その質問に答えると、僕は一応一等空尉という扱いになってるらしいです」

その歯切れの悪い回答（前半の疑問は華麗に無視した）に首をかしげると、ゲンヤが再び笑いながら、

「シーナはな、八神…その功績から、周りの人間から次期中将として持ち上げられてんだ。レジアス中将を筆頭に少将に持ち上げようとする動きすらあるんだぜ？」

と言った。その言葉を聞いたシーナが頭痛をこらえるかのように頭を押さえつつ「レジアスさん…」と呟いたのを見て、なんだかはやては同情してしまった。というか一等空尉から少将になるなど前代未聞の大出世である。それを推すレジアスのイメージが、はやての中で徐々に変わりつつあった。

「こ、コホン…という訳で改めてお願いしますが…八神二佐、どうかその任務手伝わせて下さい」

「うん、此方からも改めて…そうや、最後に1つだけ確認良いか？」

「？　なんでしょう」

はやてはじっと真剣な目でシーナを見て、そして数十秒間くらいその顔をじっくりと眺めた後、溜めに溜めてこう言った。

「――――女やろ？」

「男ですっ！！！！！！」

その疑問に対し、シーナの全身全霊を掛けた叫びが陸士宿舎全体を揺るがしたのは――――言うまでも無い。

そして更に追い討ちを掛けるかの如くゲンヤの爆笑も混じったことを此処に追記する。

”？4　シーナ”（後書き）

天破「最後に何故かギャグが入る不思議」

シーナ「ああ…遂に八神二佐と会ってしまった」

天破「え？いやなの？」

シーナ「だて、色んな二次創作であの人よく人を着せ替えてたりするじゃん…僕も着せ替えられるのかなぁ…子供の頃のリンディ義母さんみたいに…」

天破「えっと…なんというか…ドンマイ」

次回、ガジェット内部に仕組まれていた宝石の謎に迫る！！
果たしてガジェット製作者の正体とは！？　乞うご期待！！！

？「…ふむ、既に答えは出ているようなものだと思うのだがね」

天破「まだ貴方は出てこなくておｋ」

次回をお楽しみにお願いしま～すｍ＿＿ｍ

追記：感想を誰にでも書けるようにして見ました＾＾と言うか制限がかかっていることにさっき気づきましたｗ申し訳ないです＾＾；

“正体”（前書き）

今回のタイトルには色々な意味が含まれています。
この作品中のレジアスの実体や、ガジェットを操る黒幕などなど。
…微妙？ゴメンなさい。天破が一番分かってます↑

それでも良ければ、どうぞ天破が誇る超駄文を御覧下さいませ。

では、どうぞ！

７／２１　１３：００頃、文が一文丸々抜けていることに気づき修正しました。
申し訳ないっすｍ――ｍ

“正体”

――はやてがシーナと初めて出会った頃…

首都中央地上本部ｓｉｄｅ

「…以上がレリックのデータです」

此方では、シャーリーとフェイトがレリックについての会話をしていた。

とはいえ、現在レリックについて分かっていることは少ない。正確には何かのエネルギー結晶、ということ位しか判明していないのだが。

「う～ん…封印はしてあるんだよね？」

「はい、それはもう厳重に…けど、本当にレリックの存在意義って何なんでしょうね？　エネルギー結晶体にしては良く判らない機構がたくさんあるし、動力機関にしてもなんか変だし…それに、封印を自動解除しようとするし」

「そうだね…って、ちょっと待って。封印を自動解除する？」

何気なくシャーリーが洩らした一言に、フェイトが驚きで目を開きながらその言葉を聞き返す。

その言葉を受けてシャーリーが「あちゃ～…」と言いながら申し訳無さそうに、

「す、すいません…一応まだ誰かに話すことを許可されてなくて…聞かなかったことにしていただけませんか？」

と言うので更にフェイトは驚いた。なぜならレリックの処理などを

担当する管轄は他でもない機動六課なのである。なのに封印の自動解除などということは知らされた覚えがない。

「本局の命令で…こんなシステムがあることが知れ渡ればパニックになる可能性があるから今は伏せておけ、と」

そしてその言葉に納得すると同時に複雑な気分になった。確かにそれが局員から管理世界に住む人間に知れ渡れば色々とパニックになるだろう。しかし現場に直接行ってレリックを封印・確保する自分達には知らされておらず、サポート役のシャーリーが知っていたというのは少し複雑な気分である。

それを察したのか、シャーリーが「私もたまたま知っただけなんですけどね」と苦笑しつつも言った。

「まあ、レリックについてはこの位です…次はガジェットのデータですが…」

「あ、うん。あんまり他の型と大差ないよね…あの球体爆発型ガジェット以外は」

気を取り直してレリックからガジェットの話題へ。その流れは自然にフェイトらも出会ったあの爆発ガジェットの話になる。

「結局、部品が1つ残らず消滅しちゃったんだよね…」

「外装すら燃え尽きちゃいましたからね。結局あれはどんな素材で出来ていたのでしょうか…」

なのはやフェイト、フォワード陣が遭遇したガジェットは、レリックが奪われたことが知れ渡るや球体ガジェットと共に自爆した為、回収が不可能な域にあった。

どうやら、司令塔的存在である赤い球体ガジェットが存在しなくても自力で自爆出来るらしい。いや、あるいは何処かから遠隔操作で爆破させただけかもしれないが。

しかしそのどちらにしても、殺傷能力はあったとはいえそんなに大きくなかった爆発で外装すら破片も残らずに消えると言うのはおかしな話である。現場検証に駆けつけた局員も、爆発するところを見たフェイトらも頭を捻っていたが結局解明されずじまいであった。

「う〜ん。まあ、あのガジェットの件は追々調べていくとして…他には何かある？」

「いえ、特には…」

「そう…ん？　ごめんシャーリー、？型の写真をアップにしてくれない？気になるものが映ってるの」

「あ、はいっ」

カタカタ、とコンピューターを操作してフェイトに言われたとおり？型の写真をアップにする。フェイトはそのガジェットの中心部分に存在する――宝石のようなものに注目していた。

「…なんでしょうこれ。宝石？　レリックと同じエネルギー結晶ですかね…」

「…ジュエルシード」

「え？」

「随分昔になのはと私が集めたロストロギア…今は局に封印されて厳重に保管されてる…」

「へぇ…って、如何してそんなものがガジェットに！？」

「シャーリー、このジェイルシード、何か書いてある…ここ拡大してくれる？」

「は、はいっ」

フェイトの指示で『ジュエルシード』の部分を拡大するシャーリー。
確かに良く見ると、名前のようなものが書いてある。

「これは名前ですね…えと、ジェイ…」

「ジェイル・スカイエッティ」

「？　フェイトさん、知ってるんですか？」

「ドクター・ジェイル・スカリエッティ超広域指名手配…第一級捜索指定の次元犯罪者。ちょっと訳ありで、この男は何年か前から追ってるんだ」

「どうしてそんな犯罪者がこんな分かりやすく自分の手がかりを？」

「あくまで推測だけど…本人なら挑発、他人ならミスリード…どちらにしろ、この事件になのはと私が関わってることを知ってるんだと思う」

そこまで言って、ふと頭をよぎる例の骸とそれを使役する謎の男。

まさか、あの男の依頼者というのは――

「…それはない、か」

一瞬、男の言う依頼者がジェイル・スカリエッティかと思ったがその直ぐ後に男が言った言葉が頭をよぎりそれは無いかと思い返す。

もし依頼者というのがジェイル・スカリエッティだとして、あの科学者に何の利点がある？

それに、あの男1人いればガジェットを出す必要性すらないと思う。

とすれば、あの男とスカリエッティは別勢力と考えるのが妥当なところだろう。

更に言えば、“あの男は、管理局と連絡に取れる立場にある”という説――まだ彼女はなのはにもはやてにも話していないし確証すらない。

というかそれ以前に、シグナムを殺そうとした上にリニアレールまで跡形も無く破壊して新人魔道士達を殺そうとしたあの男が管理局に通じているなど有り得ない、と心の何処かで思っているからか詳しく調べてすらいなかった。

しかし彼女を責める訳にも行かないだろう。フェイトは過去のジュエルシード事件が終わってからずっと管理局で勤めてきた。彼女の管理局への信頼は絶大なものだ。そしてそれは、ほぼ同時期に管理局へ協力を始めたなのはも、ある事件を境に親友となり、一緒に働くようになったはやてにも言えることである。

彼女も、どんなに強くてもどんなに早くても、やはり1人の人間である。“今”というこの恵まれた環境が、自分の不用意な一言、又は行動で崩れ去ってしまうかもしれない――そう思うと、とても彼女は真実を調べられなかったのだ。

「…フェイトさん？」

「…っ、」

「フェイトさん！」

「！？　あ、ゴメンシャーリー…少し呆然としてた…」

「大丈夫ですか？」

心配そうに顔を覗き込んでくるシャーリーに、笑顔を作りながら軽く頷く。

「大丈夫大丈夫。とにかく、このデータを纏めて帰ろう。隊長陣を集めて緊急会議を開きたいんだ」

「あ、はい。分かりました」

目の前でキーボードを撃ち、データを纏めるシャーリーを見ながら彼女は自らに問う。

自分の居場所と真実。自分はそのどちらを取るのかを――。

地上本部　はやてｓｉｄｅ

「…ん、了解や。直ぐに対策会議を始めよか。アッと驚く助っ人も来ることやしな」

『助っ人？　誰なの？』

「ふふふ、まあ会ってからのお楽しみってやつや。じゃ、私は今から戻るからもし先に戻ったら、会議の準備お願いできるか？」

『うん、分かった』

色々と紆余曲折あったものの、はやて達は打ち合わせも終わり、食堂でお昼を食べていた。

「何か分かったのですか？」

「うん、ちょっと事件に関してな…」

通信の内容は、ガジェットの中に仕組まれていたジュエルシードの件。そのジュエルシードに“ジェイル・スカリエッティ”と書かれていた事だ。

それを聞いたはやては正直驚いた。そんな大物がいるとは予想だにしていなかったのだ。

とはいえ、判明したからには会議して対策を練って、新人魔道士達にも注意を呼びかけて…昼食はしっかりと食べながら、彼女の頭は部隊長のそれへと切り替わる。

そして頼んだ分の昼食を食べ終わり、「申し訳ありませんがこれで…」と、ゲンヤに頭を下げつつ、せめて昼食の代金でも払っておこうと領収書を取ったところで、その領収書をゲンヤが奪い取った。

「え、そんな…」

「大丈夫だ。今回の昼飯代は――」

「あ、僕が払います」

「――っつーこった」

「はあ、そうですか…っていやいやいや、おかしくありません!?

レジアス中将のお気に入りなんですよね！？　次期中将なんですよね！？」

「大丈夫です。レジアスさんにツケておくので、はやてさんには一切お金の請求は行きません」

「しかも中将に払わせようとしとる！？　ええんか！？　それでええんかシーナ君ッ！！！」

思わず叫んでしまった彼女を誰も咎めはしなかった。寧ろ普通の管理局員ならこれが正常な反応なのかもしれない。

「あはは…一応本人公認なので、スルーしちゃってください」

「あ、勝手に払わせようとしとるんや無くて公認なんやな…尚更レジアス中将のキャラが分からなくなってきたわ…」

はやてのレジアス像は既に全壊状態である。もう何を聞いても自分

の目で確かめるまでは信じない、と彼女は心に決めたとか何とか。

「と、とにかくまたレジアス中将のこととかは詳しく聞かせてくれな？　…じゃ、申し訳ありませんがお先に失礼します」

「おう」

「「はいっ」」

そんな会話の後、はやては陸士宿舎を離れ六課へと戻っていった。

フェイト&ａｍｐ；シャーリーｓｉｄｅ

本当に普通の人間か疑うような速度でデータを纏めたシャーリーと

フェイトは、手際よく車に乗り込み機動六課へ戻っていた。

「フェイトさん」

「ん？」

急ぎながらも律儀に車の速度を守りながら走っている最中、ふとシャーリーがフェイトへと話しかけた。

「ドクター・スカリエッティでしたっけ？その次元犯罪者」

「そうだよ」

「その人がレリックを集める理由って、例えばどんな…」

「あの男は、ドクターの名の通り生命捜査とか生体改造とかに関して異常な情熱と技術を持ってる。そんな男が、ガジェットみたいな兵器まで用意して捜し求めるからには…きっと、また人の人生を狂わせるようなことをするつもりなんだ」

「…、」

普段、特にエリオやキャロの前では絶対しないであろう、怒りを露にしているフェイトの顔を見て、シャーリーはそれ以上何もいえなくなってしまったのだった。

ジェイル・スカリエッティｓｉｄｅ

「スカリエッティ、ゼストとルーが活動を再会したぞい」

スカリエッティの研究室へ入り、ゴスロリ服を着た女性――ディールがその裾を翻しながらスカリエッティへと報告する。

「ふむ…クライアントからの指示は何かあるかい？」

「ルー達への無断の協力は極力控えよとのことじゃ。ふん…全く、何処までも上から目線じゃのう」

「そんなことは今更だろう？　それよりも、自立行動を開始したガジェットは私の完全制御下では無いのでね。プログラム上、勝手にレリックの元へ集まるのは勘弁して欲しいものだ」

「分かったのじゃ。　そのように伝えて置く様にウーノ姉上に頼んでおく…で、次の任務の際には妾も出してくれるんじゃろう？」

「まあ、約束したからね…ただ、やり過ぎないでくれたまえよ？

君が暴れると、辺り一面が焼け野原になってもおかしくは無いのだからね」

「それは承知の上じゃ…万が一、他の兵器達が敵として現れればその限りではないが、の」

「…考えたくないな。君のような存在も信じられないというのに、その上がまだ４人いるとは」

「…会いたい反面、怖いのう…兄弟喧嘩はいやじゃ…」

なまじ、その喧嘩がミッドを壊滅させる可能性もあるからのう――

―続けて小さな声で呟いたこの言葉を聞いたスカリエッティの頬が、思いっきり引きつったことに、ディールは全く気づかなかった。

ジェイル・スカリエッティｓｉｄｅ　ｏｕｔ

機動六課　訓練所ｓｉｄｅ

「じゃ、夜の訓練おしまい！」

「「「「ありがとうございました！」」」」

つい最近までゾンビ状態になって宿舎に帰っていたとは思えないほどの元気の良さで返事をし、疲労してはいるもののしっかりとした足取りでシャワーを浴びに行くらしい新人魔道士達。

恐らく、良くも悪くも“死”という恐怖（もの）を間近で見たお陰なのかも知れない。

人間、危機が迫っているとなると知らず知らずのうちに必死になるものである。それはなのは達でも、ティアナ達でも変わらない。本人達は気づいていないだろうが、リニアレールの事件の前と後では、訓練における身の入り方が違う。

当然、事件の前もかなり頑張っていたのだが、やはり命の危機があるとなると体の方が勝手に『更に能力を高めて危険を回避』しようとするので、賛否あるだろうがやはり恐怖と言うものは人を強くす

るのかもしれない。

そして、新人魔道士が去り、なのはが1人でティアナ達のデータを編集しているところに春斗が通りかかった。こんな遅い時間にまだ仕事をしているなのはに疑問を感じたのか、春斗がなのはへ問いかける。

「ん？　なのは姉、まだやってんのか？」

「え？　ああ、春斗…大丈夫、もう終わるから」

「そうか。手伝わなくて大丈夫か？」

「いいよ、大丈夫」

「…そうか」

元気があるようなのはの返事に更に返事を返しつつ、その後ろで

心配そうになのはを見つめるヴィータの方へ近寄り、小声で尋ねる。

「（ボソボソ…）…で、実際あれはどれ位いつもやってんだ？」

念話でいいんじゃねえか？と思ったヴィータだが、春斗にはリンカーコアが無い（ことになっている）ため念話が出来ないことを思い出し、自分も出来る限り小声でそれに答えた。

「（ボソ…）…いつも、訓練が終わってから3時間以上は」

「（ボソボソ）労働基準法ガン無視だなオイ…分かった、これはやはりなんとかしなけりゃならんようだ」

「宛があんのか？」

「まあな…宛、というものでもない。が、結構身近にこういうことには理解のある人がいる」

「？」

最後まで小声で話していたため、なのはに気づかれることは無かったが、そのなのはを見る春斗の目は何だか可哀想な人を見る目だった。

「知ってるか、ヴィータ。局員にはな、有給ってのが存在するんだぜ？」

「…いや、管理局員としてそれは知ってなきゃ拙いだろ…」

まるで分かってないかのような春斗の物言いに、少し呆れながら答えるヴィータ。

しかそその後、春斗から「知ってたか？　機動六課隊長陣の有給消化率は０なんだぜ？」と聞かされ、「ああ、さっきの質問はそういう意味か」と納得してしまったヴィータがいた。つまり、有給が溜まりすぎてるらしい。どうやら１年くらいはバカンスに行っても大

丈夫な位溜まっているとか。よくもまあそんなに仕事ができるものだ、と春斗は呆れと驚きしか出なかった。

「その勢い…クロノから『春斗、なのは達をどうにかして休ませてくれ』と泣きながら懇願される始末…なので少しリンディさんに事情を話して、任務という名の有給をとってもらうことにした。最近は特になのは姉やフェイトさんも頑張ってるから、さすがに休んだ方がいいだろうしな」

「ああ、そうだな。…てかクロノ…アイツも大変だな…」

同時に溜息をつくヴィータと春斗。なお、2人とも気づいていないがヴィータも隊長なのではやてと同じく有給が溜まりに溜まっている。なので彼女は本来なら溜息を疲れる側なのだが、それは一先ず置いておこう。

「で?その任務って一体…」

「それは明日辺りに来ると思うからな。楽しみに待っておけ」

「あ、ああ…って、撫でるなぁ！」

「ああ、すまん。身長的な意味で丁度良かったから」

「…アイゼンでぶっ潰してやろうか？」

そんな漫才を繰り広げている間になのはの仕事も終わり、それぞれの寝室へと戻っていった。

ジェイル・スカリエッティアジトｓｉｄｅ

「…」

ふと、ディールの目が覚めた。

「…嫌な夢を見たのう」

それは、全兵器に共通する“悪夢”。

彼女達が生まれた場所で起きた、地獄と惨劇。

どれだけ幸福になっても、それだけ恵まれても…消えることの無い、
彼女達(へいき)にとっての呪縛(くさり)。

それは、自分が人間では無いことを思い出させる。自分が幸福になってはいけないことを思い出させる。

見た者を全て、不幸と絶望の底へ叩き落す——ただそこに存在する“過去(ゆめ)”。

しかしディールは、この夢を嫌だとは思いつつも忘れようとは思わない。見たくないとも思わない。

この夢は、離れ離れになった兵器（きょうだい）のディールなりの最後の思い出なのである。

どんなに辛かろうと醜かろうと、それは大事な大事な思い出である。

それを忘れるなどという選択は、彼女には無いのだった。

「…妾らしくも無い。もう一度寝るかの」

しんみりと思い出に浸る自分が恥ずかしくなったか、再び布団を被って目を閉じ、眠りに落ちようとするディール。

けど、その表情は何処か幸せそうで――

願わくば、他の兵器達も自分と同じ気持ちでありますように。

――そんなことを心の何処か、頭の隅で考えながら、彼女は再び深い眠りに落ちた。

“正体”（後書き）

天破「ディールの最後の夢については、物語の後半あたりに話す事になるかと思います」

スカリエッティ「ふむ、確かにディールらしくないね。私達にも研究所での出来事は全く話してくれないしね…さてどうしたものか」

天破「そしてもうぶっちゃけて出てくるスカリエッティさん。　一応近くにフェイトさんいるんだからさ…自重しようよ」

スカリエッティ「自重？　無限の欲望に君は自重を求めるのかい？」

天破「サーセン、良く考えれば確かにそうだった。貴方に自重が出来るわけが無い」

次回は地球へ。

この作品中で数少ないギャグがかなり入る回にしたいです。なぜなら、地球から戻った後のホテル・アグスタですが――

これだけ予告します。『原作とは１８０度違います』。しかも無還者がリニアレールの際以上に無双します。しかも、遂にフランらが他の兵器達と邂逅を…するかもしれません。

あくまで予定です。予定は未定。素晴らしい言葉です（滅

天破「そして、此処で発表したいことがあります」

スカリエッティ「む？何かね」

天破「なんとっ…初感想がきましたぁぁぁぁぁ！！」

スカリエッティ「おお！　それは素晴らしいではないか」

天破「ホント嬉しいっす。このまま終わりまで一切感想来ないのかな？戸まで考えてました」

スカリエッティ「それは無いと思うが…まあ、良かったではないか。だから、そのディールの下着写真を出してもらおうか？」

ダッ（天破、逃走）

スカリエッティ「ウーノ、ディール。作者の逃げた位置を捕捉してくれたまえ。絶対に逃がしてはならない」

ウーノ＆amp;ディール「了解」

作者の命運は地獄（こっち）だ！！？

天破「あれ！？　もう私の未来→で決定してない！？　って、何か砲撃キター！？」

“続かない”

では、深夜更新＆ａｍｐ；茶番申し訳ありませんでした＞＜；
次回も出来ればお楽しみにしていただけるよう、よろしくお願いします＾＾

それでは、またよろしくお願いします＾＾

“地球”（前書き）

地球編です。完全に暴走した結果です。そしてシリアスなどほとんど見られません。

というか、かなり更新遅れてすいませんｍ――ｍ夏休み色々と予定入ってまして。。

それでも見てくださっている皆様に感謝の言葉を。本当にありがとうございます。

そして書いてからふと気づいた。

ヘリでの会話で、はやてが喋ってない…

…では、どうぞ！

“地球”

さて、春斗が思わせぶりな台詞を言ってヴィータへの死亡フラグを建てまくった次の日のこと。

部隊長である八神はやての仕事用ＰＣに、一通の仕事依頼のメールが届いた。

「ん？　メール…なんやろ…また別世界の任務やろか」

ＰＣを操作してメールを開く。

そこに書いてある内容を見ていって…と同時に頭も回転し…そして最後に任務地を見て、はやての顔が輝いた。

「…くっくっく…私の時代が来たようやな…！」

嬉しすぎて少し混乱しているのか、その口から漏れたのは現れて数秒で勇者に倒されそうな気がする中ボス的な台詞であった。

「はやてちゃん？　どうしたんですか～？」

そこに近寄ってくる純真無垢なリインフォース？。現在の状況をとても誰かに話したかったはやては、輝く笑顔で事の次第を彼女に話した。

機動六課　仕事室ｓｉｄｅ

「…おっしゃ、朝の仕事終わり、っと」

「えっ、春斗もう終わったの！？」

此方では今日も変わらない時間が流れていた。春斗やフランも、本当に平和だなあと脱力してしまうような時間である。

「いやだって、いつもよりちょっと少なかったからな」

「そんなこと無いよ！？　それでも結構あると…「ふぅ、終わりましたわ…」　って、フランも！？」

額の汗を拭いながら、フェイトの義妹であるフランの口からも“仕事が終わった”という言葉が。　そう、彼女達は自分の弟と妹に負けたのだった…いや、隊長であるなのは達と一般事務員である春斗

とフランでは仕事量などに大きな差があることはあるのだが。

「き、今日は早いんだね…？　いつもは（主に春斗が）脱走に脱走を繰り返したりしてるのに」

「ん？　ああ、帰って来た時に仕事を多くしたくは無いからな」

「そうですわねぇ」

なのはとフェイトには分からないが、どうやら彼らの間では通じるらしい会話をして苦笑しあう春斗とフラン。そして、少々危険な方向（ブラコン・シスコン）へ向かっている2人からしてみればそれは地味に面白くない。

「ふーん…フラン？」

「何ですか、フェイトお姉様？」

「やっぱり春斗のことが好きなんじゃないの？」

「ふぇ…？　……はぅう！？そそ、そんな訳無いですわ！！というか如何してそんな結論に！？」

「だって、何も話さなくても通じ合ってる感じだし…」

それにしてもフランは慌てすぎである。　これではそうでなくても誰だって邪推する。

「確かにフランと春斗って仲が良いよね～。　ね、春斗はどうなの？」

「ん？　俺？　ん～…双子の兄妹みたいな感じだな」

正直リアクションに困る例えが返って来た。しかも事情を知っている者からすればそれは例えでもなんでもなく、（過程はどうあれ）ほぼ同じ時、同じ場所で生まれたのだから笑えない。

「双子かぁ…でもさ、それ少し違わない？」

「？　何がだ？」

「兄妹じゃなくて姉弟…じゃないかな？」

「待つんだフェイトさん。それはどういうことなんだ？」

その問いに、フェイトは顔を背けた。見ればなのはまでもが春斗に視線を合わせまいとしている。

「…俺ってそんなに幼く見えるか…？」

その声が少々泣くのを我慢しているかのように震えているのは、決して勘違いでは無いだろう。

「…兄妹……か…」

そしてフランと言えば、春斗の言った単語を反芻しつつ、自分でもどう表せばいいのか分からない不満と焦りのようなものを感じながら顔を赤くしてモジモジしていた。こういうことを天然でやるから、彼女は色々な噂が立つのである。

そこから更になのはとフェイトによる弁明や尋問が始まり、収集が

付かなくなってきたとき。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、フラン、春斗おるかー！？　大ニュースやで大ニュース！！」

「はやて…お前が神か…！！」

「ふふふ、そうやろそうやろ――って、私まだ何にも言ってへんのやけど…何や、その疲れた顔は？」

「いや、なんでもない…で、大ニュースって言うのは？」

そんなカオスに空気を読まず飛び込んできたはやてにこれまで無い以上の感謝をした春斗であった。

「そうそう、聞いて驚き…機動六課に、出張任務依頼が来た」

それを聞いて姿勢を正すなのはとフェイト。いつもはのほほんとしている（春斗視点）彼女達でも、やはり仕事となれば至極真面目になるのである。

「そして…なんと！任務先は…「地球だろ？」って春斗ォ――――！！なんて事をしてくれたんや！　突っ込み役として失格やで今のは！」

「いや、俺はお前の突っ込み役になった覚えは一瞬たりともないんだが」

しかし彼は気づいていない。既に現在進行形ではやてに突っ込みを入れていることを。

「いや、チョイ待ち…なんで春斗が地球に行くってしっとるんや？」

「知るも何も、その任務を出してくれるよう頼んだのは俺とクロノだ」

「「「えぇ！？」」」

まさかの黒幕に驚きを隠せないなのは達。

「いや、何を驚いてんだ…じゃあ聞くがな、なのは姉よ。あんたら最近休んだか？」

「？　休んでるよ？　仕事合間の１０分くらい」

「それは一般的に休むとは言わない。それどころか微妙な休みがある分逆に辛いと思うんだが」

６時間続けてする仕事と、三時間置きに１０分の休憩がある仕事。人にもよるだろうが、全く同じ内容の仕事なら3時間もやっていればトランス状態（何も考えずに仕事をするような感じ）に突入する。ある意味、そこに水をさすような１０分の休憩はキツイと思う。集中力が切れてしまう場合があるのだ。

それに耐えている自分達の姉はやはりおかしいのでは無いか、と思ってしまう春斗であった。

「まあ、そんなわけだ。当然俺とフランも行く」

「だからこうやって早く終わらせたのですわ」

「な、なるほど…」

今此処に、１つの謎が解けたのだった。

…しかし、それはつまり。

「あ、なのは姉、フェイトさん、はやて。当然だが、隊長陣である3人は任務から帰ってきたらピラミッドを軽く超越する位の仕事が待ってるだろうし…今ある仕事だけでも全部やらねぇと、帰ってきたとき大変なことになると思うぞ」

その言葉が終わるか終わらないか、春斗ですら見極められない速さではやては部隊長室へ戻り、なのはとフェイトは先程の約3倍の速度で仕事を片付け始めた。

やはり彼女達も仕事はばっち来い的な感じだが、大量にありすぎるのは勘弁して欲しいらしい。

（…良かった…あそこで『それくらい帰ったらやればいいよ』とか言われてたら、本当にこの人達を人間か疑うところだったぜ…）

彼女達の与り知らぬ所で、実は春斗も安堵していた。

まあ、そこまで深く考える必要も無い事なのだが。

「そんじゃ、俺らは任務の準備してくるからな」

「うん、私達のもできれば先にお願い！」

その返事を聞いて、苦笑しつつも春斗とフランはともに自分の部屋へ準備しに向かった。

「…ん？　なのは姉の準備って…着替えだよな？　…俺がなのは姉の下着とか服を準備しろと。何処の罰ゲームだ」

エース（なのは）オブエースをファンに持つ者からしてみれば、それは罰ゲームどころか羨望の対象に入るのだが…それを春斗が知る機会は永遠に無いだろう。

それから2時間程度経過し、なのはたちの仕事も終了。更に準備も終わって（結局春斗はなのはの任務の準備をしなかった）地球へと出発するときがやって来た。

「地球かぁ…何お土産に買おうかな～」

「スバル、アンタねぇ…遊びに行くんじゃないわよ？」

「わ、分ってるよティア。　でもさ、地球ってあたしのお父さんの故郷だから一度行ってみたくって…」

「そういや、ゲンヤ三佐も地球出身だったな」

そこに現れた春斗。彼は他の者より早く仕事と準備を終わらせたので暇らしい。

「あっ、春斗さん」

「はっはっは、きっと驚くだろうな。お前ら、なのは姉と俺の家族想像できるか？」

「えっ？えぇと…」

春斗の問いに、ちょっと考えてみるティアナとスバル。何処かから「ポク…ポク…チーン！」と聞こえてきそうな勢いでスバルが答えた。

「えぇっと…なのはさんって魔力の塊から生まれたんじゃないんですか？」

「馬鹿ね、スバル。きっと父親も母親も素手で管理局の魔道士を手玉に取れる手練に違いないわ」

「スバル、前提条件から間違ってるんだが。そしてティアナ、お前は俺となのは姉の親を何だと思っているんだ」

だが、普段の彼女を見ているとそうと取れなくも無いから不思議だ…いや、スバルのは論外の領域だが。

「大丈夫だ。俺らの母と父は人間やってるからな。人間じゃないのはなのは姉だけだって肋骨が砕かれるような痛みがぁー！！！」

「春斗？　貴方はティアナとスバルに何を教えてるのかな？かな？」

「それはティアナの台詞だろうが！？」

「待ってください。何で今のが私の台詞になるんですか」

それは“中の人”という概念が存在しないティアナやスバルには絶対に分からないだろう。春斗も勢いで言ってしまったらしく、何故ティアナの台詞になるのか自分でも分からないらしかった。

「ぐぅう…何故バカンスに行く前に致命傷クラスの傷を負わなくてはならないんだ…？」

「それを人は自業自得と呼びますわ」

「フラン…」

そこに、短い裾のワンピースを着たフラン登場。なんと言うか、遊ぶ気満々であった。任務に行くという気配が微塵も感じられない。

その後ろで一応隊服を着ているフェイトは苦笑している。どうやら黙認する気らしい。

そして、そんな彼女を――――脇腹の痛みにより倒れたまま見て――――春斗がボソッと言った。

「…しｒ」

次の瞬間、世界最大級の金色の刃が彼を襲った。

「まさか一日で2回も三途の川を見ることになるとは驚きで一杯だ」

「…／／／／」

「春斗さん、サイテーです」

ティアナの汚物を見るような視線すら慣れているらしく軽く受け流す。その横では、顔を真っ赤にしたフランが意味の無いことを呟きつつスカートの裾を強く掴んで俯いていた。

「春斗？　このことはお母さんに言うからね？」

「サーッセンでしたァァァァァァ！！！」

そして、なのはの冷たい笑顔から放たれた言葉と同時に素晴らしい姿勢で土下座した。はやて曰く、『あのスピード、姿勢、そしてその謝罪の速度。どれをとっても、あれは世界を狙える土下座やった』という。

そしてその様子を見て、やはりなのはの両親は人間では無いのではないかと失礼なことを考えたスバルとティアナであった。

なお、春斗が何を見て何を呟こうとしたのかは――ご想像にお任せする。

「さて、時間になったから行くで！…って、如何していく前から春斗はボロボロなんや？」

「大丈夫だ。何も問題はねぇ。それよりも次のお仕置き（こうげき）が来ないうちに早く行こうぜ、はやてよ」

「よし、私は何も聞いてない。だから何も問題はないんやな？　じゃ、出発しようやないか！」

因みに、残念ながら例の事件によってシグナムとそしてその看病としてシャマルは今回の任務の参加を辞退した。本当ならはやても残ろうとしたのだが、シャマルに「はやてちゃんが休んだら今回の任務の意味が無いんじゃないかしら？」と諭されたので、心配になりながらも六課の部隊長として任務に参加することにしたのである。

なので、見かけ上は元気でもはやての心は重かった。

「…ま、せっかくの任務（きゅうか）だしな。　楽しもうぜ、はやて」

その心情を察してか、後ろから（春斗よりは）身長の低いはやての頭へ手を乗せる。

「…そやな」

一応はやてと春斗は同い年のはずなのだが、その光景だけ見てるとはやてが年下に見えてくる。更に曲解すると彼氏が彼女を慰めている光景に見えなくも無い。

その光景をみたフランが、無言のまま春斗の脛を音も無く思いっきり蹴った。

「――――ッ！？」

無言でその痛みに悶える春斗。何が起きたか分からないはやてはその光景に目を白黒させて「ど、どうしたん？」と慌てたように言っていた。

「さ、行きますわよ！」

そして場を混沌にした張本人であるフラン本人は――自分でも分からないような不満を胸に押し込めて、何事もなかったかのように春斗に呼びかけた。

そしてその光景を見たなのはとフェイトがニヤニヤとしていたのは、彼女にとっては知らない方が身のためだろう。突っ込めば弄くられることは目に見えている。

そしてそれからも物理的な意味で被害が主に春斗に降りかかったりしたが、収拾が付かなくなるので此処では省略する。　行く前から迫り来る災害に少々疲労しながら、春斗達はヘリに乗るべくヘリポートへと移動し、ヘリへ乗り込んだ。

―ヘリ内部ｓｉｄｅ―

「そういえば、この課って地球出身多いよな」

早くも少し回復した春斗が誰に言うともなく話を振る。

「あ、そうですよね。春斗さん、高町隊長、八神隊長…あ、フェイト隊長とフランさんも一時期地球に住んでたと…」

「俺達は成り行きだけどな」

「成り行き、ってどういうことですか？」

「私達は捨て子ですのよ」

苦笑いしたまま“設定”を口にすると、ヘリ内の温度が少し下がった気がした。

「あ…ご、ゴメンなさい」

「別に謝らなくても…所詮、過ぎたことだ」

「不思議なものもあるものでしょう？　春斗は私が捨てられたのと同時期になのはさんの近くの山に捨てられたのを見つけられて保護されたのですわ」

「そしてフランは異次元に放り出されたんだが運よく地球に漂流してフェイトさんとその家族に保護された…確かフランは精神的なショックで3年位何も食べず、何も喋らずに眠ったようになってたって話だからな。　良く生きていたと思うぜ…」

“設定（うそ）”をペラペラと話す春斗とフラン。しかし、彼らの姉の顔がどんどん沈んでいく為信憑性は高い。というか裏事情を知らないな

のは達にとってこれが真実であり事実である。嘘などと思うはずもない。

「…、あの」

「何だ？　エリオ」

「…なんで捨てられて、怒ったりしないんですか？　家族のことを、憎んだりとか…」

おどおどしく言ったその質問に、なのはとフェイトが顔を見合わせる。

エリオの素性を知っている彼女達にはその気持ちが良く分かるが、何も知らない春斗達に言ったってエリオの納得のいく答えは得られないんじゃないだろうか――しかし、春斗の口から出た答えは彼女達の予想を大きく上回った。

「何言ってんだ。今も昔も憎んでるさ」

「「！？」」

「…えっ？」

当然驚いたのはエリオだけではなく、静かに聴いていたなのはとフェイトもだ。春斗は子供の頃は確かに混乱しているような感じがあったが、幼い頃から彼を見ているなのは達から見れば、春斗に“憎む”という感情は全くないように見えた。

その春斗がたった今、人のことを“憎んでいる”と明確に言った。しかもその声色に冗談とは思えない重い響きがある。なのは達は思わず、それについて突っ込むことすら忘れたように固まってしまった。

そんな、なのはとフェイトの動揺に気づかず春斗は続ける。

「ああ、そうだな…憎くて憎くてたまらねえよ。――――八つ裂きにしてやりたい位にな」

ヘリの内部に、冷房が効いているだけとは思えない寒気が春斗とフ

ラン以外の全員に走った――――

「（バキィ！）いだっ！？」

――――と思った瞬間、フランが春斗の頭をグーで殴った。

「何をするかフラン！　いいところだったんだぞ！」

「馬鹿ですか貴方は！　芝居に力を入れすぎですわよ…」

「芝居…？　　！　あ、そうだな。力を入れすぎちまった」

一瞬怪訝な顔になった春斗だが、何かに気づいたように笑顔で遠まわしに“今のは芝居”と言った。

「し、芝居？」

「ああ、芝居だ。　ごめんな、憎んでんのは嘘だが、感謝している気持ちはあるぜ」

「感謝？」

「ああ。親にではなく“兄”にだけどな」

しかしこの話題転換にはさすがに無理があると春斗自身も思う。現に、春斗の背後には疑問の視線を向けるなのはとフェイトの姿があるからだ。

憎んでいると明言した親の話題からいきなり他の対象を話題に上げる。エリオ達は気づいていないようだが、これでは話題の摩り替えと同じである。しかも巧妙にも同じ家族の話をしているのだから気づきにくい。

そして、これに何か言おうとしたフェイトだが、なのはに目で制され留まった。

（フェイトちゃん、いいよ。春斗が芝居だって言うんだから信じよう）

（でも、春斗が親のことを話してた時のあの寒気は…）

絶対ただの寒気じゃなかった。念話でそう続けようとしたフェイトだが、またしてもなのはがそれに被せるかのようにフェイトに言った。

（うん、そうかもしれない…けど、春斗は絶対に私を裏切らないでくれるはずだから）

（でも、それに確証は…）

（じゃあ、フェイトちゃんはフランが裏切ると思うの？）

（そ、そんなことある訳ないよ！）

自分で力強く言った言葉に、ハッと気づくフェイト。
なのははそれに薄々気づきつつも、決して攻めずに優しく諭した。

（ほら。…家族を信じるのに、確証なんて必要かな？）

（…ごめん）

（うん、いいよ）

だからこそフェイトも謝ったし、なのはもそれを許した。
フェイトの気持ちも良く分かったし、もし先程エリオと話していたのがフランであれば、なのはもきっと同じように疑っていたと思うから。

念話とアイコンタクトで会話を終えた2人は、何事もなかったかのように目線を春斗へと戻す。

――全ての念話内容を、フランに盗聴されているとも知らず。

（…本当に、私達には…もったいない、家族ですわね…）

機密漏洩（シークレット・リーケッジ）

他の兵器――？1である無還者すら持っていないフランだけの希少能力。発動さえすれば、『いつでも』『何処でも』『何処にいても』発動した対象の念話を聞き取ることが出来る。例えなのはが地球に

いて、フランがミッドチルダにいても発動できる優れものである。この能力を発動できる条件が、“一度でも対象にしたい人間の声を聞く”だけと緩く、彼女にかかれば念話で交わされる機密情報もただ漏れという、サポート系能力では最高級のスキル。そもそもフランは兵器の中でもサポート役に特化するよう造られたので、当然と言えば当然だが。

思わず熱くなる目頭を気づかれないように押さえながら、彼女はティアナ達に自分達の兄のことを話している春斗の方へ耳を傾けた。

「俺の兄貴はな、本当に人形みたいだった」

「人形、ですか？」

「そう、人形だ。さっきも言ったろ？　俺は捨て子だ…即ち、親から愛情を受けずに育ったんだ。兄貴も俺もな」

「…、」

愛情どころか、彼らの記憶にある『幼少期』とは“死”か“苦痛”か“眠る”かの三択しかない日の繰り返しだった為、記憶は思い出す必要もないほどその身に刻まれているのだが。

「兄貴は…まあ、１４年も前のことだ、全然覚えてないんだが…確か、いつも何処か遠い所を見てたな」

それを聞いて、フランも少し思い出した。確かに彼女達の兄は、いつも地下牢の様な部屋で隅に座って何処を見ているかもわからない空虚な瞳で上を向いていた。

今覚えば、あれは何処をどう壊せば上手く脱出できるか考えていたのかもしれないが所詮推測である。　そして、この脱出の件もいつか話すことになるので今は置いておく。

「俺はそんなでもないんだが…兄貴は確か、毎日のように殴られては蹴られ、妙な薬物を投与されては苦痛に喚いてたな」

そしてこれもほとんどが本当なのだが――――苦痛に喚いていたと言うのは嘘である。その頃から兵器（ウェポン）の心（マインド）による洗脳を受け始めていた無還者は、既に痛みをほとんど感じなくなっているようであったし感情もほとんど失くしてしまっていた。　よって、どんな惨いこと

をされても悲鳴の1つもあげないし抵抗すら見せなかったのだ。

「まあ、こんなところだ。俺が覚えてるのは…」

「えっと…なんていうか…ご、ごめんなさい」

「だから謝るなよ…謝られても困る」

「…あれ？　その、お兄さんはどうなったんですか？」

その言葉に、一瞬だけ険しい顔を作った春斗だが直ぐに戻し、困ったような顔をして言った。

「分からねぇ。　バラバラになっちまって、行方不明なんだ…だから、いつかは見つかるよう、日々繰り返し祈ってるわけだ」

祈っているではなく、日々管理局のメインコンピューターに侵入を繰り返しているという方が正しいのだが此処で言う必要は無い。というか言った瞬間に逮捕物である。

「そう、ですか…」

何かを思いつめるように俯き、拳を握り締めるエリオ。それを見て目を細める春斗。エリオの燃えるような赤髪を見ながら春斗は少し考える。

（プロジェクトF、ねぇ…）

兵器として造られたころから、管理局の闇は全て“記憶”としてインプットされている。其方の方が管理局にとって何かと都合がいいからである。　だからこそ彼は――――いや、彼らはフェイトとエリオがプロジェクトFの数少ない成功体だということも、スバルが戦闘機人だということも看破していた。

（見た感じ、人体及びその中身に破損箇所及び異常は見られねえ…成程、成功体と言われる訳だ。人間の体でありながら、自分は人間じゃないと考える――――俺はそれが羨ましいぜ、エリオ）

「？　春斗さん、どうかしましたか？」

「いいや、なんでもねぇ。　しかし、何か考え事があるんだったら遠慮なく話してくれよ？　俺はお前の味方だからな」

「！　…はいっ！」

そんな思考を顔の一部にも出さず。
春斗の笑顔の確認に、エリオも笑顔で頷いた。

管理局本局ｓｉｄｅ

その後は暫く雑談を続け、ヘリは何事もなく地球への転移ポートがある本局へと着陸した。

「…あれ？　私の一世一代の見せ場的な所がスルーされた気がするです」

ヘリ内で、キャロやエリオ位の身長にチェンジしたリインが呟くが、誰に聞こえることも無くその言葉は流された。決して作者が忘れていた訳ではない事を追記する。

「さて、なのは隊長、フェイト隊長。私達は先に寄る所があるから…」

「うん、先に現地入りしとくね」

「「「「お疲れ様です！！」」」」

「うん、また後でな～」

手をひらひらと振って、その場を後にする八神家。なんと言うか、やはりシグナムとシャマルがいないと少し少なく感じてしまうのが悲しい。

「さ、私達も行こうか」

「「「はいっ（おー）（分かりましたわ）」」」

纏りのない返事と共に、なのは達も転送ポートへと動いた。

地球ｓｉｄｅ

転移ポートで転移した先は、周囲を緑で囲まれた美しい庭であった。

「ん…あれは…なのは姉、此処はあの2人の別荘じゃねぇか？」

「あれ？　春斗知ってたっけ？」

「いや、この場所は知らん。　だがあんな高級車あの2人とフェイトさん以外に持っている奴なんて俺の記憶には存在しない」

春斗が視線を向けた先を皆が見ると、真っ黒な車が滑るようにこちらへ向かってきているのが見えた。　これに驚いたのはティアナだった。

「え、車？　この世界にもあるんだ」

「おいおいティアナ。車が無いとかどんだけ遅れてる文化なんだよ」

その言葉に苦笑しながら言う春斗。　しかし気持ちも分かる。文化レベルBというのは微妙なラインだから、遅れている世界はそれこそ未だにTVすら開発されていない場所がある。　アニメやドラマを良く見る春斗にとって、それは苦痛以外の何者でもないのだ。

そんな世界に飛ばなくて良かったぜ…とかなんとかどうでもいいことを考えていると、先程の車が春斗達の前に止まって女性が出てきた。

「なのは、フェイト！　あ、春斗もフランも来てたのね！」

「アリサちゃん！」「アリサ！」

「よ、バニングス」「こんにちはですわ、アリサさん」

「相変わらずね…というか春斗！貴方はいつになったらあたしのことを名前で呼ぶのよ！」

「恐らく永遠に名前を呼ぶことは無い」

「なんでよ！？」

「気分で…冗談だ。　ただ単にバニングスという呼び名が気に入っただけだ」

「少々腑に落ちないけどまぁいいわ。それにしても皆ご無沙汰してたじゃない」

「にゃはは、ごめんね」

「色々と忙しくてさ」

「あたしも大学忙しいわよ」

「アリサさん、こんにちわですー！」

「あら、リイン。久しぶり！」

「はいです♪」

「あ、そうだそうだ。紹介しとくね。　私となのは、はやての親友で幼馴染」

「アリサ・バニングスです。宜しくね」

「「「「宜しくお願いします！」」」」

頭を下げ、元気良く挨拶をするＦＷ陣。その一人一人の顔を覚えようと、アリサがゆっくりと４人を見ていく。

「元気そうな子達ね。あら、そういえばはやて達は？」

「えっと、別行動なの」

「多分すずかのところじゃないかな？」

そんな会話から急に会話が弾み始めてしまった。　せめて何をすればいいのか指示が無ければ動けないのだが、ＦＷ陣では隊長達の邪魔をするのは気が引ける。

そんな空気を察したのか、春斗がだるそうに口を開いた。

「うぉーいなのは姉。取りあえず俺らとＦＷ陣はコテージ行ってもいいか？」

「え、春斗？　…あっ、ゴメンゴメン！　そうだね、じゃあ着替えて、コテージのリビングで待機してくれるかな？皆」

「「「「はいっ！」」」」

「で、俺とフランは着替え次第遊びに行ってくる」

「久々ですものね、海鳴は…」

「え？　アンタ達は仕事じゃないの？」

「俺達は有給つかってんからな。　大体、そこの隊長が休み無く働かなければこんな任務の話すら持ち上がらなかったぜ」

「休み無く働いた…？　なのは、フェイト、ちょっとその辺り聞かせてもらいましょうか」

「…は、春斗！　弁明は！？」

「じゃあな、なのは姉。　心配してくれていいじゃねぇか。そして少し位は心配している俺の身にもなってくれ」

「えと、フラーン…」

「それでは、お先にですわ♪　フェイトお姉様♪」

「…（泣）」

満面の笑顔で放たれた言葉は、即ち春斗と同じ行動を取ると言うことであり。

暫くアリサの質問ならぬ尋問に、必死で誤魔化しも入れつつ説明を始めたなのはとフェイト。

そんな2人を見て笑いながら、何処行くかを考えつつ春斗達もコテージへと向かった…。

地球ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

「おーいスカリエッティー、こっちじゃこっち！」

「いきなり連れ出したと思えば、何故このような場所へ連れて来たのかね？　私の記憶では、此処は彼のエースオブエースやフェイト・テスタロッサの出身地の場所であったはずだが」

「そうじゃが？」

「“そうじゃが？”では無いだろう！　敵地そのものでは無いかね!?　鉢合わせしたらどうする!?」

「大丈夫じゃ。妾が全力で潰す」

「いや、そういう問題ではないのだが」

「まあ、まあ。いいではないか。一応書き置きも残しておいたし、ウーノ姉上からも『ドクターは少し根を詰めすぎているから休んだ方がいい』との言葉をもらっておるしの」

「ああ、なるほど…って、やはり結局直接許可をもらった訳ではないのか…帰ってから何があっても私は知らないぞ」

「分かってるのじゃ♪　いやー、ＴＶで見てから此処には来てみたかったんじゃよ！　海と言うものも見たことが無かったしの…ほら、行くぞスカリエッティ！　海が妾を呼んでいるのじゃ！」

「まさか泳ぐ気ではないだろうね!?　君は唯でさえ目立つんだからこれ以上目立つのは…待て待て、腕を引っ張るんじゃない！　ディール、聞いているのかね?!」

そして同時刻、非合法の転移機械で地球への侵入を果たした男女（男性はどう考えても無理矢理連れてこられた感がある）も行動を始めるのだった。

“地球”（後書き）

春斗「ちょｗｗｗおま、ラストｗｗｗｗｗｗ」

天破「神からのお告げが聞こえてきた。ディールを出せ、と」

フラン「私たち無双ではありませんでしたの！？」

天破「いや、普通じゃつまらないから色々と変えてみようかな、って」

春斗「変えすぎだろｗｗ」

フラン「うぅ～…私だって、もう少し、もう少しあれば…」

春斗「何がだ？」

フラン「五月蝿いですわっ！！！／／／／／」

春斗「ぐはっ！？」

天破「あ、春斗が空の彼方へ…」

次回も何時投稿できるか分かりません。。申し訳ありませんが、少し待てば落ち着くと思うのでそれまでお待ちくださいｍ＿＿ｍ

フラン「では、次回もごらんいただけるよう、よろしくお願いしますわね♪」

【重要】謝罪とお知らせと訂正と（前書き）

すいませんでした。本当にすいませんでした。

なんと言うか…詳しくは本文にて…ｏｒｚ

【重要】謝罪とお知らせと訂正と

えー、登場人物紹介　（ネタバレあり）を読み飛ばした方には御関係はありませんが…

登場人物紹介　（ネタバレあり）の無還者の能力を完全に間違えてましたぁぁぁぁぁああ！！

混乱させてしまったことを誠心誠意謝罪すると共に、無還者の能力の記述も直させて頂きました。

名前を間違えただけとはいえ、（別作品の能力を間違えて使ってました）こうしてみると能力の印象が１８０度違うことが伺えます。

なので、宜しければもう一度無還者の能力欄でも見て『何だこの厨二ｗｗｗ』とでも鼻で笑ってやってください。今回の件で責められるのは致し方ないことだと私も分かっております。

お詫びとして、ディールのお色気シーンでも本編に…

ディール「Σ」

と思いましたが、正直どうなるか分かりません。

ディール「（´・ω・`）」

何故もったいなさそうな顔をしてるんだ。。

と言う訳で、謝罪と訂正でした＜＞　一応小説を書いている身分でこの失敗は無いと思いましたが、処女作だと言うことでどうか多めに見てくださいますよう、お願いしますｍ（＿＿）ｍ

それでは、改めて次回もお楽しみに。天破でしたｍ（＿＿）ｍ

“任務”（前書き）

おはようございます。何とか完成しました。色々と駄文ですが。

取りあえず注意点をば。

？取りあえずフランに萌えて下さい。

？そして春斗の境遇に同情してください。

？次回の銭湯イベントに期待してください。

あれっ、これ注意点というよりｒｙ

あ、そうでした。皆様お待ちかね（？）遂に三角関係が…！？

では、どうぞ♪

※８／６の１６：２４、またしても文が丸々抜けていたので修正しました。申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

“任務”

暫くして、比較的着替えの早い男性陣（エリオと春斗）がリビングで話していた。まあ、男2人（しかも片方は年の差が4年以上ある）揃うと、話すのは身近にいる女性のことになる。

「そういえば、春斗さんってフランさんのことどう思ってるんですか？」

「……何か少し前にもそんな話題があった気がするな…何だろうか、思い出さんほうがいいと本能が訴えている」

少し前と言うかほんの数時間前だと思うのだが、彼の被害を考えると思い出さないほうがよいのかも知れない。しかし何という都合のいい記憶力だろうか。　見習いたいほどである。

「まぁ、それは置いておくか。どう思う、ねぇ…」

「あの、例えば家族みたいだったりとか、やっぱり親友だとか、そ、その…恋人、とか…」

「ああ、まず恋人はねぇな」

この瞬間、お約束的な意味で春斗に不幸が降りかかることが確定した。

「そうだな、やっぱり兄妹…というのがしっくり来るな。お前とキャロみたいな感じだよ」

「な、なるほど…でも、僕達ってそんなに兄妹に見えます？」

「何だ？　お前はキャロと恋人同士に見られたかったのか？」

「い、いやいや！？　違います違います！？僕がキャロの恋人なんて、釣り合わないですよ…」

そんなことは無いと思う――というのは、自分のことを遥か上空の棚に上げた（というか気づいてない）春斗である。キャロとエリオは歳も近いし中々にお似合いだと彼は言う。当然自分とフランのことなど全く考えてない。

「はっはっは。　子供の恋愛ってのはいいな、純粋で」

何を基準にこの男は純粋と言っているのだろうか。

「でも、は、春斗さんだってフランさんとお似合いじゃないですか？」

そこに放たれる、少し顔を赤くしたエリオの子供なりの反撃。

しかし、この程度の質問なら春斗は度々切り抜けてきた。この男、今更この手の質問で動じることはない。

余裕のある笑みを口元に浮かべながら、彼はエリオに言った。

「いいかエリオ。俺は貧乳には興味が無い。寧ろ俺は美乳・巨乳派で、例えばスバｒ（ゴォンッ！！）ぐあああ後頭部に鈍器が激突したかのような痛みがぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！」

その一瞬、エリオはおろか春斗すら反応できない速度で何かが飛来し正確に彼の後頭部へと直撃した。

それを冷めた目で見つつ、丁度着替えから出てきたのだろう――フランは笑顔を作って、春斗達にこういった。

「エリオ、春斗。着替え終わりましたわよ」

「……は、はい…」ガタガタガタ…

取りあえずエリオは、フランの額に浮んでた青筋とその横で頭を抑え悶絶している春斗とその傍に転がっているゴルフバッグをすべて見なかったことにした。

「……ちょ、ちょっと嬉しい……かも…」

そしてフランの後ろで、少し顔を赤くして照れているスバルのことも――――これ以上場の混乱を避ける為――――本能が記憶から消去した。

＊

暫くして、なのは達がコテージの外に集まった。

「旅行が始まる前に酷い目にあったぜ…」

「春斗さん、ホントサイテーです」

「春斗？この事はお母さんに報告するからね？」

「やべぇな…風邪を引いたか？　膝の震えが止まらねぇ……っ！！」

それは決して風邪ではなく、恐らく怯えによる体の拒絶反応だろう。

「ま、まぁまぁティア！　春斗さんだって冗談で言ったんだし、許してあげよ？」

「スバル、アンタはそれでいいの？　客観的に見て、アンタも被害者の１人だと思うんだけど…」

「じ、冗談だって分かってるしね…」

「…ふ～ん？」

何やら疑わしそうな視線を向けるティアナに、目線を合わせず下手な口笛を吹くスバル。

そしてその後ろでは、再びフランを傷つけたということで春斗がフェイトに断罪されていた。旅行に行くというのに、彼はその前に病院へ運ばれそうな勢いであるが、当然ながら自業自得である。

ドゴォォォォォ！！！！

「ぎゃあああああああ！！！」

金色の斬撃と共に、いつもより大きい爆発音と春斗の断末魔が空に響き渡る。

今日も、現在進行形で機動六課は平和であった。

「すまんな、遅れた…って、如何して春斗は行く前かｒ…これ、地球に来る前もやったような気がするんやけど」

「奇遇だなはやてよ、俺もだ。理由を聞くか？」

「少し怒ってそうなフランとかなり怒っているフェイトちゃんで大体把握したから大丈夫や。　さ、皆聞いてやー！」

“少し”と“かなり”。言葉にすれば1文字しか違わないこの表現は、現実世界ではどんな谷よりも深い違いを表す。

それすらも理解しているように同情の目線をはやてから向けられた春斗は、少々涙が出そうになった。

「気を取り直して…今回の任務はロストロギアの発見からの確保や。なのはちゃん、フェイトちゃん、頼むわ」

「了解。　じゃあ、スターズは私とリイン、スバルとティアナの二組に分かれて捜査ね。　中距離捜査は任せるよ、リイン」

「お任せくださいです！」

「クロスミラージュにも簡易型の探索魔法をセットしてあるから、そっちとこっちで少し離れて探そう。いいね？」

「「はいっ」」

「ライトニングは市内の各地にサーチャーとセンサーを設置。　それが終わり次第捜査の協力…で、いいかな？」

「「はい」」

「ヴィータは上空から探索と設置をやってくれとるから、これで皆1つは仕事が出来たか？」

「あの、はやてさん」

「なんや？　フランは此処には有休で来たと思ったんやけど…」

予想外にも、はやての言葉に手を上げたのはフランだった。しかしはやての言う通り、彼女ははやて達とは違って有休を使って此処にきているはずである。

その疑問に、フランは少し笑いながらこう答えた。

「いえ、普通に春斗と一緒だといつも通り過ぎて味気ないので、せっかくですしライトニングかスターズの方に付いていきたいなと…」

「うーん、なるほど。本来なら駄目なことのような気がするんやけど、まあええやろ」

「いいのかよ」

「此処に私達の他に管理局員がいるとは考えにくいから、少し位のことは大目に見れるんや。で、フランはどっちに付いていきたいんや？」

「私はスターズとご一緒したいですわね」

「じゃ、俺はライトニングに付いてくぜ。いいか？　エリオ、キャ

ロ」

「あ、大丈夫です」「誰かと一緒にいた方が楽しそうですから！」

「私も、いいですか？　スバル、ティアナ」

「はいっ、喜んで！」「はい、大丈夫です」

「じゃ、決定やな。　ほんなら、ロストロギア探索、任務開始や！」

『はいっ！』

ともかく、色々とあったがようやく地球でのロストロギア探索が始まった。

＊

スバル＆ａｍｐ；ティアナ＋フランｓｉｄｅ

さて、此方はガールズオンリーのチーム。しかしその中の１人は仕事ではなく休暇であり、更に魔力が無いので普通にアイスや食べ物を買って食べながら歩いていた。　現在、スバルとティアナはアイスを買いに行っているフランを待っている最中である。

「もう、フランさんたら…」

「そうだよね、もう少し仕事中の私達のことも考えて――」

「あ、スバルさん、ティアナさん。お待たせしました、アイス買ってきたんですが食べますか？」

「――部隊長の言うように、少し位多めに見なきゃ駄目だよね！」

「スバル…アンタって人は…」

珍しく正論を述べようとしたスバルだったが、フランの買ってきたアイスに簡単に陥落した。　それに頭を痛めるような動作をするティアナだったが、彼女もちゃっかりアイスを受け取っている。

「でも、フランさんは如何して春斗さんと一緒に行かなかったんですか？…あっ、このアイスおいしい」

「ああ、あの時も言いましたが海鳴は久しぶりとはいえ色々と知っているので…春斗も同じでしょうし、それならこっちに来たばかりの貴方達を案内して差し上げようと…迷惑でしたかしら？」

「いえいえ、助かります！　私達此処のこと何も知らないし、アイスも買ってくれるし！」

「…スバル、本音が駄々漏れよ」

「ふふっ…」

慌ててフランをフォローしようとしたスバルだったが、普通に自爆して赤くなって俯いた。　再び頭痛を堪えるかのように頭を押さえるティアナと、その反応が面白くて思わず笑ってしまうフラン。

傍から見れば、姉妹が3人仲良くアイスを突いているようにも見えるほほえましい光景であった。

「そういえば、何度か話題になったと思うんですけど」

「なんですの？」

「フランさんて、春斗さんのこと好きなんですか？」

直球であった。思いも寄らなかった質問がスバルの口から出たことにより、フランは思わず口に含んでいたアイスを噴出しそうになってしまった。

「ん、んぐっ…な、何を言ってるんですの？　私が春斗のこと好きな訳ないじゃありませんか」

危なげなくアイスを飲み込み、冷静さを保ちながら笑顔で答えるフラン。

だが、その答えを受けてスバルが少し顔を赤らめながら核兵器クラスの爆弾を投下した。

「へぇー、そうなんですか？　じゃ…じゃあ私が告白してもいいですか？」

「「！！？」」

これに驚いたのはフランだけではなくティアナもだ。彼女の目から見ても春斗は仕事は出来るのだが遊んでいるようにしか見えず、顔はまあまあだが性格が全てを台無しにしてるように見える。正直、フランが彼のことを好きだというのも信じられない位である。

「べ、べべ、別に、構いませんわよ。は、春斗のことだから、告白されても分からないと思いますけど」

完全にパニック状態になっているフラン。しかしその言葉に『それはありえない』と断言できないところが悲しい。　それ程春斗は朴念仁というか、人の心に鈍感なのである。

「別に構いませんよ？　分かってくれるまで言い続けますから♪」

「はぅ…？！」

しかし返って来た返事はポジティブにして、更にフランの立場を危うくさせるものだった。

フランも自分が人間では無いと言ってはいるものの、当然ながらこういう場合の対処法を分かっているはずも無い。思わず強敵（？）の出現に焦るばかりであった。

「スバル、正気？　あの春斗さんよ？　あの春斗さんなのよ？」

「うん、それに春斗さんているも見てれば凛々しいし格好いい時もあるんだよ？」

一体春斗はティアナの中でどうカテゴリ付けられているのだろうか。少なくとも春斗は聞かない方がいい気もするが、それは置いておこう。

それにしてもスバルは、顔を朱に染めていかにも恋する乙女という感じだ。一体あの男の何処にその様な魅力があるのか疑問であるが、これ以上書くと作者の黒い部分が顔を覗かせるので止めておく。

そしてこの状況に慌てたフランは、『そこら中に聞こえるような大声で』スバルにこんなことを言った。

「だ、駄目ですわ！！　は、春斗は絶対に、その、渡しませんから！！！」

一瞬、空気――否、世界の時間が止まった気がした。

「「……おぉ…／／／」」

「…はっ！？」

自分の発言を見返してみる。

そして周囲の様子を確かめてみる。

…何だか、生暖かい視線が浴びせられていた。

「…はぅっ／／／／」

恥ずかしさのあまりオーバーヒートしたのか、息を吐くように言った後顔を真っ赤にして固まった。

動く様子が無い。

「だ、大胆だね、フランさん…／／／」

「…聞いてるこっちも恥ずかしかったわ…／／／」

完全に復活するまでに３０分以上の時間を要したことを追記する。

スバル＆ａｍｐ；ティアナ＋フランｓｉｄｅｏｕｔ

エリオ＆ａｍｐ；キャロ＋春斗ｓｉｄｅ

此方は別段変わったことも無く、雑談しながらサーチャーやセンサーを設置したりしていた。普段、何故か互いに話そうとしないエリオとキャロだが、今回は上手い具合に春斗が潤滑油のような働きをしておりいつもより多く話をしているようである。

「しかし、サーチャーやセンサーを仕掛けるだけの作業と言うのも暇だな」

「いや、春斗さんは何もしてないじゃないですか…」

「そうだったな。言い換えるか、仕事を淡々とこなしているのを見ているのは暇だ」

「……それもそれでどうかと…」

今の会話を聞けば分かるように、春斗がボケ役でエリオとキャロが突っ込み役である。　違和感が無いのが凄い。やはり春斗ははやての見込んだとおり、突っ込みとボケの才能があるのだろう。

「いらん才能だなオイ」

「「？」」

「いや、何でもねぇ。何だか口から出て来たと言うか…気にしなくていいぞ」

よく分からないが、春斗が言うなら気にしないでおこう…ということで再びサーチャーやセンサーを設置していく。　地道な作業だが、その大切さは春斗も分かっているようで暇だとは思いつつ口出しはしなかった。

そこから、暫く淡々としたサーチャー＆ａｍｐ；センサーの設置と雑談を繰り返し。

「よし、これで最後です」

「うっし、終わったか！じゃ、もう少し時間あると思うし何か驕ってやるよ」

「え、でも悪いですし…」

「遠慮するなって。　機動六課は結構給金がいいからな、それなりのものは食えるぜ？」

「え、えっと…」

「エリオ君、せっかくだしご馳走になろ？　断るのも悪いし」

「う、うん。　じゃ、いいですか？」

「よし！　じゃ、何が食べてぇｋ――――（ドンッ）っと、すいません――――」

仕事も終わったことなので、早くも何を食べるか考え始めた春斗だが、誰かの肩にぶつかってしまった。　慌てて誤った春斗であるが――――

「テメェ、痛ぇじゃねぇか！何しやがる！」

――――そう簡単に、トラブルから逃れることは出来そうになかった。

「いや、謝って…」

「オイ、どうしたよ?」

「それがコイツがよォ、俺の肩にぶつかって来て謝りもしねぇんだよ」

当然抗議した春斗だが、此方の話を聞かず、そしてぶつかって来た男共の顔がニヤ付いているのを見て顔を顰めた。

これは難癖つけて、此方を脅迫し金等を奪おうとする輩の集団だと分かったのだ。

古典的な方法だが、確かにエリオやキャロ程度の子供になら効果はある。大抵はその剣幕に怯えてしまうからだ。

だが、エリオ達は子供でも管理局員。この程度の男達ならエリオ１人でも簡単に片付けられる。だがそれはデバイス、または武器を使ったときの話だ。　こんな街中でセットアップしてしまったら大変なことになる。そしてこれはキャロにも同様のことが言える。

つまり、今物理的な意味で動けるのは春斗のみだ。

「だから謝ってるだろうが」

「ぶつかった相手にその態度はなんだよ、あぁ？」

だが、春斗はこの状況をさほど危険視していなかった。

こういう相手は大抵、金を出せだとか何とか言ってくる。そう言われたら、相手の度肝を抜く金額を出してやればいい。札束にしていくつか現金を持ってきている春斗に、この手の脅迫紛いの手は強さ的な意味でも通じない。

だが、状況は春斗の理解を超えた方向へ動き出した。

「ん？　…ほぉ、そこの桃髪の嬢ちゃん、可愛いじゃねぇか」

「は？」

思わぬ方向へ飛び火したので、思わず間の抜けた声を出す春斗。

しかしそんな彼を嘲笑うかのように、男は卑しい笑いを浮かべながら言った。

「どうだ？　この嬢ちゃん、一晩貸してくれんだったら許してやる

ぜ？」

「……はぁ！？」

春斗も予想外であった。　というか誰が予想できただろう。

この男が、変態（ロリコン）であったなど。

「…ふざけてんのかお前。金ならあるからそれだけは止めろ」

色々な意味での動揺を胸に押し込め、春斗は冷静に努めながら男に向けて言う。

「ふざけちゃいねぇよ。だが、それなりに楽しめそうだからよ…クックック」

聞く者全てを吐き気を及ばせるような笑い。春斗は更に顔を顰め、キャロは怯えたような表情でエリオの後ろに隠れてしまう。　無理も無いことだ。正直キャロの歳で変態の相手は難しすぎる。

（ちぃ、面倒なことになったぜ…フェイトさんでも居れば…って、此処じゃ魔法は使えないんだった）

確かにもし此処がミッドチルダで、そして同じようなことが起こっていたのなら恐らく既にこの男達の命は無いだろうが所詮結果論である。

ニヤニヤと笑っている男共にロリコン集団という括りをつけつつ、この状況の打開策を暫し考えた春斗はふと溜息をついた。

（…仕方ねぇ。“可能性”の為だ。一肌脱ぐか）

そこまで考え、そして更に相手の思考回路を計算し自分が相手ならどうするかを考えて答えを出した。

――――そして、全ての計算を終えた兵器（はると）は、悪い笑みを浮かべながら話し出す。

「オイ、お前」

「あぁ？何だよ」

「そんな女より、もっとお前好みの女を知っているんだが…そっちの方で勘弁してくれねぇか？　流石に知り合いの娘が目の前で連れ去られるのは見たくねぇ」

「「春斗さん！？」」

何を言っているんだというライトニングの叫びも聞かない振りをする春斗。今ほど自分が念話を使えないという設定になっていることを悔やんだ記憶は無い。

そんな春斗の心情も知らず、変態（バカ）はホイホイ釣られて来た。

「ほぉ…？　因みにどんな娘だ」

「〇学〇年生、胸はＡＡＡ、まだ未経験」

「乗った」

相談は一瞬で終結し、そして目出度くも成立した。春斗の中で目の前の男が完全なる変態だと認定された瞬間だった。

「で？　どうすればいい？」

「連絡先を教えろ。それだけで後は俺達でやる」

「そうか。だが、連絡先の前にその少女のヤバイ画像があるんだが」

「見せろ」

「よし、じゃあこっちに顔を近づけてくれ――――そこに近づこうとしている変態（おとこ）１０名、後で教えてやるからお前らは待て」

少々ルビが可笑しなところに振られていた気がするが、何もおかしな所は無かった。

「…みえねぇぞ？」

「まだまだ近づけ」

怪しげに、春斗の携帯画面を覗こうとする変態。因みにライトニングはといえば、春斗の演技に騙されているので今までの春斗のイメージが崩れているところだった。

「ほれ、これだ…」

「…っ？」

態と真っ暗にした携帯画面を、見えにくいように男へ見せる。

男がそれを見ようと、顔を近づけた瞬間――――

「――――ドリャアアァァアア！！！！」

――――男の顔面に春斗の右の拳が入り、数メートル吹き飛んで痙攣

し動かなくなった。

「「「「「「「「!!!?」」」」」」」」

そこにいた皆――様子を伺っていた町の人々も入れて――――彼らの表情に浮ぶのは、驚愕。

そんな感情を知らん振りし、変態(おとこ)を殴った方の右腕をブラブラさせながら苦い顔で春斗は呟いた。

「あー、変態の汗が付いたっ！最悪だよ畜生！」

「変っ…お、お前も我らの同志では無かったのか!?」

「誰が同志だ誰が!!　お前らの仲間ってだけで虫唾が走るわ!!!」

変態達(おとこども)以外の全員が同意し、春斗を見直そうとしたところで――――

「俺は貧乳には興味は無いッ!!」

――――次の一言ですべてが台無しになった。

「テメェ！よくもリーダーを…全員かかれぇっ！！」

「一々掛け声が雑魚キャラ臭ぇんだよ雑魚がぁああ！！！」

バカ正直に突っ込んできた変態の1人の顔面を待たしても右の拳が捉え、先程の変態の如く飛んでいく。

だが、残念かな今回の春斗のターンはこれでは終わらない。

「テメェら見てぇな変態はこの世から消えとけ！！必殺！ゴォォォォルデンクラァァァァァッシュ！！！」

吹き飛んだ変態に向けてジャンプし、ジャンプした直後に丁度地面へ仰向けに倒れた変態へと飛び蹴りを放つ。

そしてそのとび蹴りは吸い込まれるように、変態へとヒットした。

――――――男なら誰でも知っている、自分の大事なところへ。

「がふぅっ！？」

春斗のノリで叫んだ必殺技を（自分の大事な部位へ）喰らった変態は、2，3回痙攣した後泡を吹いて動かなくなった。

そしてこれを見ていた野次馬含む男性全員が、自分の大切な部位を思わず抑えたり変態への冥福を祈っていた。

「？　…エリオ君、モジモジしてどうしたの？」

「へっ！？　いやいや、なんでもないよ！？」

子供ながらにして、春斗の攻撃に何かを感じたエリオは何も悪くないだろう。　寧ろそれは男性として必然といえる。

「さぁ…テメェら…」

「「「「ひっ…！」」」」

「俺と俺の連れに難癖つけた罪…去勢した上で断罪してやらぁぁぁぁぁぁああああ！！！！！」

「「「去勢した上で何かやるのかよ！？　うわぁぁあああ！！！」

」」

追いつかれれば、自分に（男性としての）明日は無いと判断した変態達は、全力で駆け出そうとして――

「「（ドスッ）グボァアッ！！！？」」

春斗に背を向けた瞬間、尻の穴へ正確に箒が突き刺さり変態が2名逝った。

「「「はぁ！？」」」

「馬鹿め！俺の投擲のコントロール嘗めんじゃねぇぞ！」

「いやそうじゃなくて、春斗さん今追いかけようとしたんじゃ…？」

全員が入れたかった突っ込みを、まさかのエリオが代弁した。だが春斗はそれに全く慌てず、ただ冷静にこう言った。

「俺は一言も追いかけるとは言ってねぇ」

「…え～？」

「いいか？　エリオ、キャロ…残念ながらこの世界は、勝てば官軍

なんだ。敗者の言うことなど、誰も聞きゃしねぇよ…」

「最低だ！？　格好いいこと言ってるような気がするけどそれは犯罪者の台詞ですよ春斗さん！！」

「はっはっは、素晴らしい褒め言葉だな…ん？　オラ、逃げようとしてんじゃねぇぞ！　テメェらの大事なもん置いてきやがれ！！」

「「「ぎゃあああああああ！！！」」」

「「春斗さぁぁあん！立場逆！逆ですってばー！！」」

そして、遂に狩られるはずだった方と狩るはずだった方の立場が逆転した。

収拾が付かないかと思いきや、最終的には駆けつけたパトカーによる周辺住人の事情聴取が始まった――　が、その頃には春斗及びエリオとキャロの姿は消えており、代わりに残されていたのは全員が全員自分の急所を抑え泡を吐いて気絶している変態だけだった。

＊

「いやー、いい汗掻いた」

「いい汗掻いた…じゃありませんよ?!　逃げられたから良かったものの…もしこれがフェイトさんの耳に入ったら…!!」

「大丈夫だ、お前らには絶対被害は及ばない。　どう考えてもこのパターンは俺1人に被害が来るだろうから心配するな」

それが分かっているのなら、普段から自重すれば何も問題は無いはずなのだが…。　そこは春斗、ということだろう。

「でも、春斗さん強かったですよ?」

「ん?　そうか?でもな、この事は出来るだけ人には言わないでくれ」

「何でですか?もしかしたら認められて昇進も出来るかもしれないのに…」

「それが嫌なんだよ」

予想外の答えに驚くエリオとキャロ。しかし、そんな彼らに春斗は笑ってこんなことを言うだけであった。

「お前らはまだ子供だから、分からねぇかも知れねぇ。　いや、実力なら明らかに普通とは一線を規しているがそれでもまだ10年と少し生きた子供だ。俺も同じようなもんだけどな。　しかし、俺は上に立つべき人間ではない。俺はまだ護られているからな」

笑っている。笑っているのに――普段、おちゃらけている春斗の声とはまるで違う、低くて威厳のある声。エリオとキャロも、何も言えずに黙って聞いている。

「しかし、これだけは言わせてくれ。醜悪な環境で生まれながらも何とか生き抜いてきたバカからの言葉だ…無意味かも知れんが、覚えておいておくといいかも知れねぇ」

「「…、」」

「自分が『護られている』ことを自覚しろ。俺は父さんや母さん、兄さんや姉さん、そしてなのは姉に護られてきたからこそここにいる。フランはフェイトさんやアルフさんに護られてきたからここにいる。そして俺が高町家にたどり着けたのは、兄貴が命がけで俺を護ってくれたからだ。それを自覚するまで、俺は何年も無駄な時間を費やしちまった…お前らは繰り返すんじゃねぇ。んで、護られているうちは護られとけ。絶対に後悔しねぇからな」

「「…はいっ」」

「よし、いい返事だ。…もう少し集合まで時間あると思うしな、改めて何か驕ってやるぜ。何がいい？」

「「中華料理を食べてみたいです！」」

「ははっ、息ピッタリだな。いいことじゃねぇか…よし、じゃあその辺の中華料理店に入るか！俺の驕りだ、食いまくれよお前ら

！」

「「はいっ！」」

その後春斗、エリオ、キャロの３人はその辺に都合よく近くにあった中華料理店に入り、そのまま流れ的にコック達とのガチバトルが始まった。

「ラーメン２０杯追加頼む！」

「あ、こっちにえーっと、チャーハンの大盛１０皿を！」

「…ふ、２人とも凄いね…」

とは言っても、バトルに参加してたのは春斗とエリオのみでキャロは常人よりも少ない量をちびちびと食べていただけだったが。

その後、突如始まった無限胃袋×２ＶＳ中華料理店は熱き戦いを演

じ、遂には引き分けとなり、料理長と春斗、エリオの間に歳を越えた友情が生まれた。当然料金は支払ったが。

「あぁ、食った食った」

「あのおじさん、いい人でしたね…」

「あぁ、いつでも食いに来てくれだってな。普通なら二度と来ないで欲しいといわれてもおかしくない状況だったのにもかかわらず…あの店はこれから人気が出るな。勘だが」

「また行きましょうね？」

「おう、だが今度はお前らが驕ってくれよ？　年上にも一応敬意って奴をな」

「任せてください！」「待っててくださいね！」

傍から見ればほほえましい光景のまま、彼らは談笑しながらコテージへ帰還した。

この後直ぐに春斗に不幸が降りかかることも知らないまま…。

＊

コテージｓｉｄｅ

春斗達が帰っている間に、はやてからスターズ及びロングアーチに連絡があった。

今回のターゲットのロストギアの所有者の情報、及びロストロギア本体の性質。どうやらダミーを生成しながら移動していくという感じらしい。攻撃性は無いようだ。

つまりはこの町にとりあえずは危険はないということなので、皆ホッと一息ついた。

「おっ、コテージだ」

「あ、そうですね…皆揃ってます」

「やべぇ、遅刻か？　これで尚更俺の命が失われる危険が高まったな…去勢事件、無断でエリオ達に中華料理を食わせ…そして遅刻…あれ、俺死んだ？」

「いやいや、そんなことで怒ったりしませんよフェイトさんは！」

「怒るから怖ぇんだよバーロー」

どこぞの名探偵の口癖を真似しつつ話ながらコテージへ歩いてると、向こうからフランが走ってきた。

「ん？　フランか……あれ、何だ？俺にはアイツが死神に見えるんだが」

「そんなことありませんよ！？　フランさんはフランさんじゃないですか！」

「いや、違うな…俺の第六感が告げている、コイツは俺の不幸連鎖のスタートの合図だと。したがって俺は――」

「はーるーとー…死んでくださぁいっ！！！／／／／／」

「タイミングよく、しゃがむッ！！」

ボキュッ！！（常人の目には見えない速度でフランの拳が放たれる音）

バッ！（春斗が即座にしゃがんだ音）

パパパパンッ！！（フランの拳が放たれた為空気が破裂した音）

「うぅ～～！！おとなしく殴られてくださいですわー！！」

「何故だ！　俺は全く身に覚えが無いんだが！？」

「春斗には無くても私にはあるんですの！　私は…わ、私がま、街中であんな、ことを…！！　貴方さえいなければぁあ！！／／／／／」

「意味が分からんがどう考えても逆恨みだということは理解できる！　取りあえず落ち着け！俺は腹が減った！！」

「ええっ、もうお腹が空いたんですか！？」

「あ、ぼ、僕もちょっと…」

「エリオ君までっ！？」

中華料理店涙目である。彼らの胃袋がどうなっているか興味が尽きないが、春斗は現在死と言う名の脅威に追われているためそれどころではない。

逃げ回り、ギリギリでかわし、逃げ回りを繰り返しているとそこになのはが接近していく。彼女もまた、普段とは違う雰囲気――具体的には現在のフランと同じ雰囲気を纏っていた。

「畜生！理不尽だ…あ、なのは姉！　すまんがフランを何とかしｔ――――」

「春斗？　私が見回りしてたら、“春斗”っていう名前の人が桃色の女の子と赤色の男の子を連れて不良１０人以上と喧嘩したって聞いたんだけど…これについて少し、お話しようか？」

「――――さらばだっ！！」ダッ！

「待ちなさいですわー！！」

「春斗っ！　あれ程言ったのにまた騒ぎを起こすなんて…今度こそ、ちゃんとお話するんだから！！」

そして、彼の味方は居なくなった。

「だぁああ畜生！不幸だぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！」

特別な右手を持っているわけでも無い春斗だが、取りあえず魔王（なのは）と兵器（フラン）に追われているこの状況を表すには――この一言しかない、と直感で考えた結果であった。

そしてその後、フェイトまでもが敵に回って簡単に捕まり、説教と言う名の肉体言語を夜飯のバーベキューの準備が出来るまで喰らい続けたことは――お約束あり、言うまでもないことであるである。

「お約束とか、ふざけんじゃ、ね…ぇ…」パタッ

しかしそれでも一応生きている辺り、彼の生命力が尋常では無いことが理解できる。だが満身創痍のようなので、バーベキューは無理かと思われたが。

「春斗さん、バーベキュー始まりましたよ！」

「良くぞ知らせてくれたスバルよ。今行くぜ俺の肉っ！！――――っとぉ！？」

「わわわ、まだ傷が回復してないんですから…肩貸して差し上げましょうか？」

「むぐぐ…（体力的には大丈夫なんだが、体が安定しねぇ…フランめ…平衡感覚を狂わせやがったな…？）　すまんな、頼めっか？」

「はい、喜んで♪」

そうでも無かったようである。それどころかスバルに肩を貸されるというおいしいイベントまで無自覚に手に入れている辺り、彼は運がいいのか悪いのか。

ただ1つ言える事は――

（…なんですの、スバルに肩を貸されて…わ、私に言えば肩くらい…あ、私が平衡感覚を狂わせたんでしたっけ……自業自得とは言え、何だか…いい気がしませんわ…）

――フランの機嫌が、また一段階春斗の知らないところで悪くなったことだろう。

そして暫くして平衡感覚が回復した春斗は、先程の友情は何処へやらエリオ、スバルと歳の差を越えた肉の奪い合いを始め、それは蹴りあり拳ありの戦争へと参加して行った。

「…春斗さん、大人気ないです」

ちょっと苦笑しつつキャロがそういったが、まさに今大きな肉をスバルと奪い合っている春斗には全くと言っていいほど聞こえなかった。

？？？ｓｉｄｅ

「いやー、楽しかったのう！」

「疲れた…ん？そういえば私は休むべきではなかったのかね？」

「あ…はっ！　い、いやはや、思わず妾が楽しんでしまったが…しかしの、最後に行く所は決まっているのじゃ」

「…ほぉ。どう考えても忘れてそうな感じだったが、それは置いておこう。　それは何処だい？」

道路にて、ゴスロリ服を着た巨乳の女性と紫色の髪の毛を持つ男性が共に歩きながら漫才のような会話をしている。

女性の方が、にやりと笑って呟くように言った。

「“銭湯”というところじゃよ。妾はもう少し遊びたいから、スカリエッティ、お主は先に入ってきてはどうじゃ？きっと休まると思うのじゃが。　当然妾も後で入るがの」

「銭湯、か…ふむ、分かった。君がそこまでいうのなら行って見るとしよう。案内してくれるか？」

「任せるのじゃ！　えーっと、こっちじゃこっち♪」

そして再び、早くも此方の環境に適応を始めた男女のペアも１つの行動を起こすのだった。

“任務”（後書き）

天破「ディール崇拝者諸君に告ぐ！！！！　次回はディール様含む銭湯イベントが光臨される！　総員全裸で待機せよォォォォォォォオオオ！！！！」

崇拝者諸君「うぉぉぉぉおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

崇拝者Ａ「ディール様ｈｓｈｓ」

崇拝者Ｂ「バカ、あえてのフランにも期待だろ.ｊｋ」

崇拝者Ｃ「エリオ君マジ天使」

崇拝者Ｄ「やはりシグナム姐さんがいねぇと始まらねぇ！！総員武器を取り立ち上がれぇぇえ！！！　シグナム姐さんのあの巨乳を取り返すのだっ！！！」

崇拝者Ｅ~Ｚ「ＹＡ――――――――――――――――――――ＨＡ――――――――――――――――――――！！！！！！！！」

フラン＆春斗「煩いッ！！！」

天破「モルスァッ！！？」

春斗「何だコイツラのテンション！？バカか？バカなのか？」

フラン「というか変態じゃないですの？」

天破「変態の編隊だよ」

春斗「おま、バカテスｗｗｗｗｗｗ」

天破「貴方はどの崇拝者でしょうか？出来ればC以外をご選択していただきたいのですがｗｗｗｗ」

フラン「あら、ディールは？」

天破「次回の台本読んで、恥ずかしくなって部屋にこもっちゃった」

フラン・春斗「あのディールが恥ずかしくなる内容…だとっ…！！？」

次回に期待してくださいませ（´∀`）ちょっと百合っぽくなってしまうかもしれませんが、もしそうなれば次回の前書きで告知しますので大丈夫です（何がだ

では、次回も閲覧宜しくお願いします＾＾

閲覧、本当にありがとうございました～♪

“銭湯”（前編）（前書き）

～今回の話を読むに当たっての注意事項～
?取りあえず春斗の境遇に同情してやって下さい
?エリオも今回いくつか不幸が降りかかります。基本この小説における男性は、ギャグで不幸な扱いを受ける代わりにシリアスで格好良かったりします。
?思った以上に長くなりそうなので前編後編になってしまったことをお許しください。皆様お待ちかねのディールの入浴シーンも次回に持ち越しです。

皆さん　　　　作者
(⊃、゜Д゜;)=========@)、Д゜)∴∵∵・すいませんでしたッ!!!!

申し訳ない。お願いだからブラウザバックで戻らないで下さい。ギャグを重視しすぎてました。　今回はいつにもまして短いですが、その分次回は女性風呂ｓｉｄｅを堪能していただきたいと思います。前半フラン、後半ディール的な意味で。

今回はお色気シーンなんて少ししかありませんし、女性風呂ｓｉｄｅすらありませんけどね！（殴

では、どうぞm――m

※8／9追記：…銭湯入場の際に、本気ですずかとアリサの存在を忘れてました…ッ！！　そしてティアナとスバルが子ども扱いに…マジすいません…ッ…！　修正いたしました；

“銭湯”（前編）

時間は夜、バーベキューの肉が春斗、スバル、エリオによって大半胃の中へ消えた頃。

「銭湯？　あー、あそこか」

「うん、せっかくだから春斗とフランもどうかなーって」

血で血を洗うかのごとく行われた戦争の成果といえば、おいしい肉と少々の傷。歳も考えずはしゃぎすぎて疲れた春斗は、そのまま寝ようと思っていたのだが。

「そうだな、せっかくだし行くか。他の奴に説明はしたのか？」

「うん、まあ皆完全に理解はしてないみたいだったけど…」

「そりゃそうだよな。ミッドチルダにに銭湯なんて風習がある訳がねぇし…経験したことのない奴の方が多いだろ」

のんびり欠伸をしながら、「着替えを取ってくる」とコテージへ戻っていく春斗。　その姿に苦笑しつつ、なのはは再度フォワード陣の点呼を始めた。

～数十分経過～

「さ、出発しよか！」

まあ、数十分程度では何も起こらず、普段の調子ではやてが号令を掛ける。　しかしながら任務のような堅苦しさは無く、いつものように春斗がエリオやキャロと世間話をしていたりフランがスバルとティアナに何やら打ち明けていたりなど、そういう感じであったためフォワード陣の緊張がほぐれていた。

「そういや、なのは姉。銭湯には予約とかとったのか？」

「ううん、取ってないけど？」

「そうなのか。　別にいらんお世話かも知れないが、この大人数で行くと女湯は混むかも知れねぇぞ」

「あ～、確かに…今からでも予約しといた方がいいかな？」

「でもまあ、この時間帯だし、そこまで利用してる客もいねぇだろうし…居るとすればスバル達のような異世界から来た観光客位だろうし…いたとしても一人か二人位だろうから、多分大丈夫だろ。悪かったな、変な所に突っ込んじまって」

「ううん、いいよいいよ。　良かった、春斗が女湯を覗きたいとか言うのかと思って思わずレイジングハートを握り締めちゃったよ」

「やべぇ、一方的な勘違いで現在進行形で俺の命が失われる危険性に晒されていたらしい。　フラン助けてくれ」

「ふえぇ！？　…し、知りませんわよバカっ！！」

「俺に味方は居ないのか…ド畜生…！！！」

今の春斗さんの立ち位置は、ある意味自分で手に入れたようなものなのだと思います…しかしこれに言及すると危険な気がしたので、そう考えてしまったエリオは口をつぐんだ。

一向は漫才のようなものをしながら、フラフラと銭湯に向かう――。

？？？ｓｉｄｅ

「…ふむ」

紫色の髪の毛をした男が、誰も居ない大浴場でゆっくりと湯船に浸かっている。

「…ディールの紹介だったから少々不安だったが、これは確かに休まるものだ……そういえば、日頃から忙しくて風呂など入る時間どころか考える時間すら無かったような気がする…。　そうだね…ナンバーズには機体の洗浄として提供してあるものだったが、私専用の風呂も造るのも悪くは無いかも知れないね」

頭に暖めた四角いタオルを乗せて、男は自分の知らなかった癒しに和みつつも自分の居場所でどうやって自分専用の風呂を作るかということをゆっくりと考える。

――――――男湯の入り口が、少し騒がしくなってきたことにも気づかぬまま。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

銭湯の入り口ｓｉｄｅ

「到着だな…で、何人だったけか」

「えーっと、私、フェイトちゃん、はやてちゃん、ヴィータちゃん、春斗、フラン、アルフ、アリサちゃん、すずかちゃん、スバル、ティアナの大人１１人とアルフ、キャロ、エリオ、リインの子供４人かな？」

「バカだなのは姉。ヴィータは子供料金で入ったほうが安上がｒ右の親指に超絶的な痛みがぁぁぁあああー！！」

「あたしは大人だっ！！」

春斗は一応正論を言ったはずなのだが、残念ながら相手がヴィータだったことが災いした。　彼の親指の命は既にマッハである。

「くっ、俺は正しいことを言った筈なのに…この仕打ちは無いぜ…」

「あ、あはは…と、兎に角入ろ！　ね！」

「待てなのは！　子ども扱いされたあたしへの反論は無しか！？」

ヴィータの言葉は、残念ながら隊長陣全員が彼女から視線を背けることになっただけであった。

「…春斗、今ならお前の気持ちが分かる気がする」

「ああ、その気持ちは大事に取っておけ。　この世界はいつでも理不尽だからな」

「肝に銘じておく」

ヴィータと春斗の間で、共通の理不尽を感じ取った友情が生まれた。
微妙な友情といえばそれまでだが。

しかし結局ヴィータは大人料金で入り、状況が改善されることはなかったのだった。

「…俺、やられ損じゃね？」

正直今更な意見であるが、これほど春斗を如実に表している言葉も無いだろう。

「あの、春斗さん」

「ん？何だエリオ」

「…此処、男女別ですよね」

「ん？　…あっはっは、そりゃそうだろ！　……混浴だったら俺の死が確定しちまうだろうが…！！！」

「で、ですよね！はは、ははははは！」

その質問に最初は笑いながら答えた春斗だが、後半の台詞には魂と言うか気迫が篭っている様な感じがしたエリオであった。

「んー、銭湯かぁ…楽しみだね、エリオ君！」

「そ、そうだね！　なのは隊長たちと楽しんできてね？」

「…えっ？　エリオ君も一緒に入らないの？」

ズサァッ！（春斗が思わずコけた音）

ゴンッ！！（エリオが銭湯の壁に思いっきり頭をぶつけた音）

それぞれがそれぞれの反応で頭をぶつけたため、春斗とエリオの目に火花が散った。

「何いってんだキャロ？　お前は女。エリオは男。ＯＫ？」

優しく諭そうとする春斗だが――

「はい！　でも、良く向こうでは一緒に入ろうとしてますから！」

「……ほう」

「わわっ、違います違います！　自分から入ろうといったんじゃなくて、向こうから誘われて…！」

キャロの口から放たれた爆弾発言に、嫉妬で目を光らせながらゆっくりとエリオの方を向こうとする。その視線に命の危機を感じたエリオは当然直ぐに弁明した。

「…エリオ、断言するぜ。　お前将来女関係で絶対苦労するぞ」

「え？」

「なんでもねぇ。　フェイトさーん、キャロ何とかしてください」

人生の先輩としてエリオに注意した後、自分で説得することは早々に諦めて神頼みならぬフェイト頼みを敢行した。

が、帰ってきた答えは予想外もいいところであった。

「え？　エリオも一緒に入ればいいじゃん」

「なん…だと…？　エリオ、お前今日何かしたか？これはその天罰とか…」

「春斗さんじゃないんですから何もしてませんよ！」

「よし、ちょっと外に来い。その言葉の真意を少し話してもらおうか。拳を使った語り合いでな」

エリオ、自爆。　春斗も違う意味での敵に回り、遂に味方が消えたかと思いきや――

「まあまあ、フェイトお姉様、キャロ？　一応エリオも男の子なんですから、無理を言ってはいけませんわよ」

救世主降臨。今のエリオにはフランが輝いて見えた。

「えー、でも…ほら！フランさん！」

「？　えーっと…『女湯への男児入浴は１１歳以下のお子様のみでお願いします』…」

尚、エリオは１０歳である。即ちこの看板通りにいくと、エリオは

別に女性風呂に入っても大丈夫だと言うことになってしまう。　そう考えたフランは、少し微笑むとエリオの方に手を置いて、言った。

「…諦めるのですわ、エリオ。　別に私もエリオなら構いませんし」

「そんなぁぁあああああ！！」

救世主（フラン）も、キャロの前ではやはりというべきか容易く陥落した。
崖っぷちのエリオ。　精神的な意味での死を覚悟したその瞬間だった。

「あっ！　あんなところに次元犯罪者のジェイル・スカリエッティがいやがる！！」

「「「「「ッ！！？」」」」」

ある者は次元犯罪者という単語に、ある者はその犯罪者の名前につられ――思わずデバイスを握り締めた彼女たちが、春斗が叫びながら指を指した方向へ振り向くと――

そこにいたのは、新聞をのんびりと読んでいるこの銭湯の経営主の年寄りの女性であった。

「…春斗ぉお――っ！！」

「あっ！エリオ君もいないっ！」

「いや…普通こんな所に次元犯罪者が居る訳が無いでしょう…せめてフェイト姉様は気づいて欲しかったですわ」

「やっぱり嘘なんだ…キャロ、さっき春斗さんもう男湯の方に逃げちゃったよ？」

「うぅ～…一緒に入れると思ったのに…ん？」

「残念ですが、諦めるしかないですわよ。ほら、ここにいると他のお客さんの邪魔になりますし、銭湯へ入りましょう」

「この仕返しは絶対するけどね……あれ？キャロ？」

「あ、今行きまーすっ！」

銭湯の入り口ｓｉｄｅｏｕｔ

男湯ｓｉｄｅ

フェイトの叫びとキャロの驚きの声が聞こえてくる。　それを聞いて風呂から出た後の死の危険に悪寒を覚えた春斗だが、オロオロしているエリオを見ていられなくなったのも確かな為、彼を護れたのなら命の一つや二つ別にいいか――と危険な現実逃避で自己完結することにした。

「…よし、逃げられたな」

「あ、ありがとうございます…春斗さん…」

それにしても、とっさにジェイル・スカリエッティという名前が出てきて彼は心底安心していた。これで万が一なのはやフランの名前を出してしまったらボコされるか白けるかの二択であった為である。

「でも、僕ジェイル・スカリエッティって人聞いたことが無いんですけど…どんなことをしたんですか？」

「んー、確か違法な研究をしていると聞いたが内容は知らん。　それどころか名前を知ってるだけで顔も知らねぇぞ、俺」

「あははっ、じゃあ本当に会っちゃったら春斗さんなら友達になっちゃうかもしれませんね」

「ははは、確かにな…だが俺は直感で悪そうな奴と面白そうな奴を見分けられるから、大体は分かると思うぜ」

因みにこれは嘘でも何でもなく、本当に春斗はジェイル・スカリエッティの顔を知らない。　プロジェクトFなどに関わったことなどは一応知っているのだが、兄のことを調べていくうちにそこまで重要視することも無いような気がして記憶から暫く抹消していたのだった。

というか、何だか犯罪歴にあったものがほとんど管理局員の上層部辺りが行っていた研究の物であった為、『あぁ、被害者か』と記憶に残ってはいたのだが。　この土壇場で彼の名前が出るとは、色々な意味で俺も成長したものだ…と良く分からない自己満足に浸っていると、エリオがあることに気づいた。

「あれ？　春斗さん、誰かの服が入ってます」

「マジか？　じゃあ先客が入ってるみてぇだな」

銭湯では良くあることというか当然のことなので別段驚きもしなかったが、こんな時間に、それも1人で銭湯に入るというのは中々の銭湯好きなのか？　と春斗が予想して見るが、ただ単にたまたまこの時間入ることになっただけなのかも知れない。

というか後者の方が確率が高いだろう。

「とにかく、誰にせよ先に入ってる人がいるんならマナーは守んなくちゃなんねぇな。　まぁ一応俺がいるし、なんとかなるだろ。普通の風呂とそんなにかわらねぇからな」

「はいっ」

そういった感じで雑談しつつ、腰にタオルを巻いて銭湯へのドアを開ける。

「うわぁ…」

「おぉ、前に来たときよりも何だか拡張してるじゃねぇか。これは楽しみだな」

此処の銭湯は、アニメや漫画などなら“どーん”などと擬音が付きそうな位広かった。エリオは何やら感動なのか言葉を失い、春斗は前回来た時よりも広くなり、その上新しく出来た風呂に入れるのを楽しみにしているようである。

「取りあえず、まずは体を流してから入らないとな」

「あ、そうですね」

感動もそこそこに、それぞれその辺にあった桶を取って、湯船のお湯をすくって頭からお湯をかけていく。　やはり少し熱かったが、銭湯ならこの位が丁度いい。

「っと…そんじゃ、入るか」

「はいっ！」

何回かそれを繰り返したところで、遂に風呂に浸かるときがやって来た。　まぁ別にそんな大袈裟なものでもないが、エリオは六課に配属されてから男のみで風呂に入ろうとするのは始めてであったし、春斗からしてみれば今日一日だけで殺されかかった回数が既に数え切れないほどあるため、口ではどう言おうと疲労を流すために銭湯を楽しみにしている、というのが本音であった。

足からゆっくりとお湯に入り、そのまま身体全身を湯船の中に浸らせる。あまりの気持ちよさに、思わず春斗の口から「あ〜ぁ〜…」という年老いた男性風な声が漏れたので、エリオが思わず噴出した事以外は何事も無く湯船に浸かる事ができてホッとした春斗であった。

そして、その春斗の声と彼らの身体が浸かったことにより発生した湯船の波によって、先に来ていた『先客』が動き出した。

「……ん？　他に誰か来たのかね？」

「お？」

湯煙により分からなかったが、どうやら同じ湯船に先程話していた先客がいたらしい。　良く目を凝らせば人影がある。

「っと、こんばんは。先に入っていたのに挨拶もせず申し訳ないな」

「いや、気にしないでくれたまえ。　私も考え事をしていたのでね、今気づいたところなんだ」

湯煙の向こうからスィー…と紫色の髪をした、独特の目をして、少々痩せている様に見える男が現れた。　そしてその男を見て、「やっぱり観光客なのか？」「そうじゃないですかね」とアイコンタクトで会話している春斗とエリオを見て――

「…！！？」

男の黄色い目の瞳孔が、驚愕と混乱で限界まで開かれた。

「あ、ごめんなさい。僕も挨拶しないと…こんばんは、エリオ・モンデュアルです」

「俺も改めて挨拶するぜ。高町春斗だ、宜しく頼む」

「っ…ははは、いい名前だね。私は…あー…そう、ジュエル・スカエルッティだ。　此方こそ宜しく」

風呂というこの場所だからこそ気づかれないが、ジュエル・スカエルッティと名乗った男の顔や体中からは冷や汗が溢れまくっていた。

何故。

どうして。

こんなところに――――

（そんな馬鹿な！　何故こんな所に管理局の、それも機動六課の魔道士がいるのかね!?　しかももう1人の男、今“高町”と……エース・オブ・エースの血筋か…？　とすると…まさかこの銭湯には…今機動六課の魔道士（エース）達が来ているのか…！？）

引きつる頬を意識して抑えながら笑顔を作る次元犯罪者――ジュエル・スカエルッティ――否。ジェイル・スカリエッティは、全力で頭を回転させながら、この状況をどう打破するかを考え始めた。

男湯ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

「この海鳴饅頭もらおうかの。後このキーホルダーも…」

「はい、毎度ありがとうございます！　お嬢さん綺麗だからオマケしときますよ」

「おぉ、助かる。礼を言うぞ、ありがとうの」

此方は紫色の髪（ジェイル・スカリエッティ）の男と先程別れたばかりのゴスロリ服を着たアホ毛のある女性。　どうやら誰かへのお土産を買っているようだ。スカリエッティを至る所に連れまわすなど好き勝手な行動が目立つ彼女だが、それでもしっかりと自分の家族のことは考えている辺り素晴らしい女性だといえるだろう。

既にその手には大量の買い物袋。どう考えても第三者視点から見ればそれは１６５ｃｍ弱の女性が持てる量ではないのだが、彼女は疲れる様子もなく軽々とそれを持っている。それどころか何が嬉しいのかスキップをして坂道を登ったりする……のだが…。

スキップするたびにそのアホ毛と、身長に似合わない豊満な胸が揺れるもんだから彼女・妻が一緒にいる男はそれこそ必死にその現実（ましゅまろ）から目を背けんとしていた。　やはり誰でも彼女や妻は怖いが揺れる胸＝ロマンという考えが強いのだろうか。

『…あなた？　ちょっとあっちに来てくれないかしら。　お仕置き（おはなし）があるのよ』

『待て、誤解だ桃子！　私は決して彼女の揺れる胸を見たりなどはしていｎ――――』

しかし中には目を背けるのに失敗し、現実どころかこの世から旅立ってしまう者もいるのだが、世界とは非情である。　所詮は元々妻がいるというリア充な者、ましてやその妻が綺麗であったあらば同情などすることもないというのがこの世界の真理だからだ。いいや違う、決して作者の個人的な感情は一切含まれていない。

更に観察してみると、独り身の男には天と地のような違いがあるのが分かる。　卑しい笑いを引っさげて隠そうともせずジロジロと見る輩、見ないよう我慢しているが顔を赤くしつつもチラチラっと見てしまう輩。別に彼女は気にしないようであったが、前者の男はそんなことを女性の前でするから彼女が出来ないんだと言ってやりたい物である。　余談になるが彼女的には後者の方がそそｒ…タイプらしい。

そして彼女が注目されるもう１つの要因はその服装である。　服装としては半袖にスカートなのだが、上半身を見れば胸元が大きく開いていて、滅多に見ることは出来ないであろう深い谷間が顔を覗かせている。　スカートは膝ぐらいまでしかない上に前述したように気まぐれでスキップすることがあるため下着が見えるか見えないかの瀬戸際という、何とも（別の意味での）男のロマンが凝縮された女性である。　そっちの趣味を持つ男性には堪らないだろう。

「ふむ、この位かの…これだけあればウーノ姉上やクアットロ姉上もどうにか買収できるはず…」

そしてこの一言さえ無ければ家族思いの女性で通っていたのだが、残念ながらそうも行かなかった。　勿論、本当の意味での日頃からの感謝をこめて買ったのだがやはり怒られるのは嫌であった。

（さて、これは隠しておかなければの）

自分の力を使えば、誰の目にも止まらないところへ簡単に隠せる。やろうと思えば能力を使って地中にだって隠せるのだが、流石にそこまでする必要はないような気がする。

そう考えた女性は、素早く誰もいない路地裏へ入り込むと跳躍してビルの屋上に着地する。　しかしそこにタイミングを合わせたかのように懐中電灯の光が自分を照らしたことで、思わず彼女は舌打ちした。

「誰だ！？」

このビルを見回っている警備員らしい。　声から男と推測した女性はニヤリと笑うと、面倒なことにならないうちに買い物袋を置いて素早く男に接近した。

「っ！？」

「…、」

素早く相手の男の歳を肉体年齢・精神年齢などから計算し、わずか5秒で22歳程度だと予測し、再び笑う。

「のう…？」

「…！？」

まずは抱きつき、その豊満な胸を押し付ける。

その後潤んだ瞳で、相手の目を正面から見る。　すると、身長差から自然と上目遣いになる。

そして、色っぽい声と子供のような声が合わさったような不思議な声で、彼女は泣きそうな顔を作りつつ。

「…妾の言うこと…聞いて、くれないのかの……？」

と、一言。

それだけで、いきなり男の身体から力が抜け、その瞳から光が消える。

「…ふ、容易いものよ」

それを確認した女性は、抱きつくのを止めて少々距離を取る。その顔に涙や泣きそうな顔など微塵も無く、今は不敵な笑みが張り付いているだけだ。

「もう一度聞くのじゃ」

悪戯っぽく笑い、一指し指を口元へ持って来てから、彼女はウィンクしながら言った。

「妾の言うこと…聞いてくれるじゃろ？」

その言葉を聞いたと同時、警備員の男はディールに跪いてこう言った。

「仰せのままに、ディール様」

艶やかなる誘惑（グロス・チャーム）――

今ディールと呼ばれた女性の為だけにある希少能力。

相手の目を見ながらでは無いと発動できないが、『自分を見て動揺した人間』を自由に操れる洗脳系の希少能力。

ただしこの場合の『動揺』というのは理性に揺らぎがあった場合のみの判定となる為、大半の男は引っかかるだろうが超朴念仁な男だったり、まだそういったコトを知らない子供だったり、そもそも“性欲”という概念が存在しない男だったりすると引っかからない。

一応女性にも使えるが、そう簡単に“そっち系”の趣味を持つ少女はいない為まだ試したことは無い。

「ふふふ、本当に容易いのう。男というものは…これを使って落ちたことの無い男はまだいないんじゃからな。あ、そうじゃった、命令せねばの…そこの荷物を管理しといて欲しいのじゃ。傷1つ付けるでないぞ。良いな？」

「はっ」

「それでは頼んだぞ。あ、洗脳されていることも気づかれてはならんからな」

そう言って、女性――ディールもまた動き出す。

「買い物も終わったことじゃし、そろそろ妾も銭湯というものに行って見るかの。スカリエッティが念話をしてこないところを見ると、念話を忘れるほど寛いでいるということじゃろうし…ふふっ、楽しみじゃ♪」

ビルの屋上から、1人の女性が黄色い閃光を残して、消えた。

それは音も、証拠すらも残さず――後はただ、洗脳された哀れな男がディールの荷物を見つからないように屋上の更に分かりにくい場所に隠している姿があっただけであった――。

“銭湯”（前編）（後書き）

天破「後半がディール無双だった。反省も後悔もしていないが、読者の皆さんには本当に悪い事をしたと思う。すいませんでした」

フラン「作者、ちょっと疑問に思ったのですけれど」

天破「？」

フラン「何故私には“艶やかなる誘惑”が使えないんですの？」

天破「いや、それは希少能力だから。人には向き不向きもあるわけでさ」

フラン「ちょっとその向き不向きについて、どの辺なのがそうなのか外でお話しましょうか」

次回は遂に女性風呂ｓｉｄｅ！！　全裸待機で、いいんじゃないかな↑

春斗「あれ、作者は？」

フラン「さぁ？　夢の島の何処かにいるとは思いますわよ」

春斗「さらば作者、安らかに眠れ」

次回もお楽しみに～♪

“地球”（中編）（前書き）

この小説は、１８禁ではありません（重要）

すいません、何の事だか分かりませんよね。それよりも何故中編なのか説明しろって感じですよね。

ディールの下りが長すぎて、ロストロギアまで入りきらなかったんです。もうその辺は皆さんの情熱が私の指を天元突破させたってことで勘弁してください。

では恒例のこの話を読むに当たっての注意事項！

・フラン可愛いよフラン
・ディール様マジディール様
・ＹＡ――――――――――ＨＡ――――――――！！春斗を○せぇっ！！
・ラストはギャグ的な意味でのスカリエッティ無双です。スカさんが嫌いな方はお気をつけて；
・ディールによる被害者＝はやて、スバル、なのは
・春斗とフランに本人たちも知らないところで進展が…！？↑
・ちょっと百合要素が入っていると感じるかも知れません！ご注意ください。

意味分かりませんね。私も分かりません。

今回長くなりました…読み難い上に駄文ですが、ご容赦くださいm
＿＿m

では、どうぞ＾＾

“地球”（中編）

時間は、春斗とエリオが銭湯に自分達以外の誰かの服が入っているのを発見した頃にさかのぼる。

女性風呂ｓｉｄｅ

此方も銭湯自体は『どーん』と擬音が付きそうなほど豪華であり、なのは達のような大人数であっても持て余す様な場所だった。このことから、わずか3人しかいない男性風呂がどれだけ彼らがその空間を持て余すかがわかるだろう。

「これだけ広ければ一杯泳げるよ、フェイト！」

「いやアルフ、およいじゃ駄目だがらね？」

「え～…？」

「そんな不満そうな顔されても…スバル？何で貴方もショック受けたような顔になってるの？」

「いや、あの、ごめんなさい！　アルフさんと同じ事考えてました！」

「……」

「スバルさんらしいといえばスバルさんらしいですが…」

スバルのまさかの告白に、フェイトもフランも苦笑で返したので彼女は少し恥ずかしそうに俯いた。

「だ、だって広いと泳ぎたくなるじゃないですか！　ね、ティア！？」

「私に振らないでよ！？　泳ぎたくならないわよ！」

「そ、そんな…！　春斗さんなら乗ってくれるところなのに…」

「確かに乗りそうですわね……っと、早く入りましょう？　このまま入らなければせっかく来た意味がありませんわ」

「あ、はいっ」「あぁ、そうでしたっ！」

フランに促され、ゆっくりと熱い湯船の中へ身体を入れていく2人。やはり男性風呂ｓｉｄｅとは違って、その行動が色っぽく見えるから人間の目と言うのは不思議である。

「はぁ…気持ちいいですわね…」

その横では、綺麗な肌にお湯を掛けながら湯船の中で足を崩して座るフランがいる。なんと言うか、元々顔が整っているのもあって扇情的だ。スバルらとはまた違った魅力があるといえばいいだろうか。

暫くは話すことと言ってもこの銭湯の感想位で、それぞれゆったりと疲れを癒すべく湯船に浸かっていたのだが、やはりこれ程女性が集まれば会話の内容は自然と決まってくる。

「さて…皆、良く聞き？」

「「「？」」」

「――これからフランが、春斗のどういった所が格好いいかを言ってくれるそうや」

「「おぉ～」」

「！！？」

そんな話は聞いてない。フランが思わず叫んだのは言うまでも無いだろう。

「はやてさん！いきなり何を言ってますの！！？」

「え、話さへんの？」

「如何して話すのが当然見たいな口調で話してるんですか！春斗に格好いいところなんて…」

風呂で体温が上がったからか、それとも恥ずかしさからか。頬を赤く染めたフランが、恐らく『ありませんわよ』とでも続けようとしたところでフリーズする。

「…か、格好いいところなんて…」

その目は右に行ったり左に行ったりで、顔も徐々に赤くなってきている。体温が上がったから赤くなっているという言い訳はもう通用しないだろう。

「あ、あんな、バカで、鈍感で、私が告白されても何も感じない男に…格好いいところなんて、ありませんわよ…」

どう考えてもその様子から見て、はやての言う『格好いいところ』という言葉に心当たりがあったのだろう。遂には恥ずかしさが頂点に達したのか、高い身長を器用に曲げて、口まで湯船の中に入ってしまった。

そしてそれを見たはやてがにやりと笑い、

「ほほぉ、格好いいところが無いんやな…？」

「あ、ありませんわよ」

「それなら格好悪い所はあるんやな？言って見てくれへんか？」

「そ、それならいいですわよ？　えっと…」

話題がそらせて安心したのか、顔の赤みも引いて急に饒舌になるフラン。それがはやての罠とも知らずに…

「は、春斗は勉強嫌いでいつも私が傍にいて逃げないように監視し無いと駄目なんですわ。それに好き嫌いも多くて、そのくせ味に煩くて…いつも私が作りに行ってあげてるんですのよ？それに、この前町を歩いてたら知らない女の人と歩いてて…春斗によればなのはさんのファンでなのはさんのことを聞かれていたらしいですが、アレは春斗を狙っている目でしたわ。いつも春斗は鈍感だし、女心が分かってないので、ほとほと困って…」

「…ほぉ…それは裏を返せば、『いつも春斗と二人きりで勉強して、いつも春斗に自分の手料理を食べさせてあげてて、しかも春斗が鈍感なのに困っている』ってことやなぁ…？」

「そ、そうですけど……あ…」

この瞬間彼女は自分の話した言葉の意味をようやく正確に自覚し…
今度こそトマトの如く真っ赤になった。

「ち、ちち、違います！違いますわよ！　今のはなし！　書き直しですわ！」

「いや、それはありえへんから…書き直しってなんや書き直しって」

「い、いや口から咄嗟に…そんなことどうでもいいですわ！　いいですか、誤解しないで下さいね？！春斗のことなんか好きでも何でもないんで――」

相変わらず顔を赤らめつつも、ニヤついているはやてに釘を刺そうとした瞬間、男湯の方向から声が響いた。

『うぉおい！？何故にキャロがここにいる！！？』

『キャ、キャキャキャ、ｋｙｙｙｙｙｙ…』

『エリオ落ち着け！　キャロ！　これ以上この場で今お前の身体を覆っているタオルを外すなどと言う愚行を犯すな！エリオが死ぬ！』

「「「……」」」

取りあえず、向こう側がカオスになっていることだけは理解できた

女性陣。

暫く騒いでいた男湯の方だが、段々春斗の突っ込みとエリオの壊れたような声が聞こえてこなくなってきたことから事態は集束したと思われる。どう集束したのかどうかはわからないが。

「あぁ、なるほど。誰かいないと思ったらキャロでしたか…」

向こうのカオスな状況を受け取って、幾分か冷静になったフランが女湯を見渡しそう呟く。

「あはは…でも、大丈夫かな？向こうにいて」

「心配なら念話してみてはどうですか？春斗には通じませんが、エリオとキャロは出来たかと…」

「あ、そうだね」

苦笑したフェイトが、フランの提案にしたがってゆったりと湯船に浸かりながらエリオへと念話を飛ばす。

（エリオ？　聞こえる？）

（あ、フェイトさん！？　あの、湯船がキャロに入ってきて男湯に

っ）

（落ち着いて、言葉になってないよ）

どうやら落ち着いたのは身体のみで、心のほうはまだパニック状態らしい。

（す、すいません…）

（えと、キャロが入ってきたんだよね？　春斗が叫んでたから間違いないと思うけど…）

（はい、その通りです…助けてください…春斗さんに完全に見捨てられました）

その言葉には彼の切実過ぎる思いが篭っていたのだが、エリオの子供としての恥ずかしさを未だに完全には把握していないフェイトはそれに気づかず。

（いいじゃん、そのまま一緒に入っちゃいなよ。流石に春斗もキャロなら変な事言わないだろうし）

（えぇぇ！？）

その言葉は紛れも無くエリオ終了の知らせであった。

（だって、春斗とエリオ以外にはいないんでしょ？男湯？）

（…っ！いやいや、実はいるんです！　…今春斗さんと良く分からない話題で盛り上がってますが…２０歳よりちょっと上っぽい男の人が！）

（あ、そうなの？）

その『エリオと春斗以外には誰もいないだろう』発言を好機と見たエリオがここぞとばかりに畳み掛ける。　子供なりに頭脳をフル回転させ、自分達以外の男性が入っていることが分かれば見逃してくれるかもしれない。そう考えたのである。

そして女湯が誰もいなかったからだろう、まさか男湯に誰かいるとは思わなかったフェイトだが暫く思考して、再びエリオに向けて爆弾を投下した。

（うーん、ちょっと心配だけど春斗がいるんなら大丈夫だと思うし…何も心配は無いよ、エリオ。キャロとの親睦を深めるいい機会でしょ♪）

（親睦を深めるステップが飛びすぎですよー！）

彼の言うことは最もだ。確かに最初はちょっとしたハプニングがあったにしろ、まだ彼らは少し皆の前で話したり雑談するのが丁度い

い位だとエリオは思っている。それが階段を1段、2段所か5段位飛ばしていきなりお風呂である。しかもお互い裸で。

10歳頃になると異性…というか『性』そのものを意識し始めることがあるというが、やはり強ち間違っていないのだろう。　現に今エリオはキャロの方を見ないようにするので既に精一杯である。

（エリオは男の子なんだから、キャロを引っ張ってあげないとね）

（会話が繋がってるようで繋がってませんって！）

「フェイトお姉様、今宜しいですか？」

（あ、ごめん。それじゃあ頑張ってね！）

（だから何をですか！？フェイトさ――――）

エリオの切実な声＜フランの声。彼女も無意識なのだろうが、今この瞬間にそんな公式が成り立ってしまった。　エリオには黙祷を捧げるしか手は無いだろう。

『いやいや！　助けてくださいよ！』

『エリオ君、いきなりどうしたの？』

『あぁあああキャロ、こっち向かないでっ！』

そんな声が男湯の方から聞こえてきたとか何とか。

「ごめんねフラン、何だった？」

「向こうに露天風呂があるらしいので、一緒に入りませんか？　そろそろ私ものぼせて来ましたし…」

「そういえば、フランは昔からのぼせるの早かったね」

「なので、最後くらい露天風呂でどうでしょう？」

「うん、一緒に行こう」

「あ、私も付いていっていいですか？」

「あら、ティアナ。大歓迎ですわ。一緒に行きましょう♪」

そんな男湯のカオスな光景も知らず、彼女達は更なる娯楽を求めて露天風呂へと歩いていった。

女湯ｓｉｄｅｏｕｔ

男湯ｓｉｄｅ

さて、ここでキャロが男湯へ入ったばかりの彼らの状況を確認してみよう。

「さて…フェイトさんからの処刑は、全治５ヶ月程度で足りるだろうか」

「キャ、キャ、キャロ、如何してここに!?」

「…（春斗君の台詞からしてフェイト・テスタロッサもここにきているのか…というかキャロ・ル・ルシエ、竜の召喚師ではないかね…何故此処に?）　ふむ…処刑だとか全治５ヶ月とか明らかに危険な単語を呟いているところ申し訳ないが、春斗君、君の知り合いかね?」

「ああ、まぁ…知り合いの女の人の娘だ」

実際は娘では無いのだが、養子云々を説明するとややこしい上に面倒なことこの上ないと考えたので省いた春斗であった。

「で、キャロ。何故此処にいる?　お前は女。俺達は男。ＯＫ?」

風呂に入る前も見たことがある光景が再び展開される。違う点があ

るといえば、紫髪の２０代後半程度の年齢と思われる男性――ジュエル・スカエルッティ――否、次元犯罪者ジェイル・スカリエッティがいる点であろうか。

スカリエッティが何故こうもリラックス（心境は少々複雑だが）した感じで彼らと話しているかといわれれば、まず自分の顔を見ても通報する様子が無かったのを不審に思ったのが始まりである。
念話で高町なのはやフェイト・テスタロッサ等の隊長各に連絡され、既に風呂の外で待ち伏せられている線も考えられたが、それにしては動揺と言うか何かを隠しているような動作が全く見られない。春斗はともかく、まだ子供のエリオまでそんな感情を隠せるとは思えない。
決め手はキャロが入ってきたことだった。　彼が仕入れた情報では、フェイトはキャロとエリオを実の娘と息子のように大事にしているとのことである。万が一の場合もあるので本当に自分がいるかどうか確かめるために入ってきたという考えが頭を掠めたが、それならサーチャーなどを飛ばせば済む話である。
結論として、現在男湯に入って来ている機動六課の魔道士達は――ジェイル・スカリエッティの顔を知らない、ということになる。

まだ気を抜けない状況ではあるが、デバイスを携帯している様子も無いので今はリラックスすることにした。普通次元犯罪者のみならず犯罪者というものは、警察（管理局）が近づけば何とかして逃げようとするものだがそれをしないあたり彼が変わり者であることが伺える…と思う。

「あれ？　春斗さん、その人は？」

「あぁ、この人は…」

「ジュエル・スカエルッティだ。宜しく頼む」

「はいっ！　キャロ・ル・ルシエです！」

「はっはっは、元気な子供じゃないか。　親の顔が見てみたいね」

「止めとけ。　あの人のことだ、キャロに付く男は数秒のうちに闇に葬られるに違いない」

「…その女性は暗殺者か何かなのかね……？」

ちょっとフェイトの事が分からなくなったスカリエッティであった。

「って、何和んでるんですか！　キャロ、男湯に入ってきちゃ駄目だよ！　早く戻らないと…」

「ううん、大丈夫だよ！　ほら！」

キャロの指差す方向を見ると、先程エリオを追い詰めた例の看板が見える。　一体何を言いたいのかと不思議に思ったエリオ達だが、スカリエッティが思いついたように言った。

「ああ、なるほど…『女湯への男児入浴は１１歳以下のお子様のみでお願いします』だが、逆に１１歳までなら女性でも男湯に入って

いいということなのか」

「はい！　受付の人にも許可をもらってきました！」

「その行動力に俺は完敗だ。　エリオ、諦めろ。　お前はキャロには勝てない」

「そんなぁっ！？」

「ジュエルさん、他の風呂に行こうぜ。　若い二人を邪魔したら行けないだろうし」

「ふむ、分かった。大人は大人、子供は子供で出来る話もあるだろうしね。まぁ、二人ともゆっくり休んでくれたまえ」

「ちょっと！？春斗さん、見捨てないで下さい！」

「離せエリオ！　もはや事態は俺の手には負えない！大丈夫だ、お前らはまだ子供だから間違いは起きないと信じている！」

「間違いって何ですか間違いって！？」

「エリオ君、ほら露天風呂があるよ？行こ？」

「わぁああ！？　キャ、キャロ！まだ僕髪の毛も洗ってないから、その後で…」

「あ、じゃあ私が洗ってあげる！」

「…え」

エリオ、自爆。

「春斗さん、ジュエルさん、助け…」

「あ～、この泡が出る風呂気持ちいな」

「この電気が流れると言う風呂も中々だ…身体が解れるようだね」

「駄目だ…！　完全に見捨てられた…！」

「ほら、エリオ君！　此処に座って、洗ってあげるから♪」

そしてこの数分後、フェイトからの念話が入り…現在に至る。

男湯ｓｉｄｅｏｕｔ

露天風呂ｓｉｄｅ

「ふぅ…良いお湯だね」

「外のお風呂っていうのも風流ですわね～」

「はい…何だか和みますね」

此方はティアナ、フラン、フェイトの3人が浸かる露天風呂。　まぁなんと言うかこの3人が並ぶと…持つ者と持たざる者の違いがはっきりするというか…。

「……」

「フラン！？　どうしていきなり負のオーラを纏い始めたの！？余りの力にお湯が振動してるよ！？」

「いえ…、何故か誰かを可及的速やかに殺さなくてはなら無い気がして…」

「結構危険な考えだよそれ！　落ち着いてフラン！」

「…きっと春斗ですわ……銭湯から出たら本気の一撃を2～3発は打ち込まなくてはなりませんわね、これは…」

「春斗さん…今回ばかりは少し同情します」

謂れの無い罪で、また1つ尊い命が消えようとしていた。

『…っ！！』

『どうしたのかね？』

『分からん…分からんが可及的速やかにこの銭湯から逃げた方がいい気がする…！』

『一体何があった！？　落ち着きたまえ！そしてその格好で逃げれば捕まってしまうと思うのだが！？』

男湯でそんなことがあったとかなかったとか。

「冗談ですわ…多分…」

（…これ多分フラグ立ったなぁ）

「ティアナ？　そんなこの世界の真理を悟ったような顔をしてどうしたの？」

「い、いえ、なんでもないです！」

フェイトの言葉は当たらずも遠からずなのだが当然この場では触れないこととする。

「…で、さ。フラン」

「何ですか？　フェイトお姉様」

「さっきはやてが言ってたこと、本当なの？」

「――――」

まさかこの場でもその話題をぶり返されるとは思わなかったフランは暫しその言葉の意味を考えて…再び湯船の中に顔を埋めた。

「…フェイトお姉様までそんなことを…／／／　だから、私は、春斗のことなんかなんとも思ってませんって！」

「でも、さっきの様子を見る限り…好きか嫌いかは別として、格好いい所はあるんだよね？」

「あー、えーと、それはまぁ…」

「それに、一緒にサーチャーとかを設置していたときにも春斗さんは自分の物だって言ってましたしね」

「ティアナ！　何で此処でそれを言うんですかっ！／／／」

「…へぇ…それは少し詳しく聞きたいなぁ…」

「…ふぇ、フェイトお姉様？　目からハイライトが消えてますわよ？」

今度はフェイトから負のオーラが立ち上り始める。　それを見て、

もしかしたら負のオーラって伝染するんだろうか…と彼女らしくも無い変なことを考えてしまったティアナだった。

「で、ですからね、フェイトお姉様。春斗の為にも説明させていただきますが、私は春斗のことなんて何とも――」

そんなフェイトを見て春斗への危険を悟ったフランが、彼の為にそして自分の為に色々と説明しようとした、その時。

ガラッ

「わあ～…凄い広いお風呂だね、エリオ君」

「そ、そうだね…／／／」

「あっはっは、もう諦めろエリオ。　人生時には死を覚悟すｒ…違った、諦めることも大切だぞ」

「いや、どういう間違え方ですか今のは…っ…て…？」

「んあ？　どうしたエリオ、さっさとはいらねぇと湯冷めしちま――」

「「「…」」」↑フェイト、フラン、ティアナ

「あ、フェイトさんにフランさんにティアナさんだ！」↑キャロ

「「…」」↑春斗、エリオ

時が止まったかのように、キャロ以外の全員の動きが停止する。

当然理由は――書くまでも無いだろう。

「…よし…状況を整理するか…」

春斗がおもむろに呟き、現実逃避とも呼べる状況整理を始める。

彼もまた、脳の処理速度が追いついていないのだろう。

「…目の前にフェイトさん、フラン、ティアナ…此方にはエリオ、今まさに湯船に浸かろうとしているキャロ…そして今思い出してみれば混浴と書いてあったような気がしなくもないこの露天風呂…つまりこの状況から導き出される、俺がすべき行動は…」

そういうと、春斗は自然な動作でフェイトらに背中を向けてエリオの方を叩いた。

「エリオよ」

「は、はいっ！？」

「俺の部屋のベッドの下の金庫の中になのは姉の目を潜り抜けて生き抜いてきた聖書（エロ本）がある…ヴァイスに渡してはくれないか。そして伝えてくれ、『高町春斗は男のロマンの為に散った』と」

取りようによっては遺言に聞こえるのは気のせいではあるまい。

「さて、と俺は…」

「…春斗…何処に行くんですの…？」

「…なんだフラン。別にかまわないだろ？俺が何処に行こうと」

「…見ましたわね？」

「何も見てねぇ。俺は何も覚えてねぇ」

「見ましたわね？」

「何も見てない。　全知全能の神に誓って俺は何も見てｎ」

「皆様の胸の大きさはどうでしたか？」

「フェイトさんはＦ以上、ティアナはＣ～Ｄの間、フランはＡＡ～

Aだな、じっちゃんの名にかけて間違いねぇ」

気持ちいい位の即答であった。　取りあえず春斗は全世界の金田一ファンに謝ったほうがいいと思う。

「…っ！！／／／／　こ、のッ…ばかはるとー！！！！！」

「しまっ……バカ正直に答えちまった…！　この高町春斗、一生の不ｋ――――」

ドスッ！！（春斗の鳩尾に正確にフランの拳が入った音）

…ド　サッ（春斗が一瞬で気を失い倒れた音）

さて、いつもならこの状況で春斗が不幸になるといういつものオチがつくところだが…残念、今回はこれだけでは終わらない。

「はぁ、はぁ……あ…っ！？」

ここで、もう一度この状況を整理してみよう。

此処は銭湯である。いつものように春斗たちは服を着ていない、当然フランや春斗もタオル一枚である。

そして銭湯に来る大体の男性客は腰にタオルを巻いていることが多い。巻き方はそれぞれだが、今回春斗が持ってきたタオルはどうにも小さかったようで、彼の巻き方では押さえて無いと直ぐに落っこちてしまうような感じだった。

…もう、お分かりだろうか。　そんないろんな意味でのギリギリを維持していた春斗が気を失い仰向けに倒れてしまったのだとしたら…どうなるのかを…。

「…ぁ……ぁああ…っ／／／／／」

「え？……ってうわぁっ、春斗さぁあん！！？」

最初に気づいたのは当然のようにフラン、そしてその次にエリオ。
あまりの“光景”に頭が追いついていかないらしいフランだが、顔を真っ赤に染めながらも何故か“それ”から目を離さない。

そしてそんなフランに気づかないまま慌ててタオルを腰に掛けるエリオ。　彼とて少年ながら異性にそれを見られてしまうことの恥ずかしさを知っている。…ただ、子供と大人の“それ”には大きな差があることを知ったのもエリオは初めてだった。

その点では春斗も色んな意味で役に立ったのかもしれないが、もっと別のところで役に立って欲しい。　いろんな方からの切なる願いである。

「…」

「…」

そして腰にタオルを掛けてから、ふとエリオが上を見上げるとまだ顔が真っ赤のフランと目があった。

「…見ましたよね」

「見てませんわ」

そして先程と立場が逆転した。　いや、１０歳児に追求される１９歳の女性もどうかと思うが。

「フランさん、見てましたよね？顔真っ赤にしながら」

「いいえ、見てませんわ、あ、あんなもの覚えてませんわ！／／／／」

「今自白しましたよね？！　結構大胆に！」

「はっ…いや、いや見てません！わ、私が見るわけが無いでしょう！？　直ぐに目を逸らしましたわ！」

「本当ですか？」

「勿論ですわ！」

「なるほど…」

「…な、なんですか、エリオ」

「…本音を聞いても宜しいですか？」

「……い、色々な本で見るよりも…大きかった、ですわ…／／／／／／」

「……フランさん…」

「……はぅ……／／／」

パタッ（フランが遂に気を失い倒れる音）

そして兵器としての頭を持ってしても遂に処理が追いつかなくなったか、顔を真っ赤にしたまま気を失って倒れてしまった。彼女の場合、想像以上に春斗のが大きかったのと純真無垢なエリオの瞳に責められるような感じで見つめられるのが耐えられなかったのかもしれない。

それを聞いて（彼女達も起きたことを把握し顔を赤くしていたが決して見ては居ない）、取りあえず春斗を運ぶ――のは後回しにしてフランの介抱から始めることにしたフェイトとティアナだった。

神の気まぐれにも程があるのだが、皮肉にもこれで起動六課所属の“兵器”が全て気を失ったことになる。…気を失った理由は到底話せるものではないが、ともかくこれで“兵器”か“人間”かを区別出来る者がいなくなったのである。

そんな時…運がいいのか悪いのか、銭湯の前に1人の女性が現れた。

露天風呂ｓｉｄｅｏｕｔ

銭湯入り口ｓｉｄｅ

「…到着…じゃの」

成人というには少々小さい身長を持つ女性――ディールがそう溢したのは、丁度フランが倒れてから１０分程が経過した後だった。

「スカリエッティからは相変わらず連絡はないから…楽しんでいるんじゃよな？　もし何かあったりとかすれば大変なことになるんじゃが…主に妾とスカリエッティ本人が」

ならば何故銭湯を紹介したのか。

「地球といえば娯楽、娯楽といえば銭湯…と知り合いに聞いたのじゃ」

あらゆる意味で間違った情報だ。　銭湯は確かに娯楽の１つだが、娯楽＝銭湯とはどういうことなのだろう。　彼女の交友関係が気になるところである。

「確か、何処かの世界の王とか言っておったかな…まぁこの話はいいじゃろ。というか妾は誰に話しておるんじゃ？　…少し疲れておるのかのう…早く帰って休むとするかの…」

現在ディールは、帰宅した後に待ちうけるであろう説教のことを完全に忘れていた。

「さて、まずは受付を…っと、うん？」

そして銭湯の暖簾を潜り…いきなり首をかしげた。

番頭がいないのだ。　受付に誰も居ない。

「おかしいのう、誰も居ないというのは…あ、これを鳴らせばよいのか」

誰も居ない受付にあるチャイムを見つけ、指先で押す。『チリンッ』と軽快な音が鳴って暫くすると、何故か男湯のほうから1人の女性が出てきた。

「申し訳ありませんお客様、お1人ですか？」

「うむ、妾は大丈夫じゃが…何かあったのかの？　今男湯の方から出てきたようじゃが…」

「あぁ、えーと…その…男性のお客様が露天風呂で倒れてしまいまして、先ほどまで救護室でお世話をしていまして…／／／」

何故そこで顔を赤くするのか少し疑問に思ったディールだが、“銭湯”と“お世話”というワードからぴんと来た。

「あぁ、なるほど。理解したのじゃ。そういうことなら仕方あるまい」

「そ、そうですか。それは何よりです」

「で？」

「…えっ？」

「…どうじゃった？」

「…彼氏より大きかったです／／／」

どうやらその女性はその男性の大切な物を見てしまったらしい。
その真っ赤になった顔を見たディールは更にこの女性を弄りたい衝動に駆られるが、何とか自粛した。

「くっくっく、お主も中々やるのう。　まぁそれは置いといて…いくらになるかの？」

「あ、えと…大人料金ですので…」

提示された金額は全く問題ないものだったのでその場で払い、ついでにタオルやシャンプーも買った。　少し顔が赤い女性に『ごゆっくり』と言われて少し笑いながら頷き、女湯の暖簾を潜って…

「…おや、たくさんあるのう」

どうも１０人以上の衣服が入っているのが分かった。この時間にこんなに来るものなのかと疑問に思い、引きかえして聞いてみれば、どうも団体客が来ているらしい。

団体客なら纏りもあると思うし、大丈夫だろう…そう考えたディールは、伝え忘れたことに謝罪する女性に対し気にしてないと告げて再び女湯へ向かった。

「ふふ…楽しみじゃな…どんな客がいるかの？」

服の止め具を慣れた手つきで外して、真っ黒なゴスロリ服を床へ落とした後に開いていた籠へと投げ入れる。

「…ん、シャンプーとタオルも持ったことだし…入るとするかの」

そう呟き、どんな客が入っているのか楽しみにしつつ、彼女がその扉を開けた。

「…おぉ、なかなか広いの…」

銭湯ｓｉｄｅ　改めディールｓｉｄｅｏｕｔ

女湯ｓｉｄｅ

ちょっとした（？）事件はあったが、改めて露天風呂に浸かっているフェイト、ティアナも含め全員がゆったりと湯船に浸かり、日頃の訓練や出動の疲れを落としていた。

一部、巨乳に敵意を光らせてる者やあわよくばその胸を揉まんとする者もいるが、此処ではあえて拾わない。

何はともあれ、何事も無く日ごろの疲れを癒していた――――その時だった。

女湯の扉が開き、こんな声が聞こえたのは。

『…おぉ、なかなか広いの…』

「（一般客!?　やばっ…アルフ、耳と尻尾隠してくれんか!?　その他の面子も魔力を隠すんや！　絶対に不審な様子を見せたらアカンで!）」

「「「（了解!）」」」

まさかこの時間に客が入ってくるとは思わなかったはやては面食らうが、そこは機動六課部隊長。直ぐに全員に念話で指示を出して隠し通すことを命じる。　命じた後に魔力を隠す必要は無かった気もしたはやてだが、念には念を入れたことにして黙った。

『～♪』

問題の女性は鼻歌を歌いながら湯煙の中を此方に近づいてくる。『問題』ということでもないのだが、万が一自分達が魔道士だとバレたらややこしいことになる。場合によってはミッドチルダで記憶を消さなくてはならないかもしれない。　そう考えたはやて達は、ならべく不審がられず『一般客』を装うとして――。

「…ん?…おお、奇遇じゃのう。　あのエース・オブ・エースや夜

天の王率いる機動六課の面々と一緒に風呂へ浸かれるとは…もしや、任務の最中かの？」

「「「「へ…？」」」」

驚いたような顔をして、腰まである黒髪に一本のアホ毛を揺らす女性――ディールはまさかの自分達の天敵との邂逅に、顔とは裏腹に状況を楽しみ始めていた。

（まさか、機動六課も此処に来てるとは…何かのめぐり合わせかのう？　まぁ良い、相手は妾が兵器であることもスカリエッティに与することも知らぬじゃろうから、このまま入るとするかの…）

「あの、貴方は私達を知ってるんですか？」

一瞬で自分達の正体を見破られたはやてが、少しの警戒を持ってディールに問いかける。その言葉にディールはクスッ、と笑みを溢し、

「そりゃ知っとるに決まっておろう。　管理局全魔道士の憧れであり象徴、“エース・オブ・エース”高町なのは。　その幼馴染“金色の閃光”フェイト・テスタロッサ、同じく“夜天の王”八神はやて。　ミッドチルダの週刊誌を読んでいればこの位のこと子供でも知ることが出来ると思うぞい」

「…えーと…もしかして…」

「そうじゃよ。妾もお主たちと同じく、ミッドチルダから来た旅行客じゃ。　此処で会ったのも何かの縁じゃ、宜しくのう♪」

「…えぇえええ!?」

そんな偶然が普通あるものだろうか。　はやてが驚きで叫んだのも無理は無いだろう。

「…あ、思い出した！　確か、ラース君を届けてくれた…」

「そうじゃよ、改めて自己紹介するのじゃ。　名はディール、今回は…父？いや、義父…どっちでもいいか。　とにかく父親と共に慰安旅行に来たのじゃ」

「そ、そうなんか…なんや、緊張して損した…」

「はっはっは、しかしこんな偶然もあるんじゃなぁ…」

そこまで言ったところでふとディールは気づく。　女湯に機動六課の面々が揃っているということは、今男湯はどうなっているのだろう？　機動六課にも少なからず男性は居るはずであるから、もしかして既に拘束されていたり…

（…スカリエッティー？　おーい、聞こえるかのー？）

ようやく事の重大さに気が付いたディールは、少々心の中で焦りつつスカリエッティに向けて念話を向ける。　返事は直ぐに返って来た。

（おや、ディール。　どうしたんだい？）

（どうしたもこうしたもないのじゃ。　今女湯で機動六課の隊長陣が勢ぞろいしておるんじゃが，、そっちは大丈夫なのかの？）

（ああ、今の所は問題ない。　どうにも、男湯に入ってきた局員は私のことを知らないらしくてね…運よくバレてないよ、今の所は）

（今の所は、を強調するあたりお主の慎重さが伺えるの…そうじゃな、そういうことならもう少し妾もゆっくりとするとしよう。　ただ、危なくなったら此処を破壊してでも脱出するから言うのじゃぞ？）

（ああ分かった。　ありがとう、ディール）

無事は確認できた。　その事に気づかれないようにホッと息を付くディール。　これで本当に拘束されていたら洒落にならないところだった。

「…そういえば、ディールさん」

「なんじゃ？」

「あの、初めて会ったときの…骸に注意、ってどういう意味だったんですか？」

しかし危機は去ってはいなかった。

（…忘れてたの…何故あんな馬鹿なことを言ったんじゃ、妾は…）

もう会うこともないだろうと簡単に予測していたのだが、良くも悪くもやはりこの出会いは予想外であった。　今ほど彼女は自分の軽い口を恨んだことも無いだろう。

「ああ、あれはの…妾は実は占い師のようなものをやっておっての…ちょっとお主にそういった相が出ていたのでな」

我ながら苦しい言い訳である、と思う。　実際は無還者のことを色々と知っているからに他ならないが、そんなことを言えば色々と大変なことになる。　当然ながら、彼女としても銭湯での流血行為は望むところではなかった。

しかし事態はディールの思わぬ方向へと進んでいく。

「あ、そうなんだ？」

「!?…そ、そうなんじゃ（あれ？　信じた？　信じたのかっ!?）」

まさかこんな苦しい言い訳を信用されるとは思わなかったディールは、思わず驚きで少し目を見開いてしまった。

それとも何だろうか。たまたま相手が高町なのはだから騙せただけなのだろうか？　と考えていると更に思わぬ言葉が彼女から飛び出した。

「あ！　じゃあ、この中の誰でもいいから占ってみてませんか？」

「…なん…じゃと…？」

非常に困る頼みだ。しかも彼女の顔を見る限り素でこれをやっているのだから困る。　少しこの状況の打開策を思案するも、適当なことを言って占いもしないと怪しまれることに代わりは無い。　それならば、適当なことを言って誤魔化そう…という結論になった。

「わ、分かったのじゃ…そうじゃなぁ…じゃ、そこの女子。良いかの？」

「あ、あたしですか？　はいっ、宜しくお願いします！」

ディールが選んだのはスバルだった。　本来なら誰でも良かったの

だが、何ともなしに誰にしようかと選んでいたらこの部隊がとんでもない集団の集まりだということに気づいたのである。

（戦闘機人にプロジェクトFの成功体、夜天の書ヴォルケンリッターの鉄槌の騎士…この部隊は一体…明らかに一部隊が持って良い戦力では無いじゃろうて…）

だがそんなに興味も無いことだったので直ぐにその考えは霧散する。今は目の前でどんなことを言うのだろうか期待しているのが丸分かりな戦闘機人（スバル）の対処だ。

「そうじゃな…まず名前を聞いてよいかの？」

「スバル・ナカジマです」

「（スバル……ナカジマ？　何処かでそんな名前を聞いた気が…まあ良いか）ふむ、スバルじゃな？良い名じゃ」

「えへへ、ありがとうございます」

「そうじゃなぁ…お主、最近良いことがなかったかの？」

「えっ？」

ディールが取った戦法とは、あやふやな占いを相手に伝えることで相手に当たっていると錯覚させる方法――良く地球でも出ている占

い師の中にもそういった方法をする人間がいるが、いざ引っかかると気を付けていても当たっているように感じてしまう、人間の心理を上手いこと利用した手法である。

案の定、スバルは驚いたような顔をしている。　何かしら思い当たっていることがあるのだろう。　そう考えたディールは小さく微笑むと更に言った。

「そうじゃなぁ、最近誰かに嬉しいことを言ってもらえたとか…」

「な、なんで知ってるんですか！？」

それにしても分かりやすい少女である、と面白くなって、ディールは思わずクスッ、と笑みを溢してしまった。　どうやら隠しごとが出来ない真っ直ぐなタイプの少女のようである、と結論付ける。そういうタイプは嫌いではなく、寧ろ大好きなディールは笑顔を浮かべながら更に続ける。

「ズバリ当てようかの？　その者は…男性…？　いや、女性…」

それっぽく声を作りながら、バレ無い程度にスバルの顔色を伺う。　やはりというべきか、“男性”という単語を聴いた瞬間スバルの顔が少しだけ赤らんだ。

と同時にディールの口の端が吊り上った。『これは面白くなりそうじゃ…』的な意味で。

「ふむ、分かったぞ。その者は男性じゃな？」

「えっ…」

「驚くことでもあるまい？これは占いじゃぞ、妾はお主の心を見抜いてるのじゃよ」

当然大嘘である。　しかしただでさえ人を疑うことをしないスバルはそれを真に受け、『す、スゴイ…』などと呟いていた。

「さて、ちょっとここからは朧気なんじゃが」

「？」

「むむ…お主…その男性に恋心を抱いておるのではないかの？」

「……ふわぁっ…」

今度こそ急激に赤くなったスバルの顔。　それを見て更に笑みを深めるディール。

正直、その辺の局員でも出来るような簡単な推理である。　女性が誰かに嬉しいことを言ってもらえた、そしてその“誰か”が男性ならば、大方その女性はその男性に恋心を抱いているんじゃないだろうかという、身も蓋も無い言い方をすると推理でも何でもなくディ

ールの勘だった。　しかし現に当たっているのだから恐ろしい。

「その様子を見るに、図星かの？」

「あ、ぅ、あ、そのう…えぇと…」

「図星なんじゃな？」

「……はぃ／／／／」

返事は小さかった。

「…ま、誰かまでとは聞かんがの。　これで証明出来たと思うのじゃが」

「は、はい…ありがとうございます」

なのはも少し予想外だったのか苦笑している。　ただ、彼女がもしスバルが恋心を寄せる人物のことを聴けば、この銭湯は戦闘地域になる可能性があるのでディールの判断は賢明といえるだろう。

「あ、そうじゃ」

「え？」

まだ少し顔が赤いスバルが、黒い笑みを浮かべたはやてを牽制しつつ遠くの風呂へ移ろうとしているのを呼び止め、此方を向かせる。

「な、なんですか？」

「いや、占いの件でまだ一つ伝え忘れたことがあってのう…あ、恋人の件ではない、別の占い…というより勘なのじゃがな」

「？　はい」

可愛らしく首を傾げるスバルにススス、っと近寄るディール。

「お主――――」

「…ッ！？」

「――――つい最近、胸が大きくなったじゃろ！？」

ふにゃん…という擬音が付きそうな程勢い良く、ディールの手がスバルの胸を一瞬の後に鷲づかみしていた。

その速さたるや、なのはですら認知出来なかった程であり――――いや、だから凄いと言う訳でもないのだが…。

「うぁ…な、なんでそれを?!」

「言ったじゃろ、勘じゃ♪」

「ふわぁ、ぁ、ちょ、揉まないでっ、あっ」

「中々柔らかい胸では無いか。羨ましいのう」

「で、ディールさんだって私くらいあるじゃないですかっ…やんっ、何でこんな揉むの上手なんですかぁっ」

「いやいや、妾はギリギリD程度じゃよ。　お主のはほれ、どう考えてももう少し大きければEは行くと思うんじゃが?」

「質問にっ、んあ、答えて下さ…あぁん」

離している間も、スバルの豊満な胸から手を離さないディール。その一方でスバルも何とか抵抗しようとしてディールの持つ胸に腕が行くような構図になっているので、もう台無しにするような感じに言うとエロい。　春斗がいればきっとこの光景を激写していただろうが、恐らくなのはの手でカメラごと消し炭にされているだろう。

脱線したので話を戻す。

「はやてさ、助け…」

「誰かカメラ持ってきてや!　今なら特別ボーナスつけるで!」

「完全に敵に回った!?　じゃ、じゃあなのはさんっ」

「うん、はやてちゃん！私行くよ！　何だかこの光景は収めなくちゃいけ無い気がする！」

「なのはさぁあん!?　貴方はそんなキャラないって信じてたのに！…あ、ヴィータ副隊長、助けてくださ――」

「巨乳なんて消えちまえー!!」

「癇癪起こしてる!?　そんな…はぁ、ぁあんっ！　ぁ、ディールさん、そこは駄目で…にゃあぁっ！」

次々と部下の前でキャラ崩壊を起こして行く上司達。　因みに、何処をどう触っているかはご想像にお任せする。

「ふふ、良い声で喘ぐのう…止めて欲しいか？」

「当然、です…あ、うっ」

「それじゃあ、小さな声でも良いから、『お願いします、止めて下さいディール様』と言うのじゃぞ」

「えぇ!?　そ、そんなこと出来ません!!」

「それならこっちにも考えがあるんじゃがの…ふぅっ」

「うにゃあぁ！？　み、耳に息吹きかけないで下さいよ！ビックリするじゃないですか！」

「次は嘗めても良いんじゃぞ？」

「あ、ぅ、いや、それは止めてください！」

「で？」

「いや、だから…その…」

「なんじゃ？　大きな声で言わんとわからんぞ？」

「～～～～～っ！！／／／／　おっ、お願いしま――」

「はいストーップ！　それ以上はこの世界の存亡の危機が始まるかも知れへんから終わりにしてや」

遂に悪魔の手によって屈服されかかったスバルとこの世界だが、どうにかはやての手でスバルと世界は守られた。　あのままではこの世界にＲ－１８というタグが張り付いていたに違いない。

「手遅れな気もするんやけどな…」

「妾もじゃ」

「はぁ、はぁ…う～～～、あたし、なんてことを言おうとして…って、二人は何を言ってるんですか？」

当然ながら、その疑問に答える者はいなかった。

「しかし、中々いい揉みっぷりやなぁディールさん」

「ふっふっふ、そうじゃろ？　いやなに、スバルが感じやすそうな身体をしていたのでつい…」

「感じやすそうな身体って何ですか！」

「勘じゃ」

「勘！？　さっきも言ってましたけど、勘であたしの胸は揉まれたんですか！？」

どう考えても今日会ったばかりの面子ではおかしすぎるこの会話。だが被害にあったスバルも近づいて来たはやてもそれぞれ身近に居る者の胸を（本人たちはスキンシップのつもりで）揉むことがあることを忘れてはならない。　揉み屋というものは自然と集まるものなのだろうか？　だとしたら被害にあっている女性からしてみれば迷惑なことこの上ないだろう。

とにかく、これで銭湯で起きたプチ事件は幕を閉じたかに思われたが――

「しかしなスバル。それ程大きければ、その男も振り向いてくれる

んじゃないのかの？」

「ふわぁ！？／／／」

――しかしまだスバルの受難は終わらなかった。

「…ぅ…まぁその男の人も、あたし見たいな胸が好きって言ってくれたんですけど」

「ふむ」

「…こ、ここにはいないけど、もう1人の女の人もその人が好きみたいで…」

「三角関係か…なるほど、本当に面白…面白いのう」

「言い切った！？　…コホン、と、ともかくそういう訳なんで…踏ん切りがつかないと言うか…なんと言うか…ぶくぶく…」

言ってて恥ずかしくなったのか、銭湯の湯船に口まで沈めてもうそれきり何も話さなくなってしまった。

「さすがにもう限界か…すまないことをしたの」

「あの、ディールさん、気になってたんやけど」

「？　何じゃ？」

「ディールさんって、いくつ何や？」

「妾か？　…えーっと…」

はやての突然の問いに少し指を折って数え始めるディール。　だがそれも数秒程度のことで、顔を上げると笑いながら言った。

「今年で確か１９じゃな」

「そうか、１９か…私達と同じとｓってえぇぇえええ！！？」

「なんじゃ、いきなり大声を出して」

そして彼女の歳を聞いたはやてがいきなり奇声を上げた。他の女性も同様に、驚きで目を見開いていたりする。

「いやだって、それにしては身長と胸と歳が釣り合ってないかな～と…思ったり思わなかったり…」

「今の台詞に胸という単語が入る必要があったのかどうかは別として…そんなことを言うのじゃな…お主、今のをどう思う？」

「？　誰に聞いて…」

ディールが後ろを向いて誰かに話しかけると、それを疑問に思ったはやてがディールの後ろを覗き込む。

――目に一杯涙を浮かべたヴィータが、そこにいた。

「…あ…」

そして気づく。　ヴィータはとある理由から身体的な成長をしないことに。

「…いいよ…あたしはどうせ、小さくて、胸も無くて、癇癪もちだから…」

「ああっ！ヴィータ、違うんや！私はヴィータのことを言ったんやないんや！」

「しかもはやてと会う物凄い前から生きてるから、はやてよりも歳取ってるんだよな…」

必死に弁解するはやての言葉も聞こえていないのか、空――この場合は天井であるが―を仰ぎ見て、懸命に何かを堪えようとするヴィータの姿は非常に見る者の涙を誘う光景であった。

「…ヴィータ？」

「はやて…雨が降ってきたな…」

「いや、雨って…ここは屋内で、しかも銭湯――」

「いや…雨だ。絶対雨だ。これはどう考えても雨なんだ」

「……うん、そうやな…雨やな、これは……」

ヴィータのみに降り注ぐ雨を降らせた原因が自分であることを悟ったはやては、『ごめんな…本当に、ごめん…』と、心の底から謝ったのだった。

～それからは各自ゆっくりと銭湯で湯浴みタイム～

ここからは音声のみで楽しんで頂こう。

『ディール、それにしても大きいね…わたしくらいあるんじゃないかな』

『いやいや、なのはも中々じゃよ。　いいのう、身長が大きくてそっちの方もある女性は…憧れるのじゃ』

『いや、それは違うで。　ディール、あんたはそのままロリ巨乳路線で行くべきや。　そっちの方が希少価値が出ると思うし』

『いや、はやてさん、何かそのアドバイスは違うと…』

『そういえば先程スバルにも聞いたが、当然お主たちもしてくれるんじゃよな？』

『何をや？』

『想い人の話じゃよ』

『ぶっ！？　な、ななな何を言ってるのかなディール！？』

『何を慌てとるのじゃなのは？　やはりエース・オブ・エースも人の子じゃのう…♪　で、誰何じゃ？』

『いや、わたしじゃなくて最初にはやてを聞くべきだと思うな！』

『なのはちゃん！？　ここで親友を売るんか！！？』

『本当に大きいからのう、エース・オブ・エース殿は…この胸でその男性を篭絡するんじゃろ？そうなんじゃろ？』

『にゃあっ！？　そ、そんなこと触らないで欲しいの…／／／』

『お主にもこの胸が無かった時代があるのかのう。想像も出来ないのじゃ』

『というかなのはちゃん、小さい頃の口調に戻っとる戻っとる』

『にゃ…なんでそんな手馴れてるの、ディール…あ…んっ』

『家にいる姉上達で練習しとるからの』

『それを聞いて私はどう反応すればいいんやろか』

『はやてさん、何も反応しない方が吉かと』

『そんなことどうでもいいから助けてなのー！』

『ふふふ、さぁ次はお主じゃぞ、はやて』

『いいやろう、来るがいい…だが、私とてタダで揉まれる程安くは無いんやで！！』

『うぉ！？』

『ふふふ、ディールの胸も大きいな～』

『やるのう、はやて…だが甘いのじゃ！』

『え？　ちょ、ま、そこはやめ…この小説本当に滅びるって、んあ、あっー！！／／／』

『…すずか、何か騒がしいわね…向こう』

『そうだねアリサちゃん…ふわぁ～そろそろ出よっか？』

『ええ、そうね…もしかしたら皆はしゃいで、自分が茹で上がって

ることに気づいてないかもしれないし…』

「…ディール、男湯に丸聞こえなのだが…」

結局この状況で一番得したのは、恐らくディールでもはやてでも無く、聞きたくとも聞こえてしまうある意味ラッキーな立場にあった――ジェイル・スカリエッティであろう。春斗が聞いたら血涙を流して悔しがりそうな役得であるが、スカリエッティ自信はそこまで胸の大きさなどに興味が無いのであまり過度なリアクションは期待できないのが残念である。

「ある意味春斗君が居なくて良かったというべきか…流石に倒れたと聞いたときは焦ったがね…」

苦笑すると、彼はディールへと念話を繋げた。

（ディール、聞こえるかい？）

（聞こえるぞい。何じゃ？）

（そろそろ出ようかと思うのだけれど、君はどうする？）

（丁度良いの、妾も今出ようと思っていたところじゃ。では、この銭湯を出たところで待っていて欲しいのじゃ）

（機動六課と被る心配は？）

（大丈夫じゃ、なのは達はサウナに入ってから出るようじゃしの…といいつつ、サウナが何なのか妾は良くわからないのじゃが）

（そうか、ならば問題はないな。　分かった、先に出ているよ）

（頼むのじゃ）

念話で打ち合わせをし、そうと決まればさっさと銭湯から出る。下手に遅れて鉢合わせをしてしまえば大変な事になる為である。

服（とは言ってもラボで着ている白衣とほとんど変わらない）を着て、男湯から出る。　出る直前に女性店員に会釈するのを忘れないのが、この男が次元犯罪者なのかどうかをディールが疑う所以である。

（…当然だが、まだ出てきてはいないか）

女性とは身だしなみなどの準備に男の倍は掛かる…と、この前ディ

ールから進められた漫画で見た。　正直それまで漫画には興味すら持っていなかったが、見始めてみると中々面白いものだった。　現在は自分で色んな分野に手を伸ばしている。

その話はまたいつか詳しくするとしても、まあとにかく時間が掛かると思っていたの、だが――

「おお、待ったかの。すまんのう、遅れて」

「いや、想像以上に早くて今驚いた所だ」

待つことたった3分だった。　これはディールだからこんなに早いのだろうか、それとも女性の準備は倍の時間掛かるというのが間違いなのだろうか？

「さ、行くとしようではないか。　でもまずは姉上たちの土産を取りに行かなくてはな」

「ああ、そうだね…って」

相槌を打とうとした瞬間、スカリエッティの頬が引きつった。

いきなりディールが自分の腕を掴み、自分の胸に押し付けるように抱いてきたのだ。

「…何かね、ディール」

「なんじゃ詰まらんの、少し位反応を見せれば良い物を…役得じゃぞ？」

「すまないが役得の意味が分からない。　現に私は今ここの住人の敵意の渦に晒されているのだが」

何時の世も人の嫉妬とは醜いものである。

「まぁそう言うな。別に減るものでもないじゃろう？」

「理由を説明してくれないか」

「…妾1人じゃと面倒な男に声をかけられたりするのじゃ。すまんが暫くこうしていてくれ」

「ああ、そういうことか…もう少し早く説明してくれれば精神的にも助かったのだが…」

「いや、慌てる“無限の欲望”を見てみたかったのじゃが、期待はずれじゃった」

「そんな期待はするものでは無いな、ディール…」

「クックック、まあ少しの辛抱じゃ。その辺の路地裏に入るまでの」

「……その台詞だけ聞かれると、私が凄い勢いで誤解されそうなんだが」

第三者の目からは夫婦漫才にしか見えない、そんな会話を交わしながら、次元犯罪者と兵器は仲良く帰って行ったのだった。

「…ちょっと待ってくれたまえ、ディール」

「何じゃ？」

「…あまりこういうことは聞きたくないのだが…君、まさか――」

「あ、下着はつけてないぞ？」

「…」

「下着は付けるのが面倒なんじゃよ。　別に妾の胸はパットやら何やら入れる必要もないし、何よりこの服に下着は邪魔なんじゃ。それにほれ、分かったということは感じてるんじゃろう？妾の生乳の柔らかさをのう…役得ではないか。で、何故そんな怖い顔をしておるのじゃ」

「…すまないねディール。　もう弁明は不可能だ…あれ程ウーノやクアットロが言っていたのに、君は……向こうへ帰ったらまた皆からの説教が待っていると思っていたほうが良い…」

「…解せぬのじゃ」

「いや、そこは理解してくれ」

夜の町に響いたスカリエッティの声は、どこまでも切実だったという…。

“地球”（中編）（後書き）

天破「総員整列」

ザッ！（不気味な宗教服の団体が銃を構える音）

天破「対象はジェイル・スカリエッティ及び高町春斗」

高町「えっ、ジェイルは分かるけど何で俺？」

ジェイル「…（遠い目）」

天破「罪状を読み上げろ」

団員Z「はっ。ジェイル・スカリエッティ被告はディール様の胸をその右手で獲物をむさぼる獣の如く味わったとして我々はこれを青少年云々条例に反する物として定め可及的速やかな判決を彼の者に求めるとして」

天破「御託は良い、つまりどういうことだ？」

団員「高町被告はムカつくから、ジェイル被告は羨ましいからボコしたいのであります」

天破「すばらしい罪状だ。両被告、理解したな？」

春斗「いや、できねぇよ！！　何だ俺の罪状！ムカつくからって！

酷すぎんだろうが、横暴以外の何者でもねぇよ！？」

団員Ｃ「裁判長、判決を」

天破「死刑で」

春斗「話を聞け！！ってぎゃあぁぁっ！！」

～暫くお待ちください～

天破「悪は滅んだ…」

ディール「どう考えてもお主らのほうが悪じゃろ」

なのは「でも、今回は拙くない？　結構ギリギリだよね、コレ…」

ディール「いや、アウトじゃろ」

天破「それだよね、問題は…」

今回の話でいやな思いをされた方、本当に申し訳ありません。感想等で突っ込んで頂ければすぐに修正いたします。

では次回は、ロストロギアの捕獲回！

と、オリジナルの展開が少し入ります。

ディール＆ａｍｐ；なのは「「え？」」

次回もお楽しみに～♪

“地球”（後編）（前書き）

取り合えず今回の話を読むに当たっての注意事項をば。

・春斗がカッコいいだと…！？
・ティアナが奴の手に落ちた模様です
・クロスミラージュさんが狸の手に落ちていた模様です
・あれ、スライム捕獲任務がメインじゃなくなってる
・魔王フラグ消滅↑

それでは、どうぞ！！↑

“地球”（後編）

「何故だ！！　はやて、何故写真を撮らなかった！？　そこは撮るべきだろ！！　美乳（スバル）とロリ巨乳（ディール…だっけ）の競演だぞバカ野郎、そこは写真に撮って六課陣営のテンションを上げる為にも印刷して焼き増しして配るべきだろうが！！」

「すまへんかった…この八神はやて、一生の不覚や…！！　話すことに夢中になりすぎて、結局写真を撮ることを忘れとった…！！」

銭湯の入り口にて、どう考えても成人男性と女性が話すにはおかしい話題をしているのは――見間違えようも無い、先程フランの手で行動不能にされた春斗と、銭湯から出たばかりのはやてである。

春斗は先程復活したばかりだが、はやてが女湯での出来事を口にした瞬間血涙を流して拳を握り締めていた。

「くっ…だが、まぁいいか。　流石に俺も知り合いの女の裸見て欲情したりするほど腐ってねぇし」

「えー、それは残念やなぁ。私、春斗君にやったら見てもらってもええのに」

「はやてよ、冗談も過ぎると俺が殺されるぞ」

「…あー、ごめんな、うん、今のは冗談や。　……別に見てもらっても良いというのは本当なんやけどなぁ」

「何か言ったか？」

「ううん、何も」

この男は一体幾つフラグを立てれば気が済むのだろうか。

「でも、エリオから聞いたで？」

「何を？」

「ベットの下に、そういった方向のを隠しとるんやって？」

ダッ（春斗が駆け出す音）

ガシッ（丁度銭湯から出てきたなのはが春斗の頭を鷲づかみにする音）

「頭蓋骨が軋む様に痛いぃぃぃぃ！！！」

「春斗？　貴方は、こんな所でも問題を起こすんだね…本当にもう…」

「なのは姉、それは説教なのか!?　じゃあアイアンクローはいらねぇよな!?」

「あ、なのは。次私ね」

「なん…だと…畜生っ！　エリオォオ…帰ったら覚えとけ…」

「うっ…ご、ごめんなさい、口を滑らせちゃって…」

5分間程なのはによる“愛の鞭（アイアンクロー）”を喰らうと、もう終わった…かに見せかけてフェイトが春斗の間接を極めてしまった。

「がぁあぁぁあああ!!　痛い!何故だ!?　何故俺がこんなに責められなくてはならない!?」

「自業自得ですわよ!／／／／」

顔を赤く染めてそういうのは勿論フランだ。春斗よりも少し遅く目が覚めたのだが、あの光景はまだ頭から抜けないらしい。

「俺はお前に何かしたというのか!?」

「覗きの現行犯ですわ!!」

「それを言われると何も反論できｎぎゃあああ!!　腕が外れる音

がしたぁあああ！！」

実際は何も知らずに入ったので覗きにカウントされないはずだが、見たものは見てしまったのだから仕方が無い。

「だがフランよ」

「…な、なんですの？」

「丁度風呂に入ってから状況整理を始めた先の記憶が無いんだが、何があったか説明してくれないだろうか」

「…／／／／／／　い、いやですわ」

「何故に」

「いやって言ったらいやなのですわバカ春斗ー！！／／／／／」

「キャラかわってんぞお前ってがあああー！　左肩が外れたぁー！！」

次元犯罪者も去った夜の町に、しばらく春斗の大きな絶叫が響き渡った。

「ふむ…で、俺が気絶している間にロストロギアの反応があったと」

「はい」

「なるほどなるほど…で？」

「なんですか？」

「何故俺はお前に背負われて居るんだ、スバルよ」

ちゃっかり幸運も手に入れている男、高町春斗。　この男の朴念仁っぷりは底知れない。

「え、私に背負われていたら嫌ですか？」

「いえ、寧ろ風呂上りの女性特有のほのかな香りが漂ってきて物凄く嬉しいでｓゲフンゲフン、違う。お前らは任務があるだろうが、俺は本来ならここに来るべきではなかったかもしれないんだぞ？」

作者としてはそれは困る。春斗が消えたらネタの９割が消失してしまうからである。

「それでも、大切な六課の仲間ですっ！」

「…、仲間、か」

「はい！」

「そっか。それは嬉しいな…つか、少し思ったんだが…」

「え？」

「どう考えてもお前無理してるよな」

春斗の身長は１８５ｃｍ前後と中々の大きさであるが、対してスバルはまだまだ春斗に比べれば小さい方である。　小さい方が大きい方を背負うというのは中々に疲労する。　だからこその春斗の的確な指摘である。

「いやっ、そんなこともあるようなないようなあるような」

「あるんじゃねーか」

「で、でも！　…せっかくじゃんけんで勝ったから、譲りたくなくて」

「…？　何か言ったか？」

「いえっ、何でも！」

「今日は何だかはぐらかされることが多いな。まあいいか、もう下ろしても良いぞ。完全に意識が覚醒した」

「そうですか？じゃ。下ろしますね」

結局、良く分からない問答の結果スバルはゆっくりとしゃがんで春斗を降ろした。

「っとっと…久々に目が覚めた気分だ」

「あら、春斗。おきましたのね」

「あー、フランか。　…？　お前は何故少し怒ってるんだ？」

「いえ、貴方にはほとんど関係ないことなので心配ありませんわ」

「そうか。なら良いが…そうだ、忘れてた。　おーい、なのは姉ー！」

「…（あの時私は何故…チョキを出してしまったのでしょうか…全くもう、スバルにデレデレして…）」

デレデレはして無いと思うのだがそれは一先ず置いておく。

「よし、許可取ってきた」

「何の許可ですか？」

「ちょっとな。　六課の面子に土産でも買ってってやろうかと思って、聞いてきた。ロストロギアを捕獲した後ならいいらしい」

「あ、じゃあ私もギンガ姉と父さんに買ってってあげようかな…」

「あ、そうなのか？　それじゃ、仕事が終わったら『一緒に』買いに連れてってやるよ。お前だけじゃ名産品とかも分からないだろ」

「！　は、はい！　絶対に連れて行ってくださいね！」

「！！…は、春斗。　１人だけじゃ案内しきれないでしょうから、私を連れて行っても――」

「いや、なのは姉には俺だけで十分だといってあるしな。　だが俺はゲンヤさんとギンガの好みは知らんから、スバルは連れて行かなくちゃならんし…それに、お前だって今日の夜位ゆっくりしたいだろ？」

「…、」

彼のその気遣いは満点なのだが、女心が分かっていないので残念ながら０点だ。　彼女たちにとって重要なのは春斗と出かける事であ

り、スバルだって普通に考えれば父と姉の好みを春斗に伝えれば済む話なのだ。　それに気づかない春斗も、ある意味兵器としてみると色々と抜けているように見える。

そして春斗の詳細な説明に、フランは返す言葉が無い。　その言葉が自分を労わってくれていることを指していることがわかるからこそ、その想いを無下に出来ないのがフラン・Ｔ・ハラオウンという女性だった。

「…そうですわね…分かりましたわ、お言葉に甘えて今日は休ませていただきますわ」

「ああ、それが良いと思うぜ。　お前には迷惑掛けてるからな。今日くらいは休んでてくれ」

出来ればその心遣いを別の方向に向けて欲しい。　そんな涙を押し殺したかのようなフランの感情が、ただでさえ兵器の中でも一番“考える”ということが苦手な春斗が分かるはずも無いのだった。

「で…結界内に着いたんだけど…」

「…何これ」

「スライムか…合体したらキングスライムにでもなるのだろうか？」

「いや、色からしてスライムマデュラかも知れませんよ」

「話が分かるなスバル。今度ゲームを片手に二人で話合いｔ（ドゴォ！！）」

「ごめんなさい、このバカはほって置いて今はこのロストロギアに集中してくださいですわ」

「は、はい…」ガタガタガタ

「エリオ君！？　すっごく小刻みにデバイスを持つ手が震えてるけどどうしたの！？」

フランのオーラに気おされたのか、はたまた地球へ来た当初のセクハラ発言の際に春斗が受けた傷を思い出したのか…どちらにしろ、エリオの身には未来永劫忘れることの無いトラウマがこの任務でいつの間にか刻まれていたのだった。

『あたし達は空から散らばったダミーを片付ける』

『本体を封印すればダミーも消えるよ！』

『頑張って下さいです！』

「――と、高町隊長達も任せてくれたことだし…私達でやるわよ！」

「「「はいっ！（うん！）」」」

「ああ、応援してるぞー。頑張れよ」

「って、春斗!?　貴方何時の間に復活してましたの!?」

「俺の再生速度を嘗めるな」

腕が吹き飛んでも元に戻ってしまう彼が言うと、困ったことに全く嘘にも冗談にも聞こえない台詞であった。

「…って訳で、まずはエリオ、スバル！」

「了解！　はぁあああああっ!!…（ぽよんっ）…えっ!?」

「おりゃあああああっ!!　（ぷるんっ）…こ、これ…」

「斬撃…打撃無効化能力!?　ちょっと待って…」

このロストロギアは、外見の通りその身に加わった衝撃を全て吸収してしまうという特性を持っていた。　当然それは魔法も例外ではなく、直撃したと思った瞬間魔法弾があらぬ方向へ飛んでいった。

再びフェワード陣が集まって、これをどうするかを考える。

「打撃も駄目、魔法も駄目…さて、これからどうするかだけど…」

『フラン、これ一つ位持って帰っては駄目だろうか』

「そうだよね。　どうにかして本体を見つけ出さないと…」

『いや、何を言ってるんですの貴方は。　駄目に決まってるじゃありませんか』

「でも、どうやって見つけましょう？　皆同じ形で、行動に違う点があるようにも見えないし…」

『いや、リインも言ってたろ？　ダミーは本体を封印すれば消えるって。　だからその間だけでもと…このぷよぷよした感じが応用できればなあ』

「ちょっと待って、行動に違い…？」

「ティア？　どうしたの？」

『例えばそうだな、コレとか。っと、やっぱり滑り落ちてくんな。こら、逃げんな』

「そうだわ、ダミーは本体の危機にのみ生成される…そしてその用途は、本体を欺く為の物…」

「…あ！　ということは…」

「ええ、この中で1つだけ、この場から逃げようとするような動きをする物が居る筈よ！」

「あ、なるほど…流石ですティアナさん！」

「…、」

「いや、それほどでも…　スバル、どうしたの？」

「いや、春斗さんの持ってるスライム…ダミーで遊んでるのかなー、と思ってたんだけど」

「「「？」」」

『んー、なんだ？　俺はスライムに嫌われているのか？何故か逃げるのかコイツだけ早いな』

『というか捕まえてどうする気なんですの？』

『あー、フラスコに入れて実験生活…』

『非常にかわいそうですわね。　それでしたら普通に封印されていた方が幸せかと…だから逃げてるんですわよ、その子』

『マジか…駄目だな俺気を付けるとしよう…よし捕獲！！　こら、逃げんじゃねぇっ…と（パキンッ）あれ？少し強く掴んだら何か壊れたな』

「「「…あれだ――――――――ッ！！！」」」

そう、春斗の捕まえようとしていたスライムこそ本体だった。　どう考えても周りのスライムよりも動くのが早いからである。　因みに、春斗が壊したのは兵器（彼ら）にとっては空気とそんなに代わり無い程度の障壁だった。

「は、春斗さん！　それ！　そのスライム！」

「どうしたティアナ。　これがどうかしたか？」

「いや、それが本体なんです！　それさえ封印すればこれ全部消えるんですって！」

「なん…だと…？　もったいねぇ、せっかく捕まえたのに！　なのは姉、これもって帰っても良いよな！？」

「駄目に決まってるよ！？　何言ってるのかな！？」

「もったいねぇ、せっかく商売道具が手に入ったと思ったのに…！　くっ、じゃあ封印頼むわ」

「えと…あ、はい…」

残念そうに手からスライムを落とすと、再び地上へと落下した。

すると凄い速さで春斗から離れ、ティアナ達の方向へ向かっていった。

まるで「早く封印してあの人から助けて」と言っているようだった。

～ロストロギア封印中～

まさかの展開もあって、非常に脱力するほど簡単に任務は終わった。
特に見せ場も無かったエリオとスバルは少しむくれていたが、まあ春斗さんだから、というような感じで落ち着いた。

「もう、春斗ったら…せっかくフォワードの皆の活躍が見れるはずなのに、なんで手を出すの？」

「そこにスライムがあったから」

「流石私の見込んだ六課局員やな！」（サムズアップしながら

「いや、そういう問題じゃ無いからね？　というかはやてちゃん、仮にも部隊長がそんなノリでいいの…？」

因みに新人たちの横で空から降りてきた隊長陣と春斗が漫才的な会話を交わしていたが、華麗にスルーした。

「だけど、とにかくこれで任務完了だよ！　お疲れ、皆」

「あたし、何もやってません…」

「僕もです…」

「私は一応封印したけど…何もやってないのと同じよね」

「わ、私も同じく…」

結局、本人に自覚はないが今回の一番の功績者は春斗であった。
ただ、動機が不純なのと本物を見つけたのはどう考えてもまぐれだったので別に褒められることも無く地球への任務は終了したのだった…。

さて、時間は深夜になっていく。

「という訳で、部屋割りを決めるでー」

「待てはやて。何故部屋割りを決めるのに俺とエリオが呼ばれる？」

ようやく任務も終了したことだし各自就寝モードに入ろうとしたところで狸こと八神はやてが眠そうに集合を掛けた。

眠いのならそのまま寝りゃいいのに、と春斗が思ったのは秘密である。

「え？」

「え？　じゃねぇよ。　今日だけで3回は説明しているが、俺とエリオは男。お前らは女。　ＯＫ？　ほら、もう答えは見えたはずだろ？」

「なるほど…つまり、私らが一緒に寝る時、どちらが襲う方か襲われる方かをはっきりさせたかったんやな？」

「違ぇよバカ狸！　何処をどう間違ったらそんな解釈が生まれるんだよ！」

隣では色んな意味でエリオも絶望している。　確かに今よりもずっと子供の頃はフェイトと一緒に寝ていたりした頃もあったが、前話で述べた通り彼は今“異性”を意識し始めていると思われる。　そんな彼が万が一キャロと一緒に寝ることになったりしたら…風呂場での彼女の裸が思い出されて、眠るどころでは無いだろう。

「で、でもはやてさん。　別々のベットですよね？　そうなんですよね？」

「あー、そのことなんだけど…」

ここですずかが申し訳無さそうに前に出る。

「ゴメンね、此処はここまで大人数が泊まりに来ることを想定してないロッジなの。　だから、３組～４組位は一緒のベットになっちゃうんだよね…」

「よっしゃエリオ！　俺、色々ゲームやら漫画やら持ってきたから今日徹夜して遊ぼうぜ！　勿論その部屋でな！」

「そうですね春斗さん！　僕、少し前からそういうゲームとか漫画とか興味あったんです！！」

ダッ（春斗とエリオが駆け出す音）

ガシッ（同時にはやてに腕を捕まれる音）

「離せはやて！　お前のその顔から俺はお前が何を考えているのか全て分かる！　その思考はどう考えても俺を社会的に殺せる考えを秘めている目だ！」

「はやて部隊長！　お願いです、今日だけは！今日だけは勘弁してください！」

「嫌やなぁ、二人とも。　まだアンタ等が誰と一緒に寝るか決まっ

てへんのに、何をそんなに慌てとるんや？」

「エリオはともかく、俺はなのは姉以外と…いや、なのは姉とでも一緒に寝たらどう考えても犯罪だろうが！　つーか恭弥兄と士郎父さんに殺される！」

何処の世界でもあの兄と父は恐ろしいらしい。

「まぁ、それはこれを引いてからでも遅くは無いやろ？」

「籤かよ。いつ用意したんだお前」

「こういうこともあろうかと、遊びに行くときはいつも準備しているんや！」

「無駄な才能だな」

適切に突っ込みを入れつつ、籤の概要を確認していく。割り箸の先端に色を塗っただけのものだったが、何処かに仕掛けが無いか、形が違わないかを確かめていく。　全ては、生きる為に――

「いやいや！　流石ににそんなことせえへんて！　春斗の中で私どんだけ信用ないん！？」

「エリオ、お前も見ておけ。　この籤には、俺達の安眠と明日が掛かっている」

「っ…はいっ！！」

「エリオまで！？　何が私をそんなに不審にさせたんや！？」

「こういうことをするからだ」

「はい、返す言葉もございません」

そんなことをしているうちに、エリオも籤の調べを終えたらしくはやてに丁重に割り箸を渡した。何処か釈然としないものを感じながらもはやてはそれを受け取り、改めて割り箸を混ぜる。

「それじゃ、改めてくじ引きを始めよか。　勿論、引いた籤の交換は無しやで？」

それぞれの願いを胸に秘め、藁（今回は割り箸だが）にも縋る思いで籤を引いていく。全員引いたところで、それぞれの籤の色を見せ合った。

「…エリオ、何色だ？」

「…青です…春斗さんは？」

「がハッ…緑…だ」

「…」

当然といえば当然なのだが、この二人の色がこの状況で揃うはずも無く。　エリオは青、春斗は緑であった。

さて、彼らの気になるペアだが。

「えぇっと、私は青です！　…あ、エリオ君青なの！？」

「あ、私は緑ですわね」

悲しいかな、結局こうなった。

「はやて」

「なんや？」

「再抽選を希望する」

「却下や」

「はやてさ「却下や」僕は何も言ってませんよ！？」

このメンバーの中でも最悪のペアになってしまったことに、地に膝

をつき項垂れる春斗。いや、別にフランが嫌という事ではないのだが――――

「春斗…？　分かってる、よね？」

「イエス・マム。　全て理解しております」

修羅と化したフェイトの処理が恐ろしく怖い。　気分はさながら一歩間違えれば奈落の底への転落のデスゲームである。　春斗の背中は汗で濡れていた。

「もしフランに何かあったら…」

「いや、フェイトさ――いや、フェイト様…お言葉ですが、もしはやてが許可をしたら籤を貴方様のと…」

キッ！（フェイトがはやてを見る音）

コクコクコク（少々震えながらはやてが頷く音）

「（よし、俺の命はコレで護られた…ッ！！）　じゃ、フェイトさんこれを…」

「ま、待ってくださいですわ！！」

「――――ここで出てくるかフラーン！！」

だが平穏を手に入れたと春斗が少しほっとした瞬間、フランが乱入してきた。　頭を抱える春斗。

「は、はやてさんが決めたではありませんか！　『籤の交換は禁止』とか…それは護らなくてはなりませんわ！」

「止めろフラン！　時には取り決めごとを破ることが必要なんだ！　というかそんなに俺と一緒が良いのかお前は！？」

「えっ！？／／／　そそそ、そんなわけありませんわ！　貴方なんかと誰が！！」

「そう！　それでこそフランだ！　俺の知っているフランは、ことあるごとに俺を殴り、時間に煩く、それで尚胸が小さい女だからな！」

「…ｏｒｚ」

「フランさーん！　しっかりしてくださいー！」

自分の問題点を気になる異性に言われてしまい、どんな人間の目にも分かるように落ち込んでしまうフラン。　特に最後の言葉が、彼女に痛恨の一撃を与えたのは言うまでも無い。

「まぁそういうわけだからフェイトさん。　はいよ、これ」

「うん、ありがとう」

「止して下さい。俺にお礼なんて…」

命が助かったのでそれだけで十分です。　とは勿論言わない春斗だった。

「…？　あれ、それじゃあ俺は結局誰とペアに…」

「…、」

「…あ」

春斗の手→橙色の割り箸

ティアナの手→橙色の割り箸

「はやて審判！　やはり再審を要求し――――」

「すまへんが、流石にこれ以上はルールを曲げられへん」

「――――畜生！！」

今日も深夜も、今はやっぱり機動六課は平和だった。

～部屋移動中～

「で、ダブルベット、かよあの狸め…帰ったらゲームデータ全部削除したる」

「ははは…」

「…ま、なってしまったもんは仕方ない。　俺は床で雑魚寝するからティアナはベットの上で寝とけ。　お前は今日はずっと任務やらなんやらで疲れてるだろ」

そう言ってベットの上から1つ枕を取り、床に放り投げて寝転ぶ春斗。　ある意味ではやて、否…全ての読者の期待を裏切る男、それが高町春斗である。

「あ、ありがとうございます…」

その好意に甘え、ティアナもベットの上に身を預けるようにして寝転んだ。

暫く無言の時間が続く。双方、起きているのは分かっているのだが春斗の方は別段話す事も無いのでそのまま寝ようとしているだけであり、ティアナの方は、いくら春斗が何もしてこないのは分かっていても自分の“兄”以外の男性と寝るのは始めてである為、少し緊張していた。

そして、睡魔に負けて春斗が眠ろうとしたその時――――

「春斗さん」

春斗には背を向けたまま、ティアナが春斗の事を呼ぶ。　その言葉で春斗は一瞬で眠りから覚醒した。　これは、名前を呼ばれたら直ぐに起きる習慣が研究されていた頃から存在していた為の癖の１つである。

「…どうした？」

「…私って、中途半端だとは思いませんか？」

「何？」

いきなり話題を振るわれて、些か混乱気味の春斗。　当然だろう、ティアナの台詞は台詞として成り立っては居ないようなものだった。

「春斗さんは、なのはさんに子供の頃からついてるんですよね？」

「ああ、だが魔法を知ったのはなのは姉が教えてくれた頃だから…１０歳前後の頃だけどな」

「その頃のなのはさんって、今みたいに凄かったんですか？」

「…、」

少し真意が見えてきた春斗は、逆に彼女へ質問を返した。

「その質問に答える前に逆に聞くが…お前は、天才って居ると思うか？」

「え？　……いる、と思います。　だって、現になのはさんやフェ

イトさんは、１９歳でエース・オブ・エースっていう称号を獲得してるし…」

「…ふむ。それで？」

「はやてさんは、あの歳でＳＳランク相当の魔道士になっています。それに、私よりも年下のエリオやキャロも希少能力（レアスキル）や、魔力変換資質を…親友のスバルだって、私と違って接近戦の才能がある。…前線に立つ皆からしてみれば、私だけなんです…このフォワード隊の中で、凡人…才能が無いのは…」

やっぱりだ。　と、春斗は思う。

彼女が自分に才能が無いと思い込み、強くなりたいと焦っているのは大体分かっていた。　しかし今彼女はこうして自分の心境を言葉にして吐き出している…何故自分に相談、というか言ったのかと問えば、おそらく魔力０の自分になら同情をもらえるとでも思ったのか…それとも、純粋になのはの過去を聞きたかったのか…

「…、それは違うな」

「え？」

驚いたような顔をするティアナ。春斗はゆっくりと身体を起こし、そのまま床で寝て固まった身体をほぐしながらティアナの横に座った。

「少し、昔話をするか。　誰にも言わないでくれよ？　なのは姉にも秘密にしてくれって言われてるからな」

それに、俺もその時の状況は良く分かっていないけどな、と前置きして春斗が始めたのは…“不屈のエース・オブ・エース”登場秘話。

…というと少々幼稚に聞こえてしまうかも知れないが、その内容は残酷なものだった。

始まりは、あるフェレットを拾ったことだった。

その正体が実はユーノ・スクライア…現在は無限書庫にて不眠不休の活動をしている『不死の史書長』と呼ばれる男…で、彼は単身、ジュエルシードと呼ばれるロストロギアの探索・回収に来たという。

「変なところで人が良いなのは姉は、それを俺達に内緒で手伝い始めてな…」

それは本当に偶然が重なった――重なりすぎた出来事の連続。

なのはにS級の魔力適正があったこと。

そしてなのはがジュエルシードを集め始めたことにより、時を同じくしてジュエルシードを集めていた幼少時のフェイト・ハラオウンと激突。　最初のなのはは負け越しであったと言う。

そのままことあるごとに対立、激突する二人だが、遂にその魔法の使用に丁度地球の近くに居た管理局の分局“アースラ”が反応。どちらもA級を超える魔力と知り、小規模の次元震も起こったことで、看過出来る事態ではなくなり直ぐに現場へ急行したこと…。

「って、なってる。表向きはな」

「え？」

「考えても見ろ。　ここは管理外世界だぞ？　ここで違法に魔法を使用していたからと言って、管理局のかの字も知らんなのは姉、しかもまだ8歳程度の頃に管理局の法律を捻じ込むのは間違ってると俺は思ってる」

「…あ」

続けるぞ、と含み笑いをしながら更に言葉を紡ぐ春斗。

そしてリンディ・ハラオウンの説得により、そのまま管理局に協力する魔道士になってしまったこと。

「なって“しまった”？」

「先程も言ったがなのは姉はその時まだ8歳だ。　恐らく理解していなかったんだろうが、その時リンディさんが提案した条件は“管理局の指示に従うこと”これ1つのみ。　だがおかしいとは思わないか？」

「え？　でも、それだけで自分の故郷が守れるんであれば…って、あ！」

「そうだ。　もう一度整理すると、なのは姉は正真正銘管理外世界の生まれであり化け物的な魔力適正があったのも偶然…しかも成人どころか中学生にもなってねぇなのは姉をここぞとばかりに勧誘しようとした理由は恐らくひとつだ。　現在もそうだが、今管理局は人手が足りない。　全く足りていない。　今はその頃程でもないが、その頃はもっと深刻だったに違いない…そんな時、目の前に転がってきた未来のS級魔道士。　どうするかなんて答えは決まってるだろう？」

「…無条件で獲得できる、割の良い兵士…ってことですか」

「そうだ。　しかも自分がやらなくては駄目だという固定概念がその頃からなのは姉には染み付いていたからな。　地球は、自分が護らなくてはならない見たいな感じでプレッシャーを感じまったんじゃねぇかな。　きっとリンディさんも上手かっただろうさ、努力も

せずに管理局の中でも希少なレベルの魔道士が手に入ったんだ。しかも自分のことを素直に聞いてくれると来た。　色々トラブルもあったようだが、リンディさんがその頃の狸だったことは間違いねぇ」

さて、この先はフェイトさんの過去も侵害しちまうから簡潔に説明するが、と前置きして春斗は続ける。

「この頃のフェイトさんはなのは姉と敵対関係にあったってのは言ったよな？」

「はい、それっぽいことを1回だけ…」

「まあ、結局は仲良くなって『友達』になったらしい。　魔法のことを話してるなのは姉は、その事を話すときものすっごく顔が輝いてたよ」

「へー…」

じゃ、次な。　と春斗が何故か急に感情をなくした声で次を告げたので、何か悪寒を感じて真剣に耳を傾けるティアナ。

「はやての過去の罪は知っているな？」

「はい、まあ。　あんまり詳しくはスバルの方が詳しいかと思いますが…」

「そうか、まあ良い…とにかく、闇の書事件と呼ばれるそれははやての意思で起きたものでもなければ、総合ＳＳ級魔道士という称号もはやて自身の意思で手に入れたものではなかった」

「…、」

言葉を失うティアナを見据えながら、春斗は口を動かして言葉を吐いていく。

「闇の書には致命的な呪い（バグ）が掛かっていたんだ。　所有者を喰らって死に至らしめる最悪の呪いだ。　防ぐ手立ては闇の書を完成させ起動させるしかない…しかしその起動させるためには、魔法生物や魔道士が持つ、リンカーコアが必要だった」

「…まさか」

「勘違いしないで欲しいのは、これははやての意思でやっていたことではなく、闇の書の守護騎士であるヴォルケンリッター…シグナムさん、シャマルさん、ザフィーラ、ヴィータの４名がはやてのことを想い、勝手にやっていたことだ。　はやてが命令していただとかいう気に食わん上に陰湿な噂が流れているが、根も葉もないどころか嘘そのものだ。　まずこれではやてが攻められる理由は何処にも無い」

「…、」

「さて、そのリンカーコアを奪う方法だが蒐集という。　この蒐集を使うことにより、敵の魔力を吸収して持ち主の魔力が更に大きく

なっていくと言う寸法だ。　つまりはやては、自分も知らないうちに魔道士や魔法生物の魔力を吸収して、今ほどの魔力を手に入れたわけだ。　望まぬ形でな」

「！　そ、それじゃあもしはやてさんが闇の書の主で無かったら…」

「ああ、管理局に入っていなければそれどころかなのは姉と知り合うことすらなかったかもしれないな。　だが全ては結果論だ。　結局、管理局のとある上層部の1人の策によって闇の書は暴走してしまった。　そして戦闘が起き、最終的には闇の書のバグはアカンシェルで吹き飛んだらしい。　…が」

「“が”？」

「闇の書はそもそも“夜天の書”と呼ばれるロストロギアが何者かによって改造されたものだった。　元々このロストロギアは偉大な魔道士達の魔法を保存する為に作られた由緒正しきものだったが、悪どい事に使用する魔道士が増えた為に闇に染まってしまったと言われている。　結果、“夜天の書”の管理人格である“リィンフォース”…まあ、リインの一代目ってことだな。　その“リィンフォース”は、内部にまで侵蝕していたその呪い(バグ)と共に消失した」

「っ…」

「はやての悲しみは相当なものだったらしい。　事後報告だったんで俺らにその気持ちは簡単には分からないけどな…以上、あの3人の過去を簡潔に説明したわけだが。　どうだ？」

「全然、知りませんでした」

ずっと言いたかったことをいう子供のように、彼女は堰を切ったように言葉を吐き出した。

「なのはさんが子供の頃、そんな体験をしたことも、はやてさんがそんなつらいことを体験したことも…それなのに私、勝手なことばかり…」

「反省しているところ悪いが、もう1つ言わなくてはならないことがある。　なのは姉の教導を受けているお前達新人魔道士には知ってもらいたいことだ」

「…え？」

「“不屈のエース・オブ・エース”。　なのは姉の代表的な二つ名の一つだが、こう呼ばれた理由をお前は詳しく知っているか？」

「えっと…たしか何年か前になのはさんがガジェットに墜落させられて…それでも引退をせず、懸命なリハビリの後にまた前線で活躍をし始めたという理由からかと思いますが…」

「そう、概ねあっているな。だが、二つ…ガジェットに墜落させられた理由は、一重になのは姉のミスにあったんだ」

「！？」

『あのなのはさんがミス？』と驚愕で頭の中が一杯になったティアナに追い討ちを掛けるかのごとく春斗はほとんど感情の無い声で続

きを言っていく。

「あの頃のなのは姉は、自分の疲労も省みずに無茶苦茶な訓練や任務をこなしてばかりだった。　それこそ俺達の忠告なんて耳も貸さない程にな。　そしてお前の言う数年前、遂にその無理が祟った。
　あの頃の本来の実力なら倒すことなんて造作も無かった筈のアンノウン…ガジェットだと思うが…に疲労でバランスを崩した所に攻撃を喰らったんだ。　バリアジャケットを貫通するほどの大怪我…誰もがもう前線復帰は無理だと諦めていた。　それどころか普通の日常生活を送ることもな」

「そんな…！」

「最初はなのは姉も生きることすら諦めかけていた。　だがフェイトさんやはやての励ましもあって、生きているのすら奇跡ともいえる怪我が悪化するのを覚悟で、見てると痛くなるかのようなリハビリを毎日毎日繰り返したんだ。　フェイトさんや俺、そしてなのは姉と俺の家族も皆心配し、時には反対もした。　が、最終的にはなのは姉は奇跡の回復をして、大怪我に屈することなく前線に復帰した。　これで“不屈のエース・オブ・エース”の誕生だ。」

「…！」

「これを聞いて、誰か連想できないか？」

「？」

「テメェだよ、ティアナ」

「！！」

肩を震わせるティアナ。　ここで自分のことが話題に上がるとは思っていなかったのだろう。

「隠れて練習しているつもりか？　はっはっは、俺ら機動六課平隊員の情報網を嘗めるなよ。　お前がどれほど練習をしているか、何時から練習しているかなど、なのは姉やフェイトさんの隊長・副隊長陣に隠して伝達するなど歩くことよりも簡単なんだよ。　実際、前線メンバー以外は皆知っているからな。　お前が夜隠れて練習していることを」

「っ！　何故、なのはさんたちにそれを言わないんですか…？」

「俺達にも気持ちは分かるからさ。　強くなりたい気持ちはな…その点で俺はお前に言いたい。　自分を凡才というのは結構だが、それを魔力適正が無い奴には言わない方が良い。　魔法が使えるだけでどう考えてももうお前は非凡だよ。　しかも卓越した指揮能力と狙った物を正確に打ち抜くガンナーとしての才能…どれをとっても凡人には不可能なものばかりだ」

「あ…っ」

「あんまり高みを目指すと顰蹙を買うぞ。　謙虚なのも良いが、無理をしすぎればなのは姉のようになる。　なのは姉の教導は、正直強くなると言う実感を感じにくいからな」

「分かってたんですか！？」

「なのは姉の教導は“積み重ね”を前提としている。　急激に強くなるなんてどんな奴にも無い。　それこそ、外道な方法でなら別かも知れねぇけどな…俺がなのは姉達の過去話をしたのはそういう意味も含めてだったんだが、分かりにくかったろ？」

「あ、えっと…」

「…だよな、小さな頃からどうしても説明が苦手なんだよなぁ…だからいつも殺されかけるんだろうか…？」

「いや、あの…春斗さん…」

「ん？　おぉ、すまねぇ。　ま、つまりは、だ」

ポスッ、と。

春斗の大きな手が、ティアナのまだ少し小さな頭に小さな音を立てて、収まった。

「ん……」

「お前は凡才じゃねぇよ。　いつか、なのは姉も越えることができるだろう。　それが何時になるかは流石に分からないが…」

ふと、ちょっとだけ撫でられている頭を上にずらして、今自分の頭を撫でている男性を見る。

不覚にも、一瞬だけ――――いや、何故か心臓の動悸が止まらなくなった。

朝や昼、彼女が“最低”と評した男の面影はそこに存在していなかった。

ただの、笑みだった。

愛想笑いでも作り笑いでも、おかしさから来る笑みでもない。純粋な、白も黒も無い笑み。

春斗からしてみれば、ティアナを妹を見るような目で見ているだけなのだが…その親しみやすい笑みこそ、彼に好意を持つ人間が増えている理由なのかもしれない。

『どんなモノでも受け入れる器量』。これが春斗の最大の長所であり、彼が考えるのが苦手な所以である。

兵器であった彼がこれほどの心を持つまでに成長できたのは、きっと高町家に拾われたということもあるだろう。　考えない代わりに、どんなものでもいつの間にか受け入れてしまうのが、本当の彼であり、本当の高町春斗という人物なのである。

ティアナは焦っていた。

頬が熱い。

心臓の動悸が止まらない。

先程の笑みが、頭から離れない。

頭に乗っかってる手が、暖かい…。

先程まで意識しなかった“春斗”があらゆる形で認識出来てしまう。

今彼女の前にいるのは、彼女にとって普通の男性が居るのではなくなった。

そう――――ティアナ・ランスターが、初恋をした瞬間だった。

「さて、もう夜も遅いな」

「…、あ」

彼女の頭から春斗が手を離す。思わずもったいなさそうな声を上げるティアナだが、それに春斗が気づく様子は無い。　この男は本当に、無意識に格好良いところを見せるのにこういうところで疎いのが非常にもったいない。

「そんじゃ、お互い明日に備えてゆっくり寝ようぜ。　俺ももう眠い…「あ、あの…」　ん、まだ何か質問があるのか？」

「えと、その、あの」

呼び止めたことを後悔しているのか、少し赤い顔で目線をグルグルと右往左往させるティアナ。　しかし次第に収まると、軽く深呼吸して、言った。

「きょ、今日だけ！　今日だけ、お願いがあるんですけど――――」

（どうしてこうなった）

１０分後、高町春斗が思考することと言えばこれに限る。

目の前にはティアナの寝顔。

自分は何故かベットに寝ている。

そしてそれは、目の前で寝息を立てているティアナ本人の希望に他ならなかった。

『き、きょ、今日だけ…その…一緒のベットで寝ることを…ゆ、許して、あ、上げま…しゅ』

『お願い』なのに何故上から目線なのかという突っ込みや最後噛んだっぽいという指摘はともかく、春斗は完全に混乱していた。

まぁティアナの心情の変化を知らないのだから無理は無いだろうが。

（なんだ。　これは俺を陥れようというコイツの策略か？　確かにこのまま俺が寝れば明日は俺の命日になること確定だろうが、そんなの脱出すれば済む話…子供でもコイツは執務官希望者だ、もっと搦め手を使ってきてもおかしくはない。　ということは何者かの指

示か？　フランかフェイトさんあたりが妥当か…俺の処刑理由を造ろうという戦法ってところか）

悲しきかな、春斗の脳に『ティアナが自分と一緒に寝たかった』という考えは一切存在しない。　育ちが研究所→高町家というヘビーな人生だし、その上最近はフェイトやフランからの処罰が段々酷くなってきたため異性に好かれると言う考え事態が消滅して来ているのだ。　フェイトはともかく、フランにとっては本末転倒以外の何者でもないがそれは置いておこう。

（だが貴様らの思い通りにはさせんぞフラン。　俺は貴様の魔の手から離脱してやｒ　「兄さん…（ムギュ）」　がハッ！？）

既に春斗の中ではフランが黒幕で固定されていた。　否、今彼はそれどころではなくなった。

ティアナが寝ぼけて春斗のことを兄と勘違いしたのか、春斗の腰に抱きついてきたのだ。

この瞬間、春斗の頭の中でフランへの逆襲＜この状況の離脱に優先順位が切りかわった。正直相手が自分より3歳年下の子供だとは言え、身体ごと抱きつかれるのは非常に拙い。

…彼女もスバルとまではいかないが、女性としてでている箇所は出

ているし全体のプロポーションのバランスも良い。しかも今は隊服ではなく結構露出の多い寝巻きを着ているのだ。

結果、１６歳特有の太ももや柔らかい胸がダイレクトで春斗の身体に直撃していることになる。

（…色是御恋…汝姦淫すること無かれ…ッ！！）

とあるライトノベルの主人公も使っていた呪文を使って見たが、使い方はともかく内容が違う。　これでは恐らく効果は無いだろう。

（くっ…ん？　あの光ってんのは…クロスミラージュか！！）

闇に一筋の光を見つけたかのような表情になる春斗。　小声で呼びかけてみる。

「（ボソボソ）おい！　クロスミラージュ！」

≪春斗さん、申し訳ありませんが事態は私の手には負えません≫

「（ボソボソ）諦めんの早くね！？　つかお前饒舌だなオイ！！
せめてテメェの主を起こしてくれ！　俺の命の灯火が理性と共に消えそうなんだよ畜生！」

≪申し訳ありませんがその様な動作は登録されていません≫

「（ボソッ）シャァァァァリィィィィィィイ！！！！アイツだなこれを教えたのは！？　いや狸か！？」

≪いえ、男と女が一緒のベットで寝ている場合は起こしてはならないと…はやて部隊長から≫

「やはり狸か！！　あの女ァ…絶対にセーブデータ復元不可能領域まで破壊してやる…俺が生きてたらな…」

小さな声で叫んでいたら疲れてきた。

思わず目を閉じかける春斗。　だが強靭な精神で耐える。　ここで寝てしまうのは拙い、しかし何もしなければ疲れは…

（なんだコレ…この状況を見られても死、ティアナを起こしても死…生きる選択肢がねぇ…）

…何もしてないはずなのに更に疲れてきた。　そして、遂に眠気に身を任せてしまう。

（あー…もう、明日なんて…こなけりゃ…いいのに…）

作者の願いでもあるが、それはきっと永久に叶わない願いだろう。

～早朝～

コンコン

「…ん、もう朝かぁ…」

「そうみたいですね…」

ガチャ

「春斗、ティアナ。　朝ですわ、おはようございますです…わ…」

「ふわぁ…昨日はなんか恐ろしく疲労をした気がするんだが、何故だろうか…確か、ティアナが…」

「うぅ…そうでしたっけ…アレ？　何で、私、春斗さんと一緒のベットで…」

「…一緒のベット？」

サァッ（春斗の顔が一瞬で青ざめ、後に眠気が一瞬で覚醒した音）

かぁああっ…（ティアナの顔が真っ赤になった音）

「あ、あの春斗さん」

「言うな…言うなティアナ…」

「違うんです…あのその…」

もごもご言っていたティアナは、さめた目つきのフランと逃げる準備をしている春斗が見つめている中で――――

「き、昨日は頼みを聞いていただきありがとうございました！！しかも、一緒に…あの…だ、抱きついてしまって…も、申し訳ありません…で、でも、すっきりしたので…そ、その…嬉しかったです…／／／／／／」

春斗処刑フラグを――――投下した。

～この表現の中には未成年者には見せられない表現が存在します。
ディールとスバルの絡みを想像してお待ちください～

「――――え!?　誤解!?」

「…その言葉、俺が殴って蹴られ逆さまにぶら下げられる前に聞くことは出来なかっただろうか…」

無理だと思う。　全世界の読者の総意だろう。

どうにか釈放され、ティアナとスバルによって支えられ何とか体制を整える。

「もう帰るんだろ？」

「そうなのよ。　もう少し居れば良いのにね」

「そうだよな。　俺は普通に平穏な生活が出来れば何処でも良い」

「無理ね」

「即答かよ」

まぁ、いつも通りといえばいつも通りである光景だった。

「それじゃあね、皆。　…頑張りなさいよ。あのバカは鈍感だから」

「鈍感？誰が？」

「アンタだ」

「俺が鈍感？　はっ、何を言ってるんだか。　俺が自分に向けられた好意なら1秒も経たずに気づける自信がある」

それは絶対に無い。

「さ、皆。　元気でね！」

「「「「はいっ！」」」」

春斗を軽く無視して、アリサとすずかが手を振るのを最後見ながら機動六課の面々は転移して行った。

―　管理局本部　転移ゲート前　―

ヒュオン…

「到着…やな。　「！！　や、八神部隊長！！」　！？」

一息つこうとした瞬間、息が完全に上がっている六課隊員と思われる男性が敬礼をしていた。　その様子からただ事ではないことが伺えたはやて及び機動六課の面々は、直ぐに仕事モードに切り替わる。

「…どうしたんや？」

「緊急事態です」

短くそういうと、男性は少し深呼吸をして、敬礼を崩して――――

「管理局地上本部のロストロギア保管施設が強襲されました！！
犯人は一名と思われますが、施設に配備されていた魔道士は全員殉職を確認しました…ッ！！　現在保管されていたロストロギアと現在の保管庫のロストロギアをリストアップして照合していますが…
どうやら、“レリック”のみが全部奪われているようです…！！！」

――――平穏を終わらせる、新たなる物語の幕開けを、告げた。

“地球”（後編）（後書き）

フラン「どうします？　あの鈍感男、また作りましたわよ」

スバル「春斗さんだから仕方ないんじゃないかな…」

はやて「うん、私もそう思う」

ティアナ「は、春斗さん。　これ…食べてくれませんか？」

春斗「サンキュ、丁度腹が減ってたところだ（パクッ）…ふむ旨いな。　なんだ、コレ」

ティアナ「え、えっと！　手作りのパイです…」

春斗「また作ってくれよ。　どうも甘いもんが無いと仕事がはかどらないんだ」

ティアナ「！　は、はい！／／／」

天破「離せディール！私は奴を…奴を…！」

ディール「よせ作者！　まだ奴らには無意識の無限の糖分が展開されとる！　一体あの中に行ってどうする気なんじゃ！！」

天破「うるせぇええ！　離せよコノヤローーーー！！」

次回はこのタイミングでの閑話です。というか幕門と言うか番外編です。

一応兵器だって女の子。　さて、女性が風呂上りに乗るものと言えばなんでしょう？

勿論、全ての兵器がでるはずですよ～♪

次回をお楽しみに～＾＾

閑話“機動六課ダイエット作戦”（前書き）

という訳で閑話です。　そしてこの瞬間、私の閑話ネタが切れました。誰か、オラに、ネタを分けてくれ！！（殴

忙しいので更新が更に遅くなる予感。これが9月最後の更新になる可能性があります。　というか多分そうなります。

この話を読むにあたっての注意事項！

・フラン。・゜・（ノД`、）・゜・。
・はやて（´∀`＊）
・春斗（´゜д゜、）
・ヴァイスに異変…！？
・ラスト、急展開

この意味を知りたい方は！

どうぞー♪ｍ（＿＿）ｍ

閑話“機動六課ダイエット作戦”

「きゃあああああああああああああああー！！」

その夜、そして次の日からの女性陣の苦悩は、フェイト・T・ハラオウンの義妹フラン・T・ハラオウンの六課全体に響き渡る悲鳴から始まった。

～次の日の早朝～

「…エリオ？」

「…はい、春斗さん」

「これはどうした？」

「いえ、僕も今起きたところで何がなんだか…」

朝、もう皆朝食をとってもいいような時間帯。

しかし食堂に広がるのは、まるで通夜のような雰囲気。

良く見ればその中心にいるのはフランであり、その周囲になのは、フェイト、はやて、ティアナ、ヴィータ、シャマルと続いている。

一体どういう集いなのか、良く分からない春斗達は互いに顔を見合わせながら首を傾げつつ食べ物を取りに行く。

と、取りに行く途中に少し寝過ごしたらしいスバルがやって来た。

「おはよーございま…って、なんだろ、この空気…」

「スバルも分からんのか」

「あ、春斗さん、エリオ、おはようございます」

「おはようございます！」「ああ、おはよう」

「で、これはどうしたんですか？」

「少し前に俺がエリオに全く同じ質問をしたところだ。だが原因は不明…。つまり触らぬ神に祟り無しと言うことだ。とりあえず朝食を食うぞ。朝飯食わないと太るらしいからな」

「「「「それ本当！！！？」」」」

「うおぁ！？　急にどうした！？」

春斗が知っているようで知らない人のほうが多い微妙な豆知識を披露した瞬間、通夜モードになっていた女性陣がいきなり食いついてきた。

「春斗!?　それは本当ですの!?」

「いや、本当だぞ。　実際、相撲とかを職業にして頑張ってる人は朝飯抜いて昼飯大量に食ってるらしいしな」

「マジか…じゃあ、朝飯も昼飯も大量に食ったほうが太らんのやな!?」

「いや、それは一概にはいえないぞ流石に。　痩せるんだったら運動や適切な食事量が必要だからな…ってうん?　まさかお前ら…」

まだ少し眠気の残る頭の中で春斗が唱えた言葉は、

「太ったのか?」

自分を死へと誘う自壊呪文だった。

「春斗さん…流石に女の人に今のは拙いと思います…」

「１０歳の子供であるエリオに女性へのマナーを正される１９歳の俺…第三者から見ればかなりシュールな光景だろうな。　で、結局話を整理すると、近頃食ってばかりだったからいつの間にか体重が増えていたと。　だからあんな雰囲気になったのか…体重ぐらいで大袈裟な…」

「体重ぐらいってなんですか！」

「そうですわ！　私達にとってこれは重大なことなのですっ！！」

「俺の目の前にそれとは全く無縁そうな奴が１人いるが」

「ふぁい？（口いっぱいに米を含みながら）」

「まずは口ん中を飲み込んでから話せ、スバル。　コイツはどう考えてもそういうことに無縁な気がするが…」

「ん…（ゴクッ）ダイエットは今まで一回もしたことありませんね、

そういえば」

「ほらな」

「それだけいつも食べて、一回もダイエットしたことが無いのですの!?」

「あたしは何故か太らない体質なんですよ～」

「…それは私への挑戦状なんですのね？　そうなのですわよね？」

スバルとしては本当のことを言ったまでなのだが、フランには挑発と思われてしまったようだ。　無理も無い。

「そういえば、春斗やエリオも一杯食べるのに太らないよね」

「そういう体質らしいです」

「エリオに同じく」

「なんて羨ましいんや…！！　全く努力せずそのプロポーションを維持しとるやと…!?　特にスバルの場合、この世界の不平等さを垣間見た気すらするんやけど」

「はやて…アイツの胸はおかしい。　絶対におかしい。　だから気にしたら負けなんだ」

きっとスバルの場合、食べたカロリーが全て胸に言っているのだろう。信じたくないが、凄い勢いで食べまくる度に少し揺れる胸がそれを物語っている。

覆ることのない（胸的な意味での）戦力差に、遂に永遠に叶わないことを悟ったのかフランとヴィータが膝を突いて落ち込んでしまった。

「ま、それならダイエットを頑張ることだな。俺らはそんなお前らの目の前でめっちゃおいしく料理を食ってやるから」

「それってただの嫌がらせだよね!?　春斗なんか私達に怒ってるの!?」

「大丈夫だ。　逆にそうすることによって精神力が鍛えられ、それに耐えることにより体重が激減を…」

「それ多分ストレスだからね！　ストレスで痩せたって何も嬉しくないよ!?」

「我侭な…別に直ぐリバウンドするんだから少しでも痩せた方が良いだろ?」

「それは横暴だよ！　どう考えても横暴だから！」

なのはと春斗の漫才合戦が展開する。　これを天然でやるからこの姉弟は性質が悪い。　収拾がつくなるなることがしばしばあるので

ある。

「まあまあ、落ち着いてなのはちゃんも春斗も…ここでそんなこと言ってもしょうがないやろ。それよりも春斗」

「なんだ？」

「当然そこまで言ったからには、私らのダイエットに協力してくれるんやろなぁ…？」

「…」

閑話休題。

「と、言うわけで良く分からんが機動六課女性陣ダイエット作戦を始める。　全員仕事は終わらせてきたんだろうな？」

「…（サッ）」

「そこの狸、露骨に顔を逸らすな。　お前だけ仕事やって来い、終わらせないと参加させん」

「そんな殺生な！　す、少し位ええやろ!?　なあ!?」

「部隊長としてそれはどうなんだ。　妥協は許さん、部屋に帰れ。既にリインに監視を申し付けてあるから逃げられないぞ」

「…もし、逃げたら？」

「カロリー１０００を超える俺特性ハンバーグを１日三食食ってもらう」

「行ってきまーす!!」

カロリー１０００を超えるハンバーグとはどんなものなのだろうか。少々興味がでてしまったスバルとエリオ（今回の作戦では春斗の手伝い係）だった。

「さて、改めて確認するが…正直俺はこの企画に気が進まない」

「「何故っ!?」」

「考えてもみろ、俺は太んないからダイエットなんて興味持ったこともないし…知識なんてあってないようなものだぞ。　それに見た目からして、お前らそんな太る前と変わらない気がするが…」

「それは無いよ！！　私なんて０．３ｋｇも太ったんだよ！？」

「私だって、この前よりお腹が０．６ｍｍも出てるんです！　どう考えても太ってますよね！？」

「ああ、お前らはダイエットをする意味が無いことは分かった。取り合えずこの部屋から出て行ってくれ」

―フェイト・Ｔ・ハラオウン＆ａｍｐ；ティアナ・ランスター　リタイア―

早くもリタイアが出たこの作戦。　まぁ当然と言えば当然なのだが、早くも『コレ大丈夫か？』と頭を痛め始める春斗だった。

「で、残ったお前らは？　まずフラン」

「…あ…ぅ……（ボソボソ）ｋｇぐらい…／／／」

「…そりゃまた結構太ったな……外見からは全然分からんのに。なのは姉は？」

「（ボソボソ）ｋｇ…」

「あんたは何を食ったんだ!?　何を食ったらそんなに太るんだ!?」

「そ、そんなのわたし分からないよー!／／／」

「はぁ…ま、いいか。取り合えずこんだけｋ――――…すまんシャマル。本気で忘れかけてた」

「同じ部屋にいるのに!?」

「ああ…作者すらも本気で忘れかけていたぜ…」

春斗のメタ発言はスルーしておこう。

「で、お前は何ｋｇ太ったんだ?」

「えっと…（ボソボソ）ｋｇ…だけど…」

「なのは姉とフランに比べたら微々たるもんだな。　だがまぁ良かった、まともな太り方をしてる奴がいて…全員フェイトさんみたいに桁がおかしかったらどうしようかと思った」

そうなっていたとしたら、機動六課の将来がかなり心配になるところだろうが。

「さて、改めてどうするかだが…まず食事量の制限からやってみるか。　そんで早寝早起きは…十分すぎるほどやってんな。　どうして太ったのかいまいち原因が分からねぇんだよなぁ…じゃ、そういう方向でどうだ？」

「そうですわね、取り合えずそれからやってみましょうか」

「私もそれで…」

「うん、それで良いと思うわよ」

「じゃ、決まりだな。　だが無理に制限する必要性は無いと思うから、少しずつ減らしていくとしよう。　食堂の人には俺から頼んでおくから」

「宜しくお願いしますわ」

「よし。　じゃ、早速明日から実戦だ。いいな！？」

「うんっ！」「はいっ！」「分かったわ！」

こうしてシャマル、フラン、なのはの３人はダイエットを開始した

――――

――その次の日。

「…」↑フラン

「…」↑なのは

「…」↑シャマル

早朝の食堂に広がっていたのは、死屍累々の光景であった。

「ってなんでやねーん！！」

「どうしたはやて。　朝から元気だな」

「いやこれは突っ込まんと駄目やろ！　何があったんや！？」

「何って…」

恐らく今機動六課中で注目されているであろうその質問の答えに、春斗は少し遠い目をしていった。

「食えば食うほど腹が減るスープを食わせただけだぞ」

「鬼畜やないかー！！」

それは確かに鬼だろう。　一応記しておくと、『無理にダイエットすると身体に良く無い』と言ったのは彼自身である。

「大丈夫だ。一応機動六課所属だからな、多少のリスクは問題ない」

重ねて記すが、『無理に制限する必要性は無いと思う』と言ったのも彼自身である。

「お腹が…減り…ましたわ…」

「うぅ…訓練できないかも…」

「はやてちゃ～ん…お菓子ちょ～だ～い……」

「いや、死屍累々やん！　日常生活に支障が出るレベルやでこれは！」

「大丈夫だ、問題ない。　取り合えず食堂のおばちゃん、一番いいスープを頼む」

「あいよ！」

ゴトッ（食堂の従業員の手でスープが置かれる音）

「…あれ？　先程のスープと違いますわね…」

「ああ、これは普通に腹が膨らむスープだ」

「「「…（ぱぁああ…！）」」」

「あ、ただし後になればなるほど今の2倍は腹が減っていくからな。その少ないエネルギーで何処まで活動できるかが鍵だぞ」

「「「……（ガクッ）」」」

こうなるとキツイのはなのはである。彼女には問答無用でこの後に教導が待っている。　シャマルは保険医だし、フランは一般局員だからそこまでエネルギーは消耗しないだろうが、なのははこれから一日中、歩くだけで空腹になるような食べ物だけで過ごさなければならないのだ。

「せめて…せめて春斗、私だけでも…この後、教導があるから…！」

「エース・オブ・エースは空腹なんかで自分の信念を折らないよな？　なのは姉」

「…（涙）」

弟に泣かされる姉。　何かもう…色々と台無しだった。

―朝→昼までキング・クリムゾン中…―

「いやいや、元ネタしらへんのに何言ってるんや」

「はやて、何言ってんだ？」

「あ、ヴィータ？　いや、別に…」

「そうか？　それよりも、アレ何とかしてくれねーかな…正直、見ているのすら辛くなってきた」

「え？」

「…」↑フラン（死体）

「…」↑シャマル（死体）

「…」↑なのは（屍）

1人屍が混ざっていた気がする。

「ってなのはちゃーん！！　しっかりするんやー！！」

「ああ…刻が見えるの…」

「って、だから元ネタ知らへんのにネタを使いすぎや！　いつか消滅するで！？」

「だから落ち着けはやて！　錯乱しすぎて何言ってんのか分からねーぞ！！？」

朝よりも酷いこの状況。　何があったのかは大体予想はつくが、フランとシャマルはそんなに動かない仕事の筈である。　何故ここまで疲弊しているのだろうか？

「何故今日に限って大量に仕事が回って来るんですの…」

「如何して今日に限って…たくさん…患者さんが来たのかしら…」

「まあ俺が手を回しただからだ」

謎は全て解けた。

「貴方は私たちを殺す気ですの！？」

「いや、それは……そんなことある訳ないだろう、馬鹿だなぁ★」

「今の間はなんですか！？　というか語尾に星つけたって、貴方がやっても気持ち悪いだけですからね！？」

「言うな。　今のは俺でも無いと思った」

春斗、自爆。　しかし彼には珍しく後悔した。

「心配するな。　昼は普通の食事だ」

「！！　ホント！？」

「食いつきすぎだぞなのは姉。　…っと、ほら来た」

～フラン達の昼食～

・ポテトサラダ
・蜂蜜掛けたリンゴ
・にんじんジュース

「ってちょっと待ちなさいですわー！！」
「お前は元気だなオイ…どうしたんだよ？」
「何ですかこれ！　こんなの食事じゃありませんわよ！」
「そりゃ、消化の良いものを選んだからな」
「今はとてもカツ丼とかのお肉が食べたいよぉ…」
「お前らダイエットしてるんだよな！？　そうだったよな！？」

早くも揺らぎ始めた彼女達の石の決意。　まあ初日からこのスパルタではめげるのも分かる。

「リタイアならリタイアでもいいぞ？」
「い、いえ…まだ、まだ私は頑張りますわ…」

「私も…なんとか…」

「ふぇえぇ…私、もう無理かも…」

そう言って春斗特性のダイエット料理に口を付けるフラン達。

当然だが、腹が膨れた気がしなかった。　しかし彼女達にはまだ仕事が残っている。　少し休憩し、空腹で震える身体を引きずりながら、全員それぞれの仕事場に向かうのだった。

―昼→夜へキングクリムｚ（ｒｙ―

「「「…」」」

「あぁ、遂に台詞の括弧が3人纏められたで…もう言葉喋ってへんし…というか燃えつきとるし…」

「これ一週間続けるのか…無理じゃね？」

「少なくともあたし達は無理です」

「はい。　絶対に無理です」

確かに、三食通常の5倍以上は食っているような彼らが今のフランらのようなダイエットをすれば、餓死して死んでしまう恐れすらあるだろう。　人にはやはり向き不向きというものがあるのだ。　しかしこの考え方だと、フラン達にもダイエットは不向きだと言えるのでは無いだろうか？

「やり方にもよるけどな、まずはカロリーの軽減とかだろ？　あ、でもやはり空腹スープの方は止めた方が良かったか…？」

「…ごはん～…」

「？　何か聞こえたか？」

「え？　いえ、何も…」

「……おにく…」

「いや、やっぱり何か聞こえるぞ」

「ちょ、ちょっと！　怖がらせないで下さいよ！」

「いや本当だって…何か、亡霊の如き声がなのは姉達の方角から」

「「「私たちだー！！！」」」

「「「わぁぁあああああ！？」」」

先程まで屍状態だった3人が急に起き上がり春斗に飛びついた。
春斗はそれを転げまわって回避する。

「お腹が減りましたわ…早く…早く御飯を…！！」

「お願い春斗ぉ～！　私が間違ってたよ…ダイエットなんてするもんじゃないね！」

「お願い…春斗君……もう…止めて…ッ」

「駄目だ…もう諦めモードに入ってるぜ、こいつ等…」

飛びつきが失敗し、起き上がる気力も無くなったのか床にへばり立つ元気すらなくなった様子のフラン、なのは、シャマル。　どう考えてもこれ以上ダイエットを実行できるとは思えない。
仕方ないか、と諦める春斗。　それに今回のメニューは恐らく自分

にも原因がある。　ダイエットなんてやってことが無いからほぼ適当に無理矢理なことを考えていた節があるのだ。　一応今は改善したものを作ったが、これでは試すことも恐らくは出来ないだろう。

となると。

「何処へ行く狸」

「（ギクッ）」

犠牲になるのは当然、ダイエットの件があやふやになりかけていたはやてである。

「心配すんな。　ちょっとメニューを変えたからな、もうなのは姉達のようになったりはしない」

「い、いやでも…私にはやっぱり不向きかなあ、って…」

「そうか？　まあそれならそれでいいが…ふむ、とすると俺はエリオとでもランニングするか」

「ああ、そうしてくれるとありがたいんやけど――ってちょっと待ちい！　どういうことや！？」

「ん？　ああ、言ってなかったか。　丁度良いから俺も早朝ランニ

ングを始めようと思ってな…が、１人だと流石に詰まらないからダイエット参加者でも巻き添えにするかと考えたんだが、皆不参加なら仕方ないだろ…おいスバル、エリオ、実はな――」

「ストップ！　待つんや、やっぱり私参加する！！」

「え？　何故？」

「ちょ、ちょっと急にやる気が出たんや！　やっぱりダイエットはせなアカンかなぁ、と思っただけや！　本当に！」

？　と首を傾げる春斗の真後ろで、少しはやての言葉と春斗の言葉を空腹で働かない頭で考えてみるフラン。

はやてがダイエット計画に参加する

←

春斗がそれに便乗して、参加者を巻き込んだランニングをしようと思っている事が発覚

←

このまま行けば参加者ははやて１人

←

……朝、春斗とはやてが二人きりでランニング…？

そこまで考えたフランは、人間の目に止まらない速度で起き上がり声を大にして言った。

「ッ、それ、私も参加しますわ！！」

「なん…だと…？」

「（チッ、読まれたか…流石やな、フラン）あ、フランも参加するんか？」

「（そ、そう簡単には行きませんわよ！）え、ええ。やっぱりはやてさんの言うようにダイエットって大事ですものね」

「フラン、本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですわよ！　…今日は後、御飯さえ食べれれば…」

「そうか…なら良いが。　じゃ、ちょっと待ってろ。　打ち合わせしてくる」

気になる単語を発した後、乙女の戦が現在進行中のはやてとフランの両名から離れる春斗。　現在舌戦…ではなく、アイコンタクトで全て会話を済ませている辺り、この2人は意外と相性がいいのかも

しれない。

「（しかし、フランもよーやるなぁ。いくら春斗の為とはいえ、散々今日は酷い目にあったのに）」

「（は、春斗の為なんかじゃありませんわよっ！　その、やっぱりダイエットは大事ですから、それだけです！）」

「（いい加減素直にならんと、婚期のがすで～？　スバルはともかく、私とフランは正直ギリギリだと思ってるんやけど）」

「（…、いいですわよ。　私、結婚とか興味ありませんから）」

「（ほぉ～…？）」

詰まらなそうにはやてからそっぽを向くフランと、ニヤニヤしながらそれを見るはやて。　傍から見れば何がなんだかわからないが、今はまだはやての方が優位な状況だと言えよう。　だが問題は朴念仁春斗がそれに気づくかどうかであるが、それだけは正直望み薄である。

そのままの状態で時間が何分か経過し、春斗がようやく戻ってきた。

「よし、決まりだな…はやて、フラン」

「はい」　「なんや？」

「明日は早朝6時起きでロビー前集合だ。　動きやすい服を着て来い。　スバルとエリオは特別参加で、ティアナはそんな俺達の為に飯を用意して待っていてくれるそうだ」

「え？　ティアナ、ええんか？　場合によっては私らより早く起きなきゃアカンやん」

「食堂のおばちゃんも快くOKしてくれたしな、何も問題はねぇ。こいつのパイはおいしいからな、楽しみに待っておけ」

「では、お言葉に甘えて…宜しくお願いしますわね、ティアナ」

「はいっ！　分かりました！　『春斗さんの為に』とびきりのを用意して待っています！！」

「ああ、楽しみに待ってるぜ」

此処で、ティアナの言葉によく注意して聞けばお分かりだろうか。
彼女は目先の欲に惑わされ、春斗らの役に立つことによって人知れず春斗へのポイントを稼いでいたのだ。　なんという策士。　それでいて無意識なのが恐ろしいところである。

因みに、これを聞いた乙女の戦勃発中の両名は…

「（春斗は意外と億手やからなぁ～♪　朝なら襲っても分からないやろうし…フランをどうするか、やな）」

「（あ、あの目は絶対に春斗を襲おうとしている目ですわ…！！絶対に春斗には手を出させないようにしないと…！！）」

哀れ、『春斗と2人きりになれるチャンス』という目先の欲に見事に囚われており、ティアナにまで気が回っていなかった。

だから、ティアナの春斗を見る目が『女の敵』では無いことにも、誰一人気づいていないのだった。

次の日。

「オーッス。眠たそうだな」

「ふわぁ～…せやなぁ…」

「結構眠たいですわねぇ…」

「だが、チビ二人はやる気満々だぞ？　ほら」

次の日の早朝、何とか起きてこれたフランとはやて。

春斗の指差した方向では、エリオとスバルが思い思いのストレッチをして身体を温めていた。　どうやら本気で望むようである。　…いくら春斗と共に居たいからと言っても、体力が元々無いはやてと、兵器の中でも体力の無いフランはこれから始まるハードなダイエットに顔を引きつらせた。

「っし、ストレッチは終わったか？」

「はいっ」　「はい」

「お前らも少しはやっておいた方がいいぞ。　俺は少し前に終わらせた」

「あ、先程私達は軽くやっておきましたわ」

「うん、本当にかるーくやけどな」

「それならいいか。　よっしゃ、行くぞー」

春斗による何処か抜けた号令と共に、ジャージ姿の彼らはミッドチルダを走り始めた。

出発して１００ｍを過ぎたところで、何か見覚えのある影が見えるのに気づく。

「…？　あ、ヴァイスじゃねぇか！　こんな朝早くからどうしたんだよ？」

ランニングを止めて、店の前にいた――ヴァイスに話しかける春斗。　その声を聞いたヴァイスも振り返り、春斗を見て少し驚くと笑顔で春斗の肩を叩いた。

「おお、ハルト。　おはようさん…いや何、ちょっと冷蔵庫の中のもんきらしちまってよ」

「食堂で食えば良いんじゃねぇのか？」

「栄養ドリンクだよ。　最近仕事が増えてきてるから飲み始めてるんだ…っと、後ろにいるのは…スバルにエリオに…フランに…八神隊長！？　お、おはようございます！」

「いや、今更畏まらなくてもええよ？　今は朝早いし、普通に砕けてくれればいい」

「ええ…そうは言われましても…」

「まあまあはやて。この馬鹿は変なところで堅いんでな…気にすんなって」

「馬鹿は余計だ」

「はっはっは、言うな。　…そうだった。お前、妹とはどうなってる？」

屈託無い笑いから、急に少々低い声に変わる春斗。　感情の移り変わりが激しい男だと思いつつ、ヴァイスの方も少し沈んだ声でそれに答える。

「すまない…お前と話してからは少し会いに行こうとしたんだが、まだ決心が付かないな」

「そっか。　ま、ゆっくりと和解していけばいいと思うぜ？　俺にはそれしか言えないからな…」

「いや、あの後少し楽になったよ。　本当に感謝してるぜ…出来れば、俺の代わりにラグナへ会いに行って欲しいんだが…いや、俺の代わりに謝って欲しいとかじゃない。　俺が傷つけてしまった、右目の状態を見に行って欲しい」

「！」

「？　どうした？」

「…あぁ、分かった。　いいぜ、その頼み承った。　明日なら用事も無いしな、それで良いか？」

「本当か？　ありがとよ…それじゃ、もう少し仕事頑張ってくるぜ…八神隊長、頑張ってくださいね。　それとフラン、エリオ、スバル。　またな」

「「はいっ」」「はい。　また後でお会いしましょう」「ほな、またな～」

少しだるそうに手を振って六課の方へ歩いていくヴァイス。　それを軽く見送って再びランニングをやり直そうとしたフランらだが、今回の主催者の春斗がヴァイスの方をジッと見ていることに気づく。

「どうしましたの、春斗？」

「…っ、あ、フランか。　悪い、もう一度出発するか」

「？　大丈夫ですか？」

「ああ」

短く返事をした春斗だが、

「…問題ない。　恐らく、な」

結局そのヴァイスの背中が消えるまで、彼が出発することは無かった。

「ふぅ、お疲れさん。これで終わりだ」

春斗のその声と共に、午前8時ごろようやくランニングが終了し六課のロビーにへたり込むはやてとフラン。

あの後、結局往復４ｋｍを走った。　スープダイエット（フラン命名）よりかは効果はありそうな気がするが、やはり魔法や術での強化も無しだと疲れてしまう。　強化したらダイエットの意味が無いことも確かだが。

「これを夜も走って、一週間続けるか。　それで効果を確かめるってのはどうだ？」

「それでええんやないかな…はぁ、はぁ…疲れた…」

「……2人になる余裕なんて微塵も存在しませんでしたわね…」

「フラン、何か言ったか？」

「いえ、何も言ってませんわ！？」

「如何して疑問系なんだよ」

少し首を傾げつつ、スバルやエリオと共にティアナの用意したパイとジュースを口にする。　彼曰く、『ティアナは仕事に不可欠な糖分を含む料理を作る才能があるかも知れない』らしい。

「それじゃ、仕事行くか。　エリオ、スバル、ティアナ、行くぞー」

「「はーいっ！」」　「はいっ！」

「フェイトさん、なのは姉、フランとはやての連行宜しく」

「うん、任せて」「いいよー♪」

「「って何時の間に（いたのですの！？）（いたんや）！？」」

そんな異常の無い日常が、ゆっくりと、且つ有意義に過ぎて行き…
遂に一週間が経過した。

「キンクリは流石に辞めたらしい」

「春斗、何を言ってますの？」

「別に何でもない。　というかさっさと乗れ」

「うっ…」

一週間が経過したため、あの忌まわしき体重計に乗ることになった
フランとはやて。だが、再びあの数値が出たらと思うと怖くて乗れ
ずに１０分以上経過している。

「…じゃ、私から…」

だがそんな硬直状態に終止符を打ったのは、部隊長八神はやて。
局員よりも自分を犠牲にするその姿勢は素晴らしいと言えるだろう。

はだしになり、目の前に置かれた忌まわしき物体へと足を乗せる。
そして足で電源を入れて暫く待つと、電子音が響き、結果が表示された。

「……ふっ」

ドサァ…（はやてが倒れた音）

「はやてぇえええええええぇえっ！！！！」

「嗚呼、春斗君…ごめん、やっぱり私、ダイエット無理や」

「諦めるな！気をしっかり持て、まだやれるだろ！！？」

雪山で遭難したかのようなシーンだが、誤解しないで欲しい。これはダイエットに失敗（？）しただけである。

「…っ…はやてさん…」

「フラン…後は、任せるで…！」

「……お任せ下さいませ…！」

繰り返すが、これはダイエットである。

「とにかく、フラン。　乗ってくれ」

「…はい」

短く返事をし、少し深呼吸をすると体重計へと乗り、電源を入れるフラン。そのまま硬直し数秒待つと、再び電子音が響き体重が表示された。

「…、あ」

「どうした！？」

また倒れるんだろうか。　誰もがそう思ったとき、まるで夢かと思っているかのような声がフランから聞こえてきた。

「…痩せてる…」

「え？」

「痩せてますわ…元の体重よりも、痩せてます…！」

「……（チラッ）」

「（コクッ）…ああ。…フラン。よくやった！　ダイエット、成功だ！！」

かつてない犠牲を払ったこともあったが、何とかフランのダイエットは此処に完結したのだった。　少し感動のあまり泣いてすらいるフランを見ていると、なんだかダイエットを強要してしまったようで少し申し訳ない気持ちになる。

さて、残念ながら痩せられなかったはやては溜息をついて直ぐ傍のイスに座った。

「あー…やっぱり私はむかへんのかなぁ」

「いやいや、しかしおかしい。　あの運動音痴のフランが痩せてはやてが痩せてない…？」

そう言って少しはやての身体を眺める（決していやらしく見ているわけではない）春斗。　彼としては何か発見があるかな、と思う程度だったのだがふとある一部分でその目線が停止した。

と同時にある突拍子もない考えが浮び、その考えを思考が全力で否定しながらも本能が確認せよと警報をならしている。　しかしこれを聞くと、正直に言って聞いた方が大惨事に見舞われる気がする。

少し悩んだが、それなら頼める奴に頼めば良いんじゃないか？　という結論に至り、フランとはやてに1つ頼み事をすることにした。

「あー、フラン、はやて」

「なんや？」　「なんですの？」

声のトーンが違いすぎることにちょっとやりにくさを覚えながらも、体重計を指差し、

「これを片付けてきてくれないか？　シャマルのところで良いと思うから」

「1人で十分では？」

「一応身体を急に動かしたようなもんだから、身体に異常がないかどうか検査しに行ってくると良い」

「なるほど、そういうことならいこか」

「はい、そうですわね♪」

はやてが体重計を持ち、そのまま歩いていく両名。　完全に歩き去ったのを確認し、たまたま近くに居たティアナから端末を借りて、シャマルへと連絡を取った。

「あ、シャマルか？　…ああ、ちょっと頼みてぇことがあってな、俺だと殺されかね無いから…変わりにやってもらいたいんだが…大丈夫だ、断言は出来ないが、お前に被害は行かねぇと思う」

～フラン&ａｍｐ；はやて、身体計測中…～

「春斗、戻ったで～」

「戻りましたわ」

「…、」

「あれ？　シャマル…そんな深刻そうな顔をしてどうしたの！？」

戻って来たのは、フランとはやてだけでは無く保険医であるシャマルも二人の付き添いのような感じで付いてきていた。　しかしその

顔にはかげりがあり、何かが起きていることを暗に告げている。

「……シャマル？」

「……ええ、貴方の予想通りよ」

「……そう、か……」

そしてなにやら深刻そうに春斗と頷き合う。　慌ててはやてがシャマルに問いただした。

「ちょ、シャマル！？　私たちの体に異常でもあったんか！？」

「いえ、異常と言うかなんというか…」

「非常に言いにくいんだが…」

シャマルはともかく、あの春斗ですら迂闊に言えないような言葉。
いよいよ心配になってきたフランとはやて。

その後ろでは、どうやら春斗とシャマルの言葉を理解したらしいティアナが涙を拭いていた。　フラン達としてはその涙の訳を早く知りたいのだが。

「いえ…世界って、ままならないものだなー、って思っただけです

…」

「どこにそんな要素があったんや！？」

「えっ、ちょっと本当に心配になってきたのですけれど」

素早く目線を交わし合う春斗、シャマル、ティアナ。　そして数瞬後、一瞬の内に交わされたアイコンタクトによる攻防戦にて敗北したシャマルは重い口を開いた。

「ええと…非常にいいにくいのだけれど…」

「「？」」

「貴方達が痩せた箇所と太った箇所の変化にちょっと共通点があってね？」

「「え？」」

そう言ってシャマルが開いたのは、端末に入れた先程の身体計測のデータ。　見ると、はやてとフランのデータの一部分が光っている。

「…どうもね、貴方達……」

「…シャマルさん」

「…その…いいづらいのだけど…」

「…言わなくて、いいですわ…」

「…貴方達…二人とも、どうやら“胸”の脂肪から体重が増減してるわね」

フラン・Ｔ・ハラオウン：バスト↓前回測定より７ｃｍ弱減少

八神はやて：バスト↓前回測定より１１ｃｍ強増加

「……」

「……」

広がる沈黙。

動きがあったのは、

「…つД｀）・。・。・。・＊：・。」ダッ

フランだった。

「フラーン！！　泣きながら逃げるな！　一応ダイエットは成功したんだから笑顔で泣け！」

「五月蝿いのですわー！！　春斗なんかに私のことなんて分かりませんわよー！！。・゜・（ノД`）・゜・。」

「まさか俺だってこんなオチ予想外だよ畜生！」

「えっと…これ私、喜んでええんか？　泣けばええんか？」

「笑えばいいと思うわよ」

「なんだろう…フランさんのことが人事だと思えない…涙が止まらない…」

見事に彼女達のダイエットは成功（？）した。　いや、完全に成功したかと問われれば少し首を傾げなくてはならないが。

さて、この件に関しては余談がある。

「あっ、体重が減ってる…走り込みしてるからかな？　うーん、これ以上減ると体に悪いかもしれないし、もう少し食べる量増やそう、っと♪」

「あれ？僕も少し減ってる…増えないのに減るって何かおかしい気がするなぁ…」

結局、今回ダイエットが成功したと言えるのはこの両名だけだった…と言えるだろう。

「ダイエットなんて懲り懲りですわー！！」

「だから泣きながら叫ぶな！　…あれ？　この構図って色んな意味で誤解されねぇ？」

そして今日も、フランの叫びは機動六課全体に木霊するのだった。

さて、時間は同日の夜に移る。

あの後も色々とあって、やはり誤解したフェイトが室内で攻撃を仕掛けてきたりフランが部屋に閉じこもってしまったので機嫌を直すのに2時間程度費やしたり、スバルとエリオが痩せたという報を聞いてはやてと春斗がギャグ的な意味で転けたりなど。

「なんだろうな…めちゃめちゃ疲れた…」

ため息混じりにそう言って、六課のヘリポートの地面に座り込む。

此処は良く月が見えて綺麗なので、一部の男性局員しか知らないスポットだった。　利用する目的は不純なもので、失恋の傷心を癒すためだとか春斗のようにストレスが溜まった時に来たりだとか、その程度のことなのだが。

「…お、ハルトじゃねぇか？」

「ん？　ああ、ヴァイスか」

ふと声を聞き後ろを振り返ると、そこにいたのはヴァイスであった。
手には缶コーヒーを2本持っている。

「これ、飲むか？　今日もなかなかにカオスだったらしいからな」

「…ああ、もらっていいか？」

「そらよ」

春斗の返答を聞き、左手に持っていた方の缶コーヒーを放り投げるヴァイス。　それを片手でキャッチし、それを見届けつつヴァイスも春斗の隣に座り込む。

「しかし、ダイエットねぇ。　俺ら機動六課男性陣には恐らく永遠に理解できないな」

「そうだよな。　そしてそれにまきこまれる俺の心情も察してくれ」

「はっはっは、違いない」

「いや、笑い事じゃねぇから」

そう言いながら笑い合い、雑談する春斗とヴァイス。

これだけ見れば、彼らがどれだけ仲がいいかをうかがえることが出来るだろう。

「――――それで？」

「ん？　なんだよハルト。　それで、って？」

夜も更けてきて、そろそろお開きになりかけた瞬間に春斗がヴァイスの肩を叩きながら笑いながら呼びかける。

それに笑顔で応じるヴァイス。

春斗、笑みを顔に貼り付けながら、ただこう言った。

「機動六課（ここ）に何の用だ、無還者（リセッター）」

『…』

返ってきたのは、肯定でも否定でも言葉でもない。

『攻撃』であった。

“ヴァイス”がその指を春斗に向けたと同時、春斗は座っていた位置から驚異の跳躍でその場から離れる。

瞬間――――豪音が鳴り響いて閃光が走り、春斗がいた位置から直線上にヘリポートが消滅した。

「――――オラァッ！！」

空中に跳んだ春斗は体制を崩したかのような格好でそのまま拳を振るう。

“ヴァイス”との距離は推定２０m以上。　しかし彼はそれに構うことなく拳を振り切り――――

轟ッ！！　という音が空気を裂いて、

直後、ヴァイスへと“何か”が直撃した。

再び夜の空へ粉砕音が響き渡る。　春斗が空中に浮いたまま辺りを見回すと、薄く、それでいてかなり高度で堅固な結界がヘリポートに張られていた。

「（機動六課の結界魔導士全員を注ぎ込んでもこれ程の結界は出せねぇだろうなぁ…俺も俺だが、やはり規格外は変わらず、か）」

そう思いながら、空中で一回転しボロボロになったヘリポートへ着地する。

「…少し違えたか。　テメェは無還者じゃねぇな？　だが、気配も匂いもこれは無還者だ。　改めて聞くがな、テメェは何だ？」

『…、』

その問いにも反応せず、春斗には見えない粉塵の向こうで黙り込んでいる“ヴァイス”。

一方の春斗は、敵の一瞬の動作も見逃さないよう睨むように見ながら構えている。

もし相手が無還者に縁がある者だったりすれば最悪である、と春斗は考える。

なぜならば、春斗が最初に“ヴァイス”のことを無還者と言ったのは、隠しきれていない強大な魔力と違和感のある言葉からそう推測したものであり、もし無還者の協力者であれば――無還者の周囲に、本人と同様の力を持つ者がもう一人いることになる。

果たして、空気が張り詰めたまま1分か2分が経過し――

『フム』

沈黙を破ったのは“ヴァイス”であった。　一言呟きを漏らすと同時に彼の周りを取り囲んでいた粉塵が、ボッ！！　と音を立てて霧散し、消えていく。

『何故“ヴァイス・グランセニック”デ無イト分カッタ？　吾輩ノ憑依ハ完全デアッタ筈ダガ』

「テメェがヴァイスで無いと分かった理由は3つある。　一つ、完全て言うけどな、“兵器（おれたち）”でないとわからない位だったが、テメェからかなり高濃度な魔力が微量だが漏れてやがるぜ。　ヴァイスのものとは思えない禍々しい魔力がな」

『ホォ？　ソレハ気ヅカナカッタナ』

「二つ、一週間前に朝テメェと出会った時、ヴァイスの妹のラグナの話をしたな。　だが、ラグナの負傷した目は右目ではなく左目だ。　ヴァイスは負傷させた大事な妹の患部を間違える程愚かな馬鹿じゃない」

“ヴァイス”――いや、人間のする笑みとは思えない程狂った笑みを顔に貼り付けながら、春斗の話を聞く“何か”。　その口はつ

ぶやく言葉と共に動くが、とてもその声は人間の出せる声では無く。
得体のしれない悪寒と鳥肌を感じながら、春斗は次の言葉を紡ぐ。

「で、３つ目だが」

『？』

「俺はブラックコーヒーが嫌いだ。　ヴァイスならよく知ってるはずだぜ？」

『…フッ、ハハハハハ！！　成程、ソコマデハ考エテイナカッタナ。全ク、汝等“兵器”ハ誠ニ面白イ』

「さて、質問には答えたぜ？　次はテメェの番だ。　もう一度聞こうか、『テメェは無還者の何なんだ』？」

『ヨカロウ、楽シマセテクレタ褒美ダ。　答エヨウデハナイカ』

楽しそうに笑いながら、“ヴァイス”もその声で言葉を紡ぐ。

『吾輩ハ汝ラガ“無還者”ト呼ンデイル男ノ話相手…否、従者トデモ言ウベキカ』

最悪の予想が当たった。　春斗の顔が一瞬だけ歪んだのを見逃さな

かった“ヴァイス”は更に楽しそうに話す。

『安心シロ、コノ行動ハ吾輩ノ独断ダ。　主ニモ報告ハセヌ』

「分かんねぇな。　こんな面倒な行動をしてテメェになんのメリットがある？　テメェ程の実力なら、指一つで機動六課全勢力を相手にだって出来るはずだ。　わざわざヴァイスに化けてまで潜入して来る理由を知りてぇな。　まさか俺ら兵器を見に来ただけとかじゃねぇだろ？」

『御名答。　其ノ通リダ、Ｎｏ．２“消失者”ヨ』

バレている。“兵器”であることだけではなく、自分の忌まわしき“製造番号”や“二つ名”までも。　血が出る程唇を噛み締めながら、更に春斗は目の前の“敵”に質問する。

「尚更分からねぇ。　テメェは何が目的だ？」

『ナァニ、　簡単ナ事ダ。　アノ人間共ガ造ッテイタ兵器ノ、主以外ノ生キ残リニ興味ガ沸イタ。　ソレダケダ』

「…人間共？　まるで自分が人間では無いみてぇにいうんだな」

『其ノ件ニツイテハ言ウワケニハイカンナ。　主ニ止メラレテイル』

「…そうかよ。　じゃあ最後の質問だ」

そう言うと、春斗は腰を低くし、足に力を込め、瞬時に飛び出す準備をし、

「ヴァイスを何処へやった？」

と、聞くと同時に飛び出した。

春斗の本気のスタートダッシュのスピードは、秒速７００ｋｍ超を記録する。　一瞬だけだが、それは瞬間移動にも等しい速度であることには変わりはない。

パパパパンッ！！　と、空気が破裂する音が響き――響いたと感じた瞬間には、春斗は“ヴァイス”の後ろを取っていた。

『！　ムッ』

そして“ヴァイス”が振り向いたのは、春斗が攻撃を放つ寸前であり。

「“零距離”」

――――――――パニッシュインパクト！！

巨大な光の砲撃が彼の拳が振るわれると同時に放たれ、夜空の下、本日最高の威力を持つ一撃が“ヴァイス”に直撃した。

「（手応えは感じた！！　だが、一瞬のうちに障壁を展開された…！！　構えてから放つまで2秒も経ってねぇのに今の砲撃の威力を3分の2以上殺す障壁を展開するとか、マジでバケモンだなクソッ！！）」

『見事。　誠ニ見事。　S級砲撃ナラバ無効化スラ可能ノ吾輩ノ障壁ヲ打チ砕クトハ、本当ニ汝ラハ面白イ』

“消失”の概念を喰らって平然している“ヴァイス”は、愉しそうに手を叩きながら口を開く。

『シカシ、1ツ汝ハ勘違イをシテイルナ。　吾輩ハコノ“ヴァイス・グランセニック”ノ身体ニ取リ付イテイルダケダ。　憑依、ト呼ベバイイカ？　吾輩ハ汝ノ言ウグランセニックデアリ、ソウデハナイノダ』

「んなことはどうでもいい。　それならさっさとその体を返しやがれ」

『…フッ、アノ頃トハ全ク違ウナ。　自分ノコトデハナク友人ノ身体ヲ優先スルカ…』

「…あの頃？　…ッ！？」

“ヴァイス”の言葉に引っかかりを覚えた春斗はその意味を考え――目を最大限にまで見開いた。

そして口を開こうとした瞬間、それに被せるように“ヴァイス”が低い声を轟かせた。

『消失者（パニッシャー）…否、“タカマチハルト”。　真実ヲ知ロウトスルソノ姿勢、誠ニ興味深イモノダ』

常人なら、気づかぬ内に膝を付いてしまいそうな威厳を持つかのような言葉。

春斗はこの声を本能が知っている。

そう、自分が子供の頃、投与されたＤＮＡの中で唯一“悪夢”として記録されていた声。

『ダガ、知レ。　コノ件ノ真実ハ、汝ガ思ウ以上ニ闇ノ中ヘ沈ンデイル』

「テ、メェ」

『真実トハ、イツノ時代モ残酷デ穢レテイル。　汝ハ知ルベキデハ無イ』

「まさか、テメェ、は…」

『――ソウデアッタナ。　吾輩ノ名ヲ言ウノヲ忘レテイタ』

冷や汗が止まらない春斗を見据えながら、“ヴァイス”の身体から得体のしれない真っ黒な“何か”が溢れ出してゆく。

そして。

パンッ、と。

何かが、ヴァイスの体から飛び出した。

「――――――――――ッ！！？」

飛び出した“何か”は春斗の真横を横切り、そのままの速度で消えていく。

『吾ガ名ハ“デミス”。　真ノ名ハ分カラヌ、トイウコトニナッテイル。　汝モ吾輩ノヨウニナリタクナケレバ――今ハ只、時間ニ身ヲ任セヨ。　マタ会ウコトモアルダロウ。　次ハ主ト共ニ、戦場デナ』

春斗は振り向けない。

そして“デミス”と名乗った“何か”の気配が消えると、そのまま膝をつき息を吐く。

「…ッ！！　はぁ、はぁ、はぁ…！！」

冷や汗で水たまりが出来ている。　これは本能が危険信号を発していた証拠でもあり、そして…

「…畜生…情けねぇ…ッ！！」

彼が怯えた証拠でもあるのだった。

分からない。

だが、大昔に実験と称して投与されたＤＮＡが、拒絶反応を示しているのは確かだ。

何の、誰のＤＮＡかは聞かされていない。　当然といえば当然であるが、“デミス”というのが何者であるかはなんとなく理解した。

「何故だ…」

満月が照らす、ボロボロになったヘリポートで春斗は呟きながら自分の頬を触る。

小さく、斬られていた。

それこそ、彼らにとってはそこまで意味の無いような傷。

だが、治らない。

再生能力というものが彼らにはあるのに、傷が治らない。

不可解な点はいくつもあるが、春斗は今はただ只管に、

「何故…この時代に…古代ベルカ時代の“王”がいる…！？」

どうしても受け入れられない現実を、噛み締めるのだった。

～次の日～

「おはよう、春斗…あれ？　その絆創膏、どうしたの？」

「…？」

「ああ、なのは姉にフラン…ちょっと転んじまってな」

「そうなの？　まったくもう、変なところで春斗は抜けてるからね。気を付けなきゃ」

「あはは、わりぃわりぃ」

笑い合う姉弟。少し雑談し、しばらくして仕事があるからとなのは
は先に行った。

後に残ったのは、春斗とフランのみ。　しばらく無言の時間が続く
が、先に口を開いたのはフランだった。

「何がありましたの？」

「…、」

「私達には共通して驚異的な治癒能力がありますわ。　その程度の
小さい傷なら、1秒も経たずして治るはず…考えられるのは、そう
簡単に治癒できない傷であるのかあえて治癒をしないのか…」

「すまねぇな」

その声は、フランには重く、聴きたくない言葉だった。

「話すわけには、いかない。　まだ…な」

「…どうしてですの？」

「もう少し、待ってくれ。　頼む、お前には絶対に迷惑は掛けない」

「…、」

少し見つめ合う両名。

そしてこの言葉に折れたのも、フランだった。

「わかりましたわ。　でも、何かありましたら絶対に私に報告するのですわよ？」

「ああ、分かってるさ…」

その呟きは、空気に溶けて、消えた。

余談になるが――――――――――

“ホテル・アグスタ事件”が起きたのは、この数日後の事だった。

閑話“機動六課ダイエット作戦”（後書き）

フラン「。・゜・（ノД`）・゜・。」

なのは「ああ、フラン泣き止んで…（（（（（；。д。）））））」

フェイト「私の出番、今回少なくない？」

天破「いや、だって貴方太ってなかったでしょ」

あ、あの後ヴァイスは普通に回復しました。一週間ほど記憶は飛んでいましたが。

頭を打って記憶が飛んだことになったみたいです（＊´∀`＊）

春斗「ご都合主義だな」

天破「ネ申の気まぐれといってもらおうか」

春斗「変わらねぇよｗｗ」

次回から新章・ホテルアグスタ編突入！！　レリックを奪った者の目的は？　事件現場の監視カメラに映っていたものは？

ホテルアグスタで行われる、無還者の任務とは！？

次回もおたのしみに＾＾ノシ

“生命”（前書き）

安定の深夜（というか朝）更新ッ！！　眠すぎて死にそうな天破です。

今回はとんでもなくシリアスです。始まりから終わりまでシリアスです。もうね、ギャグがない話を私が書くことになるとは思わなかった。　精神的にも死にそうですが私は元気です。

この話を読むにあたっての注意事項！！

・シリアスです。『ギャグなんて無かった』状態です。
・なのはさん好きの方ご注意！　ちょっと今回はなのはさんが悲惨です。
・フェイトさん好きの方ご注意！　今回はフェイトさんがズタボロです。
・春斗がキレます。　結構怖いです。

さて、新章突入ということで無還者ＶＳ機動六課がいよいよ本格化してきたような来てないような。　ただ、正直春斗やフラン達が協力しなければ絶対に無還者には勝てませんけどねｗ

まずはその前哨戦的なもの。　果たして最後に笑うのは誰でしょう？

それではどうぞｍ――ｍ

“生命”

『ぎゃあああああああ！！　やめ、止めてぐ、れ…！！』

『嫌だ！　俺には家族が居るんだ！　頼む、助ｋ――』

『ぁ〝ぁぁあああぁぁああ！！　が、どう〝じでこんな〝』

「…うぷっ」

場所は機動六課会議室（ミーティングルーム）――

見ているのは、本部のロストロギア保管所で起きた“レリック”強奪事件――否、『レリック強奪虐殺事件』でかろじて残っていた監視カメラの映像だ。

見ている局員の中には、本人の希望によりキャロやエリオ、春斗やフランの姿も見える。　だが年齢問わず、その場にいる局員の顔は青かった。

『じ、にたくな〝い、やめ〝…』

『任務条件は“ロストロギアレリックの強奪”及び“兵器発見局員の抹殺”です。その命令は受け付けられません』

『ぞ、ん〝な…あ〝…』

『ひぃぃぃぃぃぃぃ！！　くるな、来るなぁあああ〝あ〝あ〝…っ…』

『魔術開放（マジックオープン）：詠唱破棄　“フォトンランサー…”』

「…ッ！！？　止め――――」

『は、はは…こんなの、聞いて、ない――――』

『“エクスシフト”』

蹂躙しているのは、“黒いドレスのようなものを着た男”。

蹂躙されているのは、ほんの2日程前まで笑顔で会話していた管理局員達。

監視カメラ最後の映像は、男が一瞬で生み出した金色の槍が男性局員を抵抗なく貫いた所で終りを告げた。

「…ッ！！！」

歯を食いしばりながら、フェイトが思いっきり拳を握り締めて映像の男を睨む。

「…今の、魔法は…」

「…うん…昔、フェイトちゃんが使ってた魔法…」

心優しき金色の閃光の魔法が、人殺しの為に使われた。

その事実に、皆顔を歪めて悲痛な顔をしている。

静まり返るミーティングルームで、一言春斗がつぶやいた。

「…おかしい」

「春斗？　何がおかしいの？」

その一言に敏感に反応したなのはが春斗を問いただす。

春斗が顔をしかめつつ、口を開いて疑問をそのまま言った。

「『映像がそのまま残っていること自体』がおかしい。　なのは姉から聞いた話からすると、監視カメラなんて全て壊されて証拠なんてなくたっておかしくない筈だ」

「壊し忘れたとかじゃ――――」

「スバル。　炎を凍らせたりとか、なのは姉やフェイトさん、果てにははやてを相手に遊ぶような奴がそんなヘマをすると思うか？」

しかめ面を崩さずそう断言する春斗に、それは確かにと納得し引っ込むスバル。

「ちょっと待つんや春斗。　じゃあなんや？　この男は――――『監視カメラがあることを知って』こんなことをしたと言うんか？」

「そうなるな」

「どうして？」

そういったのは、言葉の節々からイラついているのが丸分かりなフェイトだ。　よほど自分の魔法を使われた事が悔しいらしい。

「そんな事をしてもアイツにメリットなんて一つもない！！　あるとすれば、私達への嫌がらせとか――――」

「恐らくそれで合っていると思うぜ？　フェイトさん」

「――――え？」

静かに告げる春斗の目に宿っているのは、画面の男と混乱している様子のフェイトだった。

「考えても見てくれ。　この映像は随時管理局の本局のみならず他の管理世界で自立的に警察みたいなことをやっている組織にも配布される」

「…、」

「これは俺の推測に過ぎないが…もしこの映像を見た奴らが、この男が映像内で唯一使っている魔法を調べ、それが管理局の誇る“金色の閃光”と同様の魔法であると分かった場合はどうなるか…」

「…ちょっと、待って……」

「俺だったならば恐らく――――フェイトさんと男と関係があるのではないかと疑うな」

「そんな事ある訳がない！！　私は…」

「当然だ。　そんなことはこの機動六課メンバーや管理局員がよく知っている…だが管理局以外の自立した組織はそうはいかない。恐らく管理局、そしてフェイトさんやフェイトさんに関係のある人物に疑念を持ち始めるだろう」

「…ッ！！」

「…春斗、それはつまり…」

「ああ。“レリックの強奪”というのも目的なんだろうが、もしかしたら――――所詮1局員の被害妄想に過ぎないかもしれないが――」

春斗は相変わらずしかめ面を崩さず、ただ事務的に言い切った。

「この男の本当の目的は――――『管理局の信頼の低下』もしくは『機動六課』そのものにあるかも知れねぇな」

機動六課ｓｉｄｅｏｕｔ

???ｓｉｄｅ

「『任務完了です。　レリックの強奪、及び局員の殲滅を終了しました…質問です。まだ他に任務はございますか?』」

『　　。

』

「『了解…ロストロギア“レリック”の厳重封印を施した後、管理者の下へ転送、同時に次の任務へ移ります。　同時に確認します。

任務について他に追加することはありますか？』」

『　　。

』

「『任務内容の詳細を把握。　確認します――』」

雨の降っている、今も話し合いが行われている会議室の上――上空。

真っ黒なドレスのような服を着た男が、空中に浮きつつ、黒い瞳で眼下に存在する施設を見ている。

いや、正確には――その施設内で今も会議が行われているであろう、とある課のミーティングルームを、禍々しい魔力を放出しながら見据えていた。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

機動六課ｓｉｄｅ

「『管理局の信頼の低下』と…『機動六課』そのものが目的…？」

「あるいはその両方ってとこだ。　はやて、その件に関しての可能性は？」

「十分にありえるな」

即答であった。“秒”を待たずしての即答に、それも部隊長が管理局そのものを否定しかねないことをズバッと言い切ったので流石のなのはや春斗までも目を丸くする。

「だってそうやろ？　…フォワードやなのはちゃんには黙って来たんやけどな、せっかくやから言うで？　この部隊は知っての通り『部隊の持てる魔導士ランクの限界』というのを完全に無視している状態や」

「うん。　それは私も思ってた」

「そやろ？　それをやって周りからとやかく言われない訳はな、皆にリミッターを掛けて無理矢理魔導士ランクを下げているから…そして強力なバッグホーンが後ろにあるからや」

「強力なバックボーン？」

「…三提督を始めとして、リンディさんやカリム、クロノ君辺りがな」

これには皆が少しの間絶句した。　まさか伝説の三提督までもがバックにいるとは思わなかったのだろう。

「もちろん、そうなると快く思わない人もいるということや。　地上本部のレジアス中将がいい例やな。　他にもたくさん私らの部隊に反対の人は多くおる」

「…はやてちゃん、それ、どういうことかわかってる？」

「なんのことや？」

「とぼけないで！　はやてちゃんは今、遠まわしに『今回の事件は管理局の誰かが手を引いている』って言ったのと同じなんだよ！？」

「「「！！」」」

「「「…、」」」

なのはの悲痛な声での指摘に、驚愕するフェイト達と黙り込むはやて、フラン、春斗。

そもそもはやてはこの“兵器”が命令されてこういうことをやっているのだと既にゲンヤやカリムから聞いている。　だからこれも―信じたくはないが、管理局の上層部の何者かが任務を依頼してやったことなのだと考えていた。

春斗とフランは――言うまでもないだろう。　彼らは知っている

も何も彼と同じ“兵器”である。　当然ながら無還者が命令されて局員を殺しているのだと分かっていた。

だからこそ、彼らにとってはやての『管理局を疑う姿勢』は予想外だった。　なのは、フェイト、はやての3人は小さい頃から管理局に勤め、その信頼も大きいはずだ。　人はそう簡単に一度信じた物を裏切れない。　はやてがそんな柔軟な思考を持てるとは思わない、とすると――

（（プロジェクトの事を知った…？））

フランと春斗の思考がリンクするも、その可能性は低いと自分達自身で考える。　もし知ったとして、誰から聞いたのか？　少なくとも“兵器”以外の管理局員で“無還者”に適う者など検討がつかない。　プロジェクトのことは普通に考えて極秘事項、外に漏らせば兵器よる処刑が待つ。

こんな状況の中で、誰か上層部がはやてにプロジェクトの事を漏らすとは考えにくい。

しかし、万が一はやてが知っていた場合――彼女はいったいどうするだろう？

そしてそれを知っている上ではやてが自分達の正体を知ったら？

（…考えるな……今はまだ、最悪の結末を考えるときじゃない…）

頭の中に起きた“結末”を振り払い、白熱し始めた会議に耳を傾ける。

「――せやから、私はただ可能性を述べただけや！」

「可能性！？　こんな非人道的なことをする人が、管理局の…私達と同じ組織にいるの！？」

「管理局に居るからって、皆が皆同じ思想を持っているとは限らへんやろ！？　私達みたいに犯罪者を捕まえようとする局員も居れば、それを疎む輩もおるんや！！　それの何がおかしいんや！？」

「それはそうかもしれない、けど人を殺していい理由にはならないよ！！　はやてちゃんは許せるの！？　そんな人が同じ場所で働いてて――」

それを聞いた春斗の感想はといえば。

“子供の喧嘩か”

ただ、それだけだった。

しかし今のなのはの言葉は春斗の顔にさらに皺を作るのには十分過ぎる物だった。

気付かないうちにヒートアップしているから気づかないのかもしれないが…余りにも今の言葉は戴けない。

ここには無還者よりも数は少ないかもしれないが――人殺しをした者が最低“５人”いる。

春斗と、フラン、そして――ヴィータとシャマル、ザフィーラのヴォルケンリッター。　ここにいないシグナムもきっと一人は殺したことがあるだろう。

見れば、ヴィータとシャマルは顔を俯けてしまっている。　ザフィーラは狼モードだが、やはり何処か寂しそうだ。

春斗達は人殺しの経歴が浅い上、殺すのは管理局から『捨てられた』局員達であったため感慨など何も起きなかったが、彼女達は違う――春斗達が生まれるさらに以前から、主の命令で、そして主そのものを本心では無いのに殺してきたのだ。

つまり、今のなのはの言葉はヴィータ達を全否定してしまっていた。

「（フラン。　頼む）」

「（ええ、わかりましたわ）」

今も子供の喧嘩の様に怒鳴り合うなのはとはやて。　フェイトはどうやらそれを静観する様で、エリオ達新人魔導士を落ち着けている。
　これはいい判断だろう。　これでフェイトまでもあの喧嘩に参加するようだったら、本当に無還者やその管理者の思う壺だ。
せめて、俺だけは冷静に行こうとなんとか深呼吸しなのはの肩を叩き呼びかける。

「なのは姉？」

「何！？　今は『春斗には関係な――――』」

「ちょっと黙ろうか、エース・オブ・エース」

「――――え？」

無理だった。　なのはの不用意な言葉によって一瞬で冷静さを失った春斗は冷たい目でなのはを見据え、言葉を紡ぐ。

「俺には関係ない？　ああ、そうか、それならそれでもいいぜ？　俺はもともと平隊員だからな、誰が死のうと知ったこっちゃない」

「は、ると？」

「アンタやはやてが死ぬのは困るから声をかけただけなんだけどなあ。　そうか、アンタのことは分かったよ、なのは姉」

「はる――――」

乾いた音が響いた。

春斗が、なのはの頬を叩いた音だった。

「出て行ってくれ。　んで少し頭を冷やして来てくれ。　さっきから聞いてれば『人殺(そんな人)しが同じ場所で働いてていいの？』だの不用意な発言が目立つな。　ここに人殺しをした事がない程綺麗な奴ばかりがいると思ってたか？」

「……ぅ、あ…」

その言葉に『春斗は関係ない』と怒鳴りかけた事への追求は含まれていない。　それは春斗が諦めたからなのか、それとも追求することすら忘れるほど怒っているのか…

「殺しは確かに重罪だ、許されることではないと俺だって思う。だが、悔い改めて反省し、そして関係者にも謝罪して心を入れ替えて管理局で働くのは駄目な事なのか？」

「…ち、がっ……」

春斗自身はと言えば、管理局で働くのは一向に構わないが殺した罪

は永遠に背負うべきだという考えを持っている。

「しっかりと自分の言った事を反芻して来い。　今のアンタは此処にいる資格はない」

「…っ、あああああっ！！」

春斗の冷酷な目線と、言葉の攻撃に耐えられなくなったか、遂には椅子を蹴ってその場から駆け出した。　会議室の扉が開いて勢い良く締まり、再び沈黙が会議室全体に広がる。

「…春斗…」

「何だはやて。俺への罰ならなんでもいいぜ？　どうせならクビにしてもいい」

「違う…そうやない…ありがとな。　ヴィータ達のことを思って言ってくれたんやろ？」

「それもあるけどな…なのは姉の考えは少し固まりすぎだ。　もう少し柔軟な思考が欲しい所だな」

そう言ってなのはが座っていた椅子を起こし、そこに静かに座る。

そしてじっと俯いているフェイトの方をむいて、笑って言った。

「すまないなフェイトさん、行ってやってくれないか？」

「…、」

「今のなのは姉には俺が行っても逆効果だ。　親友のフェイトさんが居た方が良い」

「…分かった。　ありがとう、春斗」

言葉は小さかったが、確かに伝わった。　笑みを浮かべて春斗が頷くと、フェイトもなのはを追いかけるように会議室を出ていく。
それを見ながらはやてもクスリと笑う。

「さ、皆。　ちょっとトラブルもあったけれど、続けよか。　春斗、フラン、この中では一番アンタらが管理局と関わって日が浅いやろ。　言い方は悪いかもしれへんが、私達みたいに管理局のいい所ばかり見てはいないんやないかと思う。　何でもええ、管理局やこの男について気づいたことがあったら話して欲しい…もちろん、ヴィータやティアナ達もな」

少し躊躇った者もいるが、全員元気よく返事をし、会議は再び始まった。

エース・オブ・エースと金色の閃光を外したまま――。

機動六課ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

フェイト・Ｔ・ハラオウンｓｉｄｅ

なのはは何処に行ったのだろう。

小走りで息を切らせながら、辺りの職員に聞きつつ歩を進めていく。

「…ここにもいない……」

中庭に出てきたが、ここにも誰も居なかった。

昔から一人で抱え込むなのはのことであるから、ひと目のつかない場所にいるかと思ったが――

「（中庭にも部屋にも居なかった…じゃあ、何処に…？）」

いよいよ見つからず、焦りが彼女の顔に浮かんだその時。

ポツ…ポツ…ザァァアアアッ…！

「…雨…」

いきなりの豪雨が彼女を襲った。当然ながら傘など持っていないので、彼女の特徴である金色の髪も雨水で濡れていく。

≪サー、このままここに居ては濡れてしまいます。一旦隊舎に戻るべきかと≫

「うん、そうだね…ありがとう、バルディッシュ」

そんな彼女を心配して声をかけた愛機（デバイス）に礼を言い、この雨ならなのはも外には出ないはずだと考え、隊舎に戻ろうと引き返した。

「『こんにちは、フェイト・T・ハラオウン』」

「――――――――――」

挨拶と共に彼女を襲ったのは、巨大な大鎌であり。

卓越した彼女の反射神経は、それをバルディッシュのザンバーフォームで受け止めた。

「…おま、えは…！」

「『お久しぶりです。　お元気でしたか？』」

「ふざけるな！！　お前のせいで…私達は…！」

金色の大鎌と銀色の大鎌が鍔迫り合いをし、バチバチと火花が散っていく。

その様子を見て、フェイトは歓喜もせず気も緩むことすらせず――

「（そんな…鍔迫り合い“してる”…！？）」

愕然とした。

バリアジャケットを展開していないとはいえ、現在バルディッシュの魔力出力は全開だ。　ダイヤモンドすら切り刻むであろうその刃が、見た目はただの鉄の筈の質量兵器と互角。　いくら相手の実力が底知れぬからといって、こんなこと起こり得るのか？

数分、そうやって鍔迫り合いした後にどちらからともなく力を込め鍔迫り合いを解く。　そしてその一瞬の内にフェイトはバリアジャケットを装着し、更にバルディッシュの出力を上げる。

最早形振り構ってなどいられない。　今の鍔迫り合いで理解した、理解してしまった。

この男は異常だ。

管理局と繋がっているか繋がっていないかと言う以前に、勝てる要素が見つからない。

「『そういえば、何か捜し物をしていましたね？』」

「…それがどうした？」

「『もしかして、彼女の事ですか？』」

その言葉と同時、『誰もいなかった筈の場所』からなのはが現れる。

「！？　なのは！！」

「…フェイト、ちゃ、ん…！！」

その声は苦しそうだが、紛れも無くなのはの物であり。

「貴様…なのはに何をした！？」

「『その問いにお答えすることは出来ません。　彼女が何をされているか私は知りませんので』」

「…う…フェイトちゃ、助け…！！」

「…ッ…！！　…要求は？」

「『ご理解が早くて何よりです。　私の目的は貴方の魔力です。

リンカーコアを頂きましょう』」

「…蒐集ってこと？　分かった、それでいい。　でもまずはなのはが先だ」

「『いいでしょう。　解いて差し上げてください』」

その言葉と共に、なのはの体が一瞬だけ揺れて頭を抑えるように膝を付く。

「…はぁ…はぁ…」

「なのは――」

「『おっと』」

走り出そうとフェイトがなのはの元へ向かおうとした瞬間、機械的な音声が響きフェイトとなのはの間に巨大な亀裂が走った。

それが一瞬の内に男が放った斬撃によるものだと理解したのは、亀裂が走った後だった。

「（全く見えなかった…！？）…ッ……！！」

「『警告です。　貴方はそこで停止してください』」

「……分かった…」

その言葉を聞き、ゆっくりと、しかし確実にフェイトのもとへ歩いていくなのは。

そして時間は掛かったが、ようやく亀裂を超え――――

「なのは！」

「フェイトちゃん――――」

フェイトがなのはを抱き締めた。

「――――ありがとう。　そして、ばいばい」

「え？」

今言われたことと自分の状況を確認するフェイト。

なのはの腕が、自分の胸を貫いていた。

バルディッシュのコアが、相変わらずの無機質な目でこちらを見ている男から放たれた小さな針で貫かれていた。

そして――――今、なのはは何て？

≪サ…ー…≫

コアのみを正確に破壊され、所々ノイズを発生させながら、バルディッシュは愛する主の為に警告する。

≪お気を、付けて…その者は…人間では、ありませ…（バキィッ）≫

そしてコアが完全に壊れるのと同時に、“なのは”の腕がフェイトの胸から引き抜かれる。

その手には、小さな金色の玉が握られていた。

「かハ…」

「ふはははは、上手くいったな」

「『任務目的“フェイト・T・ハラオウンのリンカーコアの蒐集”の達成を確認。　管理者への報告を開始、並行して次の任務へ移ります』」

痛みで膝を付いてしまうフェイト。　気絶しないよう歯を食いしばり、拳を握り締めながら彼女は男と“なのは”を睨みつける。

「…貴様…なのはじゃ、ないな…！？」

「ああ…そうか。　フェイト・T・ハラオウンとはまだ会ったことがなかったか？　主」

「『その回答ですが、正直私は貴方の行動を全て把握している訳ではありません。　しかし、私と共に任務を行なった際には邂逅したことはないと思われます』」

「そうか。　ならばせっかくだ、自己紹介でもして置くとするか」

そう言って、“なのは”は自分の顔に手を置いて…

自分の顔を『剥いだ』。

「…え？」

『…改メテハジメマシテ、ダナ』

顔の右面だけ、なのはの顔の皮膚がついていた。

左面は、ただの“骸”であった。

『吾輩ノ名ハ“デミス”。　以後オ見知リオキヲ、フェイト・T・ハラオウン』

「ひ…あぁ…あ…」

片面はなのはの顔、もう片面は骸骨。　その異様な光景に、フェイトは思わず腰が抜けてしまい泥状態の地面に座り込んでしまう。

そんな彼女を見ながら、無還者は骸骨に向けて言う。

「『デミス。　記憶はどうせ“飛んでいることになる予定”なので

すからそこまで効果は無いと思われますが？』」

『別ニ滅ルモノデモアルマイ？』

「『申し訳ありませんが言葉の意味がよく理解できませんでした』」

『…兵器（ウェポン）の心（マインド）トイウモノハ日常生活ニハ不便ナダケデハナイノカ？』

「『その言葉の疑問点ですが、残念ながら私には“日常生活”を送った記憶がありません』」

『…違イナイ』

何やら話している2体を前に、フェイトは動けない。

自分の理解の範疇を超えた『化け物』が2体――冷静な自分があらゆる逃走手段を提示するが、また別の冷静な自分がその手段が成功する確率の低さを提示する。

走って逃げる？

――無理だ。相手はソニックムーブを身体強化なしで捉えるほどの演算能力を持っている。　魔力強化なしで走って逃げたりすれば、一瞬で追いつかれるのがオチだ。

無理を承知で挑む？

――リンカーコアを奪われた痛みで立つこともままならないこの状況で？　バルディッシュも破壊されたこの状況下で救援が来るはずもない。　しかも此処は今も豪雨が降り注いでいる。　彼女が叫んだところで、雨の音にかき消されるだけだろう。

見逃してもらうよう頼み込む？

――論外だ。　それをやったとして見逃して貰えるはずがないだろうし、何より自分自身のプライドが許さない。

『ホホォ？』

ふと、そこまで考えたところで骸骨が感心したような声を上げる。

『自ラノ生命ヨリ自ラノ尊厳ヲ優先スルカ。　見事ダ、ソレガ蛮勇ナノカ汝ノ勇気トイウモノナノカハ分カランガナ』

読み取られている――――。　そして悪寒と共にもう一度理解する。

自分の全てを費やしても、恐らく目の前の“化け物”には勝てない。

（せめて――――）

だから彼女は、少しだけ体に残っていた魔力を全て使い念話を繋げる。

自分の記憶を、誰かに遺す為に。

（せめて、この事だけでも誰かに――――！！！）

が。

「『残念ですがその思考は無駄だと断定します、フェイト・T・ハラオウン』」

それすらも、目の前の化け物には通用せず。

辛うじて繋がろうとしていた念話の糸は、何かに遮られるかのようにブツリ、と切れてしまった。

「『機動六課全体に念話のジャミングを仕掛けさせて頂きました。所詮5分程度の応急措置の様な物ですが、今の貴方になら十分でしょう』」

念話のジャミング――言うは易しだが、それを実行するにはＡＭＦなどの魔法を丸ごと無効化するような機械が無いと通常なら不可能だ。

それを、目の前の男は瞬時に仕掛け、同時にフェイトの最後の希望をも絶った。

「『ご心配なく。　死ぬことはありません。“私と出会い会話した記憶が飛ぶ”だけです』」

「…何故」

「『…“何故”？　申し訳ありませんが質問の意味が分かりません』」

「何故、貴方はこんなことをするの？」

全ての希望を完全にへし折られ、かろうじて出た言葉はそれだけだった。

その質問に兵器は暫し考え込むような動作をみせ、直ぐに口を動かした。

「『それが任務ですので』」

「任務？　ああやってレリックを奪うついでに人を殺すのが任務？」

「『はい。　全て指示通りに私は動いた。　その結果“生命”が失われた。　それだけのことです』」

「…っ、どうして、なんで貴方は何も感じないの！？　貴方は人を殺した、でもそれは自分の本意じゃないんでしょ！？　少しでも命を尊ぶ気持ちがあるのなら…！！」

その言葉に、彼は無言で首をかしげた。

「『何故、“命”に尊ぶ気持ちが必要なのですか？』」

「え？　そ、それは――」

「『申し訳ありませんが理解出来ません。　生とは確かに全ての人間に平等に与えられる権利ですが、死という概念も等しく全ての人間に与えられます。　その違いは与えられる時間…それが私の行いで長くなろうと短くなろうと、それは私が“命を尊ぶ”という概念を持つに至りません』」

「…！？」

「『命とは所詮、いつかは消える電子データと同義。　いつかは散る木と、いつかは燃やされる塵と何ら変わりはしないのです』」

そして、フェイト・Ｔ・ハラオウンは悟る。

目の前の化け物は、根本的に自分達と考え方が違うことを。

目の前の“兵器”にとって、生命とは“塵”や“電子データ”と同様の物であり――“生命”を“生命”として見ていないという事を。

「…こんな、ことって…（ガシッ）　！！」

『申シ訳ナイガ、時間切レダ。　フェイト・T・ハラオウン』

暗く沈む意識の中、この世のものとは思えない程狂気に溢れた声が彼女の脳に響く。

『希憶喰い（ホープイーター）』

そして、フェイト・T・ハラオウンの意識は暗転した。

“生命”（後書き）

天破「イメージと違う展開と私の表現力に絶望した。　眠いぜ…！！」

春斗「いや、寝ろよ」

今回の無還者の“生命”についての考え方は週刊少年ジャンプ連載中の『めだかボックス』の“悪平等”を参考にさせて頂いております。

尚、最後にデミスが使った『希憶喰い』ですが適当に考えたので後に変更するかもしれません（ぉ。　何かダサいじゃないですか。。

春斗「なら記憶を忘れさせるなよ」

天破「だってここでフェイトさんが『デミス』の事覚えてたら閑話の存在意義なくなっちゃうでしょうが」

春斗「ああ、成程」

それでは、次回もお楽しみに＾＾♪

“信頼”（前書き）

安定の深夜更ｓ（ｒｙ

大丈夫です。天破は生きていますからそのお経をおやめください。本当に成仏したらどうするんですか。（ぇ

さてさて、此処でお知らせです。なぜこうも奇跡の高速（？）投降を出来ているかというと天破が勉強をサボっているからでして本来ならこんなことはありえません。なんという自業自得。　留年する未来が見えるようです。（ぉ

という冗談に聞こえない真実もあって、要するにこれからは更新速度がガタ落ちします。
暖かい目で見据えてやってください。よろしくお願いします（（（（；。д。））））

という訳でこの話を読む上での注意事項！！
・なのはがどうも格好いいです。あと何かフラグ的な何かが立っています
・無還者ｖｓ機動六課前哨戦終結！結果がどうでも怒らないでね☆彡（殴
・無還者に異変…だと…！？
・チート集団よりなる国、ようやく登場

ごめんなさい、相変わらずよくわからん注意事項で。
ラストの方で前々から出す予定だったオリジナルの世界が出現します。

第2管理外世界って、原作じゃ出ませんでしたよね？　適当です。
ごめんなさい。

それではどうぞ（´ー`）

“信頼”

――結果として、最初に異変に気づいたのは、春斗だった。

今の今まで全く感知できなかった“兵器”クラスの魔力反応が一つと“兵器”とまでは及ばないが強大な魔力反応が一つ。

いつ転移したのか、何をしていたのか、全く気付かなかった程の隠密作業。

唇を誰にも気づかれぬ程度に噛み締め、フランにのみ分かるように念話する。

（フラン！）

（分かっていますわ…くっ、不覚！　でもどうしてですの？　今の今まで気づきませんでしたわよ！！）

（慌てんな…もう結果は出ちまっている。　幸い、六課内で生命反応が消えた人間はいない。　なのは姉の反応もあるし…フェイトさんも…！？　オイ、フェイトさんの魔力反応が弱いぞ！？　どういうこった！？）

（待ってください……　成程、このフェイトお姉様の状況は“蒐集”に似ていますわ。　恐らく侵入者の目的は、フェイトお姉様の魔

力…いや、もしかしたら他の方の魔力も狙われているかもしれない…！）

（ッ…！　くそ…この状況を狙ったかの様な襲撃…となれば此処にきているのは…）

（ええ…見事に私達は、“お兄様”…またはその“依頼者”の策に嵌ったようですわ…！！）

彼らの予想は、間違ってはいなかった。　無還者の狙いは確かに『機動六課』だった。

だがその目的が『魔力』であったことだけは予想外だった。　無還者一人で管理局の全勢力を１００倍した値を相手に完全完封勝利出来るとまで言われているのだ。　魔力だって桁違いである。　そんな彼が今更自分の意思で魔力を欲する筈もない。

となればやはり命令しているのは裏にいる何者か――。　はやて達はもちろん一向に気づく様子も無くミーティングを続けている。

歯がゆい思いを感じつつ、この状況を打破するべく本気で頭を回転させる春斗達。

（“兄貴”の狙いはやはりこの機動六課か…！　一時的でもいい、大量の魔力を持つ隊長各が一人、それか少数になるのを待っていたんだろうな。　そして少数になった所を狙って襲撃して魔力を蒐集…フェイトさん、なのは姉の実力は高いが、流石に兄貴には及ばない。　一般局員が近くにいてもおそらく結果は同じ。　せめてフェイトさんと俺らが一緒にいれば…！！）

（しかし、何故少数になった所を狙ったのでしょう？　お兄様の実力なら、ここを直接狙って纏めて蒐集することも可能な筈ですわよ？）

（それは分からん！　何か理由があるのかもしれねぇ…魔力を蒐集しているのをまだ知られたくないのか、それとも“依頼者”の意向なのか…とにかく、まずはフェイトさんをどうにかしねぇと！）

「そういえば、フェイトちゃん遅いなあ…なのはちゃんが見つからんのやろうか？」

そこまで考えたところでいい具合にはやてから心配の言葉が。　ここがチャンスと、春斗が身を乗り出して口を挟む。

「確かに遅ぇな…ちょっと探してくっか？」

「そうやなぁ…春斗、頼めるかいな？」

「任せとけ。　多分説得に時間が掛かってんだろうしな…俺が言えた義理じゃないが、時間を置いたほうがいいかもしれないし、呼び戻してくる」

「頼むわ」

平静を装い、フランに『念話で何か異変があったら連絡を来れ』と

頼んでおく。　微かに頷いたのを確認し、会議室を出てドアが締まったのを確認すると高速で駆け出した。

（フラン！　フェイトさんの詳しい位置は分かるか！？）

（問題ありませんわ！　ええと…此処は中庭です！　どうやら外に出たところを襲撃されたらしいですわ…）

（了解した、サンキュー！）

行くべき場所は理解した。　バレない程度に魔力を使い、曲がり角を加速を緩めずに直角に曲がって更に駆け出す。

頭の中の地図を頼りに走り、中庭に出ると見慣れた金髪の女性が倒れていた。

「フェイトさん！」

自分が濡れるのも構わず思いっきり足を踏み込み再びバレない程度に魔力を使い跳躍する。

２０ｍ以上の距離があったが難なく着地し、倒れて服もびしょ濡れなフェイトを仰向けにして状態を調べる。

「…（よし、命に別状は無さそうだ。　だがリンカーコアが異常に

弱体化してるな。　…バルディッシュも壊されてやがる…抜かりねぇ、流石は兄貴…此方にとっての嫌がらせを的確にやってくれるぜ）

…これは無理に起こさずに運んだほうが良さそうだな」

バルディッシュが破壊されていなければ相手の戦略も少しは分かったかもしれないのだが、無還者がそんなミスをする筈も無く。　何か極細の針の様なもので綺麗にコアを貫かれていた。

その針を抜き、手にとって少し眺めてみる。　正体は直ぐに判明した。　『創造魔力（イマジンエネルギー）』で造り出した氷の針であった。　ご丁寧に微量の電流も流されている。

「（貫くと同時にこの微量の電流で自己修復システムやバッグアッププログラム、記憶領域も破壊か…運が悪いと完全にメインプログラムがイかれていてスクラップの可能性があるな。　それだけは避けたい所だが…）ったく、本当に嫌がらせが多いな、俺達の兄貴は…」

いくらバルディッシュが雷の魔力変換資質を操るフェイトのデバイスだと言っても、精密機械そのもののメインコアに電流を流されては身も蓋もない。　これでは壊れてしまうのも当然だろう。

「取り敢えずフェイトさん隊舎の中に運び入れて…っと、フランに連絡しなくちゃな」

（フラン、聞こえるか？　フェイトさんは保護した。　状態は安定、

ただしリンカーコアが異常に衰弱している。　デバイスのバルディッシュは大破、原因は氷の針による物理的破損と同時に流された微量の電流。　元の状態での復旧は恐らく不可能だ）

（了解ですわ。　後はなのはさんが心配ですわね…）

（ああ、ここに来る途中も色々見たがどこにもいなかった。　フラン、お前なら分かんじゃねぇか？）

フランの探査能力の高さは兵器の中でも随一である。　その代わり体力がないのは、元々フランがフルバックのポジションに付く予定であった兵器だからだろう。

（申し訳ありあせん。　この六課の何処かにいるというのは分かるのですが、どうやら補助系統の魔術使用に阻害（ジャミング）が掛けられていますわ。　私達の念話は問題なく機能しますが、はやてさん達の念話は恐らく使え無い状態かと。　同時に私の探査魔法もボヤけてよくわからない状態…正確な位置は分かりませんわ）

（チッ、認めたくねぇが良い手だな。　確かに普通の魔導士なら誰かがいなくなればまず念話で呼びかけるだろう）

その念話が使えなくなれば今度はサーチャーなどの探索魔法を使うだろう。　が、それすらも機能しないと分かった瞬間、一時的な物だろうが魔導士達を混乱が襲う。　情報系統の混乱というのは戦う上で一番恐ろしいことだ。　敵は良くそれを理解している。

（取り敢えず了解した。　何か不信な魔力反応があったらすぐに連絡してくれ）

（ええ、わかりましたわ。　しかし、何故フェイトお姉様がそんな簡単にやられたのでしょう…？　やはり死角からの奇襲等でしょうか？）

（もしかしたら機動六課の誰かに化けたのかも知れないな。　もしそれが当たっていて、化けた対象がなのは姉だとしたら恐ろしい。
　兄貴は現在進行系でこの機動六課の状況を理解出来ていることになる）

感じるのは、未だ底のしれない“兄（てき）”への畏怖。

自分の義姉が無事でいることを信じ、フェイトをロビーで寝かせ、壊れたバルディッシュをポケットに入れると再び春斗は駆け出した。

春斗ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

???side

コッ、コッ、コッ。

規則正しい足音が、機動六課の廊下に響く。

流れるような『金髪の髪』とその整った顔はその女性が何者かであるかを示していて、たまに局員がすれ違うも、会釈をするのみで誰もその女性が誰であるかを疑わない。

その普段と全く変わらない柔らかな笑みは、そんな局員に会釈を返す事に少しずつしぼんでいき、遂には何処か落ち込んだような顔になってしまった。

「詰まらんな」

ボソッ、と。

女性の口から女性の声で、女性の口調ではない物が漏れる。

「もう少し、楽しみたかったが…主、本当にこの女が機動六課の最高クラスの戦力の一人なのか？」

「『その疑問への回答ですが、与えられたデータのみで推測するにあたって機動六課の主な戦力は“高町なのは”、“フェイト・T・ハラオウン”、“八神はやて”の3名であり、この3名を行動不能にすることは機動六課を行動不能にすることと同義と考えられます』」

「それにしては呆気無いものであったな。　そう言えば主、高町なのはとこの女の…フェイト・T・ハラオウンには弟と妹がいなかったか？」

「『管理者より与えられたデータを参照しましたが、その2名――“高町春斗”と“フラン・T・ハラオウン”はどちらも一般局員であるが故、この任務においては関係は無いと思われます』」

「果たしてそうか？」

楽しそうに、“フェイト・T・ハラオウン”は誰もいない廊下を歩きながら呟く。

「『理解できません。　貴方は何を根拠に其のようなことを？』」

「“勘”だ。　そう、勘でしかない」

「『“勘”。　尚更分かりません、勘とは最も信用し難い人間の不

確定で不透明な存在です。　そんなモノを信用する事は、論理的な思考に重大なエラーを及ぼします』」

「いいや、主よ。　世界は広いぞ。　この世界には勘や直感を自分の武器にして戦っている者も存在する。　いつかは其のような者とも見えてみたいものだな」

「『勘や直感を武器に…確かにそれは興味深い事柄ですが、現在の任務には何ら関係は無き物です。　…最後の任務目標である“高町なのは”の場所は既に把握しています。予定よりも早急に動けているとは言え、次の管理者からの指示の遂行には比較的早い行動が必要になるとデータより算出されました。　よって、もう少し早く動いて頂きたいものですが？』」

「疑問形にするでないぞ、主。　少々恐ろしい。　いつの間に無言の脅迫など覚えた？」

「『申し訳ありませんが、“無言の脅迫”という単語に心当たりが無い故その質問に答えることは出来ません』」

「…吾輩がもし“兵器の心”を弄れるのなら、もう少しユーモアのあるプログラムにすると思うがな…」

と言いつつ、やはり誰もいない廊下で一人何かと会話しながら、“フェイト・T・ハラオウン”は歩く。

向かうは『医務室』。

シャマルが会議に出ているため、今は誰もいないその部屋で蹲っている“自分（フェイト）”の“親友”を迎えに行く為に。

???ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

春斗ｓｉｄｅ

（!?　春斗!!）

（どうしたフラン？　何かあったのか!?）

（いえ、フェイトお姉様は今歩ける状況ではないのですわよね!?）

（ああ、リンカーコアがかなり衰弱していて一日二日で回復できるような傷ではなかったことは確かだ!!　それがどうかしたか!?）

（今そのフェイトお姉様の魔力反応が“２つ”、別々の場所で出ましたわ!　やはりぼやけていてよく分かりませんが、１つはロビー周辺、もう１つは今六課内の何処かを歩いている様子です…ロビー周辺のフェイトお姉様はどうやら動いてないので直ぐに判明しまし

たが、阻害魔法のせいで動いているフェイトお姉様の方は正確な位置が特定できませんわ）

（いや、理解した！　ロビーに寝ているのは俺が保護したフェイトさん、んで今動いてんのが恐らく偽物の方だ！　というかやはり擬態魔法を使ってやがったか…！！　やはり“兄貴”は俺達の動向を何らかの方法で読み取っている可能性がいよいよ高くなってきたな…）

（その辺も私の方でできる限り調べておきますわ。　偽物、なのはさんの正確な居場所は相変わらずわかりませんが、この阻害魔法をしたのが“お兄様”だとしたら既になのはさんの居場所はつかまれている可能性が高い…何処か、なのはさんの居そうな場所に心当たりなどはございませんか？）

（有ったら苦労しねぇよ。　だが誰もいない場所にいる確率が高い。こういう時のなのは姉は一人になりたがるからな）

だが『誰もいない場所』と言うだけなら容易いが、探すとなればいくら春斗とフランでも時間を要する。　しかも探索魔法に制限がかけられているこの状況下では全て探すのは絶望的とすら言えるだろう。

「俺の責任だな…」

彼らしくもない独り言が、彼の口から静かに漏れる。

まさか、隊長陣がバラバラになったこのタイミングで襲撃してくるとは思わなかった。

まさか、狙われたのが命ではなく魔力であったのは予想外だった。

まさか、“兄”に協力者がいたのは予想外だった――――。

全ては結果論だ。　それは自分がよく分かっているしフランにもそう言った。

だが機動六課の隊長陣をバラけさせたのは紛れも無く自分が原因だ。
あそこでなのはとはやての喧嘩を何もせずに見守っていたら、そうじゃなくてもフェイトになのはを追うように促さなかったら。
この状況は少しでも改善されていたのかもしれない、あるいは更に悪化していたのかも知れない。

未来を見通す術を持っていない春斗には分からない。

しかし。

（――――！！　春斗！　阻害魔法が解けましたわ、探査魔法、念話も問題なく使えます！　例の偽物は現在医務室へ向かっているのを確認しましたわ！　で、医務室からなのはさんの反応が出ました！　このスピードと距離だと、お兄様がなのはさんの場所まで辿り着くまで1分も掛からないかと！！）

自分には心強い味方がいるから、彼はどんな佳境にあっても自分の

“勘”を信ずることができる。

小さい頃から同じ苦痛を体験してきた『妹』であり、大切な仲間である。　恋愛感情では無いと思うが、何だかんだ言って彼自身、彼女へ好意を抱いていることは確かであった。

（よし、ナイスだフラン！　丁度良い、俺はこのまま医務室へ向かう！）

（了解しましたわ。　お気を付けて…！！）

向かうは医務室。

小さい頃、まだ出会って間もない頃から良く気に掛けてきてくれた、返しきれない恩のある義姉を助けに行く為に。

春斗ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

「…、」

真っ暗な部屋。

一人ベッドに腰掛けて、とある女性は考える。

「何やってるんだろう、私…」

冷静に考えてみれば、あの時とても信じられないことを自分は言っていたと思う。

そう――あの言動・あの態度は全て春斗やヴォルケンリッター、はやてやフェイトまでも蔑ろにしてしまう物だった。

春斗が諌めてくれなかったら、どうなっていたことか。

二度と埋まらない溝が、はやてやフェイトの間に出来てしまっていたかもしれない…。

そう考えると、恐ろしくて怖くって、彼女は逃げたまま未だ戻れずに此処にいる。

生き抜こうと決めた現実からも、大切な親友からも、果てにはずっ

と一緒にいた義弟からも目を背けて、情けないな、と自分を嘲笑し、再び自分の頬を涙が伝うのを感じる。

今彼らは何をしているだろう？

自分のことなど忘れて、ミーティングを続けているだろうか？

それとも自分を探してくれているのだろうか？

もしそうだとしたら、自分はなんて傲慢で、なんて欲張りなんだろうか？

勝手にわめき散らして、勝手に飛び出して、それでも自分は見捨てられないことを願っている。

『ちょっと自分の言ったことを反芻して来い。　今のアンタは此処にいる資格はない』

「――――ッ」

でも、春斗の拒絶の言葉を思い返す度、胸が締め付けられる様に痛くなって戻れなくなる。

あれ？　こんなに、春斗から嫌われることって心苦しかったっけ？

昔からこういう風に喧嘩して、二度と会うものかと考えて、でも結

局はどっちかが折れて仲直りして――――

次の日には二人とも忘れて、他愛もない話をしたし笑いながら遊んだりして――――

そこまで考え、あ、そっか。と彼女は思う。

「嫉妬してるんだ、私」

自分で思ってて、すごく醜いと思う。

きっと、小さい頃から一緒にいたから、いつの間にか、なんかこう…独占欲、みたいな物が生まれてしまったのかも知れない。

ダメだとは思いながら、春斗が誰かの為に怒っていると考えたら、どこか遠い場所に春斗が行ってしまうんじゃないかと考えてしまう。

気付かないうちに依存していた。

弟離れの出来ない、ダメな姉だな、と思って、なんだかおかしくなって笑う。

「ねぇ、春斗。　覚えてる？」

誰にも聞こえるはずもないのに、涙を流したままなのはは暗闇に向

けて呟く。

「小さい頃、本当に小さい頃…春斗、私に向けてさ――――」

そこまで、呟いた時だった。

コンコン、と電源を切ったので手動になっている医務室の扉が叩かれる。

誰かが来た。　そう思ってつぶやくのを止めて耳を傾ける。

『なのは、いるんでしょ？』

聞こえたのは紛れも無く、自分の親友の声。　ビクッと体を震わせて、縮こまってしまうなのは。

『いないならそれでもいい。　答えたくないならそれでもいい。でもね、聞いて？』

そんななのはの様子を見透かしたかのように、親友――――フェイトは呟くように話す。

『皆、これだけでなのはを嫌ったりしないよ。　はやてだってなのはの事、分かってる。　だから私に探させてくれたんだよ？』

今の自分には、何て綺麗で甘い言葉。

『謝ってもいないのに許される』。　それは子供であっても大人であっても、甘美な響きであることに変わりはない。

「でも！」

でも彼女は、それだけではとても自分への嫌悪を収めることができない。

「私は、ヴィータちゃん達やフェイトちゃん、貴方まで傷つけたんだよ！？　このまま許される筈が無いよ…ごめんね。　本当に、ごめん…！！」

『いいよ』

即答だった。　何処か望んでいただろうその答えに、思わず顔を上げてしまうなのは。

『私は怒ってない。　今回の事はなのはも、はやても悪くない。
でもなのはが謝りたいんだったら謝ればいいよ。　今回の事はそれだけのことなんだから』

「…春斗は？　お、怒ってた？」

『春斗？　うん、少しね…でも、きっと春斗だって許してくれる。
春斗も私も、なのはの事は大好きだから』

「私は…わ、私は…」

『だから、ここを開けて…皆に謝りに行こう？　大丈夫…私も一緒に謝るから…』

なのはへ向けて持たされるのは、何よりも甘い“友情”と言う名の言葉。

レイジングハートは無言で主を見守っている。

そして彼女はフラフラとベッドから立ち、ドアの電源を入れようとスイッチに手を掛ける。

自分には親友がいてくれる――

謝れば許してくれる――

何よりも大事な親友が、そう言ってくれたから、彼女は――

（なのは姉、開けちゃ駄目だ！！！　そいつはフェイトさんじゃねぇ！！）

『…なのは？』

フェイトの声は、もう耳に入らなかった。

今、なのはの頭に響いたのは…紛れも無く…

（春斗？　春斗！？　どうしたの、春斗！？）

応答はない。　当然といえば当然だ。　彼には魔力適正が無い筈であり、つまり念話だって使えないはずだ。　だからこのタイミングで、この場で聞こえるはずが無い。

幻聴？　自分の被害妄想？　考える要素はたくさんある。

だが、この場言えることは、一つ――

『どうしたの、なのは？　早くここを開けて――』

「貴方は、フェイト・Ｔ・ハラオウン隊長ではありませんね？」

『――――――』

返ってきたのは、息を飲む音。　それがどういう意図なのかはわからない。

でも、自分の弟がそういうのだったら、信じよう。

だって“高町春斗”は、今も昔もなのはにとって大切で、大好きで、信用出来る弟だから。

「擬態魔法を解除し投降してください。　許可無き他人への擬態は重罪です。　素直に投降すれば情状酌量の余地がありまｓ――――」

２回目のなのはの言葉。

返ってきたのは、強大な魔力反応だった。

≪マスター！≫

「うん、分かってる！！」

S級は下らない魔力反応を感知し、機動六課内に設置された緊急事態を告げる警報も鳴り響く。

同時。

扉の前から左に回避行動を取ったなのはが見たのは、頑丈に作られているはずの扉を呆気なく蹴り壊し飛び込んできたフェイトだった。

『おぉかしぃいぃなぁぁぁあああ?』

その声はフェイトのものではなく、そしてその顔もフェイトのものではなかった。

綺麗に整っているはずの顔やスラリと伸びている体の所々に罅が入り、ボロボロとその欠片が床に落ちていく。

罅が入り、欠けた場所から覗くのは真っ白な“骨”。

首は人形の様にガクンと左に傾き、右目が不自然に血走っている。

両手には既に全体に罅が広がり、見る影もないほど無残な姿だ。

しかしその姿からは相も変わらずフェイトの魔力反応が出ている。

「レイジングハート！」

『了解。　セットアップ！！』

敵は異常にして強大だ。

鳴り響くアラームの音と、邪悪で強大な魔力を受けながらセットアップしレイジングハートを“敵”に構えるなのは。

そんななのはを曲った笑みを顔に浮かべながら見据える“フェイト”は、再びその壊れた音楽プレーヤーが出すような不透明な声で疑問をぶつける。

『わたしぃいは、どこからどぉぉみても“ふぇいと”そのものだったと、おもうんだけどなぁあああ？　どうして“わたし”じゃないってわかったのかしりたいなぁあああ！？』

繰り出されるのはセットアップしていない人間の速度とは思えない“抜き手”。

それを驚異的な反射神経で回避し、狭い医務室で“フェイト”の背後を取り高速で魔力集収を開始、“フェイト”がこちらを向いた瞬間にそれは放たれた。

≪ディバイン…≫

「バスター――――！！！」

桃色の光ををほぼ零距離で見た“フェイト”も、次の瞬間にその閃光と同様の威力を持つ闇色の魔力を右手に集結させる。

『あはハははハハハ！　“ジャッジメント・エクスキューショナー”！！！』

闇色の閃光と桃色の閃光が、零距離で激突した。

と、同時。

「なのは姉!?　――――ッ！！？」

なのはの声に、聞きなれた声が響く。

否、『響いた気がした』と言った方が良いか。

目も眩むような閃光の後彼女の胸から、色白の男の腕が生えていて。
同時に強制的に砲撃を終了させられ、相殺しきれなかった黒き魔法の衝撃派がレイジングハートに直撃、バルディッシュほどではないがレイジングハートのコアにも罅が入った。

「てめぇらあぁぁぁあああああッ！！！」

激高し、思わず魔力を解放しかける“兵器”。それを冷静な目で見据えながら、もう一方の“兵器”は静かになのはの胸から腕を抜き、桃色のリンカーコアを蒐集した。

「『デミス。　任務は完了しました、撤退します。　既に機動六課に用はありません』」

『それはいいけど、アレはなぁあに？』

「『その疑問に対する解答ですが、どうやら貴方の“勘”という物が当たった様です。　と解答します』」

『！　…へぇえ。　この“なのは”もそうだけど、ここはほんとうにたのしむばしょがおおいなぁあ』

闇色と桃色の魔力の衝撃で粉々になった医務室で、無還者が静かに手を振るう。

何かを弾くような動作をした瞬間、怒りで我を見失い掛けている春斗が抵抗もできずに廊下の壁へ叩きつけられた。

「が…ッ！！（重力の魔力変換資質か！？　いや、それにしては重すぎる…！　何か別の魔術も同時に掛けやがったな…！！？）」

「『“高町春斗”。　貴方の事はどうやら管理者も知らない、人間とは全く別の“何か”だと推測できます』」

「…、」

「『ご安心を、管理者への報告は致しません。　もし内容が分からなければ聞き流し、お忘れください。　万が一貴方の事が漏れれば、その瞬間この“機動六課”の局員の生命はないものと警告します』」

「…何だ？」

「『“何だ”？　主語のない質問止めていただき――』」

「テメェの、テメェらの目的は何だ！！　どうしてこんなことをする！？」

「『…目的』」

感情無き兵器は、ふと感情無き声でその単語を繰り返す。

何かを確かめるように、何かを疑問に思うように。

「『目的。　目的？　目ｓｃｅｕｅ的……っ……がが…ぁぁ…がが…？』」

「…？」

『あれ？』

“フェイト”が兵器の異変に気づいたのか、首をコテン、と今度は右に傾ける。

「『あ〝ががｋｋｋｋｋｇｇｇｇｇｋｋｋａａａａａａａａａａ兵器の心（ウェポンマインド）に異常発生異常発ｃｅｗｓ生関係者は速やｓｗｉｕｉかにＮｏ．１“無還者”のメンテナンスを初めて下ｓｓｓｓｓｓｓｓｓｓｓａａａａａａａａａａ』」

『！』

「！！」

まず初めて顔を歪めたのは、“フェイト”。　それより更に驚いたのは、春斗。

目の前で頭を抱えよろける“兄”を見て幾分か冷静になったのか、状況の整理を開始しようとするが。

『っ、ざんねん、だけど、きょうはこのへんでおわりだよ！』

フェイトの身体をした“何か”が無還者の腕を掴むと、真っ黒な光を発してその場から消えた。

逃げられた？

「いや、違う。“逃げた”？　あの“兄貴”が？」

過去の無還者を知っている者からして、まず疑問に思うのはそこだった。

指一本で機動六課を蹂躙出来る“兄”が逃走。　兵器の心（ウェポンマインド）の異常事態。

そのキーワードが、“目的”という単語。

「どういう、ことなんだ？」

ただ、疑問。

術が解け、何か正体不明の重圧から解き放たれ、なのはの元へ駆け寄り脈を確認する。

脈を確認し、安心して――それでもその疑問は氷解せぬままに、異常事態のアラームとS級魔力の発生源を受けて駆けつけたはやてらによって春斗となのはは保護されるのだった。

春斗が駆けつけるのが遅れたのは、無還者本人が現れ行動を妨害されたからだった。

彼らにとっては小規模、しかし一般魔導士に取っては殺傷能力の存在する魔術を使って攻防を繰り広げていたのだが、ふと攻撃が通ったかと思ったら爆発して消滅。　分身で化かされていたことを知り、それまで以上の速度で向かっている最中に思わず念話でなのはに注意してしまった、というのが真実であった。

しかし残念ながら、丁度春斗が到着した瞬間にはレイジングハートも魔力の衝撃でコアが壊れ、なのはの魔力は丁度蒐集される寸前であった。

しかし全てが奪われた訳ではない、得るものもあった。今回の件で、２つ分かったことがある。

無還者はやはり何も覚えていなかった。　春斗の事も、フランの事も、何も。

春斗を直接見て尚、それがＮｏ．２であると分からなかった様子であるからこれは間違いないだろう。　一縷の望み位は持っていた春斗達には少々キツイ現実である。

もう一つ、無還者が“目的”という単語に敏感な反応を示したこと。

これには分からないことが多すぎてフランもお手上げだった。　もしかしたらこの“目的”に何か隠されているのかもしれないが分からない物は分からない。

数々の疑問を残したまま、“隊長陣2名の魔力が蒐集される”という前代未聞の事件から3日が経過した――――

「まだなのはは目を覚まさないの？」

「ああ」

心配していそうな声のフェイトに、急遽用意された医務室変わりの仮眠室で眠るなのはを見る春斗。

「砲撃を撃った瞬間にリンカーコアを取られたらしいからな。　痛みも相当なものだっただろう…そういうフェイトさんは大丈夫なのか？」

「うん、まだ完全には回復してないけど…仕事をする分には大丈夫だよ」

「それは何よりだ」

笑顔で言うフェイトは、なのはの髪を触りながら呟く。

「でも本当に私、情けないよね。　まさか、『一瞬で背後を取られて気付かないうちにリンカーコアを取られちゃう』なんて…」

「…、」

「春斗？」

「いいや、なんでもねぇ…」

そして、当然のごとくフェイトの記憶も操作されていた。

シャマルを筆頭とした管理局が誇る最高の医療チームが精密検査を敢行し、それでいて尚異常が発見できない程レベルの高い記憶操作。

春斗はもちろん、恐らく“兄”以外の兵器にすら不可能なレベルだろう。

いや、無還者がこれ程高性能な記憶操作が出来るとは聞いたことが無いが…もしかしたら協力者が施した物かもしれないし、結局の所全ては謎の中である。

「…頃合なのかも、しれないな」

「え？　何が？」

「いや、なんでもない」

「むぅ、春斗？　何か私に隠してない？」

「いや、フェイトさん？　一体貴方様は何故そんなに顔を近づけてくるのでしょうか？」

何か俺したっけ？　と考えるもそんなことはないと思いたい春斗。
あるとしたら自分の命は今頃ないだろうが。

「ううん、別に。　何かパニックになって口からこぼさないかなぁ、と思って」

「何だ、それだけか。　俺はてっきりまた命の危機に瀕しているのかと…」

「私、春斗からどう思われてるのかちょっと知りたくなったんだけど…？」

回避したと思ったら死亡フラグ成立。　さすがは春斗、期待を裏切らない。

「っと…ごめん、仕事が入っちゃった。　行こう、バルディッシュ」

≪了解≫

が、ここで念話ではやてに呼び出されたのか臨時医務室から出ていくフェイト。

春斗とのすれ違いざま――バルディッシュのコアが、何かを言いたそうに光っていた。

「あれ？　バルディッシュ、どうしたの？」

≪サー、申し訳ありませんが少し春斗卿と話してもよろしいでしょうか？≫

「どうして？」

≪改めて、サーを発見していただいた事についてお礼を言いたいので≫

「ええ！？　もう、そんなのいいのに…」

≪お願いします≫

「分かったよ…それじゃ春斗、なのはとバルディッシュのことよろしくね？」

「了解、っと」

バルディッシュを受け取り、丁重になのはの頭の上にある熊の人形の手に乗っけたのを確認すると笑みを浮かべつつ、フェイトは臨時医務室を出ていった。

沈黙が広がる。　バルディッシュも、春斗も、当然ながらなのはも喋らぬまま1分、2分と経過していく。

バルディッシュも春斗も、どちらかが話し出すのを待っているようだった。

5分程度経過しただろうか？

ようやく春斗が口に出した言葉は、謝罪だった。

「ごめんな、バルディッシュ」

≪…≫

「まだ、誰にも言う訳には行かねぇんだ」

静かにそういうと同時、小さく指を振って部屋全体に聴覚阻害を掛ける。

その様子を見守っていたバルディッシュも、その言葉に反応するかの様に言葉を紡ぐ。

≪…『それ』は…我が主やなのは嬢、はやて嬢にも言えない事…なのか？≫

此処で、壊れたバルディッシュが春斗のポケットに入れられたあの後の事を話さなくてはならないだろう。

バルディッシュについてフランによる鑑定の結果――――どうあっても管理局の技術での修復では不可能と断定された。　だがこの先使い慣れたデバイスがフェイトにないのは困る。

というので――――“兵器”だというのがバレるのを覚悟で、フランの能力を使ってバルディッシュの状態を壊れる前まで“巻き戻した”。

それこそがフラン・Ｔ・ハラオウン、Ｎｏ．２の能力――――『巻緑（リウェンド）戻光（プログラム）』。

『戻す』という概念が宿った光を操る能力で、対象のあらゆる概念を戻してしまう事が可能な能力。

集収された魔力を再度バラけさせたり、今回のように壊された物を壊される前までに巻き戻す。　戻すこと限定なら時間すらも操れる、それが彼女の力である。

そして彼らが懸念していたように――――ついに機動六課の仲間に、能力を隠し持っていることがバレてしまった。

そう、他でもない。　フランの能力で壊れる前に“巻き戻された”バルディッシュに。

「ああ、言えない」

≪…あえて、聞くが…もし、私がサーへ言うとしたら…どうする？≫

「その時は非常に心苦しいが、お前の記憶領域を全て消さなくてはならない。兵器の掟（ウェポンルール）、という奴だ」

≪…、≫

その目は冗談の無き本気であり、その声も普段の声とは違う低く、意思のある声だということを理解したバルディッシュは、再びチカチカと光った。

≪分かった。サーと私の名に掛けて、この件に関しては春斗卿、フラン嬢の口から出るまで追求せず、そして私の口からも口外しないと誓おう≫

「ああ…本当にサンキュー、バルディッシュ」

≪その変わり、一つ約束してはくれないか？≫

「？」

バルディッシュは、主を思うが故、何より主の幸福を願う故。

今一度、春斗へ問う。

≪信頼しても、良いのか？≫

「当然だ」

当然の疑問と当然の即答。

暫しの沈黙の後、どちらからともなく、笑い合う。

再び指を軽く振って聴覚阻害の魔法を解除し、その後は他愛もない世間話で時間を費やした。

フェイトですら久々というか初めて聞くバルディッシュの笑い声に驚愕を隠せなかったらしいが、真相は定かではない。

機動六課ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

「『…っ、……？』」

『ヌ…主、体調ハドウダ？』

「『…異常ありません。　これは貴方が？　それとも管理者が？』」

『イイヤ、違ウ。　…ナント言エバイイノカ…』

「『…？　よく分かりません。　しっかりと説明をして頂けなければ状況把握が不可能に…』」

頭に乗っけられていた氷嚢を取って側の棚に置き、男は辺りを見廻す。

整えられている部屋だった。　質素な部屋と言えばそれまでなのだろうが、よく見れば本はきちんと五十音順に並べられ片付いているし、氷嚢を置いた棚だって埃一つ被っていない。

この部屋の住人はかなりの綺麗好きと見える。

そこまで見たところで、ふと男はある疑問点に気がついた。

「『デミス？』」

『…何ダ、主』

「『その姿は一体？』」

『言ウナ。　何モ言ウナ。　正直コレシカ思イツカナカッタノダ』

「『…尚更理解できません。　一体此処は何処で、私は何故…』」

男が“デミス”と呼んだ男性の姿は、どう考えても子供の物であり。
そしてその後悔したような言葉が、更に男の状況把握を難しくする。

いよいよ状況が混沌として来た時、これまた質素な木の扉がコンコン、と音を立てて叩かれた。

『ヌ…主、少々吾輩ノ設定ニ合ワセテモラエルカ？』

「『設定？　…ちょっと待ってくださいデミス、詳細な説明を求めま――――』」

男がその言葉に何かを感じたか、“デミス”への説明を要求するが。
その件を追求する前にドアは開かれ、流れるような桃髪を持つ…１８～２０歳程度の女性が優雅に入ってきた。

「失礼します…あ、目が覚めたのですね？」

「うん！　ありがとう、お姉ちゃん！」

「いえいえ。　それにしても本当によかったわ、私が偶々通りかかって…貴方一人じゃどう考えても運べませんからね、この方は」

少々混乱した読者がいる可能性が高い為念の為書いておくと、「お

姉ちゃん」などと言ったこの子供こそが先程の“デミス”である。

「あ、いきなりでちょっと混乱しているようですね。　まあ無理もありませんか…」

「『……えぇ…』」

兵器の心（ウェポンマインド）は既に安定している。　結局、何故暴走したのかは分からなかったが安定したのならばそれに越したことはない。

だがそれ以上にわからないのはこの状況だ。　取り敢えず人間を卓越したその思考でまず考えたことは、デミスの変り身の早さについての謎であったことをここに記す。

「この子からお聞きしましたが、管理局に無実の罪を着せられて雨の中さ迷っていたとか…心中お察知します」

そしてこの嘘はもう少しなんとかならなかった物だろうか。

普通に考えて管理局の所有物の自分がこんな事を言うのはありえない。　そう考えて、女性の後ろをよく見ると“デミス”がサムズアップしていた。

何処にその動作をする要素があるんですか、と疑問を提示したくなるのを後に廻し、目の前の優しく微笑んでいる女性に疑問をぶつけ

る。

「『申し訳ありません、まずここが何処だかお聞きしたいのですが…』」

「ああ、これは此方こそ申し訳ありません。　大事な事を言い忘れてしまって…」

どう考えても話の腰を折った自分が悪い筈なのにわざわざ頭を下げる女性。　しばらくして顔を上げると優しい笑みを浮かべたままこの場所の詳細を言うのだった。

「此処は第2管理外世界。　正式な惑星名称はまだ無いけど、国の名前は“アルディス”。　そして私の名前は“アルディス王族警備軍副隊長”、リンと申します。改めて、ようこそお兄さん。　私達の国、アルディスへ」

「『……？』」

恐らく、この瞬間こそ１９年片時も休まず兵器としての任務を果たしてきた無還者が始めて『呆けた』瞬間だろう。　無表情だからわかりにくいのは変わらないが。

見れば今は子供である“デミス”の頬もかなり引きつっている。

――“第２管理外世界”アルディス。　別名、“異端者の国”。

違法研究で造り出された“人造生命体”や、無実の罪を着せられた“次元犯罪者”を率先して庇い、守護し、そして民として住まうことを許可している都。

そんな場所があるのに、何故管理局が手を出さないか？　理由は簡単だ、『出せないから』。

この都には管理局に対する“反抗軍（レジスタンス）”を始めとし、『アルディス』に古くからある警備軍がいくつか存在する。

各軍はそれぞれ友好的な関係を結んでおり、有事には戦力を決して、敵へと向かう矛となる。

中でもアルディスの『王族警備軍』は別格であり、たった3人で構築されたその警備軍ははるか昔にこの都を占領しようと大挙して押し寄せた管理局軍を“2日”で全滅させたという。

つまり結論としてこの都は――――管理局にとっての敵地そのものであり。

「あ、そういえばお兄さんの名前はなんですか？」

「『……、』」

「…あ、お姉さん！　ごめんね、お父さんまだ具合が悪いみたいだから、もう少し待ってから聞いてくれる？」

「あら、そうなの？　分かったわ。　では、御ゆっくり…」

パタン、とドアがしまったのを確認し、トテトテと近寄る“デミス”。　そして溜息でも付きたそうな男。

「『デミス』」

『…何ダ』

相も変わらない変り身の速さ。　だがその声には少々陰りがあるのがわかる。

「『この状況はともかく、この設定だけはどうにか出来なかったのですか？』」

『…イヤ…ウム…スマナカッタ』

「『この状況も十分問題だと推測…いえ、断定できますが』」

彼とて流石にこの国そのものを敵に回せば無事では済まない。それを分かっているからこそ、デミスも子供ではありえないような顔で悩んでいるのだろう。

そして男――“無還者”と子供に化けた“デミス”は、この状況をどう打破するか、兵器最高峰の頭脳を使って頭を悩ますのだった。

“信頼”（後書き）

『アルディス』は『アルカディア』を参考にさせて頂きました。そのまま使うのはなんだかまずい気がしたのでこんな感じです。　ネーミングセンスなくてマジすいません。

春斗「…バレちまったな。バルディッシュに」

フラン「ええ…」

天破「バルディッシュならまだいいじゃん。　それにバレたことに後悔は無いんでしょ？」

春斗「まぁ、それはそうだが…」

天破「どうしたん？」

春斗「これが前哨戦だと思うと…本当の戦いのときどれ程の被害が出るのか…」

天破「……あぁ…」

それはきっと、破壊の章終盤になったとき嫌でも理解するでしょう…（何）

感想、お気に入り登録ありがとうございます。本当に励みになります！

これからも天破をよろしくお願いしますm（＿＿）m

それでは、次回もお楽しみに～（´∀`）／～～

“過去”（前書き）

正真正銘、９月最後の更新です。　１０月はテストだやっほい／（＾ｏ＾）／オワタ

取り敢えず今回の話を読むにあたっての注意事項をば。
・無還者の過去が一部明らかに…！！？
・アスディスの国の過去も少し登場。　正直チートです。
・なのはが目覚めたよ！
・やったね、たえちゃん！
・おいばかやめｒｙ

色々と詰め込まれていく下手な伏線。果たしてすべて回収できるのか、かなり不安な作者でございます。　泣きたいです。

それではどうぞ（「ω｜ゞ

※９／２３、修正しました。
誤：メビアとある幻想種の女性の間に～
正：先代とある幻想種の女性の間に～
申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

“過去”

「こんにちは、そしてようこそ。歓迎するわ。客人さん」

真っ黒なドレスの男が無機質な目で、そしてまだ顔をかなり引き攣らせている少年の目が映し出すのは、みかけは8歳程度であるニコニコと笑う小さな少女とその両脇に控えている男性と女性。

彼らは今、俗に『王室』と呼ばれる場所へ招待されていた。

「あたしがアルディス(この国)の王女…まあつまり頂点ね。　王女のロザリー・アルディスよ。　そしてこっちが、」

「よく誤解されがちだけどロザリー姉ちゃんの弟のメビア・アルディスです。　そして…」

「ロザリー姉さんの妹であり、メビアの姉の…改めて始めまして。　王族警備軍副隊長兼何か良く分からないけどお姫様っぽいのをやってるリン・アルディスです」

「「「宜しくお願いします」」」

「『…、ええ、此方こそ…』」

その声は無機質だが、どう考えても兵器の心(ウェポンマインド)がどんな反応を返すか

迷っているのが丸分かりな返答だった。

無理もない。この男は此処まで礼節を尽くされた挨拶をされたことがないのだから。

「（ボソボソ）主。　何だこれは。　どうしてこうなった？」

「『……その疑問への解答ですが、これは９８％の割合で貴方の責任であると断定します』」

彼らの目の前で、豪華な椅子に深く座りすぎてるせいで床に足が届かない様子のロザリーが弟と妹に笑われて怒っているのを見ていると何だか誤解しがちだろうが――

断言しよう。　彼らはこの国で最強、そしてあらゆる次元世界で化け物の部類に入る存在だと。

そう、子供――デミスと、男――無還者は、元々インプットされていた情報（データ）からこの兄妹が何者であるかを知っている。

まず末弟の“メビア”と名乗った少年。　見かけは本当に何処にでもいる高校生っぽい少年だが、その正体はあらゆる全ての幻想種の根源とも言われている『真祖の吸血鬼』である。

『精魂吸引（ライフテイカー）』などの希少能力（レアスキル）を備え、特に満月の夜は彼の独壇場であり、無限に魔力が回復していくのである。　実際に戦ったこともなければこれまで会ったことも無かったため、詳細な能力はわから

ないが、満月の夜ならば無還者と互角なのではないかと推測出来る。

次は穏やかな笑顔で優雅に立ち、先程も無還者達を迎えた“リン”という女性。　ほんわかとしていて無害そうな感じであるが騙されてはならない、何を隠そう彼女は大昔に第(地球)９７管理外世界のとある国で起きた『魔女狩り』という非人道極まりなき取締の中から魔術を使ってこの世界へ逃げ延びた本物の大魔女である。

よってどう考えても見かけ通りの年齢とは考えにくい。　何らかの術で外見を変化させているのだろう。　何よりこの国のＮｏ．２を任され、その上で王族警備軍の副隊長を兼任しているのだからもうこの時点で普通の人間では無い筈だ。

無還者の“リン”に関するデータにも詳細な能力は無い。　ただ一つ言える事だが、彼女と戦った管理局員は皆同様に外見を留めていなかったそうである。

最後、今もその小さな体でニコニコと笑い無還者とデミスを見据える少女。　この国の２代目の王であり、その実態は今年で９２歳――管理局創設前から生きていることになる――になるという、超大型の古龍種だ。

真の姿を見た者は誰もおらず、そして見た者は平等に殺されるという。　“死を告げる黒龍”とも言われ、その目で睨まれた者は蒸発し、その息吹を受けた者はたちまち腐蝕するという伝説を持つ。
初代アルディスの王が彼女の父であり、史上最古の龍種であったのは有名な話である。

最強にして最凶の布陣の『王族』である。　正直この中の誰か一人でも出れば戦場に他の味方なんて要らないというのが実情であった。

「そう言えば、まだ貴方達の名前を聞いてないんだけど」

「ああ、先程はその方が具合が悪いらしくて先延ばしにしてたの。　コホン、改めてお聞きしますが、貴方方の名前はなんですか？」

さて、いきなり難問が飛び出してきた。　再びなんと答えていいか分からない為（寧ろ解そのものが存在しない為）、兵器の心（ウェポンマインド）がフリーズし、今は子供の姿である“デミス”が冷や汗を流しながら視線を右へ左へと移動させる。

先程も記述したようにこの3人の実力は無還者とデミスをしてどうなるかも分からない程強大な物である。　これが一般人であったら『情報漏洩の危険が合った為事故死した』で片付けられるのだが、此処は管理外世界であり相手はその世界の唯一存在する国の王族である。　何かあれば管理局とこの世界の全面戦争になりかねない。

「（ボソ…）主。　こういう時の兵器の心（ウェポンマインド）だろう？　何かいい手を…」

「『……警告。　兵器の心（ウェポンマインド）及び“無還者”に予期せぬ質問、または動作が命じられました。　関係者は速やかに問題を修正してください…』」

「これほど主の兵器（ウェポンプログラム）の心を作った人物に殺意を抱いたのは始めてだ。もし許されるのなら今すぐその者を殺しに行きたい」

許されない。　というか兵器（ウェポン）の心（マインド）の基礎を作った人物は既に無還者本人の手によって惨殺されている。

そんなこともあり、暫く双方無言の時間があったが、ふとメビアが困ったような顔で言った。

「…もしかして……名前も告げられない位、深刻？」

うまい具合に勘違いし始めたようである。　そう考えた一瞬デミスの目があらゆる世界の法則を超えて光った。

「……ずっと真っ暗な部屋にいたの」

なるべく涙を堪えるかのごとき声を作り、『不幸な子供』という役を作ろうとする。　無還者の目が少々突き刺さっているように感じるが、何も言わないところを見ると兵器（ウェポン）の心（マインド）が自分に任せる（デミス）という判定を下したらしい。　今はそっちの方が好都合である。

「ご飯も食べさせてもらえなくて…お父さんはいつも無理してて…何とか脱出できたんだけど、でも…でも…」

「ああ、良いわよ良いわよ！　もう言わなくて大丈夫！」

ロザリーが慌ててデミスのを止めたのを聞き、俯けた顔で口を曲げるデミス。　人間の姿に変貌していると元は骸の姿である彼でも表情が分かりやすい。

「リン……頼むわ…」

「ええ、分かってるわ…姉さん」

しかし演技は止めず泣いているかのように身体を震わせていると、ふとリンとロザリーがボソボソと話してリンが部屋を出ていった。　何故だろうか？　性質上この状況では言葉を出せない無還者だが、その行為をよく観察すると彼らの顔から怒りのような感情が読み取れた。　感情を持たぬ彼からすれば意味のわからない物であるが。

「でもまあ、それだと無理矢理名前を聞くわけにもいかないし…客人さん、でいいかな？」

困ったような顔から一転、こういう件には慣れているのか笑顔でそう提案するメビア。　ふと考える無還者だが、元々名前が無いので軽く頷くことで了承した。

「うん、じゃあ取り敢えずこの件は置いといて…せっかく来たのも

縁だし、この国を見てったらどうかな？　楽しい国だよ、此処は。
　僕はここに来て確か…１００年…１５０年…？　その位になると思うけど、先代の頃からこの国は勢いが衰えないから」

「普通ならメビアが王になる筈だったのに、お父様が先代ってだけで私が推されたのよ？　おかしいでしょ？　私はその辺でお菓子とか食べてたほうが似合うのに」

「『…？　今の言葉への疑問点ですが、貴方方は“兄妹”なのでは無いのですか？』」

「ああ、形だけよ、形だけ。　ただそれの方が次王位を受け継ぐ人がはっきりしてるからそう決めたの。　籤引きで」

「籤引きで王様が決まったの！？」

思わず泣き真似を止めて大声を上げるデミス。　だが子供口調なのを忘れない辺は流石と言えよう。

「いや、王は…非常に不本意だけど私なんだけどね？　その次の王様が誰か決まってないと困るから、せっかくだから『兄妹』を作ろうって事になって…で、このメビアとさっき出ていったリンの二人が次の王様の候補者で、でもどっちも王様は誰がやってもいいよね？　って感じだから籤引きで弟と妹っていう順列を決めたの」

「…（管理局では考えられぬな…）」

一般的に王位というものは、その位に就くだけで莫大な財力と強大な権力が得られる物である。　管理局では元帥がそれに該当する。
　誰もが垂涎必死のその職が、この世界では血塗られた戦争もなく汚れた裏取引も無く籤引きで決まるらしい。

なんと平和な世界と平和な国だろうか。　正直デミスとしては、無還者に命令して邪魔者を消している管理局の上層部に見習って欲しいものである。

「まあそんなどうでもいいことはどうでもいいわ。　えーっと、この時間帯暇なのは確か…ライムー？　暇ならこっち来なさーい」

少しおかしな言葉を使い、コンコンと頭を叩いて――念話なのだろうか、ここにはいない誰かへと呼びかける。

返事はこの部屋の扉のノックだった。

「（ガチャ）失礼する。　ロザリー、暇だから呼ばれたが何の用だ？」

王が相手だというのに敬語どころが礼儀のひとつも見られない。
だがそれをメビアもロザリーも気にすることなく、ニコニコと笑ったままロザリーは要件を告げる。

「ええ、客人よ。　暇潰しでもいいから簡単に案内してくれる？」

「此処に客人？　珍しいな…お初にお目にかかる、私はライム・ローディウス。　この小さな王女とその隣の化け物王子を護る王族警備軍の補佐役をやっている。　宜しく頼む」

入ってきた男性は人懐こい笑顔を浮かべた２０代後半のような感じの男性だった。　しかしその頭からは曲がった角が生えている。先程から実年齢とは程遠い外見をしている者が続いている上、この男（ライム）からもギリギリ気づける程度の異常な魔力が漏れていた。　人間でないことは確かだろう。

「ちょ、ロザリー姉ちゃんはともかく化け物王子って何さ！　否定はできないけど！」

「化け物だろうが！　此処へ来た時の我々がお前を見たとき腰を抜かし掛けたのだぞ！　吸血鬼の真租クラスはとうの昔に滅んだ物だとばかり思っていたからな…」

「あ、真租っていう括りで言うなら吸血鬼の生き残り僕だけになっちゃうけど」

「知っている。　まあ、一般の吸血鬼の寿命も３００年程度あるのだから真租はどれ程寿命があるのか計り知れないがな…」

「いや、そこはあたしの言い方も疑問に思ってよ！？　小さな王女って何よ！　その通りだけど、あたし人への変化だけは苦手なんだもん！」

「『そうなのですか？』」

「ええ、そうなのよ…って、ごめん客人さん。　置いてけぼりになっちゃたわね」

横槍を入れらない子供のような言い合いが続くかと思いきや、無還者の純粋な疑問によって何とか収まった。　そしてこのロザリーの言葉にライムが疑問を提示する。

「む？　ロザリー、『客人さん』では流石に失礼ではないか？　名前は…」

「……ライム、この人たち管理局の訳ありで…」

「…そうか、それはすまなかった。　どうやら裏の関係者のようだが…あそこは悪夢だっただろう、嫌なことを思い出させてしまったな」

しかしなにやらメビアが耳打ちすると、一瞬だがその笑顔に陰りを差し謝罪をした。　その表情の変化を見逃さず、デミスが子供の口調のまま彼に尋ねる。

「お兄さん、ぼくたちのいた場所知ってるの？」

「あはは、お兄さん？　あのね、この人は実は７０歳前後の鬼神族の一人で（ドゴォ！！）」

「あ、お姉ちゃんの頭に巨大なコブが」

なにやら笑いながら訂正しようとしたロザリーだが、ライム本人によって封殺された。　だがデミスと無還者はそれを聞き逃さない。　聞捨てならない単語が再び聞こえたからだ。

『鬼神族』。　昔、管理局の『平和の害』になる種として住処を追われたＡＡＡ級のレア種。　非合法な奴隷売買にもたまに出品されるがそれは非力な女性のみ。　鬼神族の男は例え子供であっても拳の一撃で人間の身体を肉塊に変えてしまう程の怪力を持つ。　更に共通して希少能力である『老力増加（エンシェントアップ）』という能力を持っており、歳を重ねれば重ねるほどある一定の時期までは力が増加していくという種族だ。

そして目の前にいる男性は先程７０歳といった。　しかし衰えている様子は全然見えない。　先程記述した能力の傾向から言って、その怪力はどれほどの物になっているのだろう。

しかし鬼神族は本来平和主義者で、人間との交流を積極的に望んでいる種であるのだが…。

「（ボソ…）主？」

「『データを発見しました。　当時の少将が鬼神族のＤＮＡ目当てで『種族狩り』を行なった種族の生き残り、または子孫と思われます。　尚このデータは第一級危険任務のフォルダ内に保存されてお

り、管理者の許可が無い者には閲覧が不可能となっている様です』」

「……やはりか」

目の前にいる男も、管理局の行なった『正義』の生き残りというわけだ。　そう思い、気づかれないよう顔を歪めていく。

洗脳を受けた自分の主はその行為が善か悪など考え無い様にプログラムされている。　よって無還者について行って様々な事を思考するのは自然と彼になるのだが、彼自身は管理局があまり好きではなかった。

寧ろ嫌いと言っても良い。

管理者の姿を見た事がある彼としては、尚更の事。

「ま、すこし気分が沈んじゃったかもしれないけど…案内頼めるわよね？」

「うむ、了解した。　それでは客人殿…此方だ。　まずは城の中を案内するとしよう」

だからこそ、今は子供の姿の彼にとってこの世界は異様に輝いて見えるのだった。

自分の夢見た世界と、重ね合わせて。

「『…？』」

ふと気づけば、ライムに付いていこうとしている自分の主がこちらを見て無表情で首をかしげている。　どうやらいつの間にか話が一段落していたらしい。

「あ、ごめんお父さん！」

子供の声と子供の口調を作って、まだ自分の事を何も話していない主に向けて彼は走る。

他でもない、『自分の後継者』を探すため。

無還者ｓｉｄｅｏｕｔ

機動六課ｓｉｄｅ

「…、う……」

「「なのは!?（なのは姉っ!?）（なのはちゃん!?）」」

「…、あれ？　私、どうしたの…？」

「良かったぁああ……よかったよぉぉ…」

「フェイトちゃん、泣いてるで？」

「な、泣いてないもん！」

「はは、気絶してるだけで命に別状もないんだろ？　いいじゃねぇか」

未だに医務室は復旧しないので、現在急遽医務室代わりとなっている仮眠室。

あの六課（あくむ）襲撃事件から3日が経ったある日の午後、エース・オブ・エースはようやく目を覚ました。

まだ寝ぼけてるかのようにここがどこだかも分かっていないようだが、１０秒くらい春斗、フラン、はやての顔を順番に見ていったかと思えば、はっ！として春斗の肩をつかんで揺さぶった。

「あ、あの男の人は!?　そして偽物のフェイトちゃんは!?」

「落ち着けなのは姉、パニックになりすぎて何言ってんのかわからねぇよ！　偽物のフェイトさんて何だ!?　んで男って誰だ!?」

「あ、ごめん…」

「まあ、目が覚めたばかりで良く状況が分かってへんやろ。　簡単でええ、思い出しながら話してみてくれへんか？」

「うん」

そして彼女は話す。　その日、彼女が涙を流していた頃何があったのかを。

その前に、思い出していく段階で彼女は謝った。　自分が熱くなっていて周りに目を向けていなかったこと、そして春斗やはやて達にとんでもないことを言ってしまっていたことを。

しかし皮肉にもあの時の偽物が言っていたように、彼女はあっけなく許された。　はやては笑いながら、春斗は少し苦笑しながら。
春斗としては、なのはが襲われたのは自分の責任であったかもしれないので心苦しい思いだったが。

まず彼女はフェイトの偽物について話した。　声だけではなく、風貌、魔力、全てがフェイトの物と全く同じであり、気づくまでは全然わからなかったという。

となれば何故偽物だと分かったのか、ということになるがそれは何とか第六感ということでごまかした。　あの時春斗の声が聞こえたのはやはり幻聴であると考えたのだ。　こっそり春斗が安堵したのはバルディッシュの記憶領域の奥の方に仕舞われた。

次に蒐集されたときの様子。　これは彼女は今も鮮明に覚えているという。

子供の頃、ヴィータ達がまだ敵だった頃だ。　その頃に蒐集されたときと同じく、自分の体から急速に魔力が抜けていく感じと激痛が走った。そこまでは同じだったのだが――

「…凄く冷たかったの」

「え？　何が？」

「その、私のリンカーコアを蒐集したあの男の人の腕。　まるで冷水に浸かってるみたいに冷たかった」

「！　…なのは姉。　それは人間として感じる体温が低かったように感じたか？」

「ううん、違うの。　何て言えばいいのかなあ…身体の中に手を入れられた時、自分とは違う何か冷たい物感じたっていうか…」

「…マジか……ッ」

「？　どうしたんや、春斗」

それを聞き、春斗が頭痛を堪えるかのような動作をしたのを見てはやてが尋ねる。　返ってきた声は低かった。

「はやて、直ぐになのは姉の身体の精密検査行けるか？」

「！　…それはまたどうしてや？　それになのはちゃんの体の精密検査は気絶しとる間に既に終わっとるで？」

「なのは姉のその感覚には聞き覚えがある。　昔の俺の同僚がとある任務地でそんな感覚を味わったって言っててな？　ソイツは一週間の内は元気だったんだが…」

「（コクコク）」

「一週間が経過したとある日のことだ、ソイツの口から突然巨大な蟲（ワーム）が出てきたらしい。　理由はその任務地に潜伏していた次元犯罪者の使った魔道具だそうだ」

――――『死蟲破喰（ワームクラッカー）』。

裏の世界で出回っている、管理局が第一級使用禁止魔道具に指定している魔道具だ。

使う者の魔力を人の魔力を喰らって成長する卵に変換し、敵の体内へ産み付ける魔道具。　だが使用には相手の体の中へ直接ぶち込まなくてはならないので使用難易度は高い。

使う者の魔力が高ければ高い程、蟲（ワーム）は強大で獰猛な物になるという。

さて、そんなものを無還者が使ったらどうなるだろう？

…想像には難くないだろう。

「ははは、春斗!!　それ治療法は!?　治療法はあるんだよね!?」

「大丈夫だ、卵がある位置さえ分かればシャマルさん辺りが取り出せる筈…というかそれしか治療法はない。卵が孵ってたら本気で不味い、早く手配を」

「もう済んどる」

「流石はやて。　よしなのは姉、起きたところ悪いが病院に直行だ。異議は?」

「無いよ!!」

「素晴らしい答えをありがとう。　で、すまんフェイトさん、バルディッシュを貸してくれるか?」

「?　バルディッシュを?　私は良いけど…バルディッシュはどう?」

≪問題ありません≫

「じゃあ、はい。　最近春斗、バルディッシュ借りること多いけど…」

「ああ、日々綺麗になっていくフェイトさんについて論議を交わしている」

「ちょっ！！？／／／　バルディッシュ、それ本当！？」

≪サー…春斗、あれ程内密にしろと言ったのに…≫

「え！？　ちょ、ええ！？」

流石はバルディッシュ、主のツボを心得ている。　なかなかノリの良いデバイスである。

「じゃー、ちょっと外出てくる。　なのは姉、冷や汗掻きまくってる所あれだが命の危険は感じなくていい状況だ。　まだ卵は孵ってない筈だし、第一その蟲が喰うのは魔力だし」

「焦るよ！？　自分のお腹にそんなのがいるって分かったら焦るからね！？」

「って2人とも！　さっきの春斗の話は本当なの！？　ねぇってば！？」

そんな声を聞きながら、春斗は臨時医務室を出た。

「絶対にあの男はまたなのは姉達の前に来る」

中庭に出て寝っ転がりながらつぶやくように隣のバルディッシュに漏らした言葉はそれだった。

≪それは回避可能か？≫

今更バルディッシュもそれが本当か、など聞きはしない。　その声色が、その表情が本当だと言うことを物語っている。

「無理だ」

そしてバルディッシュの疑問に対し、春斗の答えも簡潔で残酷だった。　要するに今のままでは、今回以上の被害が何れまた出ることになるのだ。

「この課が色々と問題を含んでいる課である限り、この状況は改善

せず寧ろ悪化するだけだ。　いっその事解散しちまえば平和になるかもしれない」

≪…、≫

「と、思ったんだが」

≪？≫

「平和には絶対にならん事に気がついた。　俺達が居る限り」

≪…それは、一体？≫

穏当ではない言葉。　その疑問に対しての答えも、まるで春斗は事務的に、かつ簡潔に答えた。

「ミーティングの時もサラリと出たが、男の狙いはこの機動六課だけでは無く管理局全体だ。　六課が解散したところで平和にならないのは目に見えている」

≪前から思っていたのだが、何故あの男は一我が主≪サー≫やなのは嬢の事を狙う？≫

「根本的な質問だな。　だが的確だ…簡単な事だろうよ、何者かが命令したからだ」

あえて管理局の誰かが、とは言わなかった春斗だが、バルディッシ

ュならば理解しているだろう。　彼のデバイスとしての知能はその辺のデバイスを軽く上回る。　まさに一を聞いて十を知る、という言葉が簡単に当てはまる様に。元々自分の主が無言であったというのもあるのだろう。

≪命令……≫

それを呟いたっきり、バルディッシュも黙り春斗も黙る。

だが、感じていることはおそらく同じだろう。

このままでは、不味い。

いつか必ず、取り返しのつかない事件が起こる。

そしてその日は彼らにとって不幸なことに――――着実に迫っていたのである。

機動六課ｓｉｄｅｏｕｔ

アルディスｓｉｄｅ

「とまあ、城は正直に言って何も面白い所が無いだろう？　この城には我々王族警備軍の面々と王族しか住んでいないのでな。　しかし部屋だけは無駄に１００以上ある。　先代が作ったらしい」

その頃アルディスでは、相変わらず様々なことをライムに質問し情報を収集している無還者と、この状況を楽しみ始めたデミスが城の中を回り終えた所であった。

その結果あってかなり興味深い話も聞けた。この国が出来た歴史だ。

まず先代でありながら同時に古代龍族の長でもある――ロザリーの父は、その生まれながらにして得ていた知力と類い稀な力をもって、自分達古龍族の住処を治めていたのだ。

だがある日のこと、彼らと友好的関係にある幻想種の中の一つ、賢狼族がボロボロになりながら古代龍族の長である彼に助けを求めて来たという。

なんでも他の種族が、取り決められた縄張りの条約を破って不法に彼らの縄張りを占拠したらしい。　義に厚く、そう言った卑怯な事を嫌う先代の王は直ぐに其方へ向かいその種族を懲らしめ、追い払った。

賢狼族はそれはそれは大いに感謝し、なんと礼として自分達の縄張りを差し出してきたのだ。　もちろん賢狼族はそのまま住み続ける。

だがもし自分達の長になってくれるのなら、賢狼族の縄張りでしか取れない果物や植物を提供する。　なのでもしよければ自分達の縄張りも収めてくれないか、という頼みだった。

古龍族は悩んだが、それを承諾した。　これが現在の国であるアルディスの始めの一歩だったという。

その次はなんと先程笑顔で挨拶していた『メビア』の古龍族へのカチコミだった。　様々な世界を旅していた最後の真租の吸血鬼である彼は、暇な生活にも飽きたので世界最強と聞いた古龍族へ喧嘩を売ったのである。

全古龍族対真租の吸血鬼一匹。　この絶望的な戦力差の中、メビアは先代以外の古龍族を全て戦闘不能にし、一ヶ月ほど休み無く先代

の王とガチバトルをしたらしい。　結果はメビアの敗北だったが、先代はその強さと根気に敬意を表し、彼に自分達の仲間へならないかと誘ったのである。

その誘いに対しての会話が、

『うーん。　貴方のグループに入れば退屈しない？』

『ふっ。　させるものか』

『よし、じゃあその誘い受けるっ』

という物であったのは今もアルディス国の一部の民の伝説となっている。

真租の吸血鬼のみならず、長生きする生き物にとって『退屈』はどんな物よりも恐ろしいとライムは語る。　やることがなくなればもう生きるのも面倒になって自害する者もいるらしい。

さて、古龍族からひときしりの歓迎（と言う名の仕返し）を受け、当時の現状を聞いたミビアはふと『ちょっと行ってきます。　多分すぐ帰ってきます』という書置きを残し５０年程いなくなったらしい。　確かに古龍族からしれみれば５０年などほとんど意味の無い物だが、何処がすぐ帰って来るなんだ、と先代が一人でエアツッコミをしていたのは古龍族の記憶に根深く残っているとかなんとか。

そして５０年後、笑顔で帰ってきたメビアは先代からひときしり説

教を受けた後にいくつかいろいろな世界から連れてきた幻想種などを紹介した。

ユニコーンやゴブリン、精霊種など…それらはメビア曰く、生存競争に生き残れなかった種族、またはグループの生き残りで自分の住処に（暇潰しに）隠して世話をしていたらしい。　その中には家族とはぐれたりした鬼神族の少女の姿もあったらしい。

メビアの願いというのは、そんな彼らの面倒をどうにかして見てはくれないだろうか、というものだった。　それを聞き、何とも言わずに彼が連れてきた１００匹以上の様々な種族等が揃っているのを壮観だ、と思いながら見ているとふと先代はあることに気づいたという。

全く喧嘩…争いをしていないのだ。　それどころか本来食べられる者と食べられてしまう者の間柄にある筈の鳥人種と獣人種が仲良く話していたり、その獣人族が主に食べている筈の人魚（マーメイド）族の子供が獣人族の手の中でぐっすりと眠っていても誰も慌てない。寧ろ当然というべき感じだった。

それを見たメビアが、少し笑いながら言った。

『古龍族の王様には信じられない光景かな？　でもね、僕が保護したのは皆こんな感じなんだ。　共に食料を分け合い、取り合い、そして笑い合う。　まあ喧嘩して取り返しのつかない規模に成るたびに住処を移動してきたりもしたけど、皆同じ苦労を知ってるんだ。　今更種族間の争いなんてしてる暇なんてなかったんだよ』

これを聞いた先代は感動した。　自分が求めていたのはこれだ。
争い無く、種族間で余っている食べ物を分け合い、譲り合う。　そんな世界が出来たのならどれだけ素晴らしいだろう。

『王様。　あえて今だから言うけど、この先僕らの姿をしてるけど僕らじゃない生物が出てくると思う』

そんな先代へ、笑顔のままだが目だけは真剣なメビアの言葉が彼の耳へと流れていく。

『僕は勝手に“賢猿人”て呼んでるけど、彼らは僕らには及ばないまでも既に今の時点でかなりの高い知能を持っている。　今はまだいいけど、これから更に“賢猿人”は知能と子孫を広げていって、僕ら幻想種、古龍種の数を超えるだろう。　そうなると始まるのは数の暴力だ。　彼らにとっての僕らは“異形”となり、差別と略奪が始まると思う』

全ては予想でしかないけど。　そう言って一つ深呼吸をしても、彼の言葉に口を挟むものはいない。

何といっても、幻想種の中ではかなりの知力を誇る真租の吸血鬼の言葉だ。　その予想が当たる確率はほとんど１００％とすら言えるだろう。

『古龍族の王様さん。　僕らによる、僕らのための、僕らの国を作ってみない？　もちろん簡単には行かないだろうし、絶対に争いも起きる。　けど価値はあると思う。　どうだろう？』

そして、この一言こそ――――

『――――暇潰しにさ♪』

『…ふふっ。　暇潰しにもならんさ。　忙しすぎて後悔するぞ、メビア』

この国が始まる、本格的なスタートになったのである。

メビアは王と本当に仲が良かった。　親友のように色々な場所へ連れていっては幻獣や幻想種に話を聞かせたり、時には喧嘩したり、時には星を一つ消滅させたりと…彼らの信用の為に言っておくが、一応無人惑星だったので死人は出ていない。

…そしてある日のことだ。そう、今から９２年前――――ようやく国と呼べるまでに人も集まってきた頃。

先代とある幻想種の女性の間に子供が生まれた。　それがロザリーである。　国中の民全員がお祭り騒ぎで、自然と宴が始まった。テンションそのままで宴は一ヶ月続いたという。

この頃、リンが国の近くの樹海で怪我をして倒れているのが見つかって保護されたり、鬼神族であるライムらが国に加わったりと色々とあった。　騒ぎもあったがそれぞれが相応の形で丸く収まり、アルディス国は順調に繁栄していった。

「まあ、王族ではない私が話せるのはこの位だな。　何か質問はあるか？」

「『…その質問への返答ですが、先程から至る写真の中に写っているこの女性は一体？』」

そのライムの言葉に反応し、疑問を返したのは無還者だった。　ふとその言葉に眉を釣り上げると、ライムは申し訳なさそうにこういうのだった。

「ああ、その女性か…すまないが分からない。　様子を見るに、メビアとロザリーがいた頃からずっといると思うのだが、現在はその女性の姿がないのだ。　どうやら王族のみしか知らぬことらしくてな、誰にも話せないんだそうだ」

「『…、』」

「…お父さん？　どの女の人がどうかしたの？」

写真に写っているのは、カールが掛かった長く白い髪に水色の瞳をした女性だった。　落ち着いた感じを漂わせ、見ているだけで心が

癒されそうな、そんな不思議な感じに誘われるような女性。
それを無還者は、無機質な瞳でじっと見つめている。

「『…、』」

ザザザッ…

――…約束です……絶対、ですよ…

ザザザザザ…ッ

「『…ッ？』」

「？　客人殿、どうした？　まさかまだ具合が悪いのか？」

「お父さん？（主？）」

一瞬だけ。

一瞬だけだが、確かに――頭の中に、何かの映像が流れ込んできた。
兵器の心（ウェポンマインド）の誤作動だろうか？　だが自分ではそんなバグは発見出来ない。　兵器であろう自分が風邪の類を引く訳も無い。　では一体

…？

「『…いいえ、問題ありません。　ですが少々この女性が気になって……申し訳ありませんが、少し此処で休ませていただいても宜しいでしょうか？』」

「そんな気にする必要はない。どうせこの部屋も使っていないのだからな…では待っていてくれ、少し飲み物を取ってこよう」

「あ、じゃあ僕はお父さんを見ています」

「うむ、頼むぞ」

そう言って少し笑うと、パチンッ！　と指を弾く。と同時に彼の姿が気配ごと消え失せた。　転移の一種だろう、と計算しつつ近くにあったソファーへと座る。　その横へデミスがちょこん、と座った。

「…主？」

「『申し訳ありませんデミス、情報収集の最中に…』」

「いや、それはさしたる問題ではない。　寧ろ問題なのは主だ」

「『…？　よく意味が理解出来ませんでした。　宜しければもう一度お願いします』」

「今主は何といった？　『この女性が気になって』？　…それはお

かしい、主は兵器の心（ウェポンマインド）で感情ごと過去を抑えられていると自分で言っていただろう。　記憶喪失も同然の主が『会ったことのない女性』を気になるというのはおかしい」

「『…、一度バグが起きた時間帯からバグが目立ちます…自己修復は不可能で、原因も不明。　宜しければ休止モードに入りたいのですが、よろしいでしょうか？』」

「…そうだな。　休む事も大切だ。　我々にはそんなものは無いがな――ところで主、まだ高町春斗について何も思いつかないか？」

「『何の事でしょう？　彼は局員Ｎｏ．５００３４１“高町春斗”ということしかデータにはありませんが…』」

「いや、何でもない。吾輩の勘違いだったのかもしれぬしな…『無還者、休止モードを許可する』」

「『？　デｍ――――モード承認しました。　休止モードに移行します。　御用の際は再起動してください』」

質問の意図が分からずそれがどんな意味が尋ねようとするも、ふと機械的にそう告げると、倒れるようにそのままソファーに横たわる無還者。邪魔にならぬようソファーから飛び降りると、狙ったかのようにそこに無還者の頭が乗っかった。　そのまま健やかに寝息を立て始める。

「…こうしてみると、何処にでもいそうな人間なのだがな」

その寝顔を見ながらボソッと独り言を漏らすデミス。　そして休止モードに入った無還者の代わりともいうべき彼は、『高町春斗』と今回の『無還者のバグ』に付いて思考を始める。

（まず、十中八九あの“高町春斗”と名乗っていた男はＮｏ．２の“消失者”…幼い頃から魔力も性格もまるで変わっていなかったからそれは直ぐに理解出来た。　…あの頃の主が知ったら喜ぶのであろうか、弟が幸せになっていることを）

思考の最後で訪れた無駄な感情と思考を消し、再度もう一つの問題の究明に没頭する。

（それよりも分からぬのは主の兵器（ウェポン）の心（マインド）のバグだな。　これまで１０年間以上主に付き合ってきたが、此処まで酷いバグは見たことが無い…キーワードは高町春斗が言っていた『目的』、そしてあの女性…）

先程まで自分の主が見ていた写真立てを取り、問題の女性を眺める。
　先程も記述したとおり、物静かそうな女性だった。　しかしよく観察すると、かなりの色白で体が弱そうな感じがする。　病室で寝込んでいてもおかしくないレベルだ。

もしや病気だったのだろうか？　しかしそれでは無還者がこの女性を気になる理由が分からない。

――もしや、プロジェクトに関係する者だった？いいや、それは無いと思う。　彼女の写っている写真が色あせているのを見ても、彼女がいたのはプロジェクトが出来る遥か昔であることが伺える。
　それにその頃にはまだ管理局の姿もほとんど無かったはずだ。

どんなに考えても、手掛かりが少なすぎる。　無還者が何か覚えているとは考えにくいし、他の兵器達も知っている可能性は低いだろう…

そう考えた時、消えた時と同じようにライムが急に現れた。　魔力反応のないその転移に今始めて疑問を覚えるが、今はまた子供の役に戻らなくてはならないデミスは、取り敢えず考えていることを頭の隅に追いやり、ライムへ状況の報告をするのだった。

アルディスｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

ザザザッ…

『私は…（ザザ…）だから…（ザザザザ…）から…分からないですけど…』

ザザ…ザザザザッ、ザザ…

『貴方の…（ザザ…ッ）……は、暖かく、心地いい…です』

ザ、ザザザザ…ッ、ザザ…

『どうか……私のことは…（ザザ…）れて……貴方は（ザッ、ザザザ）になってください…貴方には、その…（ザザザ…）がありますし……（ザザッ）の私も、きっとそれを望んでいます……』

ザ…ザァ、ザザッ…

『ありがと（ザザ…）…楽し（ザザ…ザザッ）です……ねぇ、（ザ……ジジッ、ジジジッ）？　私は、多分だけど貴方のことが――――』

ザッ、ザ――――――――――――。

“過去”（後書き）

最後の終わりに意図はありません。　何となくこんな終わり方をしてみたかっただけです。

なのは「かなり深刻な終わり方だったけど…」

フェイト「大丈夫なの？　無還者は」

天破「大丈夫じゃないよ。　こっからだよ、いよいよ物語は。　そして管理局もついでに破壊されていくよ」

はやて「ついで!?　ついでなんか私達は!?」

一応最終回までのプロットは出来ているんですが、ハッピーエンドにするかそうじゃなくするか…いや、バッドエンド（兵器＆人類滅亡＝生き残り無還者のみ）にはなりませんが、どっちかによってラスボス戦で生き残る人数が違ってきます。

ハッピーエンドにすれば全員生き残るかもです。　無還者も生き残り、更に色々なオマケも付いてくるかも知れません。

しかし切ないエンドになると、悲しい別れが何回かあります。この小説のラスボス戦のテーマは実は『戦争』です。　モブキャラは普通に死にます。これはハッピーエンドでもこっちでも変わりません。

…まあ、ゆっくりと煮詰めていきたいと思います（´∀`＊）

それでは、読んでいただきありがとうございました！！

天破でした（´∀`）／～～

“狂者”（前書き）

ただいま戻りました！　ようやく投稿できました…＾＾

今回のサブタイトルですが、すいませんいいのが思いつかなかったんです。　タイトル詐欺ですごめんなさい。　狂ったのが出てくるのは前半だけです↑
もしかしたら変えるかもです↑↑

では、この話を読むにあたっての注意事項っす！
・遂に王族警備軍『隊長』の登場です！　歪みきった性格とそのチート過ぎる能力をどうぞ見てくださいｗ
・ロザリーｖｓデミス…？　何があったっ！？
・兵器の心（ウェポンマインド）に無還者もデミスも知らない謎のリミッターが！　そしてそのリミッターに保存されていた物とは…？
・アルディスが本格的に管理局と対立していく、この物語の大きな転換点みたいなのを意識しています。　そうは全く見えませんがｗ
・春斗、逃げて。　超逃げて。

これで一旦アルディスの世界からは帰還し、同時にデミスと無還者の出番もアグスタ編までほとんど無くなります。　さあ、皆様お待ちかね！！　次回からはディールとフランのターンが始まる…筈ですよ！！（ぉ

…シリアス方面になりそうですが（∀、ゞ）

それでは、どうぞ＾＾　すぐに修正を加える可能性がありますが、ご了承くださいｍ（＿　＿）ｍ

１０／１　１１：５０　追記：寝ぼけてたのか、完全に間違えている部分を発見しました。　そして修正；

誤→いくらでも変えられるようになった『人間』は～

正→いくらでも変えられるようになった『精霊』は～

申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

貴方は、『天国』と『地獄』という名称の世界はあると信じているだろうか？

所詮、作り話や様々な宗教が造り出した空想・幻想の世界。　死後の救済と断罪の世界などあるわけが無い。　そう思いの方が多いのではないだろうか。

しかしそれでは余りにも味気ない。　なので仮定しよう、『天国と地獄が実在する』と。

まず『天国』という世界を考えてみる。数々の御伽話や宗教では、天国とはおおまかに『雲の上、またはその更に上にある全く別の世界』とされている。　そして天国と言えば『天使』や『神』などが存在する世界であり、死後この国に来た人々は幸せに暮らせるという。

では次に地獄について考えてみる。　地獄と言えば先程も少し記述した通り罪人達の罪滅ぼしの場、または浄罪の場と呼ばれている。

　重い罪を背負う罪人には拷問や苦痛を伴う仕事、どちらかといえば軽い罪を背負う者はしばらく地獄で裁きを受けると天国へ昇れる、との話もある。

地獄の住人という単語で連想するのは、『悪魔』や『死神』、『鬼』だろう。　だが此処ではそれらに触れず、地獄の最高権力者と言われる――『閻魔大王』について深く考えてみようと思う。

閻魔大王とは、様々な御伽噺や宗教などで時には悪役として、時には厳正なる法の執行人として登場する。　彼の腹一つで地獄に堕ちた魂が天国へ昇れるか否かを決めると言っても過言ではない。

法の執行者。　この単語から更に我々の身近にある存在を導けないだろうか？　――――そう、管理局である。

皮肉にも管理局は、聖王協会の使徒や局員からは『天国』、次元犯罪者などからは『地獄』と呼ばれる。　『天堂地獄』――――者によっては天国にも地獄にもなるという意味の四字熟語だが、まさに現在の管理局の代名詞と言えるのかもしれない。
結局の所私が述べたいのは、『疑う事なき正義の法のもとに罪を必ず裁くべき』という使命を掲げるのであればそれ相応の態度を示して頂きたい、と言うことだ。

正義。　無罪の市民を犯罪者に祭り上げ、家族をも破滅に追い込むその所業が正義か？

法。　『正義』と掲げるのは結構だが、金でいくらすり抜けられるような法律が果たして許されるのか？

此処に書いてあることは所詮極論であり、反感を示す者も多くいると思う。上記に書いてる言葉を信じるのも諸兄ら次第だ。
だが、一度だけも良い、考えて欲しい。　果たして今の管理局のやっていることは正義なのか？　今自分らが為していることは果たして正義か？
正義と悪とはなんなのか。　その問いの意味を深く捉え、諸兄らの考えの手助けになれば幸いである――――

＊

「『――尚、この件に関しての異議・反論は全て私が負うものとし、我らが自由の国アルディスとは何の関係も無い物とする』――――著：『アルディス王族警備軍隊長』ドーナ・クライオン」

週刊雑誌の特集に存在した『最低の人間から、管理局への反論手紙（ラブレター）』と洒落が効いているようで洒落にならない記事を読み終わった管理局員――高町春斗はふう、と息をつく。

“ドーナ・クライオン”。　管理局のみならず、その力は全管理世界、いや管理外世界にまで轟いていると言われており、現在確認されている中で最も生きていると言われる――最強の『古代精霊』である。

元々は脆弱なとある湖に宿っていた精霊だったのだが、あらゆる世界の中で唯一『錬金術』を完成させ、更にそれを昇華させた物を操つるようになり――本人は『遊戯造界（メイキングワンダーランド）』と呼んでおり、その正体は擬似的な『世界』を造り出す能力である。

『世界の創成者』や『現代に甦った神』、『最低の精霊』として有名であり、管理局唯一の『特級指定次元犯罪者』とされている。

この『特級指定次元犯罪者』に付いて調べてみると、法に厳格な管理局には珍しく、『このリストに登録された次元犯罪者と対立した場合、特別な事情がない限り逃亡を許可する』とある。

なんてことはない。　自分の力を私利私欲のために利用しようとした管理局の船を１０００艦程沈めただけである。　それもただ一人で、だ。

そして彼がその湖の水ごと消え失せたのはその直ぐ後だった。　私利私欲の為に自分の力を利用する人間が嫌になったらしい。

先程遠まわしに『世界を造る能力』と説明したが、錬金術の応用で世界の位相を弄り、変換し、組み替えることにより、彼が定めた一定の空間内の物体を別の次元に誘導したり移動させるだけの力だ、と彼は言う。

だが少し考えてみて欲しい。　春斗も彼の能力を知り面白半分に試してみたが、2、3秒計算した瞬間に体力が尽きて倒れ込んでしまった事がある。　兵器である彼ですら一瞬で限界に達する程の演算能力が必要な能力なのだ。　ドーナという精霊はどれ程の天才なのだろうか？

さて、話が脱線したので元に戻す。　つまり別の次元に誘導して何が出来るかと言えば、つまりその擬似的に造り出した次元は彼の独壇場である。　その次元の位相を少し弄るだけで、自分以外の生物をその世界に閉じ込めてしまったり、果てにはその次元ごと虚数空間に押し込む事も可能だという。　彼が『特級指定次元犯罪者』と呼ばれる所以である。

その気になれば世界を丸ごと消し飛ばすことすら可能だし、転移の応用のような感じで大地と空を逆転させたり、海の水を全て管理局へ雪崩込ませることすら出来てしまうのだ。　その気になれば兵器クラスの危険人物である事には違いないだろう。

『最低の精霊』と呼ばれる所以についてだが、彼は決して『他人の為に』『頼まれて』動かないことで有名だ。

自分が興味を示さなければ誰かが死にかけていても無視すれば、村が丸ごと焼き払われていても動じずにその風景を眺めていた、などという情報もある。　要は自分の関心を示さない事には全く興味がないのだ。　今もゴスロリ服の女性と一緒にいるであろう何処かのマッドサイエンティストを彷彿とさせるが、此処ではあえて触れないでおく。

『魔法は正義の為に使われる為にある』と信じている管理局員に取っては確かに最低だろう。

暫く何処かで隠居とかなんとかで静かにしていたのだが、ここ最近このような文を投稿しては管理局への不信を募らせるような言葉を民衆の心へ刷り込んでいる。　因みにこの週刊誌はドーナと全く関係なく、偶に会社の前に置かれている手紙を拾ったらドーナの手記であったという、全社員がひっくりがえるような驚愕の事件の後、定期的に同じ場所に手紙が置かれていくので、以来は深く考えず、『言論の自由』を盾に週刊誌に乗せているのだという。

「ったく、こちとら兄貴で精一杯だっつーのに…上には上がいるもんだな、こりゃ」

どう考えてもドーナの思考能力は無還者と同格かそれ以上と見ても良い物であった。　何せ世界の位相空間を全て弄れるのだ。　どんな方法を使って干渉しているのかは全く分からないが、重力や怪我すら無視した戦いが可能なのではないだろうか、と思う。
そうなれば、援護なしに勝てると思うほど春斗は自分に自惚れてはいない。　フランの手助けがあれば勝てるか、と見積もっても少ないくらいであった。

「…、どうすっかなー…」

動き始めた『最低（ドーナ）の精霊』、そして今は何処にいるのかも分からない『最凶（リセッター）の兵器』、そして謎に包まれた国である『アルディス』。

自分のやるべきことは何なのか、そして今阻止すべき事は何なのか…今日も彼は、仕事をサボるついでに深い思考の海へと沈んでいくのだった。

春斗ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

「……」

とある管理外世界、樹海。

その中でも巨大な針葉樹の頂点に片足だけで立つ男が一人。

「……見つけた？」

ふと、彼の肩に鳥が止まってピー、ピーとまるで耳打ちするかのように鳴く。　それに静かにつぶやいて頷くことで応答すると、その

鳥へ小さな餌をやって自分は針葉樹の上から『歩きだした』。

コツ、コツ、コツ――――空中では絶対にありえない音が誰もいない樹海の空に響く。

髪が真っ白な男である。　顔を見れば、片目に傷を負っているのか深く目を閉じていて、もう片方は透き通るかのような白い瞳だった。

少し、空中で歩いていくとある一部分で停止する。　片目を擦り、下を見るとなにやら不自然に森が植えられた後が見える。　他の木は曲がりくねって伸びているのに、その場所だけ完全に真っ直ぐ――――つまり人口の針葉樹が植えられていたのだ。

「…空中を歩くのも疲れた……」

再びボソリ、とつぶやくと、フッ、と男の体は宙に浮き――――そのまま猛スピードで地面に落下し始めた。

ぶつかる。　空中を歩いていたとはいえ、このスピードで地上にぶつかればただではすまない。　普通ならばただの肉になって潰れるだけである。

それは当然、世界の理として彼にも適用する。　彼だって『人間』なのだから。

「……『位相転換。　わたし↑↓木。　交換（トレード）』」

ふと、男の姿が消えた。

消えた場所に現れたのは、男が落ちていく筈だった場所の近くに生えていた針葉樹だった。

「（トン）……到着…着地…大丈夫。　チェコ、おいで」

そしてその針葉樹があった場所に、男が現れた。　当然針葉樹のあった場所には元々根っこがあった部分が丸ごと消えているので、結構大きな穴が空いている。

その穴にスッポリと収まるように立つと、誰も居ないはずのその空間に、男は誰かを喚んだ。

現れたのは、耳が常人より少し長い小さな子供だった。　緑色の髪に翠色の目。　着ている服から少女であることが伺える。

「はい、此処に」

「今、大丈夫だった？」

「丁度城下町で退屈していた所です。　喚んで頂いて嬉しいです」

「うん、ありがと。　……ロザリーに連絡。　『例の場所は発見した、早急に反抗軍（レジスタンス）と鑑識の手配をお願い。　管理局は此方で抑える、

場合によっては武力行使。　その許可も出来れば』。　これでわかると思う」

「了解いたしました。　それでは、これで」

「うん。　それじゃ」

短い会話の後、出てきた時と同じくスッ、と消える少女。　と、同時に先程の針葉樹が、男の真上から降ってきた。

車以上の速度で、重力による加速もあった木の直撃。

直撃ならば…一瞬でもあたっていれば、何かが変わっていたのかもしれない。

だが男は平然と、落下して地面に不格好に突き刺さった針葉樹の上に立っていた。

「『ＰＲＯＪＥＣＴ　Ｓ．Ｗ』……嘘？　ホント？　…どっちでもいいや。　何もかも、壊せば……」

子供のようで、残酷にして狂気で造られた笑みを口端に浮かべながら。

世界すら再現し、更には自分の姿すら錬金術でいくらでも変えられ

るようになった『精霊』は――小さな声で、呟く。

「……わたしといっしょに殺(あそ)びましょ……？」

春斗の、予想外の事柄。

ドーナ・クライオンは、彼が想像する以上に狂っていたのである。

？？？改めドーナｓｉｄｅｏｕｔ

アスディスｓｉｄｅ

「そう。　分かったわ…ありがと、チェコ」

「いえ、この位なら…」

「直ぐに鑑識と軍を向かわせるわ。　リン」

「ええ、了解よ姉さん。　取り敢えず今はＤランクでいいわよね？」

「その辺は任せる。　良い？　徹底的に探すのよ。　ひとつでもそれっぽいのが見つかれば管理局を追撃する材料になる。　ただでさ

え機動六課やら地上本部の連続殺人事件やらでてんてこ舞いらしいし、このチャンスを逃す手はないわ」

「そんな研究があったなんて、信じたくないけど…」

「信じる信じないの問題じゃないわ。　この研究には恐らく私達の同胞も犠牲になってる。　それが分かればあたし自ら管理局を潰しに行っても良いくらいよ」

物騒な会話を城の広々とした廊下で交わすのは、王女のロザリーとその妹のリンの2名。　ロザリーの目にはうっすらと古龍族独特の紋様が浮かび上がり、今にもこの城ごと吹き飛ばして管理曲に特攻をかけそうな勢いである。

「それはさすがにダメよ姉さん。姉さんが行ったら次元世界の一つ二つ滅ぶ程度じゃすまないし」

「わかってるわ、冗談よ。　でも急いだほうがいいかも」

「なぜ？」

「ドーナの破壊衝動がそろそろ再発する頃だから」

「隊長ぉぉお！　もうっ、なんで王族警備軍の隊長がそんな厄介な衝動抱えてるのよっ！」

「はい薬。　もう山の一つか二つ消し飛んでるかもしれないけど誤差のうちよ。　早く行って収めて来て」

「分かったわ…はあ、仕事を開始する前から何人か怪我人が出る予感が……」

「この前は管理局からだけど死人が出たからね。　流石に同情せざるを得ないわ…はい、出撃！」

「り、了解っ！」

「チェコ、貴方はリンの補佐。　出来るわね？」

「はい、了解しました」

「貴方のお母さんにはあたしから話しておく。　頼んだわよ」

「はいっ！！」

まずはリンが、続いてチェコが彼女の周囲から魔力の反応なく消えていく。

それを感じながら、幾分か冷静になった頭で新たに浮かんだ管理局の『深淵（けいかく）』について考える。

全ては偶然だった。

リンがミッドチルダに買い物に行って、あの男の人を保護していなかったら。

その男の人の身元を調べようとしていなかったら。

その男の人が、管理局の裏の世界の存在ではない、とはっきり言っていたら。

こうなっては、いなかっただろう。　結局の所、彼女は知らないが兵器の心（ウェポンマインド）に記録されていた対話能力の少なさが仇となった。

新たに浮かんだ管理局の『深淵（けいかく）』の名は『ＰＲＯＪＥＣＴ　Ｓ．Ｗ』。

『生体兵器の制作とその量産』を目的とした――管理局創立以来史上最高値の死人を出した計画であり、そして成功体も5体しか存在しないという。　数時間に及ぶリンＶＳ管理局の最高プロテクトの末、ようやく手に入った『単語』である。　内容は完全に抹消されており、兵器がどんな能力を持っていたのかも分からない。

しかし今重要なのは、現在病気という理由で眠っている『客人』とその『息子』が――

その計画の関係者である確率が出てきた、ということだ。

「もし管理局の回し者なら、殺さなくちゃいけない。けど」

もし、兵器（ひがいしゃ）の類に入る者ならば――――これ以上ない戦力と限りなく強固な証拠が同時に手に入ることになる。

なんだかんだ言いながら『女王』としての顔になっているロザリーは、その思考をフル回転させてあらゆる事態を想定し、指示を下す。

まずはあの『客人』が目覚めるのを待つだけだ。

全てはそこから、始まるか否か。

その答えは、まだ彼女にも分からない。

アルディスｓｉｄｅ

管理局ｓｉｄｅ

…結論を言うと、なのはは回復した。　そしてやっぱり卵は埋め込まれていた。

その大きさに全員戦慄する。　ザフィーラ人間形態の拳の半分程度の大きさがあった。　孵化していたらどれほどになっていたのか想

像もつかない。

「ふぇえええん…良かった、良かったよ～」

「よしよし、なのは…ゆっくり休んでね…」

恐怖の重圧に解き放たれたなのはがフェイトに抱きつき、そしてそれを優しく慰めるフェイト。

そこに、仕事を脱走したのがバレてティアナやフランから命からがら逃げてきた春斗が様子を見に来た。

「はぁ、はぁ…フランはともかく、なぜティアナが俺の体力に付いて来れるんだ…？　よ、なのは姉」

「あ、春斗ぉ～！　取り出してもらえたよ～」

「よしよし、よかったななのは姉。　そうだフェイトさん、バルディッシュは返します」

「あ、ありがとう…ね、ねぇ？　さっき病室を出るときに話してた、その、私が可愛くなっていくって話なんだけｄ」

「はーるーと――――！！！」

「逃がしませんよ春斗さん！！　何がどうあっても貴方の仕事は貴方にやらせます！！」

「ちぃいっ！　何たる無駄すぎる察知スキルと執念！　さらばだなのは姉、また改めて見舞いに来る！」

「えっ、ちょ、春斗！？　まさか仕事サボったの！？」

「それとフェイトさん！」

「へ？　な、なにっ！」

「……バルディッシュ、後は頼んだ☆」

《春斗卿っ！？》

「さらばだっ！！」

「「待ちなさーい！！」」

ガシャーン！（春斗が身近の窓を叩き壊す音）

バッ（その窓からダイブした音）

「春斗さん…！　窓から降りるとは汚い真似を…！！」

「ティアナ、貴方はクロスミラージュの浮遊魔法で追ってくださいですわ！　私は下に降りて追いかけます！」

「了解です！」

バッ（ティアナも窓からダイブした音）

バッ（フランが春斗を捉えるべく走り出した音）

静かに現れ、嵐のごとく去っていった春斗達。　静まり返る病室で、ふと思い出したようにフェイトがつぶやいた。

「バルディッシュ？」

《…、》

「あ、あの話の事について…話して、くれるよね？」

《…イエス、サー……》

現在ミッドチルダは、麗らかな日差しの指す昼時。

魔導士たちは、つかの間の休息を得るのだった。

管理局ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

全不全。

不潔で、不快で、不平等。

不明瞭で、不定形で、不安定。

この世界は『不』ばかり。

ある日、少年は思った。

ならば壊そうと。

こんな不完全な世界、滅ぼそうと。

あの時は確かに、そう思った。

そんな時だった。

『　』に会ったのは――――

――――――兵器の心（ウェポンマインド）１ｓｔリミッターの解除条件を満たしました。　音声データの存在を確認。　再生を開始。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

無還者ｓｉｄｅ

「『（パチッ）……』」

「！　お、お父さん！？」

それは確かに夢であり、幻想である筈の物である。

「（ガチャ）あら、気がついた？　客人さん」

しかし。

ロザリーの方を向いた男の目は、今までよりも更に虚ろで、感情のない物だった。

「『――――（ザザッ）ア…イ…リィ…？』」

「具合はどう――――ッ！！？」

ふと彼が感情無き声で、しかし何かを噛み締めるようにつぶやくと、ニコニコ顔だったロザリーの顔が、デミスからも分かるように急激に歪んだ。

「『……、幻想か…幻覚か……まさか、このデータが再生される日が来るとは…思わなかった（ザザ…）…』」

「お、お父さん？」

そのデミスの声は既に届いていない。

どう考えても今目の前にいる自分の主は、この部屋を、自分たちを見ていなかった。

「『伝え、ないと…（ザザッ…）……これが例え、バグでも、別人でも…』」

「（声にノイズ!?　バグが治っていないのか!!）　お父さ――」

「『――これは“アイリィ”からの、伝言、です』」

無機質な声で、無表情な顔で、兵器は言葉を紡ぐ。

「『これを聞いている人へ。　ロザリーは元気でしょうか？　これを聞いているのが私の知り合いであることを祈ります』」

いきなり知り合いの単語が呼び捨てで飛び出した。　思わずデミスが後ろを向くと、ロザリーが呆然とした顔で立っていた。

もちろんそんなことは知らない男は、更に言葉を続けていく。

「『きっと、まだ言えない事の方が多い。だから要点だけ伝えるね？　私はクローンです。　本物じゃない。　けど最期の最期で、貴方達を思い出せた。　きっと本物の私も、喜んでいるはずです』」

感情の篭らない筈のその声に、感情が篭っていると錯覚するほど暖かく、愛情のあふれる言葉だった。

「『ロザリーは、クローンである私を母とは認めないかもしれないね。　背も小さいし。　もし生きてられたら、いっぱい話したかったんだけど、私には兵器の心（ウェポンマインド）に割り込みをかけるのが精一杯でした』」

その割り込みと同時に音声データを魔力データに変換して入力した？　それを想像すると、思わずデミスの背筋に凍ったような感覚が走る。

そんな事は普通の人間には不可能だ。　最低でも三つ以上の複雑な並列思考をこなさなくてはならない。　無還者ならば１００程度までなら余裕だろうが、それでも高等技術には変わりなく、それが出来るだけでＳ級は堅い。

「『そして…“リセッター”の近くに居てくれている方へ。ありがとう。　出来ることなら私が居てあげたかったけど、無理でした』」

その声は常に無機質で、しかもところどころノイズが入り聞きずらい。　しかし誰一人その病室内でしゃべることはなく、その言葉を聞き取ろうと必死になっている。

「『この音声が再生されているということは、“リセッター”の能力が何個が開放される事になるかと思います。　出来ることなら開放される前に封印なり破壊なりして欲しかったけど、喜んでいいの

か悪いのか…でも、きっと。　誰かが、止めてくれると信じてます』」

リミッターの存在も、そして隠された能力の事もデミスのみならず恐らく無還者本人も知らないに違いない。　必死に思考能力をフル起動し情報を組み立てていくデミス。　そんな目の前で、“アイリィ”は別れの言葉を告げようとしていた。

「『万が一、２ｎｄリミッターが解除された場合…また、私の音声データが隠してあります。　それと、このデータは再生後に消滅します。　これを聞いている誰かさんは、もし良ければアルディスって言う国の王族へ知らせてください。　宜しくお願いします』」

そして、と“アイリィ”は告げる。

「『“ＰＲＯＪＥＣＴ”には深入りして欲しくないけど…もしそんなに知りたいのなら、私達の兄弟を探してね。　きっといるはず。私の他に“リセッター”も入れて５人居るはずだ…から……』」

それを最後に――無還者は再び、力を抜いて倒れた。

「…」

「…」

無言の時間が、病室で続く。

先に動いたのは、この国の王女だった。

どこから取り出したのか、彼女の身長の2倍はありそうな剣がデミスに向かって振るわれる。

しかしそれを、もう隠す必要もないと判断したのかデミスが障壁で受け止めた。

ドォンッ！！　という音が響いた。

ロザリーの大剣とデミスの障壁が衝突した音だった。

「貴方、人間じゃないわね？」

「そう言う汝こそ」

狭い病室で、背は小さい二人が障壁と大剣のつばぜり合いをしながら会話をする。

何も知らない誰かが見れば子供が遊んでいるようにしか見えないかも知れないが、現在あの大剣には大陸を叩き割るだけの力がある。
デミスが万が一にでも競り負けでもしたら、この城ごと真っ二つになってもおかしくは無い程の力が。

「教えてもらおうかしら。　この国での極秘情報に指定されている単語をなぜ知っているのか」

「さてな。　吾輩は“アイリィ”という名前など知らぬ」

「嘘を言わないで。　今あたしイラ付いてるんだけど」

「吾輩は知らぬぞ。　だがＰＲＯＪＥＣＴについてなら少しは話せる。　しかし、吾輩は主が幼少時の頃から主と共にいたが、“アイリィ”と言う名前の生き物など見なかった」

「……、」

ガンッ！！　という耳障りな音と共に、ロザリーがデミスの障壁を弾いて後退し、同時に彼の障壁も消滅した。

それを感じてデミスは眉を釣り上げつつ、

「む…その剣、ただの大剣ではないな」

「ええ。　お父様が開発した『宝具』と呼ばれるべき武器よ。　そしてこの国の王の証でもある」

ロザリーは静かにそう言うと、その大剣の切っ先をデミスへと突き付けた。

「アルディスの王として聞きます。　『プロジェクト』について知っていることを教えなさい」

「その様子を見ると、吾輩達のことは元々疑っていた、と見て良いか？」

「いいえ、疑い始めたのは5分前くらいからよ。　リンが管理局のデータベースに侵入してね、何とか『ＰＲＯＪＥＣＴ　Ｓ．Ｗ』って名前だけは入手したわ。　その研究が行われていた場所と概要も。　けど誰がそんな研究をしていたか、そして成功体（へいき）の能力や面子は割れなかった」

「…」

デミスは静かに目を閉じると、「これは吾輩のただの独り言だ」と前置きして、口を開いた。

「確か管理局の『機動六課』に高町春斗という男がいたな。　魔力や風貌に面影がある。　あの男はＰＲＯＪＥＣＴの成功体の一人だろう」

「…、」

「どうやら『エース・オブ・エース』の義弟として生きてきたらしい。　兵器という事は明かしていないことが見て取れた。　フェイト・Ｔ・ハラオウンなどの機動六課隊長陣を痛めつけた吾輩らへの憎悪への奥底に、管理局への怒りと憎悪を確かに感じた。　あの様子であれば、恐らく我が主が管理局の駒として良いように使われていることも知っている」

「待ちなさい。　管理局の駒として言いように使われている？　初耳ね、その男は管理局に協力しているの？」

「そう言えば、主はこのプロジェクトの背後にいる黒幕に『操られている』のだったな。　管理局の上層部の命令を何でも聞く様に」

「反吐が出るわね。　あの組織の上層部はどこまで私たちを馬鹿にすれば気がすむのかしら」

彼の『独り言』を嘲笑するかのように口を歪めるロザリーに対し、少し顔を歪める少年の姿をした人外。　それを見逃さなかったロザリーは、彼に対して静かに言った。

「その様子を見ると、貴方も管理局にいい感情はもってないらしいわね？」

「…、」

「無言はこの場では肯定と受け取るわ。　後、さっきの物言いから『黒幕』も知っているみたいだけど…流石にそれは言ってくれないわよね」

「…吾輩を捕まえぬのか？」

「愚問よ。　今ので分かったわ、貴方とそこの男の人は私と同等、いやそれ以上の強さを持ってる。　そんな人とここでやりあったらこの国が潰れちゃうわ。　私は家族には優しいのよ。　それに、今回の件とはあまり関係ないけど別の件についてかなりの手掛かりを得たわ…それで十分」

そう言うと、切っ先を向けていた大剣を肩に担ぎ、くるりとデミス達に背を向けて部屋を後にしようとする。

それを見て取ったデミスもベッドで倒れ付す自分の主に触れ、転移魔法を展開した。

「で、これからどうするの？」

「帰るさ。　地獄にな」

「ここに住むという選択肢は？　どんなに人を殺したって、どんな

に非人道的な事をしたって、それはやっぱり命令なんでしょう？」

「良く分かったな？　確かに主は吾輩の知る限り一度たりとも自分の意思で殺しをした事はない」

「簡単な推測よ。　上層部に洗脳された幻想種（わたしたち）かそれ以上の力を持つ生体兵器…あの屑共がそんな人にさせることと行ったらそれくらいでしょう」

少し振り向いて、その小さな背からは想像も出来ないほど鋭い瞳でデミスを、そしてその更に向こうに居るであろう『黒幕』を射抜くかのように見据える。

その目から感じるのは、その風貌からは想像も出来ぬほどの王の『覇気』。　一般人ならば昏倒すらするだろうそれを受けて、デミスは少し嘲笑するかのように笑うと転移魔法を更に輝かせ、呟くように口を開いた。

「ゼフィナ・フリアード」

「？」

「カーレア・セビアス、ニアス・ブリティクス、ノコア・クルビオン。　吾輩が覚えている中で、現在生存を確認している例のプロジェクトに関わった研究者の名だ」

「！」

その言葉が言い終わるか言い終わらないかの瀬戸際で、彼女の小さな体が勢い良く此方を向き、その瞳が揺れる。

それが本当ならば、現在の状況ではこれ以上無い情報だ。　その研究員を捕まえて尋問でも拷問でもして聞きだせば有力な手掛かりを得られる可能性がある。

しかしなぜ、それをロザリーへ伝えたのだろうか？　その疑問が顔に出ていたらしく、デミスは口を歪めたまま言葉を続けた。

「吾輩は元々名前の無い人外だ。　人であったのは今から何千年と前の話になる」

「…、」

「だからこそ、感情は無いとはいえ名前をくれた主の幸福を願っている。　どんな形でもいい、この負の連鎖から抜け出したいとも」

「ならどうして此処に隠れないの？　管理局のサーチには絶対に引っ掛けない自信があるわ。　そう願っているのなら…」

「だが、吾輩が願った主の幸福は別にある。　そう、完全に洗脳を受ける前の主の願いこそ主の幸福だ」

その言葉にあるのは、深い悲しみと儚さだ――――そう感じたロザリーは自然と口を閉じてしまう。

「失う悲しみというのを吾輩はよく知っているつもりだった。　吾輩が人間である時もそうだった。　だが…主は洗脳されている中で、失う悲しみというのを何処かで分かっていたのかもしれないな」

それがどういうことを示すのかは分からぬがな、と呟いたと同時、遂に転移魔方陣が真っ黒に光輝き、ロザリーの視界を塗りつぶす。

その刹那、彼女の頭に響いたのは念話だった。

『汝に王の加護があることを…吾輩らしくもないがな』

その言葉が響いたと同時に黒い光は消え、広がったのは誰もいない寝室だった。

「王の加護があることを、か。　王女に何を言っているのかしら」

面白くなったのか、クスクスと笑うロザリーは少し前にやったように頭をコンコン、と叩くと遠い世界にいる自分の妹に連絡した。

「あ、リン？　そっちはどう…あ、山が2つと龍種が4匹消し飛んだ？　うん、寧ろその程度で良かったって言った方がいいかしら。
同じ龍種として少し複雑だけど。　で、今ドーナはどうしてる？
真面目に捜査してる？　じゃ、呼び戻してくれるかしら…『拷問（おはなし）』

の時間よ、って言えば喜んでこっちに来ると思うから」

少し戦慄しているであろう自分の妹を想像しまたクスリと笑うと、何秒で来るかなー、と予想を立てつつ、ニコニコと笑顔でこの国唯一の『拷問官』としてみ認められている男の到着を待つ。

『“自由の国”アルディス』。

その正体は、『力ある者こそ上に立つべきである』という無茶苦茶な言葉が簡単に罷り通る――良くも悪くも凶悪で簡潔な、最高にして最強の国。

この数日後。

ゼフィア・フリアード、カーレア・セビアス、ニアス・ブリティクス、ノコア・クルビオン。　以上四名が、管理局の局員登録名簿から消え失せる事となる。

“狂者”（後書き）

天破「今回の話で出てきた研究員は今日この時の為だけに１０秒で考えました。当然ですが二度と喋ることはない状態です」

春斗「南無…」

ディール「ふん、自業自得じゃ。　それにしてもまた厄介なのが出てきたの…」

フラン「遊戯造界（メイキングワンダーランド）ですわよね？　私達でも追い付けないほどの演算能力を持つ精霊…凄いですわねぇ」

春斗「能力もチートだぞ。　この作品中でも出てきたが、視界に入った物体と自分とのトレードをしてたし、何か召喚してたしな……」

天破「これ、このキャラが本気を出すとどんな被害が出るんだろう…

……ミッドチルダに」

春斗「…オイ待て、ミッドチルダで使わせる気か。…ゴラァ、逃げんじゃねぇ作者ァアア！！」

これでアルディスの主要人物（チート）が一通り揃ったことになります。　後は…まあ…ちょっと異常だったりするかもしれませんが、普通のしかいません。例えば自分の不幸を他人の幸運と入れ替えるような奴とか廃墟寸前の神社を一人で掃除している狐耳の幼女とかｒｙ

ごめんなさい。　全部私の趣味で（終了）

それでは改めて、次回も御楽しみに～＾＾♪

感想などなど、お待ちしています（´∀`）／～～

登場人物紹介【アルディス編】（前書き）

ちょっとあるディスのオリキャラの数が増えすぎてよく分かんなくなってきているかもしれないので、作者の整理の意味も兼ねての人物紹介です（ノ∀、）

こちらでは題名通り、天破の作中に登場するオリジナルの次元世界である『アルディス』内に住んでいる&登場する、または関係のある人物を書いていきます。
新キャラが出てくるたびに更新されて行くので、たまに見ておくと話の流れを先読みできる可能性も…あったりなかったりです。

それとついでに、この人物紹介を読んでいる方へのお知らせがあります。
詳しくは後書きをご覧くださいｗ

それではどうぞｍ（＿＿）ｍ

登場人物紹介【アルディス編】

～この作品中のオリ世界である『アルディス』とは～

あらゆる『人間じゃない』種族が共存して生きる世界で、管理外世界では最も賑わっている世界とまで言われている。　常に国を囲んでいる森にはＡＭＦ的な磁場が発生しており、魔力をその身に宿す生き物を地面に張り付けにしてしまう天然の要塞である。　数々の次元犯罪者を匿っている事から何度か管理局と対立したことがあったが、すべて撃退している。　管理世界には詳細な情報が届くことは無いので、一般的には『謎の国』として認識されている。

――――登場人物紹介（王族・王族警備軍編）――――

【アルディス国王女にして最強の古龍種】

名前：ロザリー・アルディス

外見：身長１２０ｃｍ程度で、外見は子供。　しかし実は９５歳を超える古龍種。　王女だからという理由でいつも煌びやかな服を着ているが堅苦しくてしかたないらしい。
所属：アルディス国（王女）
魔力量：ＥＸ
魔導士ランク：正規な魔導士ではないため測定不可能
魔力光：灰色　魔力変換資質：【炎熱】、【風圧】
使用術式：古龍式（ドラグーン）　※古龍種にしか使えない。

―希少能力―

【？？？】：物体を視界に入れるだけでその物体を蒸発させてしまう能力。

【？？？】：龍の息吹系統の能力。　この息吹を受けた物体は融解してしまう。

備考：身長の事を言うと泣く。　本来なら大人の姿にも変身できるはずなのだが、魔力運用がかなり下手であり、普通に炎熱変換で指先に火を灯そうと思ったら、とある無人世界の山が焼失したらしい。
　魔力変換資質の炎熱と風圧を組み合わせることにより【爆風】が起こせる。　最上位に位置する古龍種であり、大抵の龍は強制的に従わせることが出来る。
古龍族のみが使える術式である『古龍式』は、その名から想像できるように龍の如き魔力を駆使した破壊術式――ではなく、実は補助に長けている術式だ。
『息吹（ブレス）』やその強靭な生命力と巨大な肉体を持つ古龍種という物に

とって、魔力は攻撃に使えばただの邪魔な存在である。　ただしロザリーの父である先代の王はその魔力を縦横無尽に放出することにより攻撃をしていたらしいが、それは例外だ。　ただでさえ魔力運用が苦手なロザリーにそんな技術が或わけもなく、結局は補助術式という形で落ち着いている。

【笑顔を浮かべるその裏には凶悪な魔女が潜む、地球から逃げ延びた『災厄の魔女』】

リン・アルディス

外見：身長は１６５ｃｍ程度はある、１００歳は超えているであろう魔女。　胸が意外と大きい。イメージはバカとテストと召喚獣の『姫路瑞樹』さんなど。
所属：アルディス国（次期王女）兼王族警備軍副隊長
魔力量：ＳＳＳ
魔導士ランク：魔導士ではないため測定不可能
魔力光：暗い青　魔力変換資質：なし
使用術式：黒魔女式（エキドナ）　※現在はリンしか使えない。

―希少能力―

【亡者進軍（アンデットロード）】：あらゆる武器を持った骸骨姿の人形を召喚する。

実体を持たないのでリン本人を止めない限り何度でも再生する。

【？？？】：？？？

【？？？】：？？？

備考：歳の事を言うと殺される。　意外と気にしているらしい。
いつも優しくニコニコとしている彼女だが、魔女狩りが起きる前の彼女は人間を遊び道具とする残忍な性格であり、上記の能力を使い人間の街を襲っては虐殺を繰り返した為、地球でも何千万＄という賞金がかけられていた。
元々は普通の人間だったのだが、彼女の父が彼女を魔女にするための改造魔術を施したのが原因である。　その結果として、歪んだ性格と莫大な魔力を得たらしい。
しかし魔女狩りが始まり、自分と絡んでいた友達の魔女や人間が死んでいくのを見て、自分の行いの残虐さに耐え切れなくなった彼女は精神的に疲労していき、そこを魔女狩りや賞金稼ぎに狙われ生命の危機に陥ったところで未完成の転移魔法を使いアルディスへとたどり着いた――というのが真実である。

その後は様々な人物の強力あって、その人格を封印し、擬似的な多重人格状態になっている。

【確認されている中での史上最後の真租の吸血鬼】

メビア・アルディス

「華麗に、優雅に、美しく、殺せ。　面倒でしょ？　真租（うち）の家訓なんだよね」

外見：高校2年生程度の少年に見える。実際は王族一長生きしている。
所属：アルディス国（王族・リンとロザリーの弟扱い）
魔力量：ＥＸ以上
魔導士ランク：何十年か前に測ったらＥＸ＋＋＋とか何とか
魔力光：真紅　魔力変換資質：【氷結】、【霧】
使用術式：吸血鬼（ヴァンパイヤ）式　※真租の吸血鬼しか使えない。

―希少能力―

【精魂吸引（ライフテイカー）】：吸血鬼なら誰でも持っている、相手の魔力や精気を喰らって寿命を得る能力。　吸血鬼によって食らう物が異なるらしい。　尚メビアの場合は『女性の魔力』が一番美味とか。　噛み付かなくても触れさえすれば吸収できるのでこれだけで戦いの決着がつくこともしばしばある。

【？？？】：？？？

【？？？】：？？？

【？？？】：？？？

備考：見かけとは裏腹にかなりの賢人。　同じく賢いことで有名な

古龍種と競えるほどの力・知力を持つ。
吸血鬼、最後の真租であり、その力は計り知れない。　特に満月の日は無限に魔力を回復していく特性があるので、ロザリーやリンすらも勝てない状態になる。　戦う場所の状況に置いては最強になる。
吸血鬼としては珍しく、そこまで吸血・吸引することを望まない。
　本当に必要なときにのみ吸引をする。　尚その時犠牲になるのは大抵リンである事は口外無用の事柄である。
彼の他の真租は皆死んでいるとされている。　彼も最初の１００年位は他の真租を探すことに費やしたが飽きたので辞めてしまった。
　現在は暇潰しがてら王族をしている。

【ロザリーの父にして先代の王、現時点で満月の夜のメビアと互角に戦える唯一の人物】

名前：???

「平穏と安らぎを求め、国まで作って…フッ、私らしくもないな。感傷に浸るなど」

外見：４０代後半のおじ様イメージ。　『ネギま!』のタカミチとかガトウなどを参考にしています。
所属：アルディス国（元国王。　現在は故人）
魔力量：???
魔導士ランク：現在は故人の上、生きている間も測る機会が無かっ

たと思うので測定不能とする
魔力光：黒紫　魔力変換資質：【灼熱】、【雷光】
使用術式：古龍式

―希少能力―

【？？？】：？？？

【？？？】：？？？

【？？？】：？？？

【？？？】：？？？

備考：責任感もあり、義に厚い人物。　１０００年以上生きたと言われている、最古の古龍種。　魔力変換資質はそれぞれ【炎熱】と【雷電】の上位互換であり、その威力は最早炎と雷ではなくレーザー砲として認識されるほど。　惑星の核を貫く威力を持つ【雷光】と、海の水を一瞬で干上がらさせ、石をも融解させる【灼熱】は、古龍族に対立する者たちにとっての死神同然であった。
メビアに勝った唯一の幻想種で、その後メビアとは仲のいい友人となった。　そして９０年以上前、とある幻想種の女性を妻にしてロザリーを授かったが、その幸せの絶頂の中、ある日を境に精神が崩壊。　更に自身の口から『古龍族末代までの恥』と言わしめるほどの禁忌を犯し、その内容を王族に伝えるとそのまま亡くなった。
そしてその『禁忌』以来、管理局とアルディスの仲の悪さは一層高まったという。　真相は王族しか知らぬことだが、どうも『アイリィ』（後述に記載）という名前に何か関係があるようである。

【一切素性不明の謎の存在、ロザリー曰く“極秘単語”、デミス曰く“ただの人間ではない”】

名前：アイリィ

「……、ロザリー…」

外見：???
所属?:??（ロザリーや無還者に関係していると思われる）
魔導士ランク：????
魔力光：????　魔力変換資質：????
使用術式：????

―希少能力―

※幾つ、そして何があるのか全て不明

備考：先代よりも謎の多い存在。　性別すら何であるのかも不明。
ロザリーが急激に顔を歪める姿を見せるほどの思い入れがあるらしいが、その理由すら分からない。　無還者の兵器（ウェポン）の心（マインド）に細工をしたり、それで尚無還者のことを心配している様な事を言っているので更に事態をややこしくさせる原因となっている。

【見た目は２０代後半前後の若々しい男性、だが正体は鬼神族の副長】

名前：ライム・ローディウス

外見：外見はまんま『バカとテストと召喚獣』の坂本雄二を少し大人っぽくした感じです。　ただし髪は茶色で首ほどまである感じとなっています。　いつもスーツっぽいのを来ています。
所属：王族警備軍補佐役
魔導士ランク：大体ＳＳＳ前後
魔力光：土色　魔力変換資質：【風】

―希少能力―

【老力増加（エンシェントアッパー）】：ある一定の時期まで、歳を取ればとるほど力が上がっていくという鬼神族のみが持つ能力。　一定の時期というのは個々によって異なる。

【？？？】：？？？

備考：アルディス安定の年齢詐欺４人目。　普段は心優しき野生味溢れる顔をした紳士（メビア談）だが、戦闘になると敵を一人残らず喰い殺すまで戦い続ける生粋の鬼。　肉食であり、実年齢２０代

の頃は自分を捕まえようとしてきた人間を骨ごと食べてきた経歴がある。
敵対した人間には容赦はないが、そもそも鬼神族は人間と友好的な関係を望んでいる種族である。　危害さえ加えなければ優しい。
魔力変換資質である【風】は、風を圧縮したものをその異常な腕力で打ち出すことにより擬似的な『無音拳』として使用することができる。　その威力は圧縮時間を3秒と仮定すると、『ディバインバスター』を超えてしまう。
ドーナ（後述）とは結構仲が良いが、破壊衝動発動時の彼とは二度と戦いたくないとの事。

【全世界唯一の“特級指定次元犯罪者”であり、破壊衝動を持つ人格破綻者】

名前：ドーナ・クライオン

外見：『めだかボックス』の“球磨川禊”の髪の毛と目の色を白く染めて、片目に傷を付け、髪の毛を背中の中間地点まで伸ばした感じです。
所属：王族警備軍隊長
魔導士ランク：管理局が推定した数値ではＥＸ＋＋＋＋＋。　ただし破壊衝動発動時はＥＸを１０乗した値でも足りない筈だとか（※リン談）。
魔力光：精霊なので魔力無し　魔力変換資質：無し

―希少能力―

【遊戯造界（メイキングワンダーランド）】：世界や物体の位相を弄る事により、好きな位置にあるものを自由な位置に動かしたり、新たに次元を作ることも可能な能力。　元ネタは『東方』のスキマ妖怪様。

【水霊の加護】：元々が湖の精霊だったので、水を自由に召喚・操作出来る。　【遊戯造界】と組み合わせることにより、３６０度いつでもどこでも何リットルでも水を召喚できるようになった。

【？？？】：？？？

備考：恐らくアルディス国の中でも一番のチート能力所有者。　能力はぶっちゃけてしまうと『ネギま！』の【造物主の掟】や『月姫』の【直視の魔眼】、そして様々な作品に紹介・使用されている【アカシック・レコード】を全て足して２乗したような感じになる。
位相を弄ることにより、次元転移を魔力使用無しで幾らでも可能にした。　更には擬似的な位相空間を『世界』という集合の中に設けることにより、その位相空間内にその『世界』と全く同じミラーワールドを一部だけだが造ることにも成功している。
位相空間とはそもそも現在も研究中の分野でもあり、『集合に要素どうしの近さや繋がり方に関する情報（位相）を付け加え、点列の収束や関数の連続性といった概念の源とされている（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａより引用）』。

これがどういうことを示すかと言えば、魔力素を収束して放たれる『魔力砲撃』や『魔力弾』、連続して発動する設置型魔法等の『繋がり方に関する情報』を０にしてしまうことで無かった事にしてしまう事が出来る、という事になる。

もちろんただ無くしてしまうだけではなく『付け加える』事だって可能である。　例えばだが、迫り来る魔砲撃に対し、魔力玉を出して『この魔力玉と魔砲撃は同じ繋がりを持つ』とすれば砲撃はその魔力玉に吸収されてしまう。　彼に魔力が無いのが唯一の救いだろう。

難しいことを並べたが、簡略すると『世界に存在する物体ならなんでも操作できるし移動させることが出来る』という事になる。　因みに人間だって様々な原子の集合体である、その集合を０にされたらどうなるかなど想像したくもない。

破壊衝動の件についてだが、これは彼が精霊であった頃から存在する衝動であり、いつもは寡黙で必要なことしか言わない様な者なのだが、この状態になると『全世界の崩壊を目的とする』スイッチが入ってしまい、暴走する。

大規模な物だと王族総出で止めなくてはならないらしい。　どっちが警備してるんだか分からない。

尚、彼と戦ったｏｒ破壊衝動時に放った攻撃に直撃した存在で、灰にならなかった者は未だ嘗て王族のみである…。

登場人物紹介【アルディス編】（後書き）

さて、前書きでも言った『お知らせ』の件ですが、実はオリキャラの募集をしたいと思っているのです。

もちろん登場する場所はアルディス国。　春斗らの敵になるかどうかはお楽しみ、というなんともいろんな意味で危ないポジションに付けるような逸材を探しています。もう、ドーナの前ではあらゆる能力が霞んでしまうので出来れば魔力を使わない能力を持つオリジナルキャラクターを一人、皆様から募集したいと思います。

ここでポイント。

男性キャラなら――春斗と仲良くなります。　ディールかフランにフラグが立ちます。

女性キャラなら――多分、春斗かシーナに惚れます。　春斗の死亡フラグが確立します。

春斗「これどっちも俺助かってなくね？　関わり合うこと決定だよなコレ」

そんなことは知らんな。

まあそんなわけで、感想でもメールでもいいので皆様の考えるチー

トオリジナルキャラクターをくだされば…と思います。
もしこんな駄作者にアイデアを下さるのでしたら、皆様の期待に応えるべく左右全ての指に魂を込めて執筆する所存でございます。
宜しくお願いします。

因みに、万が一アイディアがひとつも来なかった場合、私が考えた『女性キャラ』になってしまいます。

この意味がお分かりですね（´∀`＊）？

フラン「」ピクッ
スバル「」ピクッ
はやて「」ピクッ
ティアナ「」…チラッ

春斗「やべぇ…何かが…何かが俺の中で終わろうとしている…ッ！！」

それはきっと貴方の未来です。

という訳で、アイデア&新キャラ随時募集のお知らせでした（＊´∀`＊）

次回は、アルディスのある人物が早速春斗に接触しに行きます。
しかし、それを見た某ちびたぬ隊長が勘違いをしてうんたらかんたらなお話です。

ギャグも混入しているので、見といて損はないかもしれないという

かあると思う（ぇ　天破の文章は半分がノリ、もう半分が低クォリティで構成されています。
優しさって、なんですか？

それでは次回も御楽しみに＾＾
天破でした（´∀`）／~~

“交渉（前編）”（前書き）

さて、此処でこの作品に関する注意事項が新たに生まれました。

ふと、思ったんです。

…これ、時間軸的にホテルアグスタもう始まってる時期じゃねぇ？

と。

ＰＣは小説投稿とエロゲやギャルゲ及び英単語検索以外出来なくなっているので、ちょっと調べられないのですが…

えっ？　不純な使用目的が混ざってた？　気のせいです。　一言言うなら、年齢という壁は果てしなく高いように見えて悟りを開けば何ら問題はないのです。

話を戻しましょう。　えー、私が分からないのは原作最初の機動六課担当事件である『リニアレール事件』と『ホテルアグスタ事件』の間にどれほどの時間が空いていたのか？　ということなのです（´・ω・、）

もし二週間以下しか無いのだったらアウトです。　全体的に時間軸が少しズレます。　ゆりかご事件の方も行うつもりなので、少々１０月に食い込んでしまうんじゃないかなという絶望的な未来が見えます。　何かもう申し訳ない。

あっ、キャラ募集の件はまだ受付中です（今言うか

それでは長くなりましたが、『本編とは全く違う時間軸で動く可能性がある』ということだけ覚えていてくだされば幸いです。

では、取り敢えず本編の前に注意事項！
・まさか！？　春斗の真のメインヒロインはフランやはやてじゃ無かった！？
・だが取り敢えず春斗は殺さなくてはなるまい
・ヴァイス達勇敢な戦士達に黙祷を
・チート集団、ちょっとずつ侵攻開始
・ドーナは実は癒やし系キャラだったとかそうじゃないとか

なんですかこれ。　どうしてこうなった。

あっ、今回のお話には批判もあるかもしれませぬ。　真摯に受取りますのでよろしければ感想等でぶっちゃけちゃってください。

では、本編をどうぞｍ（＿＿）ｍ

“交渉（前編）”

なのはの体の中から卵が摘出された次の日――――

管理局ｓｉｄｅ

とある、一人の女性がふわり、と日傘を持って管理局の前に現れた。
スラリとした身体に優しい笑みを浮かべているその姿は、一瞬にして男女問わずあらゆる局員の目を釘付けにした。
可愛らしい日傘を畳み、惚けている受付の女性に話しかける。

「今、よろしいでしょうか？」

「ふぇ…あ、はい！　何か御用でしょうか！？」

その様子を見てふふ、と軽く笑うと、「人を呼んで欲しいんです」
と彼女は言った。

「管理局“機動六課”所属の『高町春斗』という方なのですが…。

もしいらっしゃいましたら、どうか此方に連れてきては頂けないでしょうか？」

管理局ｓｉｄｅｏｕｔ

春斗ｓｉｄｅ

ブルブル…

「なんだ！？　いきなり背筋に悪寒が走ったんだが！？」

「気のせいだ。　負けるからといって逃げようというのではあるまいな？　王手」

「いや、気のせいじゃねぇと思うんだが…王手か…んじゃ、ほれ」

「ぬっ…むぅ…ならば、こうだ」

「じゃ、王手で」

「！……俺の負けだ」

「けけけ、まだまだだなザフィーラ」

そんな局員事情も知らず、ザフィーラと将棋をやっているのは紛れも無く高町春斗本人であった。　ザフィーラには先日教えたばかりなのだが、毎日打っているだけあってかなりの速度で上達している。
対局相手が出来た、と春斗も嬉しそうであった。

「此処で飛車が来るとは思わなかったな」

「裏の裏を読む男、それが高町春斗と言う男さ」

クックック、と笑いながら言うとザフィーラもそれにつられて少しだけ笑う。　結構すり減ってきた将棋駒とボロボロになっている将棋盤を片付け、自分のベッドの上に置いた。

「しかし、お前の人間形態も随分久しいな。　結構しゃべってはいるんだが」

「主は犬を飼うことを望んでいるからな。　俺はそれに忠実に答えるだけだ」

「だが、その分だとキャロとエリオ、そしてティアナやスバルがお前が人間形態になれること知らねぇんじゃねぇ？」

「……、」

「そこで黙られるとかなり申し訳ないんだが…」

春斗が的確に真実を言うと、少し顔を俯けて憂鬱げな表情になってしまったザフィーラ。　少し気にしていたらしかった。

「お前がそれでいいんだったらそれでいけど…ま、暇なときはこうして将棋にでも付き合うから、何かネタがあったら言ってくれ…（プルルルル）…ん、端末？」

「俺ではないな」

「まあお前にだったら念話でいいだろ。　消去法で俺か…（カチッ）はい、此方高町春斗ですが」

『ハァアアルゥウウウトォォオオ！！！　テメェ今度は何やらかしやがったァアアアアア！！』

「そうか、間違い電話か。　気をつけろ」

プツン（端末を切った音）

「…、春斗？」

「言うな。　違う、あれは絶対にヴァイスじゃ無い。　俺の知っているヴァイスはあんなに目が血走ってないし俺に殺意を向けてない」

プルルルル…

「…、」

「……、（カチッ）すまんが俺に通じる言葉で頼む」

『いきなり切んじゃねぇよ！！』

「だからうるせぇよ！　何があったんだお前に！」

『リア充なんて滅びちまえＹＡＩＨＡ！！』

「その意見には全面的に同意するが、テンションがおかしいぞ。後、目が異様に血走ってる。結局要件は何なんだ？」

『とぼけんじゃねぇっ！！　お前に客だよ畜生！　ハルトなんて大嫌いだ！！　受付に行け！』

「いやだから、言葉になってｎ」

『つД｀）・。・。・。・。・＊：・。』

プツン（端末が一方的に切られた音）

「……取り敢えず…受付に行けばいいのか…？　どう思う？」

「…俺は何も聞いてないぞ」

「テメェ、後で覚えとけ。　この状況で他人の振りをしたその意味を絶対に教えてやる。　…まぁ、行ってくるか。　此処で昼寝してもいいぞー」

「ああ、もしかしたらその言葉に甘えるかもしれ…ん…」

やはりシグナムの看護やはやて周囲の警戒で疲れていたのだろう。狼モードになったザフィーラはそのまま眠ってしまう。

それを見て少し笑うと、「ゆっくりな」と一言言って部屋から出た。

後には、久々に深い眠りにつくザフィーラだけが残された。

春斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ティアナｓｉｄｅ

「ふぅ…ようやく仕事一段落ついたわね」

「ティア～…」

「…少しはアンタがやりなさい。　昼休みから戻ったら手伝うから」

「ありがとう…ガクッ」

此方はティアナ達の仕事室。　いつものようにスバルが疲労で倒れ、ティアナがどうにかこうにか午前中の仕事を終わらせたところだ。

スバルに関してだが、自分の口で『ガクッ』などと言っているうちならまだ生きているだろう。　そう結論づけたティアナは少し休憩すべく部屋の外へ出る。　そして何となく左を振り向くと、見知った顔が歩いていくのがチラッと見えた。

「…春斗さん？」

一瞬自分に会いに来たのかとそんな夢物語に胸を高鳴らせるがそんなことはなく、彼は彼女に気づくことなく廊下を歩いていく。

少しだけ落胆するもよく考えたら春斗さんがそんなことをする訳が無いか、と気を取り直して何処か行こうとするも…

「…」

乙女の感とでも言うのか、何故か春斗が何をしにいくのか無性に気になったティアナはこっそりと春斗の後を付いていくことにした。

恐るべき勘である。

春斗はそれにも気づく様子は無く、どうやら受付の方へ向かっている様子であった。　そのままこっそりと追跡する事2、3分。

受付にたどり着き、春斗が何事か受付の女性と話しているのを見つつ少し辺りを見回していたら、何故か血が出る程唇をかみしめ、血涙を流しながら春斗を見ているヴァイスの姿が。

「…あの、ヴァイスさん？」

その剣幕に、思わずかなり下手で出てしまうティアナ。　その声を聞きまるでブリキ人形が動くかのような擬音を立てて振り向くヴァイス。　正直言って一種のホラーである。

「…ティアナか。　なあティアナ、リア充って滅びればいいとは思わないか？」

「いきなり何不穏な台詞を言ってるんですか！？　しかも状況が把握できませんって！」

よく辺りを見てみると、ヴァイスと同じく歯を食いしばり血涙を流しながら春斗の事を睨む男性局員が何人か。

本当に分からない。　一体彼らに何があったというのだろう。

と、そこに。

「？　なんやこの異様な集まりは。　ヴァイス君、どうしたん？」

更に事態をややこしくさせそうな女性、狸ことはやてが現れた。

「ああ、はやて隊長！　聞いてください！　春斗が…奴こそが裏切り者だったんです！！」

「う、裏切り者？　春斗が？　どういうことや？」

「あの野郎…チィッ、絶対に許さねぇぜ！　なあ皆ぁ！！」

『そうだそうだ！』『なぜあんな奴が…この恨み、死ぬまでには絶対晴らしてやらぁ！！』『裏切り者には死を！』

少し受付から離れたところでの賛同の声。　聞こえているのかいないのか、「何やってんだ？」という顔で此方を見ながら首をかしげる春斗。　まさに自分の命の危機なのだが、それを彼が察することはないだろう。

「皆どうしたん？　ちょっと理解が出来てへんのやけど…」

「あ、あたしもわからないです」

「聞いてくださいよ！　あの野郎は…あの野郎は…っ！！

オレらに内緒で彼女を作りやがったんです！！」

彼女達の頭の中が真っ白になった。

彼女？　誰に？　まさか、春斗に？

そうだとしたら、私達は――――

「ちぃい、もう我慢できねぇ！！　皆！　あの裏切り者を殺せぇっ！」

「よっしゃあああ！」「さっすがヴァイスさん！　その号令を待ってたぜぇ！」「ヒャッハァアアアア！！」

そんなはやて達の様子に気づくことなく、遂に我慢の限界に達したか残像の出るスピードで春斗に近寄ろうとする嫉妬集団。　なんという醜さだろうか。　無還者すら戦うのを遠慮しそうな勢いである。

春斗に迫る魔手。　遂に此処で春斗の命運も尽きたか、と誰もが思った。

その時。

突拍子もなく――――青い風が、吹き荒れた。

と思った瞬間、春斗を襲おうとしていた男子局員の服が下着を残して全て吹き飛んだ。

「「「「ゑ？」」」」

時間が止まったかのように静止する局員達。　自業自得なのだが、これには流石に黙想するしか手立てはない。

「…きゃー！！」

たまたまいた女性局員が悲鳴を上げる、それを聞きつけた局員がざわざわと集まっていき、そして次々と噂が立っていく。

『何だ？　ヴァイス達は裸族だったのか？』「いや違…」『ま、まさか裸で春斗君を襲おうと…？　きゃー！』「それは無…」『どち

らにしろ露出狂だと言うことは理解できた。　子供も出入りするこの場所で下着を残し裸になるとは…尊敬するぜ』「ちょ、待…」

誤解は誤解を呼び、そして彼らの社会的な死を招く。　混沌としてきたロビーの中、鈴の音が鳴るような声が響きわたった。

「あ、ごめんなさい。　待ちましたか？」

その声にひとりの局員が振り向き、その美しさに呆然とする。

更にその局員に気づいた女性局員が振り向き、思わず見とれてしまう。

ざわざわと立っていた噂や言葉は、一瞬にしてその女性の出現が原因で沈黙した。

「…？　アンタは？」

「もう、照れなくても良いじゃないですか？　私達付き合ってるんですよ？」

そしてその言葉に敏感に反応した女性2人。　そしてまた広がってゆく噂。

『今、あの人なんて言った!?』『春斗と付き合ってる、だと…許せん!』『えー!?　春斗君…意外と格好いいから狙ってたのに…ｏｒｚ』

「いや、だが俺の記憶ではアンタに見覚えは――――…っと、もう隠す必要もなかったか。　そうだったな、もう付き合って一週間も経つんだから堂々としてりゃいいのか」

「！…ええ、そうですよ。　全く、恥ずかしがり屋さんですね。春斗君は」

「はは、わりぃわりぃ。　で、今日は何処に行くんだっけ？」

「私達のこれからについて少し静かな所で話したいです。　その…今日は、大事な話があるので」

「へぇー、そりゃ楽しみだな。　じゃあ今日は俺が案内しよう。静かな場所には心当たりがあるしな」

「あら、そうなんですか？　それは楽しみです♪」

さも当たり前のように人前で自然に会話する春斗達。　その光景を見て更に頭の中が真っ白になっていくのははやてとティアナ。

こうしてみると、まさに春斗とあの女性はお似合いに見えてしまう。
　自分達ですら見とれてしまった美貌を持ち、プロポーションも良い。　背が低いのが少々春斗との凸凹感を感じさせてしまうがそれすらも忘れさせるほどの美しい女性だった。

「じゃ、行くか。　あ、はやて。　少し俺は『お話』しに行ってくるわ」

「あ、部隊長さんですか？　申し訳ありません、少し春斗君をお借りします」

そう言うと、春斗は女性の手を引いてさっさとロビー出口から出ていってしまう。

後に残されたはやてが言った言葉は、一言だった。

「ティアナ。　追うで」

「了解しました」

仕事なんて知らない。　さっさと出ていくはやて達。

人は時に、何より大切な物がある――

そう。

「…あれ、ティア戻ってこない…もしかして手伝ってくれないの…

？」

――訓練学校時代からの親友よりも、優先すべきものが。

ティアナｓｉｄｅｏｕｔ

春斗ｓｉｄｅ

「で？」

「何ですか、春斗君っ♪」

「いや、もうその芝居はいいから。　というか何故俺にあんな小っ恥ずかしい芝居をさせた。　彼氏彼女とか、もうはやて達からの視線が恥ずかしくて死にそうだった」

「あら、それにしては一週間前から付き合っていたとか私が言ってもいないことをアドリブで付け足してましたよね？」

「見栄を張りたかったんだよ畜生！　文句あるか！」

「いえ、別に♪」

此方はロビーを出たばかりの春斗達。　先程まで笑顔で会話していた『恋人同士』はもう何処にもいない。　春斗からしてみればやはりこの桃髪の女性は知らない人であったし、そしてそれを彼女も理解しているらしくニコニコ顔を崩さないまま自己紹介した。

「それにしても、ウィンクしただけで良く分かりましたね、私の言いたかった事…あ、名前を言ってませんでした。　私はリン。　魔法使いです」

「何となくな。　女のウィンクには裏があると血だらけの士郎父さんに教わったことがあるから察せた…それと魔法使いであることは理解できる。　さっきの武装解除魔法、テメェだろ？」

「えっ、血だらけって…ああいえ、何のことですか？」

「惚けんじゃねぇ。　正直、アンタの魔力量は『異常』の一言だ。　そんな魔力から放たれる武装解除だ、俺だって誰が出したか位はわかるぜ。　それに、普通何の用事もなく俺個人を呼びつけたのは考えにくい。　普通ならこんな冴えない弟よりもエースであるなのは姉達を呼ぶだろうしな。　とすると、俺のことを少しは知ってる…と見てもいいよな？」

「…さすがです。　結構魔力隠蔽工作はしていたしリミッターも掛けているのですが、私の魔力を見抜くなんて…姉さんが言っていただけの事はありますね。　でも、この続きは本当に人には聞かせられないので、何処か人の少ない場所でお願いします」

「了解した。　そうだな、知り合いの男がやっているバーがある。　そこで酒でも飲みながら話すか」

「その男の人は大丈夫なんですか？」

「心配すんな、やっていると言っても普段はいない。　俺が特別に親しいだけだ。　なので合鍵をもらっている。『秘密の話をするときなどに使うといい』と言われたんだが、まさか本当に使うことになるとは」

「それなら聞かれる心配もありませんね。　あ、そうでした」

「？」

「そのお店、ワインもありますか？」

「古い物で１２０年以上前の代物があるぜ」

「決定ですね♪」

どうやらこの（春斗から見て）小さな魔法使いはワインが好きらしい。　一体幾つなのだろう？

そんなどうでもいいことを考えながら、春斗は合鍵を手に持ちつつ裏路地へと歩を進めていった。

「あ、それともう一ついいですか？」

「ん？　何だ？」

「その男の人の名前を教えていただけませんか？　やはり名前くらいは知っておかないと心配です」

「ああ、ジュエル・スカエルッティというんだが、なかなか面白い男でな。　最近はロボ系のアニメに二人してハマっている。　特に機動戦士ガ〇ダムとか」

「……、貴方はその名前を聞いて、何も思わないんですか…？」

「ん？　何を？」

「いえ、なんでもないです…（いや、どう考えてもその人ってジェイル・スカリエッティの関係者か本人だと思うんですけど…いや、でも名前が似ているだけで…うーん、それにしても出来過ぎな気が…）」

その頃、某科学者のラボにて。

「ハクシュンッ！」

「？　ジェイル、風邪を引いたのかの？」

「いや……最近友と深夜までアニメを見ている事があるから、少し身体を冷やしてしまったのかもしれないな」

「ほぉ、お主が見るアニメ？　友というのも初耳じゃが、そっちの方が興味があるのう。　題名はなんじゃ？」

「機動戦士ガ○ダムΩ」

「うむ、後で調べる」

「見たら感想を聞かせてくれたまえ」

「了解じゃ」

何処かの科学者と何処かの合法ロリが、そんな会話をしていたとかいないとか。

春斗ｓｉｄｅｏｕｔ

ティアナｓｉｄｅ

此方は絶賛尾行中のはやて＆ティアナ。　何も知らない彼女たちから見たら、春斗と謎の女性が仲良く手をつないで会話をしているようにしか見えないので、既に疑念が確信へと変わり始めていた。

春斗には彼女がいた、と…。　彼女達にとっては絶望的な真実だが、やはり受け入れるしか無いのだろう。　例え、本当はそれが春斗の社会的生命を刈り取る虚実だったとしても…。

これからどうしようかと全く無駄なことを考えていると、いきなり春斗達が路地裏へと曲がった。　慌てて自分たちも路地裏に曲がると、更に入り組んだ道が目の前に現れる。

どうやら人気にない場所に行きたいらしい。　だが此処まで来たらもう引き下がれないティアナたちは、完全に仕事の事を頭から吹っ飛ばして行動を開始した。

訓練で培った体力を無駄に発揮し、時にははやてがティアナを、ティアナがはやてを助けながら春斗を探していく。
素晴らしいチームワークだが、これが任務でもなんでもなく不純な動機から来るというのは悲しい物である。　恐らくフェイトですら涙を禁じ得ないだろう。

そして何かいないかと探し回ること３０分…。

「…酒屋？」

「…そうみたい、やな」

かなり怪しげなバーにたどり着いた。　少しドアを動かそうとするも、鍵がかかっているらしく開かない。

何が怪しいかと言えば、まず看板が無い。　そして酒屋というには少々装飾がたりなさすぎる。　本当にいつも営業しているのかどうかすら疑問である。

しかし困ったことに此処で彼女達の春斗追跡任務は終わらざるを得なくなった。　何しろ本人達が全くいないのである。　ある意味当然の事だろうが、もちろん彼女達は春斗がこの酒屋の合鍵を持っているなどというご都合主義は考えない。

「撤退、か…すまんかったなティアナ、連れ出してもうて…」

「いえ、いいんです…帰ってきたら春斗さん本人に聞いてみましょう…」

「そうやな…」

そして、この瞬間に春斗の死亡フラグも確立するのだった。

ティアナｓｉｄｅｏｕｔ

春斗ｓｉｄｅ

「…」

「どうしたんですか？」

「いや…マジで風邪引いたのかなって思ってな…今日は寒気がある日が多い」

死の危機を感じ、再びブルルッ、と身体を震わす春斗。　その悪寒が現在自分達のいるバーの前から発せられることには気づかない。

「ま、いいか。　で、何が良い？」

「あるんだったら赤ワインがいいです」

「そらよ。　じゃあ俺は日本酒でいいか」

「…本当に何でもあるんですね。　その、ジェイｒ――ジュエルさんは何者なんですか？」

「何処にでもいる我が親友だ。　オタクの道に踏み込みかけているがギリギリ停止している感じだな」

「…なんか、疑ってる自分がおかしく思えてきました…」

「？」

「いえ、なんでもないです」

少し挙動不審なリンを不審に思いつつ、赤ワインの入った容器を投げる春斗。　それを綺麗な手で受け取ったリンは、ラベルをしげしげと見定める。

「……ってこれ超高級品じゃないですか！　こんなもの飲んじゃっていいんですか!?」

「いいんじゃねぇかな？　ジュエルからここに置いてあるものは何だって飲んでいいと言われてるから」

そう言って春斗が手に取ったのは、『鬼酒』と呼ばれる最高峰の日本酒だった。　何故そんなものが此処にあるのか疑問は尽きないが、もう考えるだけ無駄だと悟ったリンはこのバーについての思考を放棄した。

「それじゃ、乾杯でもしましょうか？」

「お、いいね。　それじゃ…」

「私達の出会いを祝って？」

「なんだそりゃ。　まあいいか、乾杯」

チン、ではなくゴンッ、と酒の入った瓶同士が大きな音を鳴らす。
優雅なカップルとは程遠い乾杯だったが、飲んでいる本人たちが満足しているため彼らはこれで良いのだろう。

「…ふぅ…おいしいです…流石、高級なお酒は違いますね…」

「っぱあっ！　いやー、この酒はうまいな。　当たりを引いたかも知れねぇ」

それぞれ、リンは優雅に、春斗は気品のかけらも感じない声でそれぞれ酒を飲み干す。　その後暫く余韻に浸っていた春斗たちだが、数分もすると復帰し本題を始めた。

「さて、色々と脱線したが…リン、だっけか？　俺について何か知ってるんだったら聞かせてくれ」

「…私も姉さんから、姉さんも人から聞いた話だからまだ確信ではないらしいんですが…もし間違っていても訂正はしなくていいですよ」

そう前置きすると、彼女はどこからか紙を取り出して読み上げ始めた。

「『高町春斗』。　ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｓ．Ｗの成功体（被害者）の５人のうちの一人で、今は高町なのはの義弟として生活。　兵器である事は周りには知られていない。　ここまでで何かありますか？」

「いや、続けてくれ」

「高町なのは及び周囲の人間には、自分を捨て子と言う事で誤魔化している。　ただし管理局への憎しみは持っているのが確認できる」

ふと春斗の眉が吊り上がる。　それを見て少し笑ったリンは、その紙を畳んで服の裏ポケットに締まった。

「それで、此処までで何かありますか？」

「そんじゃ質問。　誰から聞いたんだ、こりゃ？」

「それは残念ながらまだ教えられません」

「（“まだ”…か）…、それじゃもう一つの質問だ。　被害者五人、と言ったが俺の他に誰が何処にいるのかは知っていたりしないか？」

「……一人。一人だけお会いしたことがあります。　戦闘には発展しませんでしたし、どうやら体調を崩していたようなので向こうからお帰りになりましたが…」

「！！　そ、それは誰だ？　女か？男か！？」

「男の方です。　真っ黒なドレスのような服を着た男性の方」

それを聞いて、春斗は少し硬直し、そしてパタリ、と机に突っ伏してしまった。

時間から考えて、どうやらその男――無還者はなのはやフェイトを襲撃したその帰り道、なんらかの出来事があり彼女（達？）によって保護されたと言うことだろう。　あの無還者が体調を崩すとは考えにくいが、彼女がそういうのであれば恐らく事実なのだろう。
それに自分に見つかった時から無還者も調子が悪かったのだし、ありえない話ではなかった。

「どうしたんですか？」

「そいつな。　俺達の中でも別格で、そいつ以外の兵器が全員集まって攻撃して傷を付けられるかどうかすらわからない」

息を呑む音が聞こえた。　驚いているのか目を見開いている。「今はどうか分からねぇけどな」と呟くように付け足して、少し深呼吸をする。

どうせ手掛かりも何もない、今ここで深く考えたところで何が分かるわけでもないのだ。　それならば今は目の前の女性の話に集中しよう。　そう思った春斗は、改めて自分とリン以外誰もいないバーの中で彼女と向き合う。

「…それはまあいいとして、だ。　その男以外に会ったのは？」

「いえ、現在調査中です」

「そうか」

静かにつぶやき、一息で酒瓶をすべて飲み干してしまう春斗。　はぁ、と再び息を吐く。

「すまねぇな、アンタの話を中断しちまった。　それで、アンタの方の用件は何だ？」

「…、そのお話をする前に、お一つお伺いを立ててもよろしいでしょうか？」

「構わねぇよ」

「貴方は、今の管理局をどう思いますか？」

「完全に腐蝕してんな。　救いようもねぇ程に」

顔を歪めて苦々しく即答する春斗。　その顔を見て少し自分も眉をひそめつつ、リンは淡々と「その根拠は？」と更に尋ねる。

「これは俺らが兵器だとかそんなもんを全て抜きにしての率直な感想だ。　しかも下の奴らが腐ってるんじゃなくて上層部全体がシロアリの如く蠢いてるんだからタチが悪い。　レジアス中将を含む一部のクリーン派が居ることは確かなんだが、とてもじゃないが彼らだけじゃシロアリの駆除は出来ない。　駆除するにはもうこの管理局全体を一度建て替えないといけないんじゃねぇかな」

「レジアス中将？　あの人は寧ろジェイル・スカリエッティ等の次元犯罪者・違法組織に協力し、戦闘機人計画の黒幕の一人だと思っていたのですけど…」

「その事なんだがな。　そこにさっきアンタが会ったって言ってた男が出てくる」

苦々しい顔を崩さぬまま、彼は続ける。

「俺のことを調べてきたくらいだ。　当然知っているんだろうが、そいつは管理局の上層部（シロアリ共）の言いなりになるように洗脳と改造を受けている。　つまり、あらゆる罪を特定の個人に被せることもかなり容易だ。　方法は何でもいい、その男が行なったかもしれない大量虐殺罪だって被せることが出来るかも知れねぇぜ？」

「…成程。　自分達は手を汚さず、それでいて邪魔者を遠まわしに消すことも可能……というわけですか」

「まあ、要約すっとそういうことだ…他に何か質問とかはあるか？」

「いえ…質問はこれで終わりです」

「ん？　これだけでいいのか？　他にも色々あるかと思ったが」

「はい。　なのでこれからは交渉に入りたいと思います」

浮かべるのは艶やかな笑み。

身長１７０ｃｍ前後と、大人の女性としてはなかなか大きいほうに入るリンは――首を傾げる春斗に、笑みを浮かべながら、言った。

「貴方、私達の国に来ませんか？」

春斗ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

此方はミッドチルダ中央通り。

▲月□日　午後○時××分にて――――

「…賑やか」

「ほんと、賑やかだねぇ。　僕達の国といい勝負じゃないかな？」

「…（グゥ……）……メビア…わたし、お腹減った」

「あのさ、ドーナ？　一応君は僕の護衛なんだからさ、普通立場逆じゃない？」

「……お腹減った…あ、あの子供……おいしそう……」

「おっとぉー！？　あんな所に食べ放題店が見えるッ！！　さあ行こうドーナ！　きっとハンバーグやホットドックが君を待っている！」

「……！」ダッ

「…、」

ピッ。

「ねぇ、ロザリー姉ちゃん。　これって人選ミスじゃない？」

『言わないで。　うん、確かに王族警備軍ってまともなの居ないわよね。　改めてそう思ったわ』

「思う前に行動して欲しいな」

「（クイクィッ）メビア、早く行かなくちゃ…ハンバーグが逃げちゃう」

「逃げないよ!?　大丈夫！　絶対に君の元からハンバーグは逃げないから！　だからあの子供を見つめてヨダレを垂らすのを止めて!?　食べさせないよ!?」

「……」

「違う！　僕が言いたかったのは子供を食べると言う思考そのものを無くすことであって、子供を見ながらヨダレを垂らす事から子供を指さしながら物欲しそうに僕を見上げる事に変えてくれっていうんじゃないんだ！」

『ごめんライム。　メビアとチェンジの方向で』

『だが断る』

特級指定次元犯罪者、そして真租の吸血鬼。

この2名が、ミッドチルダに降り立ち――――物語は加速する。

某ホテル襲撃事件が起こる迄、残り8日。

“交渉（前編）”（後書き）

天破「春斗…短かったけど管理局とはお別れの時が来たね。　行ってらっしゃい。　向こうでフラグ立てたら殺すから」

春斗「感動の別れのシーンだと思ったら殺害予告だった罠。　それとまだ行くかどうか決めてねぇからな？」

天破「あっ、あんなところに巨乳猫耳の美女がっ！」

春斗「ちょっとアルディス行ってくｒ」

フラン「春斗？　何か言いまして？」

なのは「もちろん春斗はこっちにとどまるんだよね？」

春斗「…俺はっ…どうすればいいんだ…！！」

天破「まずはその欲望をどうにかした方がいいと思うな」

後半に続きます。　いつＵＰ出来るかは…分りませんｏｒｚ

この作品中に出てくる設定等は、ほとんど私の被害妄想から成り立っています。　なので批判等ありましても『スカリエッティは悪役だろ・ｊｋ』や『フランを巨乳にして』、『ディール様を貸してください』などなど、話の展開上もう変更できない箇所もございますのでご了承ください。

という訳で、ちょっとフランが鬼神の如きオーラをまとわせながら
此方へ来ているのでお別れの挨拶を。

感想・お気に入り等、励みになります！　これからも天破を宜しく
お願いします＾＾

それではまた読んでくださることを願って。

天破でした（´∀`）／~~

フラン「死になさい」

天破「待つんだ、まずは話し合いを（ボキュッ）」

“交渉（後編）”（前書き）

バトル突入。　ただし決着はつかず、どれだけアルディスの面々が狂ってるか、そして強いかの再確認的な感じです。

結局、あの国にまともな奴なんて…いなかったのさ…！

さて、天破は来週にテストを控えています＼（＾ｏ＾）／
なので更新を一時的に完全停止させていただき、運が悪いとこれが１０月最後の更新になるやも知れません。

何故ッ　習っていない箇所を　テストにッ　出すんだッ！

すべての教科が絶望的な今日この頃。私はどう生きていけば良いのでしょう？

では、この話を読むにあたっての注意事項をば。
・生々しい表現が多々混入。　ドーナの狂気が見え隠れしています。
　ご注意ください。
・リンもやはりまともでは無かった
・メビアなんてもっとまともじゃ無かった
・はやてが格好いいだと…？（失礼
・『彼』が春斗と話を…その内容とは？
・ラストの方にて衝撃の会話

尚、今回リンが使用する能力には元ネタがあります。
後書きにて発表するので考えてみてくださいｗ

ヒント：映画化、そしてサンデー連載中。

読んでる方なら一瞬にして分かってしまうヒントですね。

いつにもまして駄文ですが…では、どうぞｍ（＿＿）ｍ

“交渉（後編）”

「俺が、あんたらの国に？」

その言葉を聞き、まず春斗が発した言葉は確認だった。

しかしその顔に焦燥や驚愕が見て取れない事に、少し首をかしげてリンが尋ねる。

「あれ？　驚かないんですね、国とか、いきなりのスカウトとか」

「アンタの持ってきた『情報』はかなり深いところまで調べられていたからな。　とてもじゃねぇが、管理局相手に個人でそこまで調べられる訳が無い。　とすれば大きな組織か、国とかと見るのが妥当な線だと思ってたからな」

「あ～…」

「だが、流石に何処に国なのかは分からん。　教えてくれ」

納得したように頷きかけるリンに、少し困ったように尋ねる。　流石に国というだけではどこの世界にある何処の国かまでは分からないためだ。

そうでした、と笑って彼女はその問いに答えた。

「私達の国の名前は“アルディス”。　第二管理外世界に存在する都市です」

そして、その国名を聞いて、たまたま口にふくんでいた水を全て吐き出してしまった。

アルディスといえば、対管理局勢力の集う最強最悪の国である事で有名だ。　その国に行くということ――それはつまり、管理局への反旗を翻すことと同義である。

「正気か？　これをなのは姉…いや、匿名で上に密告すればアンタらはただじゃ…」

「はい。　大丈夫です、管理局の艦隊くらいなら一人で沈められる自信があります」

「……おっそろしい自信だ。　だが現実味があるな。　あの国から来たっていうんだから確かにそのくらいは出来るだろ」

そこで言葉を区切り、改めて水を組み入れて一気に飲み干すと更に続けた。

「で、目的は？」

「簡潔に言うと『打倒！　管理局』です」

「わかりやすくて何よりだ。　じゃあ聞くが、その後のケアとかはあるのか？」

「管理局の過去に汚職の歴史がある者を徹底排除した後、地上本部含む『クリーン派』を私達の国の内政官と共にミッドチルダに派遣し、抗争や反乱を抑えます。　ミッドチルダ以外の管理世界はそれぞれに任せ、もし希望があれば私達が治める世界に加えます。　基本全ての国に自治権利を与え、何があっても自己責任になる予定です」

「それは今よりも混乱するんじゃねぇか？　管理局を倒してからの管理世界の秩序とかはどうするんだよ？」

「もう手は打ってあります。　いえ、打っている途中と言うべきでしょうか。　管理外世界の私達の仲間が、随時抗争のあった管理世界へ派遣され争いを収めています。　一部の管理世界では既に管理局よりも私達を推挙する声が上がっています」

「成程ねぇ…地道に信頼を築く事によって、万が一管理局が潰れても混乱を最小限にとどめるってコトか。　だがそう考えると俺は必要ないんじゃないか？」

「確かに戦力の面では必要ないかもしれません。　近年の管理局員の練度は一部を除いて酷いものですからね。　この前うちの国の一人がデコピンをしたら頭が吹き飛んでしまったんです」

「いや、魔法や体術の練度と頭蓋骨の硬度は何ら関係無いと思うんだが…」

デコピンで人間の頭蓋骨ごと頭を吹き飛ばしたという話も中々特異な話だが、それを普通に受け止める春斗も大したものである。

「話を戻しますね。　ええっと、単刀直入に言うと貴方には被害者になってもらいたいのです」

「！　…なるほど。　いや、大丈夫だ、理解できた。　つまり、被害者である俺が管理局の扱いの辛さに耐え切れなくなり、そしてそれを理由として管理局へ攻め込む…そういうことか？」

「少し違います。　少し辛いかもしれませんが、例のプロジェクトで管理局が行なった事をただ言ってくれればいいだけです。　そしてそれを言う場所はＴＶ局。　そしてそれを全世界ネットで流すことで、管理局は悪役になって私達は正義になる」

「えげつないねぇ…こわいこわい。　敵には回したくない部類の人間だな、アンタ。　直接戦うんじゃなく、敵の周りを自分の味方に変えてしまうことで相手に絶望を与えつつ追い込む…俺みたいな力バカが戦いたく無い相手だ」

「ふふっ、褒め言葉として受取りますね。　それで、ご返事はどうされます？」

「なんだ、考えさせてくれる時間すらくれねぇのかよ？」

「考えるんですか？　向こうにはたくさん貴方の好きそうな女性の方がいますよ？　…私も含めて、ね？」

クスクスと笑いながらいたずらっぽく付け足してくる。　普通の男性ならホイホイと付いていきそうな感じだが、春斗はそれに少しだけ笑った。

「何だ？　そっちの上司から『いっそ籠絡してでも連れてこい』とでも言われたか？」

「……立場上、仕方なかったんです…仕方なかったんですよ…」

「え、マジだったの？　つか経験者だったの？　すまん。　そんな傷を追ってるとは思わなかった」

「いいえ、大丈夫です。　まだ処女は守ってますから。　破られそうになっているだけです」

「それは俺が破ろうとしているという最悪の誤解を受けているという事にとってもいいのか？　無駄だ、俺に籠絡は効かねぇよ」

「え？　どうして？」

「…、」

その言葉にすこし考えるも、「これは俺の個人情報だが同時に機密

情報だぞ」と言って、話した。

「　　」

「！　…それは…男性としては致命的じゃありません？」

「そうだよなぁ。　御陰で、自慰もできやしねぇし親友とのそういう話もできない。　俺はどうすりゃいいんだよっていう話だ」

「……あの、そういうことを普通に言われるのは女性としてその…は、恥ずかしいんですけれど」

「おっと、わりぃわりぃ。　ま、つまり俺が言いたいのは」

再び水を水道から組み入れて、ゴクゴクゴクッ、と飲み干し、静かにテーブルの上に置く。

「まどろっこしい事してねぇで、力ずくで奪いに来てくれねぇかな。俺を従わせるだけの、戦力・人格・そして心。　籠絡だとか誘惑だとか、んなもんじゃ俺は動かねぇよ」

「……見た目に合わず、中々堅気なんですね。　惚れちゃいそうです」

「かっかっか、そりゃ光栄だ」

その笑いを受けて、魔女（リン）はクスクスと笑いながら、入口とは逆方向――――バーの最奥、何もない壁に寄っかかる様に立つ。

兵器（春斗）もまたくっくっくと笑いながら、入口――――そう、リンと向かい合う感じで、仁王立ちした。

「そうですか。　でも私は任務を受けたのでただじゃ帰れません」

「そうかい。　なら、どうする」

「貴方の言う通りです。　私達の国の信条を教えて差し上げます。『強き者こそ上に立つべし』。　簡単でしょう？」

「ああ、簡単だ。　魅力溢れる世界だな、浮気しちまいそうだよ」

「それならそこをどいて私と一緒に帰りませんか？　美味しい料理と小さい私達の王女様が首を長くして待ってますよ？」

「生憎と小さいのには興味が無いんでね。　アンタ位のは無いとダメだな」

「ふふふっ、それは光栄です」

楽しそうに、愉しそうに。

二人の化け物は会話する。

ケタケタと何かが笑う音がすれば、静かに荒れ狂う魔力の渦がその音をかき消し、そして魔力の渦は辺りにあったテーブルや椅子を手当たりしだいに葬ってゆく。

「なので――失礼ですがその力、この王族警備軍副隊長兼次期王女であるリン・アルディスが図らせていただきます」

「なんだ、アンタ王族だったのか？　しかも副隊長まで兼任してんのか。　かかか、そりゃ魔力も能力もバケモンな訳だ」

もう、彼女も春斗もまともな笑みは浮かべていない。

リンは歪んで歪んで、歪みきった笑み。

それはあの天使のほほえみとは程遠く、その目は明らかに人を殺すという快楽を知っている目。

春斗は歯を剥き出しにし、リンが悪魔の微笑みなら彼は獣の笑みだろう。

目は獲物を狙うかのように光り輝き、リンの一挙一動を逃すまいと注視している。

「そう、貴方の言うとおり――結局、化け物（わたしたち）に話し合いなんて必要ありません。　全ては力。　絶対にして最高の法律です。　――

―行きますよ高町春斗さん。　その力と貴方の身体、全部喰らって差し上げます」

「ははは、いいねいいねぇ！！　正直アンタの事は魔性の女みたいで好きではなかったが、今日この時をもって本当に好きになれそうだ！！　その自分の欲求を全面に押し出した顔…仮面なんざ似合わねぇさ、バケモンはとことん残虐でなくっちゃなぁ！！」

「――――――――――クスクスクスッ。　貴方は本当に、面白い人ですね…」

「んじゃ…喰らって見やがれっ！！」

――――最大威力！！　パニッシュ・インパクト！！

――――全てを喰らう骸の翼《イートオール・ザ・ウィング・オブ・スケルトン》。

世界が、揺れた。

春斗ｓｉｄｅｏｕｔ

管理局ｓｉｄｅ

ヴーっ！！　ヴーっ！！

「こ、これは…ミッドチルダにて小規模の次元震確認！　被害はありませんが住民の混乱があります！」

「そんな馬鹿な！？　原因はなんだ！？」

「不明です！　何処で、どうして、何故起きたのか全くわかりません！　ミッドチルダの何処かというのみしか…」

「くっ…ミッドチルダの皆へ落ち着けるように呼びかけろ！　どんな方法でも構わん！　場合によっては僕も出る！」

「は、はい！　全管理局員へ通達っ！　小規模の次元震が発生、ミッドチルダの民衆が混乱に陥っています！　手の空いている方は被害状況の確認、民の誘導をお願いします！　任務中・現在休養中の方には、可能な場合のみお知らせして置いてください！」

とある管理局の施設で、様々なことを考えつつあらゆる指示を出すとある提督は、冷や汗を拭いながら考える。

「…一体、どういうことだ…！！？」

管理局ｓｉｄｅｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

「…！　メビア…これ…」

「うん。　十中八九リン姉ちゃんだ。　この揺れを見るに、…えーっと、高町春斗君だっけ？　との交渉は決裂したのかな？」

「（フルフル）」

「…ドーナ？」

「…違う……リンと技をぶつけた奴…わたしと同じ臭いがする…」

「…え？」

「……そう、わたしと同じ。　『何処か狂ってる』」

とある食べ放題店、突然起きた次元震にパニックを隠せないで外へ出ていったコックや店員含む人間たちの御陰でただ飯にありついている二人の化け物のうちの一人――ドーナ・クライオンが、懐かしそうに、愉しそうに目を細めながら、偶然なのか彼らがいるバーの方向を見ながら呟く。

「戦いでしか自分を見いだせなくて、人間を信じられなくて……結局、力に頼るしかない奴。　今リンと戦ってる奴……そういう奴は、強い。　護るものが無いから、本気を出せる」

「…、」

「……護るものがいる人は、だめ。　弱いとか強いとか、そういうもんだいじゃない。　弱点がおおすぎる」

珍しく饒舌に話す次元犯罪者を、珍奇な動物を見るような目で見るメビアは取り敢えず皿の縁で思い切り叩いておく。「ぎゃあああ！　頭に皿の破片が刺さって目に皿の破片が入ったような痛みがぁあああ！」と喚いているのを見て満足し、更に料理を取りに行くついでに彼は続きをぼそぼそと話していく。

「護るものを人質にとられたら？　そうどころか殺されたら？　ううん、目の前で拷問されたら？　もしかしたら操られて戦わせられるかもしれない。　よくテレビとかでやってるけど、『護るべき物があるから強くなる』。　ただの理想論」

彼はまだ、春斗とリンがぶつかったであろうバーの方角から目を逸らさない。

「これもよく小説とかであるけど、『もし何かがあったらおまえを助けてやる』。　うん、すごいね。　すごいすごい。　でもね？」

まるで兵器のように抑揚のない声で、彼は涙目になって皿の破片を頭から抜いているメビアに淡々と告げる。

「その助けてくれる勇者サマが、魔王に勝てなきゃ意味が無い。魔王は正々堂々と待つ必要は無い。　勇者サマがＬｖ１の時に背後から襲っちゃえばはいおしまい。　万が一負けそうになったらお姫サマを盾にすればいい。　それの何処が卑怯なの？　それの何処が可笑しいの？　だって命を掛けた戦いでしょ？」

「相変わらずだねー。　その勝者絶対主義。　だからこそ、君は王族警備軍の隊長になったんだろうけど。　そしてだからこそ、僕の傍にいられるんだろうけど」

破片を抜き終わり、しばらくすると綺麗に傷はふさがっていた。目がまだ少し痛いので、「帰ったら刳り貫いて洗ってみるか」と明らかにおかしい言葉をボソボソと呟いているのも気づかない様子で、人格破綻者であるドーナ・クライオンは話す。

「助けたい？　なら助ける場所に爆弾を置いておこう！　助けたい？　それなら四肢を切断したバラバラ死体を置いておこう！　どうしても助けたい？　なら勇者サマ、あなたが死ねば助かるよ？　どうする？」

歌うように、嘲るように、妖精のような声で、最低の言葉を。

「そうだねぇ」

それに同じく、笑いながらメビアが解答を言った。

「ならお姫サマを殺して、呆気に取られた所を狙おうか？　そのバラバラ死体を魔王様の目に投げて視界を潰すのも面白いね。　爆弾があって魔王様がいないなら無理だ。　帰って母さんの飯食べて平和な時間を過ごせばいいじゃん？」

これもまた、狂い切った答え。

普通じゃない。　異常だ。　人間として、生き物としておかしい。

これが普通だとしたら。　これが、彼らにとっての日常だとしたら――。

「…人を殺して…はやくおやつ食べたい」

「人は殺さないからね？　今回の任務。　ま、『クロ』の方は別に殺したって構わないけど」

超古代精霊と真租の吸血鬼。

アルディス王族警備軍隊長と、アルディス家の末裔。

共に最低最悪最凶の自論を持つ二人が、動く。

狙うは管理局機動六課。

フェイト・Ｔ・ハラオウン及び高町なのは、八神はやての『記憶』の採取。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

春斗ｓｉｄｅ

「…衝撃と魔力を弾いた……いや、かき消した？」

「そうですよ？」

いくら少し離れたと言っても所詮室内、バーの中は既にボロボロであり高級なワインや酒も全て消失し消えている。

バーそのものが吹き飛ぶことも懸念していた春斗だが、これには少し安心した。

「…その服…そしてその骨で出来た翼…テメェ、ただの『魔法使い』じゃねぇな？　『骸達ノ狂躁曲（アンデット・サーカス）』は太古に失われた術式のはずだ。俺だって気味が悪すぎる上に難しすぎて再現もできねぇ」

「はい。　私は第９７管理外世界の『地球』という場所で起きた“魔女狩り”を回避して逃げ延びた者ですから」

「……勘弁して欲しいな。　本物の大魔女じゃねぇか」

「今更ですか？　ふふっ、貴方がいけないんですよ？　貴方が、私の中の『欲』の目を覚まさせるから…？」

――――魔女ノ葬送曲（マジシャン・オブ・レクイエム）。

狭いバーの店内の中で出現するのは、巨大な骨の腕。
あらゆる物体を破壊しながら、春斗を掴もうと迫る。

「ッチィイッ！！　（此処でよけんのも限界か！　できる限りなのは姉達に正体がバレるような馬鹿なことはしたくねぇんだが…相手が本気で来てんだ。　わりぃなフラン、約束守れそうにねぇよ！！）
　オラァッ！！」

それを巧みによけていく春斗だったがよくも悪くも所詮は密室。
回避に限界を感じ始めた春斗は、自らバーの天井を壊してそこから外へ逃げる。

「あら、いいんですか！？　正体は隠して置くんでしょう！？」

「バーロー、男にはそれよりも大事な事があるんだよ！！」

「…クス、貴方、本当に面白いです！！」

春斗が飛び上がった次の瞬間。

バーが倒壊した。

否、破裂したとでも言うべきか。　圧倒的質量を持つ何かが、この世界に来ようとしている。

『ＧＹＵＯＯＯＯＯＯＯ！！』

何か雄叫びも聞こえてくる。　どう考えてもそこらの龍種や幻想種では及びもつかない覇気も感じる。

「…？　――ッ！」

ふと、自分の動きが見られているような錯覚に陥り、そしてその感覚が何なのか判明する。

サーチャーだ。　こちらを見られている。　管理局の隊員服を着ているから、バレてしまったかもしれない。

「…、マジでアルディスに行くべきかもしれんな」

そうつぶやいた瞬間、『何か』によって全てのサーチャーが破壊さ

れた。

「……アンタか」

「はい。　其の通りです」

気づけば魔女（かのじょ）は春斗よりも高い位置に立ってニコニコと笑っていた。
そう、立っているのだ。　浮いてない。　まるで何か物理的な物に乗っかっているようだった。

「此処でサーチャーを壊さなければ、俺はアンタについて行ったかもしれねぇぜ？」

「そうかもしれませんね。　でもそれじゃあ貴方は納得しませんよね？」

「ほほぉ、アンタも俺の扱いが中々分かって来たな。　褒めて遣わす」

「ありがたき幸せ……ですか？　でも生憎――――」

『GOOOOOOGGAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！』

「―――王様ごっこは間に合ってるんですよ。　ミダス、その姿を

見せてあげてください」

彼女が座っていた位置から、まるで緑色のペンキを透明なガラス細工に垂らしていくかのように『何か』があらわれていく。

何も入っていない空洞の目。

肉がついていない身体。

そして、その身体には金銀財宝がまとわりついているのが見える。

「ミダス……ミダス？　…欲望の王、ミダスか！？」

「其の通りです。　気を付けてくださいね？　彼は気に入った存在に『永久金剛化』の呪いを掛けますよ？」

そう言った瞬間、リンと同時に巨大な骸の王の姿が消えた。

「…ッ…カメレオン見てぇに風景に色を合わせてんのか…あれほどの覇気まで遮断するとは…ッ！」

咄嗟に、今向いている方向とは逆を向き、腕を交差させて障壁を造った。

一秒も経たずして彼を襲ったのは衝撃。

この世界で春斗が望まぬ生を受けてから始めて経験した、鬼神の如き拳撃――其れは、否が応にも高町なのはの集束砲を思わせる。

「これを止めるんですか。　普通なら簡単に潰れて吹き飛んじゃうんですが――それなら…」

『ＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！』

バチッ、と。

『ミダス』と呼ばれた、欲望の王の成れの果ての骨で構成された左手に、電気が帯電した。

（――ま、さか）

「いくら分厚い障壁でも、貫通力の高い雷系を付加した拳撃なら――どうですか？」

バチチチチチチッ！！

『ＯＯＯＯＯＯＮＮッ！！』

「（あれは流石にヤベェっ！！）耐圧障壁全開・魔力封殺障壁展開！！　前方１２時の方向に最強防護壁（アイギス）展開！！」

「貫いてください、ミダス」

『ＧＯＯＯＯＯＯＯＮ！！』

――――――雷化型金剛拳！！

アッパーのような形で放たれた雷の巨大な拳は、障壁を全力で展開した春斗ごと飲み込んだ。

春斗ｓｉｄｅｏｕｔ

機動六課ｓｉｄｅ

サーチャーは何者かに叩き潰されて使えない。

市街地の方に巨大な骸骨の化け物が出たとかその骸骨と一体一で戦ってる人がいるとか、未確認情報も飛び交ってもう彼女たちはてんてこ舞いだった。

だから、この自体の収束には自然と彼女達現場で活躍する職員の力が必要になるのだが…

何故か。

何らかの術なのか、機動六課の外へ出ることができないのだ。

廊下へ出ることはできる。　自由に歩ける。　しかし外へ出ることだけが出来ない。　スバルやティアナが窓からの離脱を試みたが、結局元の場所へ戻ってしまうのだ。

閉じ込められた。　彼女達がそれをようやく把握し、緊急会議を開いたのは春斗とリンが互いの一撃をぶつけ合ってから5分後程度だった。

「ミッドチルダへの襲撃でしょうか？」

「そうかも知れないね。　…あんまり言いたくないけど、管理局にいい感情を持ってる人ばかりいるとは限らないし」

「でも、次元震を起こせるほどの力があるんですの？　理論上ではS級砲撃クラスの魔法をぶつけ合わないと次元震は起こせませんわ」

「じゃあ少なくとも、この次元震を起こした何者かはSクラスの実力を持つって事やな」

S級次元犯罪者。　それが何を意味するか――つまりこの部隊では、なのは、フェイト、はやて以外は太刀打ちが出来ない程の強さを誇る犯罪者が、この街にいる可能性がある。

「でも、まずは此処からでないといけないね」

「うん…でも、どういう術なんだろう？　空間幻術？　それにしては何処にも術師が居ないし」

「空間幻術なら、閉じ込めた空間の中に術師がいないと発動できませんからね」

「…考えても仕方あらへん。　皆、取り敢えずもう一度分散して何か此処から出る方法を探そう。　もし術師かこの魔法の仕掛けの様な物が見つかったら随時回収、無理なようだったら破壊や。　ええな？」

「「「はいっ！」」」

元気に返事をし、次々と会議室を出てゆく魔導士達。

それを座りながら細目で笑いながら、見ているのははやて。

それが何故か気になったなのはは、最後に出てゆく直前にはやての方を向いて言った。

「はやて？」

「あ、なのはちゃん？　すまんなあ、こんなときで悪いんやけど少し考えさせてくれる？　少し頭の中を整理したいんや」

「……大丈夫？」

「平気や、平気。　直ぐに私も後を追う。　自分の足で歩かなきゃ、部隊長やないからな」

「…、約束だよ？」

呟くように言い残して、なのはもまた会議室を出ていく。

それを笑顔で手を振って見送り、会議室のドアが閉まるとその顔から笑顔が消えた。

「いるんやろ？」

彼女以外、誰もいない空間。

しかし彼女は、確かな確信を持って呼びかける。

「アンタの目的が何か知らへんし、もし知らん振りするならええけ

どな。　じゃあこれは私の独り言や」

そう言って、なにやら隊服の後ろポケットを探ると映写機型のデバイスが机の上に置かれた。　その横にはデータが入っているであろう、ＩＣチップが2枚ある。

「一つはロストロギアであるレリックの強奪虐殺事件で残されていた映像ファイル。　もう一つはいま私らが分かっている例の男の情報を纏めたモノ。　もう一つ、デバイスの中に記録してあるのはレリックについての詳細。　どうや、これでなのはちゃん達は勘弁してくれへんか？」

「――――…分からない」

突然響いた声。　しかしその声を聞いても動揺すらせず、八神はやてはその声に返答する。

「分からない？　何がや？」

「…確かにわたしは、この部屋で姿を消して貴方達を見てた。　“高町なのは”と“フェイト・Ｔ・ハラオウン”、そして貴方の記憶も狙ってた。　けどなんで気づいたの？　わたしの『遊戯造界』、気づいたの貴方が始めて」

「別に不思議なことやあらへんよ。　女の勘、って奴や」

「…貴方、面白い」

笑顔を浮かべた訪問者は、はやてから見て後ろから手を伸ばし、机の上に置かれたＩＣチップとデバイスを取ると、こう訪ねた。

「名前、改めて聞いてもいい？」

「機動六課部隊長、八神はやてや。　覚えとき」

「…（コク）うん。　覚えとく」

はやてが面白そうに笑うと、彼女からの品を受け取った訪問者はそのまま去ろうとする。

しかしふと窓まで近づいたところで立ち止まると、思い出したようにつぶやいた。

「ドーナ」

「…？　……ドーナ？　ま、まさかアンタの名前なんか？」

「うん。　ドーナ・クライオン。　貴方、本当に面白い。　わたしと関わった人間は、わたしの名前聞いて覚える前に死んじゃうから。
そして、わたしが人の名前を覚えるのも本当に不思議なこと」

「……っ！」

「覚えとく。　八神はやて、今度会ったら一緒に遊ぼ?」

はやては向かない、否、向けない。

背筋に走る悪寒が教えてくれる。

彼は笑っている。

今一挙一動でも彼の興味を失うようなことをすれば、殺される、と。

「……約束…ね」

そしてようやく、その禍々しい気配が消えて彼女は冷や汗がどっと溢れた。

そのまま机につっ伏す。

これは文字通り命懸けの方法だった。

相手があの次元犯罪者ドーナだったとは恐ろしく想定外であったし、そうじゃなくてもこうして自分達を閉じ込めているのだから少なからず害意を加える可能性があった。　なので決裂し自分が殺される事も覚悟して交渉してみたのだが、なんとか成功したようだ。

『…（ザザッ）八神隊長！』

「！　フェイトちゃん、どないした？」

『外に出れます！　空間幻術が解除されたみたい！』

「ほんまか？　それじゃ…ライトニング分隊、スターズ分隊、それぞれに分かれて混乱している市民の安全確保と被害状況の確認や！　ロングアーチは少しでも原因の究明を！　頼んだで！」

『『『了解！』』』

再び元気な返事が帰ってきて通信が切れたところで、はやては椅子にもたれながら呟く。

「…少し、厄介なのに目を付けられたかもしれんなぁ…」

いや、少しどころかかなり厄介なのに目を付けられた――の間違いかもしれない。

自分でそう考えて苦笑しながら、機動六課部隊長八神はやても事態の解決に向けて、動く。

機動六課ｓｉｄｅｏｕｔ

春斗ｓｉｄｅ

「…ケホッ、ケホッ。　効いた…ッ」

「それは普通の人間なら消し炭になっても全く不思議のない電流を喰らって言うセリフではないですよ？」

所々隊服は焦げ、更に少し皮膚が焼け爛れたりもしたが、結論として彼は生きていた。

「いや、俺に火傷を負わせた時点でもうアンタはＥＸ級確定だな。悪役っぽく言うと、これで俺の体に傷を付けたのはアンタで二人目だ」

「へぇ、一人目は誰なんですか？」

「アンタが会ったっていう男だ。　というか傷どころじゃねぇ、昔はホント攻撃が一撃も当たらなかった」

「…、成程、姉さんが戦うのを避ける訳です。　そんな人と戦っていたら、私達の国も倒壊していたかもしれませんね」

「で、どうする？　続けんのかよ？」

「いえ、力量の程は既に図れました。　なので今回は此処までにし

ておきます。　それに――――」

相変わらずミダスの頭に立ちながら、コンコンと額を叩く動作を繰り返す。　その動作を訝しげに思う春斗だが、彼女の次の言葉でその意味が分かった。

「……今私の仲間から連絡がありました。　機動六課が出動したそうです。　サーチャーは見つけ次第全て潰しているみたいですが、何分このデカさです。　恐らくすぐ飛んでくるでしょうね」

「げっ」

「それでもまだ続けるというのなら、私に異論はありませんけど？」

「いや、降参だ。　久々に心躍る戦いだったが、非常に残念だがこの辺で辞めておこう」

「戦い？　…興味がありますね。　貴方にとっての心躍る戦いとは？」

「“自分が本気を出せる相手であり、尚且つ殺し殺される危険性が無い戦い”だな。　兵器も随分と丸くなったもんだ。　あの頃は人殺しが日常だったっつーのに、今じゃもう知人が死んでんのを見るだけで吐き気がしちまう。　笑ってもいいんだぜ？」

「いいえ、それは素晴らしいことです。　生命の重みを知ること、それは生き物にとって一番大事なことです。　悲しいことに、王族警備軍の面々は誰一人その重さを理解していないのですが…」

よよよ、と泣き崩れる真似をするリン。　誤魔化されてはならないのは、彼女も王族警備軍の一人でありしかも副隊長であることだ。
口ぶりからして、彼女も人を殺すのに抵抗は無いのだろう。

「……アンタらとは事を構えたくないな」

「それは無理な話です。　貴方達が『プロジェクト』を追う限り、必ずまた何処かでぶつかります。　その時は、例え貴方の姉でも友人でも――容赦はしませんよ」

「肝に銘じておくぜ。　…っと、これはなのは姉の魔力っ…やべぇ、こっちに来る！　さらばだっ！」

捨て台詞のごとき言葉を残し、高町春斗はその場から姿を消した。
恐らく転移か高速移動でも使ったのだろう。　それを微笑みながら考えていると、ふと周囲に敵意を感じ取った。

「――許可なき召喚魔術の使用、更には民間への二次災害。　看過できる物ではありません。　速やかに召喚を取り消し、投降して下さい」

声をかけたのは、顔に皺の寄ったエース・オブ・エース高町なのは。
そして彼女を囲むのは、その部下に当たるティアナ・ランスターと

スバル・ナカジマ。

「あらあら、これは困りましたね……ん？」

全く困っていない声で周囲を見渡すと、ふと彼女の目がスバルの前で止まった。　そしてその目が、驚愕に見開かれて行く。

「……驚きました。　こんなところに戦闘機人がいるんですか？　タイプゼロ・セカンド……初期の戦闘機人ですね」

「！！！！？」

その言葉に、いつも笑顔の彼女とは思えないほど顔を歪めるスバル。　そして驚きで身体を硬直させたのは、他でもないなのはとティアナ。

今目の前の女性は、スバルを見ただけで戦闘機人と見破った。　それはどういうことだろう？　彼女の外見は人間と何ら変わらないし、彼女たちだって人間として接している。　戦闘機人だと匂わせる要素など何処にもないはずだ。

「そういえば、私達の国にも戦闘機人のデータはありませんでしたね。　どれ…少し、情報収集させていただきましょうか」

「…何を言って――」

「隊長さん、メビア。　お願いします」

感じたのは敵意でも殺意でも無い。

『悪寒』。

それは人間としての本能が勝手に働き、ティアナとスバルの身体を素早く横にずらした。

その瞬間彼女たちを貫いたのは目視出来ない速度で放たれた抜き手とどれほどの圧力が掛かっているのか計り知れない程の巨大な水鉄砲。　抜き手で振り切られた手はパパンッ！！と空気を破裂させ、水鉄砲に至ってはドォンッ！！とまるで大砲が発射されるかの様な音を立て空中で霧散した。

「…よけられた。　次は…当てる」

「んー、僕としてはなるべく女の子に手は出したくないというのが信条なんですがねリン姉ちゃん。　そこの所譲歩は無理ですか？」

「これは無理とか無理じゃないとかいう問題じゃないのです。　国の利益に繋がることですよ？」

「そっかー、なら仕方ないか。　ごめんねお嬢ちゃん、君の記憶――もらうよっ！！」

「……戦闘機人、タイプ・ゼロセカンド。　その機体、もらいうける」

「ミダス、あの二人ならば安心ですので私達はエース・オブ・エースの相手をしましょうか」

『ＧＵＯＯＯＯＮＮ…』

「っ！」

≪マスター、検索結果が出ました。　目の前の女性とティアナ二陸士と戦っている少年のデータはありませんが、現在スバル二空尉と戦っているのは“特級指定次元犯罪者”ドーナ・クライオンかと≫

「！？　ど、ドーナって…あの、ドーナ・クライオン！？」

記憶に新しい、ドーナ・クライオンによる『艦隊抹消事件』。　抹殺では無く抹消である。

彼を討伐すべく向かった勇気ある艦隊が、全て虚数空間に閉じ込められた事件であり、しかもドーナ本人はただ中指を動かしただけである。　しかも本人が魔力がないのを利用して、わざわざ虚数空間へ出向き金目の物だけ持ってきて人間だけ置いてきたという話もある。

勝てない。　というか指一本動かすだけで艦隊を一つ完全壊滅に追い込むような化け物に、どうやって勝てる？　こっちが知りたいく

らいだ。

顔に冷や汗が溢れ、それを察したリンが悪魔の笑みを浮かべながらミダスへと指令を出そうとしたところで――予想外の声が割り込んだ。

「……ん？　リン」

「どうしたんですか？」

「この…えーっと…「スバル・ナカジマ？」　そう、スバル・ナカジマ。　この人、機動六課所属？」

「そうですけど…」

リンがそう答えた瞬間。

ドーナの動きが、ピタリと止まった。

「ほへ？　ドーナ？」

「…っ、がぁあ……」

惚けた声をだしたのはメビア。　その右手には、幻術ごと粉砕し先程捕まえたティアナの首が存在する。　もちろん、少し力をいれて

しまえば簡単に折れる程度の力加減で。

「……機動六課所属……ごめん、リン、メビア。　わたし、帰る」

「「えぇ！？」」

「ちょ、ちょっとドーナ、どうしたんですか！？」

「約束、したの」

そう言って空中に浮くドーナが取り出したのは、映写機型デバイスとＩＣチップ二枚。

そして約束という言葉に反応するリンとメビア。

「『これを渡す代わりに、なのはちゃん達には手を出さないでくれへんか？』…機動六課、八神はやてからの取引。　わたしはこれに応じた。　だから今回は手を出さない」

「因みに、そのデータの中身は？」

「例の男に関するデータと、レリックとか言うロストロギアの情報だって」

「…、成程。　流石は機動六課部隊長。　機を見て、敏と言えば良いんでしょうか？」

「やるねぇ、というか僕たちの目的があの人の情報だってよくわかったね？」

「…（フルフル）心の中では、命を失うことも覚悟してた。　それに、わたしが名前を覚えてる」

「そういえばそうだった。　ドーナが僕ら以外の名前を覚えるなんて何十年ぶりだろう…っと、ごめんねお嬢さん」

少し感銘を受けていたメビアだが、まだティアナの首を締めていた事を思い出し慌てて手を離す。

急に気管が開放されゴホゴホと咳き込むティアナに安心し、しかしなのははその件について焦りながら追求した。

「待って、その話だと…はやてちゃんは…」

「…八神はやてに感謝すること。　もしこれがなかったら、もう貴方達、死んでた」

「……っ！（ぞくっ…！）」

「はぁ、約束なら仕方ないですね」

「そうだね。　約束は守らないと」

巨大な骸骨の姿が消え、溢れていた禍々しい魔力も消え。

魔女は日傘を差し、吸血鬼は笑い、犯罪者はフードを被る。

「……八神はやてへの伝言。　これで約束は終了。　次はわたしとの約束も守ってね？　って」

「待っ――――」

「……それと、今回起きたこのミッドチルダでの損害はこちらの責任。「うっ！」　直すから、そのままにしておいてくれればありがたい」

「ああっ！　リン姉ちゃんがうずくまっちゃった！？」

「…自業自得…」

「ま、まさか隊長からそれを言われるなんて…正直、何か悔しいです…！！」

「…どういう意味なのか、向こうで聞かせてね？」

「あっ、ごめんなさい失言でしただからやめてってきゃあああああ――――……」

魔女の悲鳴を最後に、三人の姿は消えた。

「…っ、はぁ、はあ…スバル、ティアナ！　大丈夫！？」

「な、何とか……」

「…っ！　なのはさん…あたし、あたし、」

「落ち着いて、スバル。　大丈夫。　わたしはそんなことで貴方を嫌ったりはしない…それに、スバルはスバルだよ？　それ以外の何者でもないんだから」

「…！　う、うぅっ…」

「ほら、泣くのはまだ早いよ。　早く街の復興を――」

≪マスター、フランさんから通信です≫

「フランから？――もしもし？」

『な、なのはさんですか!?　は、はは、春斗がっ!!』

嫌な予感。　フランが春斗に好意を持っているなど周知の事実、そのフランが泣きそうな顔で春斗の事を言っている。

彼女の頭に、最悪の予想が浮かび――それをかき消す。

「落ち着いてフラン！　どうしたの？」

『先程から姿が見えないんです！　何処にいるか知りませんか!?』

姿が見えない？　この状況で？

彼は（なのは達視点では）魔力適性も持たないただの人間だ。　それがドーナや先程の女性の攻撃に巻き込まれていたりすれば――！

「…私は分からないけど…ティアナ、スバル！　春斗何処に行ったか知らない！？」

「…は、春斗さん…？　あ！」

「ティアナ、知ってるの！？」

「…知ってるも何も……今思い出したんですが、さっき巨大な召喚魔術を扱ってたあの女の人…あの人に連れられて出ていきましたよ…彼氏彼女とか言ってましたけど…」

『…彼氏、彼女？』

「フラン？　どうしたの？」

『と、言うことは…』

「フラン？」

『なのはさん、急を要します。　早く春斗を探したほうがいいかもしれません』

「ど、どうしたの？」

言われなくても探すつもりであったが、その剣幕はただ事ではない。
そう問い、帰ってきた答えは彼女の顔を蒼白にするには十分だった。

『大抵春斗は、異性と何らかの大事な話をするときその設定を使うんです。　そして一週間前から付き合っている、と必ず言うんです。
ティアナさん、言っていませんでしたか？』

「た、確かに一週間前から付き合ってるって言ってました」

『その言葉を使うとき、春斗は大抵――揉め事を解決しにいくことが多いんです。　そして今回の事件の首謀者との打ち合わせでその設定を使った…そうなると、どう考えてもただ事ではありません。
最悪、命を落としている可能性がありますわ』

それだけ聞けば十分――いや、その先を聴きたくないというように、彼女は通信の電源を切った。

「スバル、ティアナ！　手分けして春斗を探すよ！　いい！？」

「「了解！」」

事の次第を聞いていた魔導士達も――焦ったように、三方向に別れて春斗の事を探し始めるのだった。

＊

「…車は急には止まれないというのは知っているが、春斗は急には止まれないという言葉があることも知っておいてもらいたい」

訳の分からない事を言って現在『ミダス』が破壊した民家に埋もれる形になっているのは、どう見ても先程から血眼になって彼女達が探している男、高町春斗である。

「久々の高速移動だったもんだからブレーキが付かなかった…少し練習が必要かもしれねぇな」

ブツブツと文句を言う春斗。取り敢えずガレキをどけつつ自分の体を出そうとして、

誰かが、自分の横に降り立ったのを見て――――それをやめて、寝っ転がった。

「よ」

短く挨拶をする春斗だが、当然といえば当然だが相手がそれを返す素振りは見せない。

「…何しに此処へ来た？　此処には面白いもんなんて何もないぞ」

少し挑発するような言葉を投げかけて、ようやくその男は無機質な瞳を自分へ向けた。

「『……貴方は何故そこで寝ているのですか？』」

「さあ？」

「『…容量の得ない答えです。　やはり、貴方達はよく分かりません……』」

無表情のその男は、崩れた民家――つまり春斗の横にポスン、と座ると黙って空を見上げる。

「『一つ問いますが、よろしいですか？』」

「ああ、なんでも」

「『……貴方は…昔に、私に面識がありませんか？』」

心臓が飛び出たかと思った。

今目の前の男が言った言葉は、それほど衝撃的だった。

「『…いえ、なんでもありません。　失礼しました』」

「待て。　…何故俺に会ったことがあるか、って聞いたんだ？」

その言葉に動きを止めると、少し考えるような機械的な素振りから、彼は言葉を紡いだ。

「『…何故でしょうか。　私も、自分自身の行動が理解できません。ただ』」

「ただ？」

「『もし、貴方がこうなる前の私を知っているのでしたら…私は貴方に、別れを言わなくてはならないかもしれない』」

ザァ、と風が吹いた。

丁度、彼がガレキの上で立ち上がった瞬間だった。

「…それは？」

「『兵器の心（ウェポンマインド）が第二形態に移行しようとしています。　このように流暢に言葉を話す機能が消滅するかわりに、演算能力やその他の機能を向上させます』」

兵器の心に第二形態とやらがあるだけでも恐ろしい事なのに、何故か春斗の頭は冷静だった。

それに不思議でもないことも確かだ。　研究所の科学者達は文字通り狂っていた。　何形態あってもおかしくはない。

だが、何よりも分からないのは――――

「もっと分からん。　何故それを俺に言うんだ？　最悪お前が廃棄処分になる可能性もあるんだぞ？」

「『廃棄処分』」

その部分を噛み締めるように無機質な声で繰り返した男は…ふと、こんな事を言った。

「『何故でしょう。　その言葉には酷い既視感を覚えます。　いえ、厳密にはこれは既視感とは言えないのでしょうけれど』」

その言葉で、またしても春斗の心臓は跳ね上がった。

『廃棄処分』。

その単語は研究所にいた頃、彼らが最も恐怖し最も悲劇を生み出していた単語だ。

「『……申し訳ありません。　やはりまだメンテナンスをすべきのようです。　これ程までに変な感覚を覚えるとは…私はこれにて失礼します』」

少し空を見上げようとして、しかしやはり目を閉じて無機質な声で告げた男は、そのまま踵を返そうとする。

その背中を何故か見ていられなくなって…春斗は、劈くような大声で叫んだ。

「……兄貴！！」

「『…？』」

「俺たちは、絶対にアンタを倒して…アンタを助ける！　だから…

アンタも、頑張ってくれ……」

「『…、』」

矛盾しているその言葉に、返されるは無言。

そのまま彼の姿が消えてゆき、春斗もそれを黙って見つめる。

透けていく。

それは嘗て、男が春斗たちを逃がしたときの逆を見ているようで――

「『……何故でしょう。　その呼び方にも、酷い既視感を覚えます』」

「…！」

もう、間違いない。

目の前の兵器は、少しずつだが、研究所時代の記憶を取り戻しつつある――――！！

そう考えた春斗の耳に、更に信じられない声が届いた。

「『…貴方はやはり、昔から変わってません』」

「…――――は？」

それは、現在の彼の状況からすれば信じられないことで。

洗脳を受け、過去の記憶が封じられている状況で、『昔』などという単語が出る訳がなくて。

「『礼を言います、高町春斗。　もうこの状態には戻れない。　そして兵器の心（ウェポンマインド）のバグが目立ったこと、謝罪します』」

「ま、待ってくれ！　今、今アンタは――――」

「『――――無還者：転移→管理者』」

フッ、と消えた。

まるで何も居なかったかのように。

何もなかったかのように。

開きかけた未来への光は、再び管理局の深き深き闇で閉ざされた。

兵器の心（ウェポンマインド）の第二形態――――。

絶対なる正義が生み出した闇の産物が、覚醒する時が訪れる。

そして春斗は、なのはが自分を呼びながら降下してくることにも気づかないほど――呆然とし、動けなかったのだった。

“交渉（後編）”（後書き）

リンの能力は『ハヤテのごとく』の『天上院アテネ』を操っていた『キング・ミダス』をそのままパクりました。　生半可な攻撃は完全無効、更には『永久金剛化』という呪いを加えてみることにより人の身体を金に変えてしまう、という設定も見事無理矢理入れることに成功しました。　アテネファンの方に全身全霊をかけた謝罪を↑

天破「テストだ！　終わりだ！　ヒャッハァァア！」

ディール「作者の禁断症状がまた出たぞい！？」

春斗「殺してでも気絶させろ！　この前は世界が３つ吹き飛んだんだぞ！！」

フラン「な、なんて汚れた気…負の感情が完全に表に出てますわ…！」

そんなことを考えながら、少しでもワークを進める私でした。

次回、いつお会い出来るかわかりませんが宜しければ心の隅っこでもいいので、御楽しみに！

感想やメール等、お待ちしております＾＾　趣味の話も大歓迎です↑お気に入り登録もすごく励みになります。　感想も簡単にでも投下していただければかなり執筆意欲が湧いてきます。　これからもよろしくお願いします―（＿＿）―

天破でした（´∀`）／~~

“逃避”（前書き）

欝です。

いえ、春斗がです。　私もですが（テスト的な意味で）。

これは、月曜日と明日は学校に行くべきではないのではないだろうか（おい

英語も数学も／（＾ｏ＾）＼＼（＾ｏ＾）／＼（＾ｏ＾）／

さて、この話を読むにあたっての注意事項です。

・ティアナの代わりに春斗に欝になっていただきました。

・春斗らしくもない思考の連続ですがお気にせずｗ

・そしてラスト、春斗の気持ちに変化が…？

・メインヒロイン決定か！？（お

それでは、駄文ですがお読み下さる方はどうぞですｍ（＿＿）ｍ

“逃避”

保護された春斗は問答無用で入院させられた。

入院というよりは休養と言うべきか。　スバルには泣きつかれティアナは心配したんですからね、と鼻声で声をかけられフランに至っては大泣きされなのはにはもう二度とこんな事が無いように釘を刺された。

3日間の休養――。　真っ白な病室を寝っ転がって見上げる春斗だが、その頭の中は相変わらず自分の兄の事ばかりである。

――“本当に、貴方は昔から変わってない”

まず第一に、洗脳されているはずの兄が自分の場所に自分の意思で来た時点でおかしいと思うべきだった。　更にはその台詞の節々から『何故か春斗の元へ来てしまった』と、兵器の心（ウェポンマインド）に洗脳されているとはありえない曖昧な理由で来た事がわかる。

そしてその後に続く、洗脳されているとは思えない言葉。　あれはまさか、春斗――いや、自分達への警告に来たのだろうか？　『これまでの自分とは別格であるから、もう手を出すな』と。

しかしどうして？　あの時だけ洗脳が解けかけていたのか、もしそ

うだとしたら春斗はある意味決定的なチャンスを逃してしまったのかもしれない。　洗脳が解けかけているのならばどうにかして解除、またはデータを作れたかもしれないからだ。

「…俺の責任、だな」

彼らしくもない言葉。

そもそもフランにのみ分かるように伝えたと言え、あの魔女の誘いに乗ったのは自分。　もしあれをごまかし続ければ、何か結果が変わっていたのかもしれないが…。

所詮は結果――なんども自分に言い聞かせてきたはずの言葉が、今回はかなり重く感じてしまう。

はやての勇気ある行動でなのは達は無事だった。　しかし、これでもしはやて、なのは、フェイトの記憶を盗られ、更にあの状況になっていたとすれば？

確信があった。

彼らは全く躊躇うこともなく、全員を殺すだろう。

それこそ誰でもいい、彼らが指一本振るだけでその戦いは終わる。

それがドーナ・クライオンであったら、恐らくこの世界に存在した

欠片も残さず。　リン・アルディスであれば、良くて全員金剛化、悪くて骨まで残さず粉砕されているだろう。　実際、春斗が受けたあの『ミダス』の拳は普通の魔導士ならば骨や内臓がぐしゃぐしゃになって吹き飛んでもおかしくはない程の威力だった。

「…何やってんだろうな、俺」

結局、自分は完全に迷惑をかけていた。　兵器であることを考えずにしても、自分はどう考えても部隊の足を引っ張っていた。

そう考えた自分の頭に手を持っていき、ポリポリと髪を掻く。

何を今自分は考えるべきで。

自分はこれからどうすればいいのだろうか？

無限に続くかのような広大な砂漠を想像した。

どっちに行っても餓死（けっか）が変わらないような感覚。　自分で馬鹿だ馬鹿だとは言っているが、兵器として造られた彼らの頭は一般と比べればかなりずば抜けている。　しかし、時にはその頭の良さがこのような連鎖を生み出す事もある。

負の思考は負の思考を呼び、彼の未来を残酷に彩ってゆく。

砂漠でオアシスが見えたと思ったら、蜃気楼だったため心が折れた

――とでも表せば良いだろうか。

「…っ、」

選択を間違えてしまったのだろうか？

やはり、自分はここにいるべきではないのだろうか？

あの時、あの魔女の誘いに乗って居れば彼女たちが苦しむことも無かったのではないか――――そんな想いがのしかかり、彼の心は既に潰れかけていた。

無還者が『感情（こころ）』を封印された理由が分かった気がする。　こういう風に、兵器には無駄な事を考えないようにするためだろう。

人を殺すことが日常の生体兵器にとって、感情はとてつもなく邪魔になる。　罪悪感も、何もかも必要無い。　いちいち人を殺すのに罪悪感など感じていては何も出来ない。

見かけ以上に彼の心は、繊細で、敏感。

ドーナが言っていた、『護るべき人間がいる者は弱い』――彼も、その中の一人だった。

昔は、そんなものなかった。　ただ殺せば殺されなかったし、言われれば誰だって殺した。

でも今は違う。　大事な家族がいる、後輩がいる、幼馴染がいる…
彼は背負い過ぎてしまった。　そして昔を懐かしく思ってしまった
自分に、再び絶望する。

現実から逃げ、逃げて、逃げて――

もう何も聞こえ無くなる様な錯覚に陥った瞬間、矛盾するかのよう
に誰かの声が聞こえた。

＊

「ドーナ、感想は？」

「考えるだけ、無駄」

さて、此方はアルディスにある王宮の映写室。　そこで八神はやて
から譲り受けたデータを再生し、王族警備軍＋王族で何か情報がな
いか調べていた。

そして上の会話は、そのデータの一つである『管理局強奪虐殺事件』

の映像でのドーナの感想である。

「その心は？」

「…全く局員に感知できない程の侵入スキル、更には軽くＳＳＳランクはある魔力と超越した空間把握能力と掌握能力。　どう考えてもこの記録デバイスだけ壊し忘れたとは考えられない」

「僕も同意見」

「私もです。　…やはり、この襲撃も全ては台本通りであった、と見るのが妥当ですわね」

「…、」

自分の妹と弟、そして王族警備軍の隊長が同意したのを聞いて目を閉じて情報を整理する。

「うん、あたしも同意見。　面白くないわね…一体、この人を操っている管理局の上層部は何様なのかしら？」

「神とでも思ってるんじゃないか？　あの者達ならばその程度思っていそうだ」

「違いないわね」

自嘲するかのように口を曲げると、その映像を止め、続いて再生するのは現在『兵器』について分かっていることだ。　此方は自分達の知っている情報も加えているので、ある意味管理局の上を行くデータである。

果たして、データが開かれた。

「…『創造魔力（イマジンエネルギー）』ってさ…反則じゃない？」

「私としてはノーモーションでSSランク砲撃を撃ったことが信じられない。　我々ですら2～3秒の溜めは必要だぞ？」

「人間なら、ね。　でもこの人は非道な実験結果生まれた『被害者（兵器）』よ。　この位、不思議じゃないと思っといた方がいいわ」

そのアルディスの王、ロザリーが真剣な顔で――しかし、少し微笑みながらそう告げる。　そしてそれを見て、自然と全員の顔つきが変わっていく。

敵は未知数にして強大。　少なくとも、この国での王族クラスは存在すると見積もっても少ないと言えるほど。

だからこそ狂った者（主にドーナ）は戦いを求め、野次馬根性溢れる者（主にメビア）は色々と画策し、知の探求者である者（主にリン）はその男の情報を求める。

国の未来など、楽しみの前では彼らにはどうだって良かった。

王女であるロザリーも、そしてこの国の住人もその例に漏れず。

彼らは、やはりどこまで行っても幻想種であり、妖怪であり、人間じゃないモノ。

楽しみたい、壊したい、遊びたい、戦いたい――そんな欲求を叶えるべく、ロザリーはその身長に似合わない邪悪な笑みを浮かべながらとある地図を表示し、「さて、此処で一つ吉報よ」と告げた。

「いろいろと調べてく内に、此処で何かオークションをやることを突き止めたの。　でね、その場所にあの機動六課とあの人が追ってるロストロギアであるレリックが出てくるかもしれないんですって」

何人かが反応を示した。　それを見て更に笑みを邪悪に深めつつ、ロザリーは告げた。

「で、ちょっとこのオークション、あたしの気になるブランドが出てくるらしいのよね」

言いたいことなど、皆直ぐに理解した。

既に目を輝かせている者までいる。　そして、王女は邪悪な笑みを引っ込め、いつものニコニコ顔で、提案した。

「あたしの買い物のついでに、付いてきたい人？」

答えなんて、そこにいる皆決まっていた。

三日月状に捻じ曲がった口を晒しながら、愉しそうに彼らは話す。

祭りの場所はホテル・アグスタ。

自分達の愉しみがそこにあることを、期待して。

＊

「誰だ…」

『…誰だ？』

真っ暗な世界の中――――いや、春斗の精神世界の中とでも言おうか。

そこで何をすることなく、何を見ようともせず座っていた春斗の背に、何者かが現れた。

『俺は俺さ。　高町春斗だ』

「…意味が分からん。　俺はひとりだぞ。　アンタは一体――――」

なんともしがたい気味の悪さを感じて、後ろを振りむいた春斗は――硬直した。

そこにいたのは紛れも無く自分だった。

そう、その顔に浮かべている三日月状の笑み以外は――――全て。

『残虐』

『春斗』は告げる。

『残虐、孤独、憤怒、絶望、非情、憎悪、狂気。　コイツラは人間の奥底に隠れた闇だ』

笑みを浮かべたまま、そしてその目で春斗を見据えながら。

『自分で言っていたが、ずいぶん丸くなっちまったもんだなぁ、オリジナル』

此方に歩いてくる。

動けない。

彼は、自分と同じ姿の『何か』から、目が離せなかった。　これが例え夢でも、幻でも、誰かのいたずらでも。　本能が逃げることを拒否していた。

『…研究所の時の、残虐さと非情さは何処へ行った』

彼は静かに呟き、そしてその足で春斗を蹴った。

「グフッ…」

『自分の運命を笑いながら書き換える人間に向けての憤怒や憎悪は何処にやった？』

蹴り倒し、襟首をつかんで持ち上げる。　春斗は身動ぎもせず、それをただ受け入れていて。

その目に生気は無く、ただそこにあるのは何処にでもいそうなただの人間そのものであり。

その様子にため息をつくと、“春斗”は春斗を睨みながら言った。

『…テメェは忘れたのか？　いや、忘れちまったんだろうな。　研究所にいたときの、孤独と絶望を』

「…違う、忘れてなんか……」

『ならば、何故高町なのはへ殺意を持たない』

その言葉は、氷のつららの様に春斗の心へ突き刺さり、悪寒を齎した。

『何故ティアナ・ランスターへ敵意を持たない。　何故フェイト・T・ハラオウンに憎悪を持たない』

「…、」

『テメェは、背負いすぎた。　だから忘れた。　“大切な物”に押されちまって、深い深い引き出しの奥に仕舞っちまった…嘘とは言わせねぇ。　最初、テメェは高町なのはが管理局に入ったと知ったとき、そしてリンディ・ハラオウンに初めて出会ったとき、なんて思った？　何を感じた？』

「…やめろ……」

『クロノ・ハラオウンに出会ったとき何をしようとした？　フェイト・T・ハラオウンに握手を求められたとき、何故最初は応じようとしなかった？』

「…やめろって言って――」

『教えてやろうか。　その時俺は――お前は、考えたはずだ。どうやってコイツ、殺そうか。　ってな』

「――、」

春斗の何かが、崩れた音がした。　それほど、今の彼にとってその言葉は重く、鋭くて――

『相手が管理局ってだけでどうやって殺そうか考える――それが高町春斗っつー存在だったはずだ。　フェイト・T・ハラオウンとの握手を拒否したのは、手なんか握ったらその拍子に奴を殺してしまいそうだったからだろう』

「っ、あ…」

『クロノ・ハラオウンに出会ったとき、無意識にお前は頭を吹き飛ばそうとしたっけな？　なんとか止められたみてぇだが。　リンディ・ハラオウンと会った時はおっそろしい程の殺意をまき散らしたっけなぁ。　で、高町なのはに至っては――』

「――」

最早、その顔にいつもの高町春斗は浮かんでいない。

恐怖。

記憶の底に閉じ込めた筈の、自分への絶望という感情が、頭を擡げて、彼を喰らおうとしている。

彼はそれを止められず――そして彼は、彼を鏡に映したような何かの口から、絶望が入った引き出しの鍵を開けた。

『ある日の夜、忍びこんで殺そうとしたよな？　しかも一家諸共。
口封じの為、そして自分の憎しみをぶつけるために』

「…ぁ、っ、違――――」

『何がちげぇんだ。　そうだろう、あの時のお前は見ものだったぜ。
全く躊躇することもなく眠っていた高町なのはの部屋に入って、
その顔に向けて拳を振り上げて――』

「っ、あああああ！！」

『！』

壊れた。　その重みに耐え切れず、彼は遂に人格を作るのを辞めた。……

力づくで自分の襟を持つその手を払いのけ、獣の如く後ろに飛び跳ねると、右手に強大な光が収束していく。

「ううううぅ…あぁああ」

『潰れたか？　ククク…いいぜ、撃ってみろ。　俺はお前だ。　受けきってやるよ』

ガードする様子も無く、両手を広げる『春斗』。　その顔にはやはり笑みが張り付いている。

しかし、今の春斗にはそれを見る判断力も、思考能力も失われていた。

現実逃避という生優しいものではなかった。　彼はあれ程自分が言っていた『結果』からも逃げていた。

目を背け、そちらを見ようとせず、しかし現在を楽しんでいた。

なんて自分は愚かで、最低なんだろうか？　『それ』は夢だ、悪夢

だと思い込み、心の奥底に封じ込めて、自分はのうのうと今を生きて暮らしていた。　それを許せるほど、彼は自分に対して寛大ではないし優しくは無い。

罪の意識は、時に罪人を改心させるが時にはその心をぶち壊す。

今の春斗が、そんな状況だった。

「パニッシュッ――――」

消失の概念が、抵抗する気配の無い『春斗』へと――――

「インパク、トォッ！！」

とてつもない光の渦が、同じ顔、同じ姿をした者に向けて解き放たれた。

『…本当に、忘れちまったんだな。　オリジナル』

光の渦を見ながら、先程とは打って変わって、悲しそうな顔で『春斗』は告げる。

『罪の意識に押しつぶされて、大事な支えまで忘れちまったのか？』

――大事な支え？

その言葉が、頭の中が真っ白の春斗の頭に響きわたる。

支え？

ささ――

――“春斗、大丈夫…わたし、ずっと、春斗のそばにいるから。
兄妹だから、痛いのも、つらいのも、楽しいのも、半分こだよ？”

『！』

再度、“春斗”の目が見開かれた。

光の渦が、消えた。　いや、霧散した。　自分を飲み込むべく放たれた光が。

『んだぁ…？　って…アンタは…』

春斗（オリジナル）の方は、何もしていない。

しかしその身に、小さな誰かが寄りかかっていた。　いや、春斗の

手を握って、肩を抱いて、包み込んでいた。

白い服を着た、ポニーテールの少女だった。

＊

「…、」ガタッ

「？　なのはさん？」

管理局機動六課内にある仕事部屋――その中の一室でともに仕事をしていたフラン、なのは、フェイトが、突然立ち上がったなのはを見て驚きの目を向ける。

「なのは、どうしたの？」

「…、分かんないの」

口調が昔に戻っている。　それ程驚くことがあったのか？　と顔を見合わせて首をかしげるフランとフェイト。　しかし不思議な顔をしている二人がまるで見えないかの等に、彼女は自分も分からないうちにギュッと自分の手と手を組んで、何かを祈っていた。

「…春斗……！」

＊

『…、いや、本人じゃ無ぇな。　そうか、アンタはオリジナルが生んだ幻影か』

『……知らないし、関係ないの。　そんなのは』

『そうだな。　確かに今は関係ない…で、どうするんだ？　オリジナルが生んだ幻影って事は、テメェは覚えてるんだよな？　そこのオリジナルがあんたを殺そうとしたことを。　恨みを晴らしたくは無いのか？　怒ればいいじゃねぇか。　殺せばいいじゃねぇか。きっと愛する姉の手に葬られればオリジナルも満足だろ』

『怒る？　殺す？　恨む？』

本当に不思議な顔で、少女は首をかしげる。

『そんなの、春斗に対してわたしは思ったことないの』

『…なん…ッ？　ありえねぇよ、人間なら一度でも他の人間に対して恨むとかの感情はもったことがあるはず…』

『うん、そうだよ。　フェイトちゃんともたくさん喧嘩したし、はやてちゃんともたくさん喧嘩した。　春斗とだって殴り合ったこと

もあったなぁ』

『なら怒ったことはあるんじゃねぇか』

『違うの。　わたしは春斗に対して怒ったことは一度もない、けど自分に対して怒った事なら何度もあるの』

『自分に対してだぁ？』

唄うように、少女は目をつぶって“春斗”へと言葉を紡ぐ。

『うん。　ちゃんと、自分の考えを伝えられない自分に対して。想いを伝えられない自分に対して。　それが表に出ちゃうと、あんなふうになっちゃうんだけどね？』

その答えにあっけに取られるようになる“春斗”。　しかし目の前の幼い少女の目には、その言葉が嘘であることなど一切感じさせない光がある。

所詮は幻影だ。　春斗が造り出したただの幻かも知れない。　だが、“春斗”はその光を無視することはできなかった。

『…私には眩しすぎる光です……』

『？』

『いや、なんでもねぇ』

ふと、口調も声も全く変わった台詞が流れた気がして、首をかしげる少女。　それを見て首を横に振り、しかし不敵に笑って“春斗”は言う。

『だが、いくらアンタがそう言おうと、オリジナルの心は既に崩壊寸前だ。　どうするっつーんだ？』

『そんなの関係ない』

またしても予想外の言葉に、目を白黒させて少女を見る“春斗”。
少女はそれが当たり前のように、笑顔を見せながら言った。

『わたしと、春斗は兄妹だから…辛いのも、楽しいのも、悲しいのも、全部、全部半分こって約束したから。　そして、春斗もわたしに約束をしてくれたから』

真っ暗な世界に、罅が入った。

それは彼女達を起点として、全体に広がっていく。

『わたしは春斗に何も聞かないし何も言わない。　でも、わたしは春斗を信じてる』

言葉と共に広がる、闇の世界に起きた異変。　罅が入った場所から漏れ出すのは、真っ白な光。

『無条件で…人を信じられるっつーのかよ？　ありえねーよ！　人間にそんな事が出来る訳がっ！！』

『わたしが、それの何よりの証明だから』

“春斗”の叫びすら、その小さき少女はたったひとつの言葉で打ち消す。　罅は広がり、そしてそれは“春斗”の方向にまで伸びてゆく。

『あなたも、きっと春斗なんだよね。　わたしを信じられない心とかがいっぱい集めってできた春斗。　でも、わたしはあなたの事も信じてる』

『――――っ！』

『だって…春斗は、春斗はいつだって…』

天使のような笑顔で、彼女はその小さな手で春斗の手を握りながら、言った。

『わたしの、世界で一番大切な弟だし、世界で一番大好きな人だから』

空間が、はじけた。

“春斗”に存在していたあの邪悪な笑みは既になりを潜め、その顔にあるのは驚愕。

この空間は、春斗の殻を示していた。

誰とも干渉されることのない、精神世界の壁。　人の精神世界に強制的に入る術など、世界で数人しか持たぬ秘術。　しかし目の前の幻は、その殻を内側から崩してしまった。　こんな事がありえるのだろうか？

少なくとも、“春斗”が知っている人間でこのような事をする者はいない。

ゆっくりと、何か吹っ切れたのか自らのオリジナルが立ち上がる。

自分は彼に酷な事をした。　自覚はある。　ならば今回ばかりは何もせずに消えるべきだろう…そう考えた“春斗”は、静かに目を閉じた。

「何目をつぶってんだ？」

笑った声が聞こえたのは、それから時間は掛からなかった。

『…消せよ。　お前の殻は消えた。　ならば俺はもう用済みだ』

「変なことを言うんだな。　テメェはさっき自分で言っただろ？　俺はお前だって。　そしてなのは姉も言ってたしな」

――お前が俺なら、俺はお前を消さない。

そう続けた春斗の顔に、苦しみは無かった。

この短い時間でどんな葛藤が存在し、どんな思考があったのか。

それは“春斗”にもわからない。

ただ、その顔は憑き物はとれたかのようにすっきりとしていた。

「俺さ、もう先を見ることを辞める事にする」

自分の生み出したであろう幻の頭を撫でながら、彼は笑顔で話す。

「先ばっかみてても何も分からねぇし、何も出来ない。　俺は怖かったんだろうな、最悪の未来が」

それは一種の現実逃避と言えるのかもしれない。

だが、この短い期間で彼が成長したのは伺えた。　そう思い、“春斗”も釣られて笑う。

「だから、俺は今を生きてみるよ。　何があるか分からねぇけどな」

『それでこそ、“俺”だ』

ククク、と笑う“春斗”は、右手の親指で自分の後方を示した。

『行けよ。　勝手口は向こうだ。　もう会うこともねぇだろうけどな』

「ああ、ありがとよ」

『それと忠告な。　そろそろ自分の感情に気づいたほうがいいぜ』

「？」

『お前、自分が人間じゃねぇからって異性を好きになることをためらってやがるな？』

「！」

『少しでいい。　あらゆる概念――――『義姉』『幼馴染』『後輩』『悪友』『兵器』『人間』その他諸々をとっぱらった目で“大事な

人”を見てくるといい』

「？　…意味がわからんが、了解した。　ありがとよ、何から何まで」

『礼には及ばねぇよ。　俺が、俺のために、勝手にやったことだ』

「…、」

その言葉に薄く笑って、春斗はゆっくりと“春斗”の横を通過する。

扉は直ぐに見つかった。　真っ白な世界の中、真っ黒なトンネルのような入口がある。　ちょっとこの中に入ることに躊躇いを感じる春斗だが、悩んでも仕方ないか、と言うような感じで一歩を踏み出す。

ふと、後ろを振り向く。

“春斗”もまた、春斗とは別の方向――少女のなのはが微笑む場所へゆっくり歩いていた。　しかしその先に出入口はない。

彼は本当に、今日、『この時の為だけに準備していて』くれていたのだろう――いや、もしかしたらただの保険のつもりだったのかも知れないが――それでも全く、『彼』は恐ろしい。　そう思いながら、春斗は大声を出して彼を呼んだ。

「おーい！」

『？』

ピタッ、と“春斗”の身体が止まる。　その機械的な動作に疑問も持たず、春斗は叫び続ける。

「ありがとよ！　アンタの事だ、恐らく全部の兄妹にこんな仕掛けをしてあるんだろうが…もう心配ねぇぜ！」

『…、』

彼は既に、“自分”に話しかけてはいなかった。

しかし彼は、楽しそうに言葉を続ける。

「もう、迷わねぇしもう逃げねぇから…だから、まぁ気長にまってくれ！　絶対アンタの事、助けるから！」

『…』

「そしたらよ、兄妹全員でゲームでもパーティでもしようぜ？　なぁ――――兄貴！」

ザァ、と真っ黒な煙が吹き荒れた。

“春斗”の身体から、出てきた物だった。

「『――そうですね』」

それももしかしたら、春斗が生んだ幻想なのかもしれない。彼の思考が生んだ、希望と言う名の幻。

でも。

その時、彼は確かに――

「『楽しみに待ってますよ？　――春斗』」

一瞬だけ、微笑んで。

そして次の瞬間、春斗の意識は急速に浮上した。

＊

「『…！』」

『ドウシタ、主』

ふよふよを浮遊する骸の中央に、真っ黒なドレスに返り血を浴びて真っ赤に染まった男が、ふと空を見上げる。

空は、相変わらずの青空だ。　麗らかで、清らかで、何処までも青い。

「『…いえ』」

しかし彼は、それを心の中に仕舞った。

兵器に、『何かが起こった気がする』などという曖昧な考えは許されないから。

「っ…たず、け…」

まだ、息のある男がいた。

それを探知した彼の目が紅く染まり、右腕がその男に向けられた。

「『――――警告』」

今日も麗らかな青空に、甲高い悲鳴と耳を劈く爆撃音や斬撃音が交差する。

その日。

第６管理世界　アルザス少数地方民族『ル・ルシエ』。

“壊滅”。

＊

「…、ん…」

「春斗！　大丈夫！？」

「春斗！」

聞いたことのあるような声。　いや、どう考えてもそれは自分の義姉と幼馴染の声だった。

ゆっくりと目を開けながら、彼女達の話を聞く。

「様子を見に来たら、いきなり汗だくで唸ってたんだよ？　はぁ、びっくりしたぁ…」

「本当ですわよ。　全く、心配かけさせて…」

「ああ、悪い悪い。　ちょっとした夢を…」

ゴシゴシと目を擦って、眠気を覚ましながら目の前にいるはずの何時もの義姉と幼馴染を見る――――

そう、何時もの…変わらない、筈だった。

「…んー…？」

「どうしましたの、春斗？」

コテン、とフランが首をかしげた。　それに合わせて彼女のトレードマークの一つであるツインテールが揺れる。

春斗の方はと言えば、別に調子が悪いわけでもなければ異変が起きたわけでもない。

ただ、彼女たちを思ったときにこう考えただけだった。

（この2人、こんなに…美人だったけ？）

もう一度目をこする。

見る。

やはり変わらない。

そういえば、“春斗”の姿をした兄が言っていた。　見る目を変えろとか何とか…。

あれは夢だったのだろうか？　いや、あれ程リアルな夢も珍しいものだが…。

「春斗、どうしたの？　なんか呆然としてるけど…」

なのはも心配したのか、少し身体をこっちへ寄せてくる。　整った顔と女性特有の甘い香りが漂ってきて、春斗とあろうものが思わず鼓動が高鳴った。

（って俺は何考えてんだ！！　相手はなのは姉とフランだぞバーロー！　落ち着け、落ち着いて素数を…あれ、素数ってなんだっけか）

少しパニックになったのか、完全に兵器としての演算能力もついて行っていない。　というか兵器云々を抜きにしても素数が分からないのは少々まずい。

しかしこの間わずか０．２秒。　少し気づかれない程度に深呼吸をし、自分の義姉の顔を見てみる。

「？　春斗？」

見ていくうちに、やはり認めざるを得なくなった。

（…畜生……可愛い…ッ……！！）

今まで感じたこともないしというか考えたこともなかった、異性の顔。

あの戦いが原因か、それとも自分の中で何かが変わったのか――――よくよく見てみると、フランもなのはも可愛い上に美人であった。

何故これまで気付かなかったのか分からない程に。

しかし、だが今はそんな事を考えてる場合ではない。　いや、今だからこそ考えるべきなのかも知れないが、それはまぁ置いておこう。

「いや、何でもない。なんでもないから落ち着け俺」

「いや、大丈夫春斗？　何か慌ててるみたいだけど」

「（スマン、アンタらが原因だ）いやいや、俺は至って冷しぇ（ガリッ）ぎゃああっ！　舌がひぎれるかのようにいひゃいっ！」

「は、春斗!?　私、春斗が舌を噛んだところ初めて見ましたわ…」

「はぁ、はぁ…大丈夫だ、問題ねぇ……で、改めて…なのは姉…ちょっと、いいか？」

「え？　うん、別に大丈夫だけど…」

慌てに慌て、何とか落ち着いた春斗は改めて椅子に座ったなのはの顔を見る。

どうしたのかな、と首をかしげるなのははやはり美人で、何故こうなったのか自分自身分からない。　が――こういうのも、悪くないのかもしれない。

ただ、色々と言いたい言葉はあるのだが、改めて彼女の顔を見ると何故か言い出せない。　柄にも無く緊張しているのか、と自分へ向けて少し笑うと、なのはがムッとしたように、

「春斗？　わたしの顔がそんなに面白いかな？」

「あー、いやいや、違うんだ。　ちょっとな…なのは姉、スマン」

「へ？」

そういうと、春斗は突然力を抜いて、なのはの方に倒れ込むように身体をあずけた。

まあ、自然と――春斗の身体が直接触れて、しかも春斗の手が首へ回ってるのだから、はたから見れば春斗がなのはに抱きついたようにしか見えない。

「えっ、ちょっ、春斗！！？／／／」

なのはの方からしてみれば、男性に直接、しかも突然抱きつかれたことは無いため顔を真っ赤にしてオロオロとしている。　相手が義

弟と言っても恐らく彼女はそんなことは忘れているだろう。

フランもこの突然のイベントに驚いているらしく、取り敢えず手頃な鈍器で春斗の意識を取り戻させようとしたときだった。

「だ、大丈夫!?　いや、気持ちはあの、その、えと大事にしなくちゃと思うんだけど、その――――」

「ありがとう」

心の籠った、お礼だった。

思わず沸騰していた頭が急速に冷えていき、フランの方も冷静になって春斗を見る。

「ずっと俺が忘れてた…約束を、守ってくれて…ありがとう」

その言葉に、なのはの顔が驚愕に彩られ、そしてフランの顔が疑問に満ちていく。

約束というのがなんのことなのか、彼女にはわからないからだ。

そして、その事について尋ねようとしてなのはの方を向いて――――思わず惚けた。

なのはの笑顔が、まるで聖母のように――優しくて、包容力のある――輝かしくも奥深い、とても普段通りなら見れないであろう笑顔だったから。

「わたしも、ありがとう」

彼女の口からも、言葉が紡がれていく。

「俺は何もしてねぇよ？」

「ううん、春斗はしっかりとわたしの約束を守ってくれてる」

その声はどこまでも優しくて、どこまでも柔らかい。

彼は、春斗は、彼女が最初の希望と最初の願いを与えてくれた人だから――

「ありがとうね。　わたしの傍に居てくれて…春斗？」

「……（くー…くー…）」

伝えたいことを伝えたなのか、彼はあっさりと眠ってしまった。

疲れてたのかなとクスリと笑って、自分の肩に乗っかった春斗の腕

を丁重に降ろすと、そのままベッドに寝かす。
その寝顔は、フランですら見たことがないほど――心地よくて、綺麗な寝顔だった。

「あはは、寝ちゃったね」

「…」

「それじゃあ、わたしは仕事に戻るけど…フランは？」

「あ、私はもう少し此処で…」

「うん、ありがとう。　何かあったら呼んでね」

「わかりましたわ」

そう言って扉から出ていくなのは。　自動ドアがカシュン、と閉まったのを確認して、フランは目を腕で覆いながら天井を仰いだ。

「…勝てませんわね、これじゃあ」

幸せそうな春斗の寝顔、そして幸せそうななのはの笑顔。

自分は、これまで一回もこんな心地よさそうな寝顔を見たことはない。　それはつまり、自分では春斗に幸せな夢すら見せて上げられない――――。

「……。　はぁ…」

恋煩いも、此処まで来るとそろそろ危険ではないだろうか？　そう思って、ため息を付く。

でも、考えていたって何も始まらないのも確か。　こういう時は誰かに相談するのもいいかもしれない――――そう思いながら、彼女も仕事に戻るべく部屋のドアを潜って、外へ出た。

その心配が杞憂だったと知るのは、意外にも早い事も知らずに。

様々な想い、様々な陰謀、様々な種族が交錯する中――――

春斗が丁度退院を許可されてから約二日後。

機動六課含む様々な部署に存在する管理局員へ、『ホテル・アグスタ』の警備命令が下った。

“逃避”（後書き）

天破「春斗の思考が１８００。変わっちゃったｗｗｗ」
春斗「…」
なのは「春斗、どうしたの？」
春斗「いや、その…なのは姉、少し近いというか…何というか…」
なのは「え？　いつも椅子ってこの位だよ？」
春斗「…なん…だと…」

天破「オイ誰か鈍器か拳銃か無還者連れてこい。　あの天然バカップルを粉々に殺害してやるんだ」
ヴァイス「任せろ」

さて、次回からようやくアグスタへ向かいます。　戦闘スタート！
主に某ドSとナンバースが活躍する予定ですｗ

さて、セリフだけですが一部お見せしましょう。アグスタ編全部を通して、何処かに登場するはずの台詞です。

―次回予告―

なのは「春斗、この服どう？」
春斗「…に、似合ってるんじゃないか？（俺は何故こんな服を…）」
？？？「へぇー、結構いい品物が出てるっぽいじゃない。　…あら、あれは…？」
？？？「匂う……これ、血の臭いだ…♪」
？？？「『警告：第２章１１項。　『地に堕ちる紅き十字架』発動

準備開始。　↓完全発動まで残り5秒『」
???「はぁ…はぁ……ごめ…みんな…」

???「『警告：第1章23項。　↓無還者の行動を阻害する生命体の存在を確認。　↓同時に本体への身体的な拘束とそれに伴う思考能力の遅延を確認。　↓本体の拘束解除及び思考能力の回復を最優先。　↓その後行動をを阻害する生命体の排除へと行動目的を変更します』」
???「…お互い、変わった上に成長したのう……久しぶりじゃな、兄上？」

宜しければ御楽しみに＾＾

感想等、ありがとうございます。　励みになります＾＾　宜しければ一行でもいいので投稿してくだされればと思います。

ヴァイス「ぐはぁ！？」
天破「ちょｗｗおまｗｗｗ何がどうなってこうなったｗｗｗ」

それでは＾＾

天破でした（　´　∀、）／~~

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9760t/

魔法少女リリカルなのはStrikerS　～PROJECT S.W～

2011年10月21日03時06分発行